

戦艦「八洲」 2

遠歩

瑞穂暦二〇〇一年一二月二六日——

紺碧と言える空を二機の戦闘機が飛んでいた。一機は海軍の零式艦上戦闘機「紫風（しふう）」である。一カ月程前に行われた爬間（はうあい）諸島沖海戦の最中に初陣を飾り、敵艦上戦闘機——4号艦上戦闘機「火龍（サラマンダー）」を散々に蹴散らした機体だ。最高速度は時速五六六里（キロ）——この時代の戦闘機としては十分に速い方に属する。

その「紫風」の前を行くのが、もう一機の方だ。

後者が先に飛び始めたのではない。ほぼ同じ時期に発艦し、一度翼を並べてから距離が開いたのだ。

何故か？ 答えは非常に単純である。後者の方が明らかに速いからだ。時間の経過は彼我距離の拡大に繋がり、「紫風」の側からは問題の戦闘機の後部が霞んで見えるぐらいだ。

「紫風」よりも優速である事で知られる、陸軍の最新鋭戦闘機——一式戦闘機「燕（つばくろ）」と比べても速い。あちらは最高速度が時速五九六里だが、あれはどう見ても時速七〇〇里を突破している。

「とんでもない戦闘機を拵（こしら）えたものだな」

「翔龍（しょうりゅう）」戦闘機隊隊長——赤松学（あかまつまなぶ）少佐は呟いた。彼は戦死した喜連川兼基（きつれがわかねもと）少佐に代わり、第二航空戦隊旗艦の戦闘機隊を率いる立場となったが、その彼をしても今近くを飛んでいる飛行機には、賞賛混じりのため息を向けざるを得ない。

「紫風」はつい一年前に正式採用された最新鋭艦上戦闘機だ。航空機は数年ごとに機種変更（モデルチェンジ）をするから、当面はこれを主力として海軍は戦う事になるだろう。

しかし、その「最新鋭艦上戦闘機」を速度・武装・防御の三つで優る戦闘機が存在を目の当たりにすると、軍事研究家たちの言う「航空機は日進月歩」だという評価が良く判る。

何しろ昨日の主力が、今日には不良在庫（ガラクタ）になる世界なのだ。勿論、工場の生産ラインの変更、整備員の再教育、搭乗員の訓練など、簡単に見るだけで複数の問題があり、即座に新鋭戦闘機が文字通りの主力になる——どれだけ強力でも、兵器は一定数を揃えなければ意味がない——訳ではないのだけれど。

そうした問題点を差し引いても、赤松の愛機を軽々と離して飛ぶ戦闘機には、価値があるように見えた。あれならば如何（いか）なる敵機が相手でも一撃で叩き落とし、戦場上空の制空権を確保できるに違いないと思えた。

しかし——

「異形（いぎょう）の鳥だな、あいつは」

赤松は翼を並べた時に視た、問題の飛行機の姿を思い出して呟いた。彼の言う「異形の鳥」は

、従来機とは異なり、胴体の後方に発動機（エンジン）とプロペラを装備していた。そして水平翼を機首近くに持つ。飛行機の事を一度でも視た事のある人間なら、「逆さまだ」と言うだろう。

これは一般的に先尾翼式あるいは鴨（エンテ）型と呼ばれるタイプの航空機で、各国で以前から研究されていた。しかし実用化にまで漕ぎ着けたのは瑞穂が最初で、何処の国も計画段階から先には進んでいない。

だがそれだけに強力だ。二〇〇〇馬力を誇る発動機と六翅（し）プロペラがもたらす最高速は、型録情報（カタログ・データ）を信じる限りでは、七三〇里——予定されている噴進式（ジェット）戦闘機化を進めれば、音速にすら手が届くとされている。

武装は二〇ミリ機銃六丁。爆装は一二〇斤（キロ）まで。

こいつに対抗できる戦闘機は、果たしてあるのだろうか——赤松は陶然（とうぜん）と思う。二式艦上戦闘機「蒼電（そうでん）」——これがその航空機につけられた名前であった。

戦艦「八洲（やしま）」第一艦橋——

戦船宮呉葉愛児英（いくさぶねのみやくれはあいじはなぶさ）内親王——戦船（いくさぶね）英海軍中将は、そこで双眼鏡を構え、上空で展開されている見世物（ショー）を楽しんでいた。彼女は戦闘機搭乗員出身だから、航空機への愛着は戦艦に座して尚深い。口許には微かな笑みが刻まれている。

「試験結果は良好なようだな」

双眼鏡から眼を外し、傍らに立つ航空参謀——鶴賀芳子（つるがよしこ）中佐に話しかける。

「はい。『紫風』をああも軽々と引き離せる戦闘機は、他にはありません」

「戦艦から戦闘機を発進させると聴いた時は」英は微苦笑を浮かべた。「航空機の黎明期（れいめいき）を思い出して、嫌な感じがしたが、杞憂（きゆう）だったようだな」

軍用航空機がようやく生まれ、航空母艦という艦種が何処の国にもまだ存在しない頃、自転車と同じ車輪をつけた複葉機が、仮設された飛行甲板の上を走り発艦するという風景がそこかしこで見られた。

それはどのような物事も、最初は試行錯誤から始まるという用例見本のような図だが、後から振り返れば何でそんな阿呆らしい事をと首を傾げるような話でもある。

「『蒼電』は機体に飛翔石が埋め込まれている関係上、垂直離発着と空中制止が可能です。翼も折り畳みが可能なので戦艦艦内でも格納が容易なのです」

「八洲」は弾着観測機の代わりに艦載戦闘機——「蒼電」——型を一二機搭載していた（予備機が三機）。

これは強力な電波探針儀（たんしんぎ）——電探（レーダー）とそれに連動する射撃装置が備えられている事に起因する。敵の弾着観測機を叩き落とす、あるいは自艦の頭上を護るために「蒼電」を使い、戦闘を優位に運ぶとの姿勢が見て取れる。

「艦載戦闘機なのに『風』がつかず『電』がつくのはどうしてなんだ？」

瑞穂海軍は航空機の命名基準を以下のように定めている。艦上戦闘機は「風」をつけ、艦上爆

撃機は「星」をつけ、艦上攻撃機は「山」をつけ、局地戦闘機は「電」をつけ、陸攻――重爆は型番の他に山岳名を愛称（ニックネーム）としてつける。

そうした意味からすれば、英が「蒼電」の名に疑問を抱いても不思議ではない。艦載機を陸上で使用できても、着艦能力のない局地戦闘機を艦上で使用するなど、本来は不可能だからだ。

「『蒼電』の能力の高さに目をつけた空技廠（くうぎしょう）が、垂直離発着が可能なら艦載機としても運用できるのではないかと主張し、開発元（メーカー）がそれを正面から受け止めたそうです。つまりは局地戦闘機として開発していた頃の名残と言いますか」

「名称を変更しないまま完成したのか」

「開発元――八須（はちす）飛行機はむしろ誇りにしているそうですがね。万能戦闘機を作れたと」

「成程、確かに違いない」

「蒼電」は「八洲」の艦尾に二基ある発艦補助装置（カタパルト）を使い発艦させる。機体を一気に加速させ、空へと舞い上げるためだが、機体そのものにかかる衝撃は強く、「万能」を主張する程に頑丈なものでなければ、到底運用できなかった。

「強力な機体には違いありませんが、一機あたりの生産費用や気難しさから気楽に運用できません」

「特殊構造の機体なのだから、生産費用が高額なのは判るが」英は質問内容を限定した。「飛行時間何時間の飛行士から使用可能になる？」

「五〇〇時間以下では話になりません。最低でも八〇〇――理想を言えば一〇〇〇時間かと」

「一部の熟練搭乗員か天才かでないと扱えない？」

「そう考えた方が宜（よろ）しいかと」

「運用面での制約が多い戦闘機となると、ここ一番でしか使えないな」

「ですがそれだけの価値はあります」

鶴賀は模擬空戦が展開されている空域を指し示した。

英は再び双眼鏡を構える。ゲルマニヤ製で精度の高いそれは、異形の戦闘機と通常機がやり合う様をはっきりと映す。速度に優る「蒼電」が「紫風」を振り回した挙げ句にあっさりと撃墜――塗料（ペンキ）まみれにしたのだ。

「典型的な一撃離脱戦法だな」

「速度と機体強度に優る側にあれをやられると、巴戦に持ち込む前に撃墜されるか逃げられるかのどちらかに」

「空戦は運動競技（スポーツ）ではないから、判定負けなどない――か」英は嘆息して双眼鏡を降ろした。

「確かに赤松君であの様子なら敵機も似たようなものだろうな。昨今の海戦は、艦隊決戦でも制空権がなければ著（いちじる）しく不利になる。爬間諸島沖海戦の時に撃沈された戦艦四隻、その半分は航空攻撃にやられたそうだし」

「『蒼電』なら如何なる敵機をも駆逐して見せます」鶴賀は傲然（ごうぜん）と胸を反らした。

「蒼電」の導入に関しては彼女が是非にと勧め、専門知識のある英なら理解してくれるだろうと

、強く期待している。

「良いだろう」英は頷いた。「あの機体を使おう。決戦時に充分役立つはずだ」

「有難（ありがと）うございます」

嬉しげに頷く鶴賀に一瞥をくれてから、英は視線を再度空に上げた。「蒼電」には彼女の乳兄弟――神社美御（かみやしろよしみ）が乗っているのだ。彼は爬間諸島沖海戦時の「抜群の戦功」を賞賛されて少佐に昇進していた。

――かなりじゃじゃ馬な機体のようだが、流石（さすが）に美御だ。上手に乗りこなしている！

自分ならどうだろうか――と英は思う。以前に「紫風」でなら単独飛行をした事があるので、その延長線上に位置する程度なら、実際の空戦はともかく操縦するぐらいなら可能なのではと考え進める。

戦闘機搭乗員（ファイター・パイロット）として最前線勤務をこなしてきたという自負が、「乗りたい」という気持ちを頭にもたげさせた。あれで空を駆け抜ければ、さぞかし気分が良いだろう。

だが――

――参謀全員から止められるだろうし、今の私は独り身ではない。無責任な行動は控えねばならない。

そう自分を戒（いまし）めた。何故か？ 彼女はつい先頃に新設された艦隊の最高司令官に就任していたからだ。

部隊名称は第七艦隊。愛称は遊撃機動部隊。

超弩級（ちょうどきゅう）戦艦一隻。

巡洋戦艦（バトルクルーザー）二隻。

航空母艦（エアクラフト・キャリアー）四隻。

重巡洋艦（ヘヴィ・クルーザー）四隻。

軽巡洋艦（ライト・クルーザー）一隻。

特級駆逐艦（スペシャル・デストロイヤー）一二隻。

特級潜水艦（スペシャル・サブマリン）八隻。

高速油槽船（タンカー）四隻。

その全てが彼女の意のままに動き、そして生命を預けている。人員は「八洲」一隻だけで三〇〇〇名。艦隊全体であれば二万名を超える。一個艦隊を指揮する経験は、臨時編成の部隊――第一東遣艦隊の時にしているが、その際は戦艦・潜水艦とつく艦はおらず、空母の数も半分だった。

しかも今回は任務が終われば即座に解隊される臨時編成部隊ではなく、正規編成の艦隊だ。場合によれば終戦まで行動を共にする事になるかも知れない。戦船宮家の縁者ばかりではなく、能力で選ばれた者も構成員の中で少なくない数だから、思いもかけぬ齟齬（そご）が起きるかも知れない。

であるからこそ、軽率な行動には自重が求められ、今まで以上に己を律する必要があるのだ。

英は軽やかに機体を操る義弟の姿を見やりながら、胸中で呟く。飛行士（パイロット）としてはお前が羨（うらや）ましい限りだよ、美御。本当は私もあれに乗りたい。しかし私には私の仕事があるからね。今はそれで我慢するけれど。

模擬空戦終了の合図が出された。三度行われたそれは、その全てが美御の勝利で終わったと報告される。

機嫌良く頷く英の耳に、レシプロ機が奏でる爆音が響き、一迅（いちじん）の風のような姿が目には焼き付いた。

2

瑞穂暦二〇〇一年十一月二七日――

この日、予てより緊張状態であった瑞穂皇国と加利米矢（カリメヤ）聯合帝国が爬間諸島沖にて激突した。世に言う「瑞加戦争」――別名「橋道洋（きょうどうよう）戦争」の始まりである。

瑞穂側は保有する戦艦の半数を彼の地に展開し、迎撃戦を展開したが、西部帝家艦隊の戦艦群が装備する電探射撃装置と4号艦上戦闘機とに圧倒され、戦艦四隻が沈没――大敗を喫してしまう。

そんな絶望的な状況下、爬間諸島に展開する友軍の撤退支援及び民間人が脱出するまでの時間稼ぎを命じられた第一東遣艦隊司令官――戦船英少将は、航空奇襲を敵機動部隊に対し実施、航空母艦六隻を撃沈乃至（ないし）大破に追い込み、見事に所定の目的を果たす。

しかし全体的に見れば、有力な戦闘艦艇を複数喪い、東橋道洋の要衝を敵に明け渡したのだから、敗北したのは紛れもない事実だった。航空機の大半を喪失した英は、再攻撃を断念し、再起を誓いながら後退した。

第一東遣艦隊が内地――瑞穂本国を目指している頃、無条件降伏要求を突きつけられた政府と議会は荒れていた。経済的理由から海軍に爬間諸島沖での迎撃を命じた秋月実松（あきづきさねまつ）首相は、精神的重圧に耐えかねて辞任。後任には予備役海軍大将で皇民院（こうみんいん）議長の紀伊國広（きいくにひろ）が選ばれた。

新内閣は議会と国民の意思に従い、無条件降伏要求を拒否する事を宣言し、徹底抗戦の道を選択する。

だが、海軍の最大戦力である皇国聯合艦隊（インペリアル・グランド・フリート）――主力戦艦部隊が籍を置く第一艦隊は壊滅状態にあり、その再建が急務であった。内地で待機していた第二艦隊以下の戦力は健在だから、当面はそれで凌ぐ事が可能だが、戦力が激減しているのは間違いない。

海軍総司令部は、そこで人事と艦隊編成を一新し、新しい風を吹かせる事にする。具体的に言えば、巡洋戦艦を主体とする第二艦隊――その司令長官を務めていた真田信繁（さなだのぶしげ）中將を、大将昇進と共に皇国聯合艦隊司令長官に就任させた事である。

真田は英が海軍兵学寮に籍を置いていた際、そこの校長を務めていた。彼女とは旧知の間柄であり、海軍部内にも人気がある。少なくとも大敗を喫し、多数の部下を置き捨てて逐電（ちく

でん) した猪松敏平(いのまつとしひら)大將を留任させるよりかは、余程ましだと思われた。

皇国聯合艦隊司令長官就任を請われた真田は、御国の一大事に責任ある地位に就くのは武人の
誉(ほまれ)だと二つ返事で受けたと伝えられる。しかしそれは外の顔である。実際の彼は何とも面
倒な仕事を任せられたとの気分を抱いていたらしい。

「皇国聯合艦隊司令長官」兼「第一艦隊司令長官」就任を祝福する妻に対し、彼はこうぼやいた
。

「だがな、艦隊は海の底だぜ」

この逸話(エピソード)は、後世の創作だとも言われている。あまりにも出来過ぎだ、と。

しかし真田の置かれた状況を見るに、彼の心境からさほど逸脱したものとは思われない。

何故なら、真田は瑞穂の他の提督たちもそうであるように、大艦巨砲主義者だからだ。航空母
艦群は無傷で、基地航空隊が健在だから戦争継続は可能だと言われても、横綱がないのに巡業
をやれと言われた興行主のようなもので、どうなるか責任が持てないのだ。

とは言え、彼は何の見識もなく重要な地位に就いたのではない。参謀長に航空戦の練達者(エキ
スパート)である佳句止(かくとめる)少將を求め、彼に航空機を中心とした迎撃計画を立案さ
せた。他に第六艦隊――潜水艦艦隊に漸減邀撃(ぜんげんようげき)作戦以外に、通商破壊作戦
の強化を求め、敵軍の進行を一日でも遅らせる措置を執らせた。

その間、艦隊の編成替えと新編も行われた。

第二艦隊は所属していた巡洋戦艦群を第一艦隊と第七艦隊とに分散し、事実上解隊。航空母艦
を中心とする機動部隊に模様替えし、部隊の別名を第一航空艦隊に定め、その司令長官に大沢治
郎(おおさわじろう)中將を迎えた。彼は航空機を用いた長距離攻撃(ロングレンジ・アタック
)を予てから主張しており、佳句と同様に航空機の専門家との評価を受けていた。その手腕を買
われたのだ。

英が指揮する第七艦隊――遊撃機動部隊は、この時に生まれた。正確に言えば一二月一五日――
英たちが讃州(さんしゅう)県美呉(みくれ)軍港に帰り着いた三日後に発足したのだ。従来
、瑞穂の皇国聯合艦隊は第六艦隊までしかなく、名称こそ第七と振られているが、実は海軍総司
令部直属の独立艦隊として。

帰還するや否や父親――戦船宮英治(ひではる)に呼び出され、その独立艦隊最高司令官就任
を求められた英は、流石に驚いた。海軍元帥である父が海軍部内に強い影響力を持つのは知っ
ているが、そんな無茶が通るのか――と。

娘の問いかけに対し、元帥宮(げんすいのみや)との異名を持つ父は、老いて皺(しわ)が刻
まれた顔に、更に皺を造りながら、

「今は戦時だ。声が大きければ何でも通る」

そう意味ありげに告げた。彼は戦場の英雄になるという自身の夢を叶えてくれた末娘の軍事的
才能を高く評価しており、国家存続の希望を彼女に託したのである。

父がそれを求めるのであれば、否応ない――と英は直ぐさま承諾した。親子であるからと言
うばかりが理由ではない。彼女は爬間諸島沖海戦、その初めから自分で指揮を執れたのなら、か
くも無残な敗北を喫せず済んだはずだとの確信があった。自分で自由に動かせる艦隊で敵と戦

いたいとの願望もあった。父がくれた好機（チャンス）をものにするのだとの意気込みが、そこにはあった。

艦隊を形成するのに必要な戦力は、美呉鎮守府（ちんじゅふ）に所属する艦を中心に集められた。

その中でひときわ目を引いたのは、数年前に建造された、世界最大の船渠（ドック）――排水量一二万石（トン）の戦艦を造るために生まれた――から出てきたばかりの、戦艦「八洲」――五一サンチ砲を三連装三基合計九門装備した、超弩級戦艦である。

「八洲」はその搭載主砲や艦の大きさは固より、従来型の艦船とは次元が異なる艦だった。まず機関（エンジン）が羽根車型（タービン）の重油専燃缶などを用いておらず、先史文明が残した産業遺物――無限機関を搭載していた。これは初回起動時にのみ大量の電気を必要とするが、一度動かして以降は水と空気さえあれば無限の力を生み出すという代物で、煙を排出する事もない、文字通りの夢のような機関であった。

「八洲」はその無限機関を、地上施設を除けば最大の大きさを誇る、との規模（サイズ）で積んでいた。それにより生み出される力は、彼女に全面装甲を張り巡らせて尚、最大速度三四航里（ノット）という正規空母か重巡並みの艦速を与えていた。

「『八洲』一隻で戦局そのものを左右できる」

とは、その建造を全面的に支援した英治の主張であるが、造船官に案内されて艦内を一通り見た英も、頷ける面が多分に見られた。「八洲」は特殊鋼板により鎧（よろ）われている。彼女の装甲版を撃ち抜けるのは、同じ八洲級戦艦か余程距離を詰めてきた艦だけで、最大脅威であるはずの魚雷も、各種防御機構――浸水や誘爆を防ぐための重油・護謨（ごむ）層などにより数十本は喰らわないと沈没に至らないとの説明を受けた時には、流石に驚いたが。

視線を他に転じると、航空戦力の充実が見られた。

英が爬間諸島沖海戦で指揮した第二航空戦隊の他に、第一航空戦隊が加入したのだ。この部隊は大型正規空母である「紅城（べにじろ）」「北賀（ほくが）」で形成されていた。彼女たちは同型艦である。それぞれが九〇機搭載可能だ（予備機は五機）。

ただし、この二隻は純粋な空母として生まれてきた訳ではない。戦艦及び巡洋戦艦を各一〇隻ずつ造るという大風呂敷（おおぶろしき）な計画――二〇（ふたまる）艦隊計画の落とし子として、建艦後、あるいは建造途中でそれぞれが戦艦・巡洋戦艦から航空母艦へと転じた、との経緯（いきさつ）を持つ。

名前にも彼女たちが歩んだ、平坦ではない道が現れている。通常、戦艦は瑞穂本国の都道府県名が、巡洋戦艦には重巡と同じく山岳名がつけられるが、その事からも判るように、彼女たちは本来の艦種すら異なる。

「紅城」は天戸（あまと）級巡洋戦艦の二番艦として生を受けるはずだった。ところが二〇艦隊計画が中止になり、姉――「天戸」と共に航空母艦に改造される際、「天戸」が大地震により大破放棄が決定し、標的艦として処分されるはずだった未成艦――「北賀」が航空母艦に転用されるという事態が生じた。

それぞれを違うタイプの艦として扱う計画もあったが、「北賀」は作りかけだったので、「紅城

」の同型艦に仕立て直し、運用効率を上げるとの措置が執られた。何しろ型が異なる艦を何隻も建造し、将兵の教育に何倍も手間がかかるのは避けたい。

そうした次第で、本来の命名基準を無視した――航空母艦は空を飛ぶ瑞祥（ずいしょう）動物、または龍や鳳（おおとり）のような伝説上の存在を名前につける――改造正規空母が誕生した。彼女たちは排水量三万石を超え、搭載機数は一〇〇機以上で、最大速度三〇航里という、「皇国海軍が世界に誇る大型空母」だと世間的には喧伝された。

しかし、航空母艦黎明期に造られただけに、様々な欠点を抱えていた。小型機と大型機を同時に発進させるために三段飛行甲板を設けたとか、敵巡洋艦と五分に渡り合うために二〇センチ砲を積むとか、機関部の排熱機構に問題があり、居住性が最悪に近い――など。

瑞穂暦二〇〇一年時、これらの建造時に抱えていた欠陥は全て修正されている。飛行甲板は全金属製艦上機を取り扱うために一段式になっているし、居住性は機関部の排熱機構の改善――無限機関を一部で使用する方式に改めた――して空調設備を増設する事によりかなりましになった。何しろそれまでは「焼鳥（やきとり）製造器」――飛行士たちが排熱で茹（う）だる事から来ている――と揶揄（やゆ）されるような有様だったのだから（二〇センチ砲に関しては、艦の均衡（バランス）が崩れるとの理由から、撤去が見送られた）。

どんなものも死ななければ変われない訳ではない。紅城級航空母艦の二隻は、試行錯誤の末に近代空母として蘇（よみがえ）った。しかし一度ついた風評はそう簡単に覆（くつがえ）せるものではない。英のところに彼女たちが送り込まれてきたのは、実のところそうした観点が強かった。

「図体がでかい割に、戦闘能力に疑問がある」

皆がそう考えて、艦隊に含むのを躊躇（ためら）ったのである。それは無限機関採用以前に、彼女らが重油を莫迦喰いする事から、「無駄飯喰い」と陰口を叩かれた事も関係していた。

国民の手前、「役立たず」だと公然と言えないので、「切札」と称して第一航空戦隊に編入し内地に温存、化けの皮が剥がれないように注意されていたのだ。

英は「紅城」「北賀」の海軍部内の評価――空母としての能力に疑問がある――を当然ながら知っていた。しかし他に回してくれる空母などなさそうだし、艦載機搭乗員たちは本物――編隊長クラスは飛行時間が一〇〇〇時間を超えている者ばかりだし、通常隊員も飛行時間が五〇〇時間以上あるか、数度の実戦経験を持つ者で占められていた――なので文句は言わなかった。

「居住性は改善されたようだし、空母そのもので敵と撃ち合いを演じる訳ではないから」

そう言ってのけたのである。

巡洋戦艦と重巡は、さほどの問題がなかった。

岩城（いわしろ）級巡洋戦艦の一番艦（ネームシップ）である「岩城」は、この段階で三〇年前に建造された老嬢（ろうじょう）だが、近代化改装を重ねた結果、三四航里の速度を誇る高速戦艦（ハイスピード・バトルシップ）になっていた。

世界で初めて三六センチ砲を積んだヴリタニヤ産の巡洋戦艦は、「八洲」の同型艦――「秋津（あきつ）」が竣工するまでの間、「岩城」「清石（せいこく）」と共に「八洲」と第八戦艦戦隊を形成する事が決められていた。「搭載主砲の寸法（サイズ）が違いすぎて釣り合いが取れ

ない」という指摘もあるが、英は速度さえ同じなら問題はないとした（敵との距離を一定に保ちながら一方的に痛打するなど、殆どの場合、絵空事に終わる）。

重巡は爬間諸島沖海戦の際、二航戦を護衛した防空重巡――愛雄（まなお）級重巡洋艦の四隻――「愛雄」「高岩（たかご）」「鳥耶（ちょうや）」「摩海（まみ）」が第一東遣艦隊から引き続き参加する。これらは魚雷兵装を持たない代わりに対空兵装が充実しており、高性能な対空・水上電探を装備しているため、防空と砲撃戦の双方をこなせる。

軽巡「千穂乃（ちほの）」を旗艦とする水雷戦隊の方はというと、「八洲」と同じように純無限機関搭載艦――雷（いかずち）級駆逐艦八隻と、異民族部隊――外人部隊により構成される霧雨（きりさめ）級駆逐艦四隻――こちらは通常艦だが、魚雷発射管を一本も持たない、実験要素の強い防空駆逐艦だった――が預けられた。

これに関しては、「厄介者（やっかいもの）を押しつけられたのではないのか？」との声が参謀陣からも上がる。雷・霧雨の両級駆逐艦は配備が始められたばかりの艦で、能力は高いのだが実際の戦闘力は未知数だ。しかも戦意については大いに疑問があるとされる異民族部隊に関して言えば、何をか況（いわ）んや。

数だけは一二隻と多いが、役に立たない者をぞろぞろと引き連れたところで意味を成さない。果たして大丈夫なのかと皆が訝しんだ。

だが、英はさほど悩む様子もなく、
「斉藤（さいとう）君に任せれば問題あるまい」

そう切り捨てた。第五水雷戦隊司令官である斉藤一葉（いちよう）少将は、海軍兵学寮は出ているが、海軍大学校――大尉との時に入学する、参謀や提督を育成するための機関で、出世する気があるのであれば、そこを卒業するのは必須――は「なるべく海にいたいから」との理由で入っていない叩き上げだ。

水雷屋と言えば、大艦巨砲主義者に次ぐ頭の固さを誇る印象があるが、斉藤は航空機の脅威を認識し、そちらへの対処法も詳しい人物で、演習風景を見ていた英が、彼女なら水雷・防空戦闘のどちらも得意だろうと、第一東遣艦隊編成時から手許に加えてきた。

最高司令官にそう言われてしまえば、騒いだところでどうにもならない問題は無視しよう――との空気が、艦隊司令部内でも芽生えたが、潜水艦群の方は何をさせれば良いのかと皆が頭を抱えた。八隻という数はそれなりのものだが、第七艦隊――遊撃機動部隊は通商破壊を専門とする部隊ではないし、戦力的に中途半端だからだ。

瑞穂海軍は潜水艦を大きさにより等級分けしている。排水量一〇〇〇石以上が一等、五〇〇石から九九九石が二等、四九九石以下のものが三等という具合に。

第七艦隊に預けられた潜水艦は、等しく排水量が八〇〇石で、二等潜水艦に区分された。彼女たちは無限機関搭載艦なので、航続距離は食料が持続する限り何処までもというもので、その任務の性格上遠距離航海を求められる艦向きだと言えた。

しかも水中速力は二四航里と凄まじく、「旧式戦艦であれば海中にいながら振り切れる」領域である。とても潜水艦のものとは思われない。

だが、第七艦隊は第六艦隊とは違い、潜水艦を専門的に取り扱う部署ではない。戦艦や空母を

含む機動部隊だ。潜水艦の運用方法に関してはどうすべきか、確固たる見識はなかった。

いや、そもそも第六艦隊が持て余した艦が回されてきた、との様相を初めから呈していた。彼女たち――高波（たかなみ）級二等潜水艦は、瑞穂海軍の潜水艦として初めて無限機関を搭載したものだ。何かしらの不都合を起こして海中で立ち往生する確率が高いのではないかとさえ噂されていた。

また、でなければ戦艦部隊と機動部隊を兼ねる艦隊に潜水艦が回されてくる訳がない。

「面倒臭そうな艦を纏めて押しつけられたのでは？」

とは第一東遣艦隊時代から英の参謀長を務める楠裕（くすのきゆたか）少将の弁だが、これには反論できる者が最高司令官以下誰もいなかった。英にしても薄々（うすうす）感づいていた。海軍元帥を父親に持つ皇族将官が指揮する艦隊なのだ。自分が上層部に籍を置いていたら、似たような真似をしていた――〇代の姫様提督に大部隊を率いさせるなど、無茶の極みだ――に違いない、と。

「そんなに複雑に考える必要はないさ。潜水艦群に関しては別行動を取らせれば良からう。先行させて偵察に用いるとか、高速を利して一撃離脱戦法を取らせるとか、その場に依じて運用法を考えれば役に立つ」

結局、英にしても航空機や戦艦ならば判るが、巡洋艦以下の艦艇になると、専門家に実際の運用を任せる他ないと考えた。一兵卒にまで総大将が命令を出そうとすると手間ばかり増えて運用効率が悪くなる。大まかな方針だけを決めて、細かな部分は各責任者に任せてしまうよりないと結論づけた。

体裁は整えられたが、いびつ極まりない部隊を率いる事になった英は、だが満足している。海軍総司令部直属の独立艦隊ともなれば、出撃するに際して、皇国聯合艦隊司令部の許可をいちいち求める必要はない。あまり期待されていない部隊だからこそ、積極的な前線活用を認められる可能性が高く、戦えるのであれば何でも良いと彼女は考えていた。

やはり、彼女は生粋（きっすい）の戦争屋だったのかも知れない。

3

第七艦隊に属する各戦隊――それを率いる者たちが集められたのは、艦隊が発足してから間もなくであった。英が最高司令官名義で作戦会議を開くとの通達を出し、集合させたのだ（第八戦艦戦隊に関しては、英が戦隊司令官を兼任する形だ）。

各戦隊司令官は、当然ながら皆が英より軍歴が長い。と言うよりか彼女が若すぎるのだ。瑞穂どころか他国に目を転じて、一〇代の艦隊司令官など他にはいない。

「一体姫様は何を言い出すのやら」

そう思う者も戦隊司令官の中には含まれた。「催飯（さいはん）防衛戦」や此度（こたび）の爬間諸島沖海戦で、英の名前は国民に広く知られているが、海軍が宣伝用に拵えた宣伝用風船（アドバルーン）なのではないか、との疑いを抱く者が少なからずいたのだ。「飾り物に騒がれても迷惑だ」――と。

これはある意味で当然の反応だと言えた。「戦争の天才」はごく稀（まれ）に現れるが、自分たちの総大将がそうですと言われて、即座に納得できる訳がない。軍部の宣伝活動の結果生まれた「似非（えせ）英雄」など、世の中には掃いて捨てる程いる。

「とにかく一度会わねば、何とも言えん」

顔も知らない相手に生殺与奪権を握られ、無茶苦茶な命令を出されるのは嫌だと感じる精神構造は、二等兵でも提督でも同じである。上級将校のみを集めた作戦会議をやるのであれば、かなりまで突っ込んだ話を聴くのは可能だろうと、彼らは当たりをつけた。

会議招集を決めた英にしてもそのつもりだった。考課表などで書類上はどんな人物なのかある程度までは把握できたが、やはり実際に顔を合わせなければ、その人物の癖や心情が飲み込めない部分がある。

英の我の強さを知る参謀たちの中には、

「言い争いになるだけだろうから、むしろ逢わない方が平和裏に話が進むのではないか？」

とその効果に疑問を呈する者もいたが、一度こうだと言い出したら他人の話に耳を傾けない気質を持つ英に反論するのが面倒で、結局は沈黙した。

何しろ艦隊発足から間もないのだ。最高司令官と各級部隊指揮官が意思疎通を円滑にするために顔合わせをされると言われたら、それは確かに正論だし、反対する方がおかしい。

だが、相手が皇国聯合艦隊司令長官でも遠慮なしに意見を述べ、揉め事を起こしてしまう英の性格を思えば、「触らぬ神に祟りなし」「掴み合いになる前に止めねば」と妙な考えを起こす者が複数いても不思議ではない。

そんな英に正面から意見できたのは、義弟――神社美御少佐ただ一人である。彼は他人の目がない時に、義姉に諭すように言うのだ。

「義姉上、どうか自重してください」

「自重しろ？ 何をだ？」

心底不思議そうに問いかける義姉に、義弟は額を抑えてからため息混じりに教えた。

「義姉上、貴女(あなた)は常に正しい。ですが、正しさを訴えるだけでは人の心は掴めません」

「それは承知している」英は頷いた。自覚はあるのだ。ただし、莫迦を見ると我慢が出来ないという性格を直せるかと言えば、その自信は絶無だが。

「我々はこれより聯合帝国艦隊という、有史以来最強の敵と戦わねばなりません。我々の事を敵視あるいは軽視する者も海軍部内には多い。その上で直属の部下、その中にも敵を作るような真似は避けて欲しいのです」

「内憂外患（ないゆうがいかん）は認める。前門の虎後門の狼（おおかみ）もそうだな。しかし無能者に何故気を遣わねばならん。私の方が階級は上だし、正しいのであれば、温和（おとな）しく従えば済むではないか」

これは物判りの悪い権威主義者の物言いではなく、子供じみた我儘（わがまま）なのである。英はまだ一〇代であるが、大人の汚らしさを知っている。また知らなければ流石に提督にはなれなかったろう。全てを踏まえた上で義弟にだけ己の思うところを述べている。

美御もそこは理解している。ただ頭ごなしに理屈を述べるだけでは、彼女を不愉快にさせるだ

けだ、とも。

「人間はただ相手が憎らしい、機会があれば足を引っ張ってやりたいとの思いだけで、自分を含めて全体を破滅させる事があります。争いの火種を――爆弾をうちに抱え込むのは危険だと申しているのです」

「国を挙げて戦争をしているんだぞ」

「だとしても人間心理は不変です。歴史に関しては貴女の方が僕より詳しいはずですが」

そう指摘されると、英にも思い当たる節はあるらしく沈黙した。土壇場（どたんば）で意趣返しを企んだ挙げ句、自分が所属する組織は固より、国家そのものを滅ぼした事例は、何気に多いのだ。

「美御の言いたい事は判った。なるべく我慢しよう」

「そうしていただけるのであれば、幸いです」

子供時分から、英と美御はこうした遣り取りを続けていた。自らの正しさを疑わない英が暴走しかけると、殆どの場合、美御が途中で止めた。英の停止装置（ブレーキ）を美御が自認している訳ではないが、そろそろ止めないとまずいという勘所を彼は心得ていたのだ（参謀が英に面倒な話をせねばならない時は、彼を『通訳』または『仲介役』にする事が多い）。

第七艦隊――遊撃機動部隊最初の作戦会議は、そんな様々な思惑を裏に潜めた形で始められた。

「作戦会議」と銘打たれて始められた集会であるだけに、場所は艦隊旗艦――戦艦「八洲」の作戦室が選ばれた。軍艦の中にある部屋と言え、如何にも実用重視な殺風景なところを思い浮かべる者も多いだろう。これまで交代で皇国聯合艦隊旗艦を務めてきた矢隠級戦艦の四隻もそうだった。室内中央に橋道洋全域の地図が記載されてある兵棋盤（へいぎばん）があり、それが一番目を引く――という具合だ。

ところが「八洲」の作戦室は大分趣(おもむき)が異なる。

数十人が一度に会して酒宴（パーティー）が設けられる程の広さを持ち、内装はホテルの高級宿泊室(スイートルーム)を思わせるものを取り揃えられており、見る者を圧倒する。壁に飾られている油絵一つで一身代――庶民の一生分の収入に匹敵するだけの価値があるのではないかと、眼にする者に想像させた。

招かれた戦隊司令官たちの中には、想像の外にある室内に戸惑いを隠せず、視線をあちらこちらに向けている者、煙草（たばこ）を何度も吹かし、灰皿を既に埋めた者、立て続けに水を煽る者など、それぞれの反応を見せている。

瑞穂海軍は五分前行動を不文律にしている。何かをやる時にしても、五分前には行動可能状態にするのが約束事なのだ。英もそこは心得ている。彼女は副官――五十旗紅葉（いそはたもみじ）と皇族附（つき）武官でもある美御を伴い、作戦室に会議開始五分前に現れた。

英はこの時も、既に自身の 象徴（トレードマーク）と化した感のある、讃州県海軍国民防衛隊（ネイビー・シビリアン・ガーズ）の大佐服姿である。白い上着に緋色の軍袴（ズボン）。通常の提督とは異なる衣装（スタイル）。されども彼女がそうしていると、舞台衣装のようにも見え、不思議と違和感を感じさせなかった。うるさ型の提督でさえ、「制服をきちんと着用したらどう

です」と言わせる余地を挟ませなかった。

階級や後援者（スポンサー）を楯にして偉そうな態度を取る者は、軍隊では珍しくない。戦隊司令官にまで上り詰めた面々からすれば、そういう輩に一度や二度は確実に悩まされたはずで、その対処法も心得ているはずだった。

しかし英の場合、偉そうとかそう言うのではなく、何故か睨まれたら態度を萎縮（いしゆく）させてしまうような、年齢の割には威圧感が強すぎるような感じがした。

彼女の事を顔を合わせるまでは経験不足の小娘だと莫迦にしていた者も多かったが、黒曜石（こくようせき）を思わせるその双眸に射貫かれると、欧洋州（おうようしゅう）の神話に出てくる、相手を一睨みしただけで石化させたという怪物と出くわしたかのように、射竦（いすく）められる者が続出した。中にはあからさまに視線を逸らす者もいる。

「最初に舐められたら負けだ」とばかりに、妙な気合いを英が入れているのも影響してか、言葉を交わす前に上下関係を叩き込まれたような雰囲気が漂う。

これを視た紅葉は当然だと受け止めた。彼女は英より七つ年上だが、英の天才的な能力とカリスマ性に惹かれて副官を志願した。その心酔ぶりは神を仰ぎ見る信徒のそれに近かった。

美御の方とは言えば、頭を抱えたくなった。確かに英は無駄に敵を作るような真似は避けてくれたようだ。しかしこれでは失敗を恐れる羊を量産したようなものではないか？ 誰もが責任を回避したがる――自分で考える事を放棄したような組織など、褒められたものではあるまい。

副官と義弟が一八〇度異なる結論に達しつつある中、英は上座に座した。自分がこの場の最上級者なのだから当然である――と顔色一つ変えない。会議開始時刻が訪れたのを見計らい、彼女は徐（おもむろ）に告げた。

「私が第七艦隊最高司令官の戦船英中将である。順番に役職氏名を名乗り給（たま）え」

最初に長い挨拶（あいさつ）があるのではないかと――と身構えていた戦隊司令官たちは、簡素な物言いに意表を突かれた。無言の圧力を感じさせられた後だけに、何を言われるのやらと皆が考え、反応が遅れた。

即座に返事がない事に、英は冷たい苛立ちを深めたようだった。彼女は性格的に短気（せっかち）なのである。「火事と喧嘩は名物」だと言われる東府（とうふ）で幼少期を過ごした影響もあるのかも知れない。それが表情に表れかけた時、最先任の少将が起立し、自己紹介を始めた。

「第三〇巡洋戦隊司令官、金ヶ崎馨（かながさきかおる）少将です」

愛雄級重巡洋艦四隻で構成される戦隊を率いる人物は、潮焼けした顔をしている。これは海上勤務が長い事ばかりが理由ではない。彼は瑞穂皇国西端領――東天竺（てんじく）の僻地、その名前も知られていないような孤島に、しばらくの間勤務していた。

無能故ではない。配偶者に問題が見られた。金ヶ崎の妻は、戦前――瑞加開戦前まで、第一仮想敵国に定められていたブリタニヤ帝国の生まれなのだ。英が彩色写真で確認した限りでは、高級陶磁人形（ビクスドール）のような外見をした金髪碧眼の女性で、四八歳の金ヶ崎と四半世紀程年齢が異なるのだとか。

金ヶ崎が左遷（させん）された――閑職に回されたのは、ブリタニヤとの内通を疑われたか

らだ。それもそうだろう、と英も思う。金ヶ崎は初婚だった。独身主義を長らく貫いた挙げ句に選んだ妻がそれでは、間諜（スパイ）扱いされるのも無理はない。

そんな人物が主力艦を預けられたのは、人手不足のためだ。重巡クラスの艦を指揮できる人間は限られており、「使える人間を遊ばせておく余裕はない」との判断から、彼は復帰（カムバック）できたのだ（対戦国がヴリタニヤではなく聯合帝国だから、との理由もある）。

そして第七艦隊に一一英のところに回されてきたのは、「扱いが面倒な姫様提督のところでも、彼なら文句を言わずに従いそうだから」という身も蓋（ふた）もない事情によるのだろう。彼は外国人を伴侶に持つ者の多くがそうであるように、国家への忠誠心を示す事を望んでいた。そのために前線で戦う事を希望していた。戦死しようとも、それなら遺家族が遺族年金を受け取れる。生活には困らない。僻地で腐るより余程軍人らしくろう。

英は安易に「愛国心」だの「御国のため」だと連発する人間を信用していない。そういう輩こそ、都合が悪くなれば国を裏切ると思う。自分自身のために戦うと口にする者の方が、正直な分まだ信用できる。絶望を背景にする者は、退く事が死に等しいのだ。愛する妻がいるゆえに忠誠を捧げてきた組織から疎まれた金ヶ崎からすれば、今回の戦争は人生をやり直す最大の好機なのだろう。彼がそう考えて真剣に戦ってくれるのであれば、別に構わなかった。

次に自己紹介を始めたのは、英に代わって第二航空戦隊の指揮を執る事になった周防正成（すおうまさしげ）少将である。彼は温和な顔立ちとそれに似合う恰幅の良さをもち、民話に出てくる福の神を連想させる人物だ。

航空母艦の艦長や基地航空隊司令を歴任し、航空行政に携わった事もある。戦闘指揮と事務処理の双方をそつなくこなせる周防を指して、「将来的には皇国聯合艦隊司令長官か海軍総長になるのではないか？」との話もある。

だが、そんな評判や温和な容貌とは異なり、彼は訓練や戦闘では激しかった。血反吐（ちへど）を吐くような猛訓練を麾下部隊に施し、何人も殉職者を出した。現地でついた渾名は「人殺し正成」であり、一部ではやり過ぎだと言われもした。

しかし、それだけに彼が鍛えた航空部隊は強く、担当地域では事故以外で喪われた機体は皆無一一だとの報告を、英は受けている。彼女自身が海賊討伐に従事し、損害を抑える事の難しさを知るだけに、その価値の重さが理解できた。

三番目に名乗りを上げたのは、第一航空戦隊司令官の東雲忠二（しののめちゅうじ）少将だ。彼は瘦(や)せぎすで鶴にどこか似ていた。元々が水雷戦隊の専門家なのだが、航空機が持つ将来性に着目し、四〇を過ぎてから飛行士の免許を得たという気合いの入った男でもある（瑞穂海軍は航空部隊の指揮官は、飛行士の資格を持つべし、との不文律を持つ）。

ただし、同僚からは「高速風見鶏（かざみどり）」だと皮肉られた。一般に水雷戦隊関係者は身内意識が強いが、それだけにそこから望んで離れようとする者に対する態度が厳しい。東雲が寡黙な男で、弁解じみた言葉を殆ど口にしなかったのも災いしたようだが。

第五水雷戦隊司令官一一斉藤一葉少将も一応流れから名乗る。彼は楠参謀長と海軍兵学寮同期だし、英とも既に面識がある。水雷戦隊のする事に関しては斉藤に一任するとの決定が成されているから、他の者とは違い落ち着きがある。

齊藤に関しては性格や能力を既に把握しているから、英としても改めて注目すべき部分はない。彼女の目を引いたのは、その隣にいる人物――五人目の少将だ。高波級二等潜水艦八隻により構成される、第四〇一潜水戦隊司令官である。史上初の高速潜水艦部隊を預けられただけに、他の提督とはどこことなく違う感じがする。

彼は他の提督と比べて経歴も奇妙だ。名は後醍重忠（ごだいしげただ）という。その重厚な響きのある名前からも判るように、貴族だ。しかも場末のそれではない。元皇族で皇籍放棄後に公爵になった。故に渾名は「後醍宮殿下」だという。貴族的な風貌の持主で、望めば戦艦部隊を率いる事も出来たろうに、何故だか本人は潜水艦勤務を希望し、今に至る。

元皇族とは言え、英と後醍は面識がなかった。血縁的な繋がりも民法的に言えない。何しろ英は潜水艦と言え、兵学寮時代に練習用のそれに乗ったぐらいで、後は無縁でいたからだ。活用法については判るが、細かな技術に関してはよく判らない――そんなところだ。

考課表や本人が身に纏う雰囲気からして、やはり潜水戦隊は後醍に任せた方が宜しかろうと、英は思う。素人が下手な口出しをすれば、折角（せっかく）の持ち味が消えてしまう類いの部隊だろうと当たりをつけたのだ。

そんな英の思惑を後醍も感じたのか、僅かに微笑む。偵察であれ、敵艦隊攻撃であれ、通商破壊であれ、自分に任せてもらえるのならご期待に添う――彼の瞳からはそうした自信が透けて見えた。

戦隊司令官たちの自己紹介が一通り終わるのを見計らって、金ヶ崎が拳手質問をした。「英殿下――いえ、最高司令官は当艦隊を如何様（いかよう）に活用なさるおつもりなのですか？」

皆が考えていた事である。第七艦隊――遊撃機動部隊は、「八洲」「岩城」「清石」がいるし、正規空母を四隻編成に含むので、機動部隊としても活動可能だ。艦隊決戦の一翼を担うのであれば、そのどちらでも活躍が期待できる。

戦隊司令官らの他に、参謀たちも英に視線を注ぐ。第七艦隊は結成されたばかりなので、英を直接補佐する者たちにしても、彼女の所信を知らない。

腕組みをして暫し沈黙した英は、その質問に対し、「私はこの艦隊を四カ月程度で戦えるように仕上げた上で、敵の連絡線を破壊する事に力を注ぎたい」

「四カ月」――その言葉が持つ響きに、驚いて眼を瞬く者が続出した。通常、一個艦隊が艦隊として戦闘可能になるまでに必要とされる時間は、最低でも半年だとされている。これは素人を一から鍛えた場合を指すのではない。既に個艦としての訓練を終え、活用可能な艦ばかり揃えたとして――という話だ。

それなのに、無限機関を備えた新型艦を複数揃えた艦隊が、四カ月で部隊単位で行動出来るようにしたいとは、余程見積もりが甘いのか、楽観主義者が口にする無茶なのか？

皆が言わんとしている事を察した英は、機先を制し、「私も難しい要求をしているのは承知している。だが、やらねばならん。我々に残された時間は短い。悠長に訓練をしていたら、全てが手遅れになるやもしれん」

「手遅れとは？」金ヶ崎は疑問符を浮かべた。

爬間諸島沖海戦で、確かに瑞穂海軍は大敗を喫した。しかし聯合帝国艦隊も少なくない打撃を被り、攻勢を再開するには、半年か一年は必要だと海軍総司令部は見積もっている。

「西部帝家艦隊だけが相手ならば、当面は危険はあるまい。彼らにしても戦力回復の必要があるからな。だが、聯合帝国は西部帝家陸海軍のみで我らに攻めかかるのではない。彼らには帝国本土軍や南部帝家軍がいるし、他方面からの戦力転用も可能だ」

「何か兆候が？」

「聯合帝国今上帝ジークフリートは、事ある事に我々を挑発し、遂には戦争にまで持ち込んだ。彼が指導者の地位にある限り、我々に対する攻撃の手が緩められる保証が、何処にあるのかね？」

そう切り返されると、訊ねた方としても沈黙するよりない。何しろ関税自主権を撤廃して門戸を開放しろだの、無限機関の技術を全面公開しろだの、橋道洋各地の自治領で住民投票を実施させ、独立させるか否かを問えだの、瑞穂側の神経を逆撫でにするような要求ばかりを、彼らは繰り返してきた。

その挙げ句に今度の無条件降伏要求である。

聯合帝国は瑞穂を圧倒する事により得られる権益に目を奪われ、こちらを完全に舐めているとしか思われない。

「しかし、我々には他にも艦隊がありますが」

「第一艦隊は再建途上だ。それに岩城級巡洋戦艦の六隻を除けば、即座に投入出来る戦艦は一隻もないんだ」

「近代化改装中の高賀（こうが）級戦艦は間もなく出渠（しゅっきょ）できるはずですが？」

高賀級戦艦とは、この時点で一〇年程前にゲルマニヤから購入された、三八センチ五〇口径砲連装四基八門を装備する艦で、同型艦に「駿海（するみ）」がいる。爬間諸島沖海戦の際は金ヶ崎が口にしたように近代化改装の最中で、危うく難を逃れた。

主砲仰角の上昇に主砲水压装置の換装、更に新型高角砲と対空機銃の増設、機関出力向上により最大速力が二六航里から二九航里へと上昇。戦艦部隊の一角を担うにせよ、機動部隊直衛艦を務めるにせよ、非常に使い勝手の良い艦になる予定だ。

「出渠して即座に戦場に行く訳にもいかんだろう。あちらはあちらで時間がかかる」

「他の戦力は当てにせず、我らだけで戦われると？」

「他力本願は趣味ではない。自力本願だな」

それは戦争の鉄則でもあった。追い詰められた状況で援軍が来るからがんばれと兵士に語る指揮官は数多いが、そもそも自軍で敵を撃退出来ていれば、そんな事を語る必要はないのである。

「我らが独立艦隊である事と何か関係が？」

「他の部隊の支援はさほど期待出来ん」英はこの際だからと問題を明らかにする。「可能なのは強制力を持たない『要請』だからな。応じてくれるかどうかは相手方次第だろう」

軍隊に於ける命令とは、する側がされる側に死を命じる事にもなる。それに対し「要請」とは、強制力を持たないもので、要するに「お願い」の域を出ないものだ。余裕があるのなら助けて

くれるかも知れないが、過剰な期待は身を滅ぼす元になる。

「我々の戦力だけで相手取れる部隊となると、限られてくるのでは？」金ヶ崎が疑問を呈する。彼は航空戦力にさほどの価値を認めていない。爬間諸島沖海戦の際に戦艦部隊が受けた被害も、乱戦に紛れた結果生じた、僥倖（ぎょうこう）に近いものだとの印象がある。

「艦載機隊がいれば、多少の敵艦隊は問題なく蹴散らせる」周防が言葉を挟んだ。「『紫風』は敵4号艦上戦闘機相手に充分通じるのが証明されたし、『赤星』や『陣山』を有効活用すれば、戦艦の撃沈さえ可能なはずだ」

「二航戦司令官の意見に賛成する」東雲が頷いた。「我々が鍛えた海の荒鷲（あらわし）は総計で三〇〇機を超える。それだけの航空機を一度に投入すれば、相手が戦艦だろうが機動部隊だろうが、必ず撃破してみせる」

一航戦司令官と二航戦司令官は、これまで親しい付き合いをした事はない。されども、金ヶ崎が言外に潜ませた航空戦力の軽視に気づき、互いの手を携えたのだ。

それを察した金ヶ崎は、眉根を寄せた。戦艦に比べれば格は劣るが、重巡は立派な主力艦である。それを新参者の航空部隊――瑞穂海軍の歴史から見れば、航空隊は急に現れたような存在――が割り込んで主役の座を喰おうなど、許容出来るものではなかった。

担当分野とは違う争いが起こりかけたのを視た斉藤と後醍は、英の方に視線を向ける。上級指揮官同士の仲違いは決して好ましい結果を生まないからだ。最高司令官に無言のうちに仲裁を求めた。

ここで言い争いを始められても良い事など一つもないのは、英も認めていた。彼女は諭すように告げた。

「――我々は敵艦隊主力と正面から戦わない」

その言葉に、金ヶ崎、周防、東雲の三者が息を止め、
「え？」

異口同音に何故――と続けようとするのを、英は「強い敵と正面からぶつかりと我々も傷つくからだ」と言って沈黙させた。弱気から来る発言ではないのは、その表情が語る。

「温存艦隊戦略ですか？」

海上戦力が敵に対し劣る陣営が取る戦略である。無理に戦わせて艦隊を消耗させるのではなく、極力戦力を温存する事に務め、敵に対しては「奴らは何を企んでいるのだろうか？」と警戒させ、常に一定の戦力を割かせる事を狙う。

ただし、それをやると艦隊そのものの士気はかなり低下する。「敵と戦うな」と言われて戦意を奮い立たせられる者はまずいないからだ。敵との交戦を避けるうちに、艦隊将兵の戦闘技量が大幅に下がる事も懸念される。

「違う」英は否定した。それから付け加える。

「先に述べたように、敵の連絡線を破壊する事に力を注ぐんだ。単独航行中の輸送船や各種戦闘艦艇、小規模の輸送船団などが狙い目だ。敵に輸送上の負担を強いる事により戦局の好転を企図したい」

「一個艦隊を通商破壊に用いると？」

「前例が皆無ではない。敵が大軍であれば避けて、簡単に潰せそうな部隊なら伏(ふく)撃(げき)して全滅させる」

「それではまるで海賊ではありませんか！」

金ヶ崎が机を叩いた。彼は最前線で敵と華々しく戦うために、この艦隊への配属を了承したのである。「催飯防衛戦」の勇者にして、爬間諸島沖海戦終盤に敵艦隊への反撃を果敢に試みた英であれば、艦隊決戦が必ず生起すると信じていた。

「そうだ。海賊だ。我々の先輩に倣う」

「先輩——ですと？」金ヶ崎は訝しむ。

「海軍兵学寮で君も学んだはずだ。我々の先祖は橋道洋への進出を決意した時、必要であれば海賊も仲間に加え、敵国商船の拿捕（だほ）撃沈を積極推奨（すいしょう）したではないか。あの行いを現代に再現する。幸いにして、我が艦隊には多数の艦載機と潜水艦がある訳だし」

「それでは敵艦隊との戦闘は極力回避すると？」

「好機あれば交戦を厭（いと）うものではない」

「好機とは如何なる基準にて判断なさるので？」

「私が状況から判断する。そこは徹底してもらいたい」英は噛みついてきた相手に言い含めるように告げる。「なし崩し的に戦闘が開始されるのは御免だ。事前準備なしに戦いが始まれば、どうなるか判らなくなる」

艦隊単位での戦闘を早い段階からしたい——と英は暗にほのめかしていた。とにかく戦う意思があるのであれば、許容できると、金ヶ崎は引き下がる。

「艦載機と戦艦、そのどちらを主力（メイン）になさるので？」

周防が確認の意を込めて訊いた。英は戦闘機搭乗員出身なので、航空部隊なのではとの期待がある。

だが——

「どちらかへの過度の依存は、眼を曇らせる原因になる。私は砲・雷・空の三本柱をうまく機能させて、総合的に活用したいと考えている。状況次第だ。臨機応変に行きたい」

確たる見識がないのでは——と疑う者、史上最大最強の戦艦に乗りながら、それを使うつもりがないのかと思う者、安易な口約束を避けたのかな——と何となく考えた者、それぞれ感想は異なるが、英の口調が有無を言わせぬものだったので、誰も反論はしなかった。

「他に何か質問がある方は？」

頃合いを見計らって、英の傍らに立つ紅葉が、各自の顔を見渡しながら言った。

皆が沈黙した。紅葉はそれを視て頷いた。

「他に質問がないのであれば解散だ。各自担当部隊に戻り、訓練を続けてくれ」

英がそう言って起立すると、他の者も倣った。会議参加者全員の顔を視てから、英は会議終了を告げた。

「これにて作戦会議を終わりとす。解散！」

皆が頭を下げて、最初の会合は終わった。

英の予感は的中していた。聯合帝国軍は攻撃の手を緩める気配は微塵もなく、次なる攻勢の準備を進めていた。

爬間諸島を占領下に置いた西部帝家陸海軍は、そこを瑞穂本国侵攻のための橋頭堡（きょうとうほ）とすべく、飛行場や兵舎の拡張を急がせていた。こればかりはと脱出用に残されていた港湾施設がその際に大いに活用された。必要物資を満載した各種輸送船が引きも切らず行き交い、平和な南国を橋道洋随一の――世界屈指の軍事拠点へと作り替えていく。その様子は、北加大陸西部が植民開拓を始めたばかりの頃――所謂（いわゆる）黄金狂時代（ゴールドラッシュ）を時と場所を変えて再現したかのようだった。

「工事そのものは順調のようだな」

土木用装軌車両（ブルドーザー）が瓦礫の山を撤去し、石ころだらけの地面を地均（じなら）しし、滑走路へと変えていく様を遠方から眺めながら、西部帝家艦隊司令長官――ユリーシア＝テレーズ・ド＝ボナパルト元帥は呟いた。

「はい。本国から輸送されてくる航空機は、今月だけで三〇〇機を数えますから」

ユリーシアの傍らに立つ、ヴィルヘルム・フリードリヒ・フォン＝アドラー少将――西部帝家艦隊参謀長と侍従武官長を兼ねる人物が、寄せられた報告書の内容を思い出しながら答えた。

「三〇〇機か？ 陸軍機が主か？」

「海軍機が主力（メイン）です。陸軍機は数は多いのですが、天測が出来ない者が過半を占めますので」

瑞穂海軍は航空機を目的地に移動させる際、商船改造空母の他に、島伝いに飛ばすという方法を用いている。その際に天測――星の位置から自機の居場所を把握する航法――は必須とされ、陸軍機もそれを学ぶ。

だが、大陸での戦闘を前提にして編成された、聯合帝国陸軍機の場合、地紋――地形を視ながら飛ぶ航法――しか習得していない者が殆どである。これは陸海軍の伝統的な不仲と、海上航空戦力は海軍に任せれば充分だとの判断、更には予算面での問題と、構造的な話が絡んでくる。

そうした諸々（もろもろ）の事情から、アドラーは対瑞穂戦――橋道洋戦線で陸軍機はあまり役に立たないと考えている。内陸部の防衛用――単なる直掩機としての活用ならともかく、洋上を戦闘航海中の艦隊を攻撃するなど、技量の点からして可能とは思われないのだ。

そこはユリーシアも認めている。陸軍機は渡洋攻撃を求められる重爆隊ぐらいしか洋上を飛べないのだ。無理強いすれば全機墜落する可能性もあるし、そもそも高高度攻撃用の四発機で洋上目標を攻撃したところで、命中弾など期待できない。直掩用の戦闘機さえ回してくれば、それで充分だと思う。

「我々の艦隊は当面使えない。護りを固めねば」

「被害を免れた艦船にしても、修理点検（オーバーホール）は必須の状態でしたしね」アドラーは同意した。帝国本土から本州艦隊が回航されるのが既に決定していたが、彼らが西部帝家艦隊の諸艦艇を護衛してくれるかどうかは疑問だ。

帝国中央政府は、西部帝家陸海軍に橋道洋戦線での戦功を独占されるのを嫌い、本州艦隊に対し「西部帝家艦隊にだけは負けるな」と言い聞かせているらしい。

またそうでなくても、使用言語や人種――西部帝家領はガリヤ系とヴリタニヤ系が過半だが、帝国本土ではゲルマニヤ系が主流だ――のみならず装備品まで異なる軍勢なのだ。足並みが揃うかどうかは大いなる疑問だった。

「戦艦は修理すれば済む。新造艦と合流させれば更なる戦力増強が望めよう。だが、空母部隊は――」

ユリーシアは苦い薬を飲んだような表情になる。

爬間諸島沖海戦の際、西部帝家艦隊は正規空母の半数を撃沈破され、護衛空母群をほぼ全滅させられるという大損害を受けた。戦闘機隊にしても大打撃を受け、その補充は急務だ。

「例の敵将――イクサブネに叩かれたのが響いていますね」アドラーは他の聯合帝国の提督もそうであるように、大艦巨砲主義者だ。航空機に関してはユリーシアの方が詳しい事もあり、門外漢との感は否めない。

「そう言えば」

「何か気になる事が？」

「そのイクサブネなのですが、新編の艦隊の司令官に就任したそうです」

「新編の艦隊だと？」

「敵信傍受班が彼らの電波（ラジオ）放送を聴いて判明したと」

「当然だろうな」ユリーシアは自身の完勝にけちをつけた敵将を高く評価していた。「イノマツとやらはずいぶん扱いやすい方に部類できたが、奴なら手強いだろう」

「それと――」

「まだ何か？」

「彼らが戦前から建造していた例の巨大戦艦『ヤシマ』が遂に竣工したそうです」

「彼らの戦艦部隊は開店休業状態だ。戦艦一隻が今更増えようが、さほどの影響はあるまい」

「それがイクサブネの艦隊に配属されたとしても？」

「何……？」

「『ヤシマ』はイクサブネの艦隊の旗艦となるようです。彼らは派手に宣伝していましたから、まず間違いないかと思われます」

「彼らは情報を何でも垂れ流しているのか？」ユリーシアは皮肉混じりに言う。開放的（オープン）な事を謳う軍隊でも、民間人を軍艦に招くのが精々だ。戦時中に重要情報を何もかも発表していたら、機密も何もあったものではない。

「宣伝風船（アドバルーン）の意を兼ねているのでは？」西部帝家艦隊参謀長は政治的配慮ではないかと匂わせた。「彼らにしても反撃のための戦力が残されていると訴えねば、心細いでしょう」

「成程。確かイクサブネは内親王だったな。国民に広く名の知られた、一〇代の皇族提督が指揮する艦隊ともなれば、派手に宣伝したくなる気持も判らなくはない」

ユリーシアは自身の立場と敵将のそれを重ねてみる。

彼女は急逝した先王から位を譲り受けた。イクサブネの父親はまだ健在だが、彼は瑞穂海軍に於いて強い影響力を持つという。軍事的才能を有する娘に期待をかけ、大規模な部隊の指揮権を付与させるのは、ある意味で当然であろう。

「新編成の艦隊を訓練するとなれば、最低でも半年は必要なはずですよ」アドラーは西部帝家艦隊の現状を鑑み、意見を述べた。「となれば、彼女と先に手合わせをするのは、本土艦隊になるかと」

「橋道洋に派遣されてくるのは、確かゲーリングだったな」ユリーシアは橋道洋方面に派遣されてくる、帝国本州陸海軍の編成表を脳裏に思い浮かべた。

ヘルムート・ゲーリング上級大將は、帝国本土に於いて最大派閥を占めるゲルマニヤ系だ。若い頃には駆逐隊を率いて戦功を挙げたと伝えられるが、中年を過ぎてからは美食が過ぎ、だらしなく肥満し、颯爽(さっそう)としたところは何処にも見られなくなった。

そんな彼が橋道洋方面・派遣帝国本州艦隊司令長官という重職にありつけたのは、早い段階で今上帝一ジークフリートの支持を表明したからだ。彼は生き残りの天才と言うか、危険を嗅ぎ分ける能力には長けていて、常に自らを傷つかない場所に置く。

此度の件にしても、西部帝家艦隊が魚の骨一瑞穂海軍の戦艦部隊に大打撃を与えて無力化し、残されたのが旨味のある部分だけだから志願したのではと、周囲から目されている。

「海を跨いだ現代のラティウム帝国」の成立を目指す聯合帝国では、出世の階(きざはし)を昇るのに、軍務で目立つ功績を得るのが一番手早い。海軍提督が敵艦隊の撃滅に成功すれば、国民的英雄として凱旋する事が可能だし、国会一帝国議会(ライヒスターク)で確たる地位を占めるのも容易になる。

ゲーリングが比較的危険度が低いとされる橋道洋方面へ来たがるのも、無理はないと言えるが――

「何度か顔を合わせた事があるが、美術品や宝石の話ばかりする嫌な奴だったな」

「海賊を討伐していた頃は、その討伐対象が貯め込んでいた金銀財宝を独り占めしていたとか」

「性根の卑しい男だよ。橋道洋方面へ来たのも、瑞穂人の財産、その略奪が目当てかも知れん」

「彼の胃袋の中に何もかも消えるのでは？」

「言い得て妙だな！」

事実と皮肉を組み合わせた遣り取りの中で、主従は笑う。好意的な印象を抱けるのが、これから肩を並べなければならない友軍ではなく、手強い敵将なのが不思議と言えば不思議だが、彼らの中でそれは違和感なく受け止められた。

先史文明研究科。

その響きに厳めしさはない。字面だけ見れば大学の一部門で、遺跡発掘に勤(いそ)しむか、あるいは研究室で学者肌の人間同士が顔を突き合わせて、それぞれの意見を隙に述べている場——との印象さえある。

それは一面に於いて正しい。

何故ならそう言うところが少なからずあるからだ。瑞穂の最高学府である皇京大学にも同じ名前のものが存在し、先に述べたような事をしているからだ。人は好奇心の翼を刺激するものを求めてやまない。

だがそこに「陸海軍」と付されると、途端に危険な香りがするようになる。海主陸従(かいしゅりくじゅう)——軍部での主導権は海軍が握っている事で知られる瑞穂だが、事が先史文明の研究となると、別個に研究・遺跡発掘をして予算や時間を無駄遣いするのを嫌い、双方から人員を派遣して情報を共有する形を採用している。

これは両者に恩恵をもたらした。陸軍が使用する陸戦兵器は、海軍陸戦隊の装備と共通していたし、海軍が近年積極採用し始めた無限機関にしても、元はと言えば古代の文献と遺跡発掘により発見され、実用化に成功したものだからだ。

戦艦「八洲」の視聴覚室もその「発見」により構成されたものの一つである。室内全体に投影された「八洲」の全体図を設計主任兼建造監督を務めた牧原希(まきはらのぞみ)造船大佐が指示棒を片手に説明をしている。

「『八洲』は全長三三三間、全幅四五間。最大速力三四航里を誇る超弩級戦艦です」

この世界に於ける「超弩級戦艦」の「弩」とは、史上初めて三〇センチ砲を、連装四基合計八門搭載した弩(いしゆみ)級戦艦の事を指す。それまでの戦艦は主砲塔は連装二基までで、中間砲や副砲を舷側側にずらりと並べた帆船時代の軍艦——戦列艦を思わせるもので、事実接近戦をかなりまで意識したものだった。

しかし弩級戦艦は複数装備した主砲塔を活かし、遠距離から敵を一方的に痛打し、撃沈する事を可能とした画期的な艦であった。それ以降に造られた戦艦は、全てが彼女に倣い、その正当進化形とされる(ブリタニヤは同思考の戦艦をほぼ同時期に設計、建造に着手していたが、僅かな差で瑞穂側が弩級戦艦を先に竣工させた)。

「『八洲』が装備する主砲は、五一センチ五〇口径砲三連装三基九門です。これは書類上は九四式四六センチ砲と記載されておりますが、実際は今説明した通りです。射程距離は最大で六〇里——六万間にも達します」

「六万間」という部分に、感心のため息が漏れた。四五里以上先は、目視での確認が不可能だし、そもそも艦砲が狙う目標としては遠すぎて、固定目標でさえ命中するかどうか怪しい限りだが

、遠くに届く大砲が嫌いな者は少ない。

「副砲は二〇・三センチ六〇口径三連装二基六門――」

そこまで牧原が口にした時、英が訊ねた。

「何故副砲を搭載したのかね？ 最近の戦艦は航空機の脅威に備えるために、副砲よりも高角砲や対空機銃を増設する傾向にあるのだが」

設計段階での思想が古かった――とは言い難い。八洲級戦艦は竣工後に第一艦隊への編入が予定されている、四六センチ四五口径砲搭載艦――旭（あさひ）級巡洋戦艦より新しいぐらいなのだ。

「それについては」牧原は手許にある映像投影機を操作した。接触式表示板（タッチパネル）式なので直ぐに画面が切り替わる。「三式近接対空砲弾――通称三式弾が二〇・三センチ砲から使用可能になるからです」

「三式弾？」聞き慣れぬ単語に英は首を傾げる。

「従来の戦艦用対空榴弾は、対空・射撃用電探の制度の低さもあり、威力や精度に難が見られました。ですが八洲級戦艦から採用された二一号電探ですと、敵機を遠距離から補足、対空射撃を実施し、撃墜する事が可能となりました」

壁や床に投影されている画像、そこでは戦艦の影絵が艦載機の影絵を主砲射撃で撃墜する様が動画（アニメーション）で展開されていた。何がしたいのかは、それで理解できる。

「しかし、そんなにうまく行くのかね？」

英は疑問を呈した。相手が航空機より大型かつ鈍足な軍艦でも、主砲は滅多な事では当たらないのである。ましてや機動力がある航空機が相手では――言わずもがな。

「三式弾には従来の時限信管ではなく、近接信管（マジックヒューズ）が採用されています」牧原は再び画面を切り替えた。

三式弾が表示される。そこには砲弾の断面図から近接信管の特性までが記載されていた。

「敵機の付近を通ると、自動的に爆発するとな？」

「はい。これは対空噴進弾にもよく似た方式（タイプ）のそれ――砲弾には仕込めないものですが――が採用された信管なのですが、敵機の近くを通った際に自動爆発し、損害を与える仕組みになっております。電探で敵機の位置をある程度まで掴めば、十分な威力を発揮するかと」

「そんなものがあったとは」

「現在の技術では二〇センチ砲――すなわち重巡の主砲以下の寸法では作れません。ですから八洲級戦艦には副砲を採用しました」牧原は再度画面を切り替える。「また近接防御に関しては一二・七センチ高角砲を連装二四基四八門、四〇ミリ三連装機銃四八挺がありますので、敵機が直掩機に代表される迎撃網を突破してきても、問題なく対処できます」

「従来の戦艦の数隻分に匹敵するな」

近代化改装を行う際に、命中率や威力に問題のある旧型の対空火器を降ろし、新型の高角砲や対空機銃を増設換装し、対空射撃指揮装置を入れ替えた軍艦は数多いが、初めから対空戦闘を強く意識して造られた戦艦と言うのは、恐らく「八洲」が最初だろう。

「『八洲』は空母部隊の全滅など、最悪の事態――制空権確保が覚束なくなった際の備えが他に

もあります」

「と言うと？」

「これをご覧ください」牧原は、今度は航空機の画像を映した。

それは従来機を逆さまにしたようなものである。元戦闘機搭乗員で航空機に関してはかなり詳しい英でも、咄嗟に意味を理解できず、首を傾げた。

「『八洲』はこの戦闘機――『蒼電』を通常一二機、予備機三機まで搭載可能です。この機体は形は従来機と大幅に異なりますが、それだけに極めて強力で、聯合帝国が保有する如何なる戦闘機をも太刀打ちできないと判断します。制空権を喪失して尚、敵艦隊との交戦を継続せねばならない時は、これを投入して一時的にでも空からの脅威を排除します」

「つまり空母としての機能も『八洲』は有している？」

「左様です」

「しかし、発艦は発艦補助装置（カタパルト）で無理矢理にでも行うとしても、着艦はどうする？　まさか使い捨てか？」

当然の疑問である。航空母艦という航空機を専門的に運用する艦種が生まれたのは、戦艦に臨時設置した飛行甲板では発艦させられても着艦はさせられず、一度発艦させたらそれきりとなり、恐ろしく経済効率が悪かったからだ。

「『蒼電』は垂直離発着機です。制空権確保後に安全海域にまで逃れれば回収は可能です」

「垂直離発着機とな？　と言う事は――」

「これも先史文明研究科が発見した資料を活用したものです。開発は民間の航空機制作会社ですが」

「極めて高い機体なのでは？」

「ご推察の通りです」牧原は頷いた。「『蒼電』一機分で『紫風』なら五機は購入可能です」

「つまり通常機七五機分の費用がかかっている訳か！　それでは『航空戦艦』ならぬ『戦艦空母』だ！」

「八洲」はそれ自体を建造するのに、恐ろしい予算を必要としたと聴く。全長三三三間という巨体を造るのに必要な船渠の確保、五一センチ砲の開発、特大の無限機関を制作するために、軍だけではなく民間――一流大学の有名教授まで招聘し、特別研究班まで拵えたとか。

軍艦はいつの時代でも金喰虫（かねくいむし）である。瑞穂国民に海軍の象徴（シンボル）として親しまれてきた矢隠級戦艦にしても、一隻あたりの建造費は五〇〇〇万円にもなる。四隻合計だと二億円だ。盛り蕎麦一人前が七銭で、国会議員の年俸が二〇〇〇円の時代だと言え、その貨幣価値は判ろうか。

「一隻一撃。一個艦隊粉碎が『八洲』の建造目的ですので」さらりと牧原はとんでもない事を口にする。

通常、どれだけ強力な戦艦と言えども、各種補助艦艇がいなければ、その力を活用できない。航空機に袋叩きにされたり、駆逐艦に片端から突撃されたら、主砲を放つ前に行動不能になるか、沈没を余儀なくされよう。

「一隻で一個艦隊を潰すとなれば、相応の被害を覚悟せねばなるまい。その備えは？」

「『八洲』は艦体の全部分を特殊鋼板で覆われております。指揮中枢を司（つかさど）る艦橋部分や重要防御区画（ヴァイタルパート）である各主砲塔には六五〇ミリー——『八洲』自身が装備する主砲を用いたとしても、同一力所に数発以上当てねばならないような重装甲を施しております」

「急降下爆撃機にやられるような事は起きまいな？」

爆撃だけで沈没する戦艦は、滅多な事ではないとされる。「余程当たり所が悪くなければ」大抵は火災が起きるだけで済むのだ。しかし、爬間諸島沖海戦の際、四〇センチ砲装備艦である「穂先」が敵機からの爆撃——あれは水平爆撃だったが——で沈没している。

英が神経質になるのも無理はなく、彼女の参謀陣も気にしている様子だ。第七艦隊——遊撃機動部隊が旗艦と定める予定の艦だから、確認する側も真剣だ。

「『八洲』は同じ八洲級戦艦が相手でも、なかなか沈没しないように造られている艦です。提督もご存じのように、近年の戦艦は遠距離放線を想定して建造されています。石単位の砲弾が一度成層圏まで到達してから降ってくるのです。それに耐えられねば砲戦になりません」

「魚雷防御は？」

肝心な部分について、英は触れた。近年その脅威が認識された航空機、その中でも最大脅威とされるのは、雷撃機である。重装甲の戦艦でも、喫水線のしたは案外脆く、比較的小型の航空魚雷が数本命中しただけで、沈没の原因になりかねない。

「張出部（バルジ）の設置と護謨・重油層による二重防御ですね。被雷力所の穴を塞ぎ、延焼を最小限に止めるための措置としては」

「成程」

一般的な見解とは異なり、重油は燃えにくい。簡単には火が点かないため、軍艦の防御機構に組み込まれている。護謨についても航空機で既に有効な事が証明されているため、問題はないと言えた。

「二〇本までなら速度の維持が可能で、四〇本までなら戦闘は可能だとの試算が出ています」

「従来艦の一〇倍だと!？」

流石に法螺（ほら）なのではないかと思われる数字だが、牧原は真剣だ。艦隊司令官の眼前で大嘘をつけば将来に関わるので、彼女は嘘をついているようには見えない。

「無敵ではありませんが、それに近いものを造り上げたと自負しております」牧原はそう言い胸を張る。

英は、このさほど大柄とは言えない造船官の何処に、こんな怪物じみた戦艦を造る情熱があったのだろうと不思議になる。「好きこそものの上手なれ」と俗に言うが、誰でも努力が報われるとは限らないのである。

「無限機関の採用により航続距離も事実上無限大と来ている。これなら——」

「八洲」一隻でもかなりまでやれるかも知れない。

そう言いかけた英の言葉を、牧原は制した。

「『八洲』が搭載している無限機関は、単に大馬力と航続距離を確保するために開発された訳ではありません。実は先史文明研究科が発掘、開発再現に成功した、とある兵器を使用するため

もあるのです」

「まだ何かあるのか？」

「五一サンチ砲を上回る、画期的な兵器です」

五一サンチ砲より威力が上——ピンと来ない。英だけでなく周囲の参謀陣もそうだ。

皆が訝しむ中、牧原は「八洲」の全体図を表示した。内部構造が判る半透明型（スケルトン・タイプ）である。

「それを使用する前に、無限機関の出力を一時的に通常最大値に二割程足します。その力を熱量（エネルギー）伝達管を通じて各主砲塔に注入し、発射します」

図にされると判り易い。艦尾にある機関部から各主砲塔に熱量が注入される様が視覚的に確認できた。必要な時間は一分程で、その前に通常弾使用（モード）からそれに切り替える必要があるらしい。

「威力の程は？」

「こちらをご覧ください」

牧原は壁一面に記録映像を流し始めた。どうやら問題の兵器の試射風景を撮影したものらしい。

五一サンチ単装砲——恐らく三連装主砲塔を造る際に、その叩き台にされたもののようだ——の筒先が俄に光り始めた。目映い輝き。陸上固定されている大砲には似つかわしくないものが集束した時、衝撃は訪れた。

ピカリと凄まじい光が放たれた直後、砲撃目標とされた小島——草木一本生えていない岩くれ——が木端微塵（こっぱみじん）に砕け散った。後に残されたのは空中に巻き上げられた土砂が舞い散る様と、茸を連想させる禍々（まがまが）しい雲。

何が起きたのかを咄嗟（とっさ）に理解できる者は、英を含めていない。全員が固唾を吞んで瞬きすらしない。

「今ご覧戴いたように、この兵器は僅か一門で島一つを完全破壊できるだけの威力を秘めております。『八洲』はそれを都合九門備えていますから、敵戦艦群に一撃お見舞いすれば、それで決着がつく可能性もあります」

「俄には信じ難い」楠参謀長が抗議するような口調で言った。「これでは空想科学小説（サイエンスフィクション）に出てくる超兵器か何かではないか。一撃で島一個を破壊できる大砲など、存在そのものが邪悪だ」

同感——と言いたげな者が、全体の半数以上を占めた。英にしても、幾ら何でもやり過ぎなのではないか、と表情で語っている。牧原もその反応は予測できていたのか、文句は言わない。代わりにその「超兵器」の名称を説明し始めた。

「零式破壊光芒（こうぼう）射出砲——通称『光芒砲』がこの兵器の名前です。射程距離は通常弾のおよそ半分——三万間。無限機関に多大な負担を強いるために、連射は出来ませんが、艦隊決戦時の切札になると私は信じております」

姿勢を正した牧原は、接触式表示板を再び操作した。すると視聴覚室に展開されていた映像は全て消え、あの幻想的な雰囲気もまた溶け消えた。言いたい事は全て口にした——彼女の表情や

行動がそれを語る。

「提督、このような兵器に頼る事は、我らの名誉に関わる問題ですぞ。遺跡から発掘した古代の遺物に国運を委（ゆだ）ねるなど、あってはならない事です」

楠は不快感を隠そうともしない。それも無理からぬ事であろう。何しろ光芒砲を使用し、それが直撃すれば、相手の艦は恐らく鋌（リベット）一本この世に残さずに消滅するであろう。すなわち全員戦死だ。

敵を殺す事よりも、船を沈める事にこだわる――海戦勝利後には、漂流者であれば、敵すらも救助する事を誇りとする瑞穂海軍の船乗りからすれば、「大量虐殺兵器」を史上初めて使用したのが自分たちになるなど、御免被りたいだろう。

英にもその気持ちは痛い程判る。彼女とて無用な殺戮に手を染めたくはないのだ。できる限り人道に抵触するような行為に及びたくはない。戦争中でも超えてはならない一線は確かにあるのだ。

だが――

「私はあらゆる道德規範を遵守して国を滅亡させたくはない」

「提督！」

参謀たちは色めきだった。今の映像を見て尚、その使用に踏み切ると、彼らの指揮官は口にしている。慌てるのも当然だ。何しろ英は一度こうだと決めた事を曲げないと事でも知られるのだから。

「君たちに責任は押しつけない。極力使わない。必要な時が来れば私自身が全てを背負う」

「ですが！」

「聞き分けてくれ。私は武器があるのに手にせず、敵に屈する事は出来ない。何もかも護れる訳ではないのは、私よりも君たちの方が詳しく知っているだろう。護るべき対象が道德か国家かとなれば、私は迷わず後者を選ぶ。自分が属する階級を滅ぼしたくはないからね」

瑞穂国民の数は、本国にいる者だけで八〇〇〇万人。海外領土にいる者を含めれば一億を超える。

それだけの人間の運命を奈落の底に落とすような決断は、英には出来かねた。であるならば、自身の既得権益を護るために戦うと言い張った方が、幾らかでも気が楽だ。彼女には、安易に「大義」とか「正義」を口にする習慣はない。

「……………」

最高司令官にそこまで言われると、参謀陣はそれ以上の反対意見を口に出来なかった。彼らにしても妻子はいるし、一族の者を含めれば、護らねばならない対象は無数にいる。英が敢えて自分を悪者に仕立て上げようとしているのは、全て理解できた。

「光芒砲の発射引金（トリガー）は第一艦橋と第二艦橋の長官席にあります。光芒砲は戦略級兵器ですので、艦長や砲術長ではなく、提督ご自身が本当に必要だと判断なされた時に引金を引いてください」

通常兵器であれば、提督自身が引金を引くなどありえない。だが、先程の実験風景の記録映像を見る限りでは、牧原の言う「戦略級兵器だから提督自身の判断で使用して欲しい」との申し出

は素直に頷けた。艦ではなく地上施設相手に撃てばどうなるかは、想像力を働かせずとも予想がついた。市街地を目標にすれば、一撃で数万単位の人間を塵（ちり）に出来てしまうだろう。

「心得た。決して安易には使用しない」

その英の言葉に安堵を覚えたのは、果たして牧原か参謀たちか、それとも彼女自身であるのかは、誰の目にも判然としなかった。

蒼穹（そうきゅう）の空を誰憚（はばか）る事なく飛翔するのは、航空機操縦者を志した者の憧れだと言える。ましてやそれが戦闘機搭乗員で、自分が操縦桿を握る機体が、世界中の如何なる航空機よりも速いと聴けば、胸が躍る。「速度こそが最高の防御力であり攻撃力」だと言われる事のある戦闘機。その中で一番速いとなると、自分は今世界で一番速いところにいる事になるのだから、当然と言える。

その贅沢を、神社美御——「八洲」戦闘機隊隊長を務める、英の乳兄弟は体験している。

鶴賀が言うように、「蒼電」は飛行時間が少ない搭乗員が操るにはきつい機体だ。速度に振り回されて眼を回すか、あるいは急に失速してその隙を敵機に衝かれるかも知れない。高速重武装で頑丈な機体だが、「不墜」は航空機にはないのである。翼を僅かに掠め取られただけで均衡を崩して墜落に追い込まれた機体は多く、戦艦のように滅多な事ではやられない——とはいかないのである。

だが美御は満足している。この機体は英が「翔龍」から「八洲」に移る事が決まった時、「美御は戦闘機に乗るのが好きだろうから」と用意してくれたものだからだ。

英の皇族附武官を兼ねる美御は、彼女が戦艦を旗艦に定めたのであれば、そちらの方を優先せねばならない。自分が戦闘機搭乗員でいたいからと、英を航空母艦に止めて良い道理はないのだ。

皇族附武官を辞任すれば話は別だろうが、美御にその意思はない。彼はたとえ敗死する日が訪れようとも、常に英の傍にいたい。皇族附武官であれば、戦闘機に乗っている時を除けば、英の傍らに控えている事が多いから、それが叶う。

美御のそうした心情を、英の方も理解していた。だからこそ「八洲」に戦闘機の搭載が可能だと聴いた時、機種変更を彼に勧めたのだ。

「前例がない機体だと聴く。面倒な人の絡みがないのであれば、美御が隊長を務めても問題あるまい」

英はそう言って楽しげに笑った。

確かに「蒼電」は前例のない機体で、形状からしても他の戦闘機と違う事は一目瞭然だ。癖の強さを嫌い、熟練搭乗員ですら搭乗を拒否したとの話がまことしやかに伝えられるだけに、他の搭乗員たちも若かった。

何しろ戦闘機隊隊長の美御で一七歳なのだ。他の隊員たちも一〇代中頃だとか二〇代前半ばかりで、全員が海賊相手の戦闘経験者で、飛行時間が一〇〇〇時間近い猛者揃いではあるのだが。「馬車馬の如くこき使われてきた面子が集められたようすな」

とは、副隊長を務める荻助六（はぎすけろく）大尉の言い分である。彼は商船学校経由で海軍に志願入隊した口で、駆逐艦の乗組員から飛行士へと転じた。その後は海賊討伐のために外地へ

と送られ、多い時には日に三度も出撃を頼まれた事があるとか。

美御にしても、年齢の割には多い飛行時間は、その殆どが戦闘で培ってきたものだ。生命をギリギリのところで拾うこつは、戦場が教えてくれた。最前線を教師としなければ、爬間諸島沖海戦の際、生還できたかどうか怪しい限りだ。

「八洲」そのものは訓練未了なので、当面は出撃する事はない。個艦訓練に最低三カ月。艦隊全体での統一行動が取れるようになるまで必要とされる時間は、やはり半年は必要だろうか？

英は時間がないから四カ月で全てをどうにかしたいと言っていたが、慣れぬ物事をそううまく処理できる道理はない。手間を惜しんで大怪我をするよりも、ここはじっくりと訓練に励みたいところだ。

――まあ何にせよ、まずはこの機体に慣れないとな！

美御はそう思う。「紫風」二一型と比べて、時速に直すと一七〇里も異なる戦闘機をいきなり手足の如く使える人間は少ない。赤松少佐との模擬空戦を行った際は、決して格闘戦に持ち込もうとはせず、速度差を活かした一撃離脱戦法に徹したから勝利を拾えたが、実戦になると一対一で決闘型の空戦を行える可能性はかなり低い。航空無線を使用した集団戦法を双方が多用する事が予想されるので、機体の癖を早い段階で呑み込んでおくのに超した事はなかった。

――義姉上の期待に応えなければ！

機体を急降下させた。速度計が俄に限界値を超える。体感的には八五〇里か。設計技師は九二〇里までなら機体が壊れる事はまずないと太鼓判を押していたが、果たしてどうなるか――

強烈な重圧（G）に眉を顰めながら、美御は「蒼電」を預けられた前後の出来事を思い返していた。

「『八洲』には垂直離発着が可能な新型戦闘機が搭載可能らしい。それを装備した部隊の指揮を、任せたい」

英が美御に言う。場所は「八洲」の長官室――その寝床だ。薄い紗（ベール）で四囲を覆われている四柱寝台だ。ご丁寧な事に天蓋まである。欧洋州の姫君が用いるようなそれに、彼女と彼は身に纏うもの一つとてない姿で横臥（おうが）している。

疑似性交を一度終えた後なのだ。互いの身体には玉粒の如き汗が浮かび、生殖器には分泌物が発するぬめりと光、それと生々しい匂いがする。

「僕に――ですか？」英の身体が発するかぐわしい香り、それに鼻腔をくすぐられながら訊いた。

「そうだ。美御に任せたい。一〇機前後しかいない部隊だそうだが、扱いは戦闘機隊長だ。航空母艦のそれと価値は等しい。当然、少佐に昇進となる」

どうだ、嬉しいか――との響きが、英の声音にはある。

特別に贔屓してくれているのは、美御にも判る。英の乳兄弟でなければ、如何に皇室に縁がある――美御の祖父は皇室武装神官隊の長だった――とは言え、ここまで速く出世できなかったろう。

だが、疑似性交の最中にそう言われると、何だか女性提督に身体で媚びを売る男娼にでもなっ

たような気分になり、少し複雑だ。自分の方からそうした関係を求め、今に至るとの自覚はあるが。

「どうした？」

直ぐに返事がないことを英は訝しむ。眉を顰めた。

「僕に務まるでしょうか？」

「不安なのか？」

「僕が任務を果たせる器でなければ――」

そこまで口にする、美御は沈黙した。もし英を護りきれず、自分だけ生き残ったとしたら、という最悪の想像が脳裏を掠めたのだ。そんな事態になったら、自分に眼をかけてくれた元帥宮様――英の実父へ、割腹でもして詫びを入れるしかない。

「大丈夫だよ」義弟の心情を察した英は、小さく微笑んだ。「この艦は頑丈だし、美御の腕前や統率力は私がよく知っている。美御に務まらなければ、他の誰にも出来ないさ。うん！　少なくとも私はそう決めた」

勝手に合点する英に、美御は何か言いかけた。だがその前に口唇を塞がれた。英が接吻を求めてきたのだ。

濃密な口づけ（ディープキス）。

舌を絡ませて唾液を送り込む。まるで自らの言葉を彼の魂に刻みつけるかのように。

口腔内に進入し怪しく蠢く舌。甘い唾液。

それらを味わっていると、半萎え状態の美御の逸物に、不思議と力が込み上げてきた。

義弟の身体の一部、その変化をめざとく見つけた英は、妖艶と呼んで差し支えない表情を形作ると、

「難しい話はもうやめよう。もう一度しよう？」

そう言うと、恥骨に勃起し始めた男性器をグリグリと当てて、男を挑発する。そうされると少年の象徴はたちまち充血し、鉄の如き硬さを取り戻した。彼は若いのである。固より二度三度は軽く出来た。

「あ、義姉上――」

妙に上擦りのある声で言う。英はそれに応じ、白い太腿を美御の股間の間に差し入れ、絡ませる。

自ら男の身体に抱きついた英は、最も敏感な部分に堅く勃起したものを宛がい、刺激を加える。最後の一線は越えないとの条件で行われる性行為だが、それでも強い快感があるのだ。彼女は表情を蕩けさせ、甘く喘ぐ。

「義姉上、義姉上――」

男の方もそうだ。自身が最高だと思ふ女に性的奉仕をさせ、快楽に顔を歪ませていると思うと、たまらないものがある。互いに回数をこなせる自信があるためか、上り詰めるのも速い。

二人は切なげな声を上げると、同時に果てた。

何故今あの時の事を――との思いが、美御の脳裏をふと掠めた。寝物語の中で一個戦闘機隊を

任されたが故に記憶に強烈に焼き付いているのかと考えたが、答えは出ない。代わりに股間に痛い程の疼（うず）きを感じた。英程の女と肌を重ねているのだから無理もないと言えるが、それでも急降下中の戦闘機に乗っている者が考えて良い話ではない。

彼は誤魔化すように「蒼電」の設計技師が説明に来た時の情景を思い返した。

「『蒼電』は、元々は局地戦闘機として注文を受けて制作した機体なのです」

八須飛行機製作所――中堅どころの航空機制作会社から来たその技師の名は、鴨野芳文（かものよしふみ）といった。彼は海軍大尉の時に予備役に編入され、その後に航空機の設計技師へと転じた。経歴を見れば美御の先輩である。

「それが何故艦載機に？」美御が「八洲」戦闘機隊を代表して訊ねた。艦載機を陸上機として使用する事は珍しくないが、陸上機を艦載機に転用するなど、航空部隊黎明期の頃の話をおぼせる。

「『蒼電』は二〇ミリ機銃までなら耐えられる特殊装甲板の他に、特殊加工された飛翔石を装備しています。ゆえに垂直離発着が可能なため、軍部の方から艦載機用に切り替えろとの要望が届き、それに応じた次第です」

「つまり原型（オリジナル）とは大分異なると？」

「左様です」鴨野は頷いた。「翼を折畳式（おりたたみしき）にするなど、当初から変更した部分は多岐にわたります。『蒼電改』とでも呼ぶのが妥当なのかも知れませんが、最初の量産機が『八洲』に配属されたものなので、『蒼電』――型と呼称されております」

艦載機の設計は難しい。大型正規空母でも二〇〇間程しかない飛行甲板を用いて離発着艦をやる必要があるのだ、いろいろな制限が加わるのだ。機体性能は抜群だが、視界不良で着艦時に事故が起こりやすいとの評価を受け、落第とされたものも数多い。

「頑丈なのは判りますがね」副隊長――荻が訊いた。

「プロペラの位置が悪すぎやしませんか？ あれでは脱出しようとしたら巻き込まれて挽肉（ミンチ）にされる」

海軍航空隊の先輩で、設計技師でもある人物を前に、言い出しにくい事であるが、触れないではおれなかった。

この時代の航空機は、後年になり標準装備とされる射出型脱出装置がなかった。発動機故障（エンジントラブル）や被弾などで墜落が確実視される状況だと、飛行士たちは風防(キャノピー)を開けて、大慌てで脱出――落下傘（パラシュート）降下をするよりなかった。

プロペラの位置が通常機とは逆の「蒼電」だと、荻が言うように、その脱出の際に、搭乗員が回転中のプロペラに巻き込まれ、細切れにされる危険性があった。

味方の誤射により撃墜される航空機は数多いが、つい先程まで自分が乗っていた航空機に殺されるなど、誰でも嫌である。精神力とか心構えでどうにかなる問題ではないだけに、訊く方も真剣だった。

「そこは我々も認識しています」鴨野は予想していた質問だったらしく、落ち着いて答えた。

「操縦席に虎縞（とらじま）模様の桿（レバー）がありますので、もう駄目だと思った際は、それを引いてください。翼が爆破されますので、その後に脱出してくれば」

「翼を爆破？」

「初めは単純に外れるだけにしようかと考えたのですが、それだとやはり巻き込まれる危険があるので」

「随分と思い切った措置を取りましたね」

「私自身が元は海軍の飛行士でしたからね」鴨野は微笑んだ。「試作機にも自分で搭乗し確かめました」

設計技師兼試作機飛行士とは、何とも器用な話である。

機械いじりが好きで、子供の頃から壊れた目覚まし時計などを自力で直していた美御からすれば、ある意味で羨ましい事をしていると言えた。

「機体の整備法についてなのですが」

「我が社の方から整備員を何名か派遣し、こちらの整備員の方が慣れるまで指導します」

販売後の保証（アフターサービス）をせねば、稼働率が極めて低い機体になるとの認識は、鴨野にもあるようだ。気難しい発動機を採用したが故に、「駄作機」の烙印を押された機体が少なくない事を思えば、この後も海軍からの注文を受けたい八須飛行機からすれば、当然の措置だと言える。

「自分にも教えてくれますか？」

「少佐がご自身で整備をなさる？」鴨野は少し驚いたような顔をした。「操縦だけでなく、発動機も取り扱いが難しいですよ。専門家に任せた方が宜しいかと思いますが」

「整備員を信用していないのではなく」美御は鴨野の目を真直ぐに見据えた。「僕自身がそういう事が好きなので。『紫風』の時も愛機の整備は自分でしていました」

「零式艦上戦闘機と『蒼電』では大分勝手が異なりますが」本当に大丈夫なのだろうか、との意を鴨野は視線に込めている。これは美御の技量を疑っているのではなく、隊長機が発動機不調で墜落ともなれば、会社の信用問題になるからだ。

「うちの隊長は手先が器用です」荻が助け船を出した。「大抵の発動機は取扱説明書（マニュアル）を一通り読んで実際にいじくればものに出来る。心配はいりませんよ」

「それなら――」

鴨野は折れた。実際に機体を運用する部隊の隊長と不仲になっても良い事は何もないからだ。自社から派遣する整備員がつききりで取り扱いの仕方を教えれば、若いのだしどうにかなるのであると考えた。

「決まりですな」荻はにやりとした。

彼は他の面子の顔を視た。隊長にだけ愛機を整備させて、他は知らん顔とは行かない。これから乗る機体の特徴や癖を少しでも速く呑み込むためには、実際に触れるのが最も手早い。

他の搭乗員たちも同意見だった。副隊長に頷く。一〇代中頃から二〇代前半ばかりなので、皆が学習意欲が高く、好奇心が旺盛だ。発動機の整備法を民間人から習うのに抵抗はなかった。

部下たちの心遣いに感謝しつつ、美御は思う。一日も早く戦力化に成功し、義姉上の役に立たねば！

自分勝手とか我儘とかとは違うが、彼の世界の中心にいるのは、いつとても義姉なのだった。

「強烈な速度を出しているな」英は「八洲」第一艦橋の窓——その防弾硝子越しに映る情景を見やりながら呟いた。「音速に近いのではないか？」

「確か時速九〇〇里近いとか」

答えているのは情報参謀の名倉四織（なぐらしおり）中佐である。彼女は航空機の専門家ではないが、各種の情報に精通しているので、航空機の型録数値（カタログスペック）は頭の中に入っている。

艶のある長い黒髪と伶俐（れいり）な顔つきを持つ事から、人によれば「冷たい女」だとの印象を抱くが、話をしてみればそんな事はないのが判るタイプだ。既婚者であり娘が一人いるようなのだが、他人の家庭生活を追求する趣味のない英は、「家の中では一体どう振る舞っているのだろうか？」との好奇心を内面に止めているが。

「開発中の噴進式戦闘機の設計値に近いな」

「レシプロ機である機体に追いつけるものを造るのは不可能に近いかと存じます」

「頼もしい限りだ」

そう答えながら英は視線を長官席にある操作卓（コンソール）に移した。そこには黒い画面に蒼い輝点が幾つかあるのが確認できた。「八洲」の電探が捉えた味方機の姿を、直感的に判るように表示しているのだ。

「蒼電」には敵味方識別装置——特殊信号を発信する機器が搭載されていた。これは誤射を避けるために、または航空管制を容易にするために考案されたもので、機体に比較的余裕のある「蒼電」から搭載され始めたものである。

従来の機体——味方機や敵機に関しては、白い輝点で表示される。素人目には何が起きているのか判りづらいが、専門教育を受けた管制官であれば、問題なく処理できる事柄だという。

将来的には味方機全てに敵味方識別装置を搭載し、一目で敵味方の区別をつけられるようにしたい——とは、電探関係者の希望であるが、将来は将来だ。当面は「敵が来るのは理解できた」という範疇で迎撃戦を展開するよりない。

それにしても——と英は思う。

それにしても、この艦の長官席は他の艦とは勝手がかなり異なるな。他所だと単なる肘掛椅子なのに、ここだと子供時分に美御とよく読んだ空想科学小説、そこに出てくる宇宙戦艦（コスモバトルシップ）の艦長席のようだ。

英がそう感じるのは無理もなかった。

「八洲」の長官席は、他の艦では「猿の腰掛」という名称で呼ばれる、艦橋内の唯一の座席とは違い、周辺を各種の機器類で埋め尽くされていた。

英が今見ている対空電探画面の他に、水上電探が捉えた影を映すもの、敵味方艦の運動図を示すもの、「八洲」艦内の様子を各区画ごとに表示するものなどがあり、何かしらの表示画面（ディスプレイ）ばかりの座席だとの印象がある。

それらの操作は、接触式表示板の他に、鍵盤（キーボード）――印字機（タイプライター）を操作する時に用いるそれに近いものを使用する。電話帳ぐらいの分厚さがある取扱説明書を英は手渡されたが、持ち前の好奇心の強さと学習意欲を発揮した結果、数日のうちに使用法を会得していた。

操作法を説明に来た操作員（オペレーター）などは、英がたちまちのうちに必要事項を呑み込むのを見て、

「提督なら、一人で艦隊全部を指揮できるかも知れませんね」

そう漏らした。先史文明研究科が発掘した技術資料を基に製造された操作卓なので、瑞穂の――いや、惑星海球に存在する、如何なる国家の技術水準をも超えている代物だから、概念自体を理解するのに時間がかかると、彼は考えていたのだ。

「技術的に可能なら、やるかもしれんね」

英は微苦笑混じりに答えた。指揮系統が判り易い部隊の方が運用効率は良くなるが、同時に別の弱点が浮き彫りになるからだ。

それは個人の力量にかかる比重が大きくなり、その人物が何らかの形で指揮不能になると、たちまち部隊の戦闘力が低下するという、お決まりの展開だ。

海軍では昔から「上位下式達艦隊（ワンマン・フリート）」になるのを戒めている。ただ一人の人間が数十隻の艦隊を完全統括し動かすのは、命令伝達方式の制約などもあり難しいのと、艦隊司令官が戦死したら残り全てが無力化されるようでは、戦争にならない。

英は可能であれば全てを指揮したいと思うが、自分の部隊を木偶の坊の集団にするのも抵抗がある。

命令遵守が徹底され、尚且つ自主的な判断能力を有する集団を形作る。それは大いなる矛盾だ。個人崇拜を徹底して、どんな無茶な命令も即座に実行される部隊を造る方が余程簡単だと言える。

「どのみち何もかも思い通りにする訳にはいかないのだろうが」

そう英は呟くと、視線を赤いスイッチの方へと向けた。それは牧原が「戦略級兵器」だと銘打った光芒砲――その引金を作動させるためのものだ。

まずスイッチを押し、続いて鍵盤に艦隊最高司令官のみが知る八桁（けた）の数字を入力。そうすると「八洲」の艦内電子計算機（コンピュータ）にそれが認識され、光芒砲の引金が展開される（普段は操作卓内に格納されている）。

各艦内部署で光芒砲発射に必要な手順が整えられた後、引金を引くと、例の一撃で島そのものを吹き飛ばす威力を持つ破壊光線が射出される。

理屈は簡単だ。所謂「必殺技」と称して良い。

だが、それによりもたらされる破壊の規模を思うと、果たして使用に踏み切れるものかどうか――との迷いがある。過剰な威力は時として護るべき対象すら消滅させる恐れがある。

「大義なき戦いは獣のそれと同義」

だと、昔の軍事評論家は語った。英もその通りだと思う。軍隊が軍隊として戦えるのは、国家や国民の生命財産を護るため、という大義名分があるからだ。侵略戦争と言われるものでも、対

外進出により自国の経済的繁栄を図るというお題目がある。ただ破壊行為に勤しむ訳ではない。

それ程恐ろしいのであれば、実際に発射してみて、威力の程を確かめてみれば良いではないか。実際に自分の目で確かめねば判らぬ事は多かるう。

そう囁く声は、英の内部にもある。偉そうな事を言いながら、威力は想定の半分以下——という駄目な兵器は数多い。先史文明研究科が発掘してきたものにしても、その全てが優秀だった訳ではない。

しかし英は、今回の光芒砲に限って言えば、嫌な予感がするのである。瑞穂という国が発展してきたのは、先史文明の遺物を昔から有効活用してきた——何故かそこいらの山を掘ると、使えそうなものが見つかる事が多い——からなのだが、光芒砲は下手に使用すると人類滅亡の原因になりかねないような、危険な香りがする。

初めから使用に賛成していなかった参謀陣たちもまた、英に光芒砲の試射を勧めなかった。出来る事なら忘れて欲しいとさえ考えているのか、話題にさえ上らせない。

英は私の強い人物だが、光芒砲に関しては「使用に賛成しろ」とは到底言えなかった。赤いスイッチに視線を注ぐ彼女に気づいた名倉の、押し殺された嫌悪感などに気づくと、「私はそんなものに興味ありません」とばかりに、わざとらしく咳払いさえした。

「『蒼電』隊が着艦を開始します」

艦橋見張員のその報告に、救いのようなものを感じた英は、視線をそちらに転じた。「蒼電」は空中停止さえ出来る機体なので、その動作は滑らかだ。艦尾方向から降りてきて、後甲板に着艦する。

航空科員たち——砲術科が幅を利かす戦艦の中では少数派に属する面々——が艦載機の収容作業を開始する。翼を大急ぎで折り畳み、昇降機（エレベーター）を用いて「蒼電」を艦内に格納する。

航空機を専門的に運用する艦——航空母艦もそうなのだが、この時の作業は気を遣う。一步間違えば大惨事に繋がりがねないからだ。燃料と機銃弾を搭載した艦載機など、それ自体が厄介な可燃物に他ならない。

「着艦と発艦をもう少し速くする必要があるな」英は戦術的な面について触れる。

「電測員（でんそくいん）を信用していない訳ではないが、小数機の接近だと見落とす事がある。昇降機を使用している時に爆弾を艦内に放り込まれたら一大事になるぞ」

「八洲」は無限機関を導入した事により浮いた重量を、武装と防御力に割り振った。特に後者のそれは同じ八洲級戦艦と砲撃戦を展開しても、簡単には沈没しないという凄まじいものがある。

だが、艦内に続く穴がぽっかりと開いている時に攻撃を受けたらと思うと、不安が残る。どれだけ外面を頑丈にしても、内部から破壊されたら脆いものは多いのだ。

「そこは訓練を重ね、慣れさせるしかありません」

「八洲」艦長——瓜生願（うりゅうねがう）少将が指摘した。彼女は姓名にあるように瓜実顔（うりざねがお）で、糸のように細い眼をしている。新鋭戦艦の艦長職を拝命するようなタイプにはどちらかと言えば見えず、後方で書類整理をしている方がしっくり来るのではないかと思われた。

「やはりそうかね、艦長？」英は長官席に座したまま、顔だけを瓜生の方へと向けた。

「はい。『蒼電』自体が本来は来年度から採用される新鋭機ですので」瓜生は頷きながら応じる。「何事にも慣れと動作反復が必要です。考えるよりも先に身体が動くようになれば、必要時間も短縮されます」

型録数値が抜群な新鋭機を無敵な存在だと捉えがちなのは、素人考えだ。大抵は背伸びした反動が現れ、問題を起こす。戦闘機でも戦車でも、整備員の不慣れ――発動機不調による行動不能――や武装変更に伴う兵員の再教育には頭を痛めている。

「急ぎすぎるのも考え物かね？」

「早く事は時に求められますが、多少でも余裕がある時は時間をかける事も必要かと」

「事故多発で、戦闘前に行動不能では話にならんか」

瓜生は英に対しても臆する事がない。直言家な部分があり、それが正論であるため、英も認めている。

もっとも、そうした性格が災いした部分もあるようだ。

瓜生は「八洲」の艦装委員長――竣工後に艦長になる事が決められている役職――になる前は、海軍省の戦史編纂室に回され、古い資料とひたすらに睨み合いを演じていた時期もあったのだと聴く。

英も直に顔を合わせる前は誤解していた面がある。瓜生は対聯合帝国戦賛成論者で、むしろ先制攻撃を仕掛けるべきだと主張していたからだ。

「八洲」に将旗を移した際、英はその辺を皮肉混じりに口にしている。君の主張通り戦争は開始されたぞ。その辺についてどう考えているのかね？ 最前線で多くの航空隊員を死なせた指揮官としての顔がそう言わせた。

それに対し瓜生は動じる事なく切り返した。英殿下は――いえ、提督は聯合帝国が本気で我々と交渉する気があったのかと思われませんか？ 交渉過程などを見る限り、開戦は必至でした。どうせ戦争になるのなら、先制攻撃により敵の出鼻を挫き、我らに有利な内容で和を結ぶべきだと自分は考えました。

聯合帝国中央政府の態度に関しては、英も大いに疑問を感じていた口だった。瑞穂側を怒らせて、交渉決裂に持ち込み、なし崩し的に戦争を始めようとしていたのではないかと。

それで勝てると信じていたのかね？ という英の問いかけに、少なくとも我々が本気である事が相手に伝わります。爬間諸島沖海戦は政治的な都合から生起した戦いであり、初めから我々に主導権(イニシアチブ)はありませんでしたから。

乱暴な意見のようだが、頷ける面が多い。

英は瓜生を共に戦うに値する戦友だと認めた。単なる「自称憂国（ゆうこく）の志士」ではないのが話せば理解できた。

その遣り取り以来、瓜生は英に直言できる貴重な人材、その一人だという認識を周囲に抱かれた。楠参謀長は官僚肌の事務屋（デスクワーカー）タイプの人物で、英に戦略戦術面での助言を求められていないし、参謀副長の柳郡（やなぎこおり）大佐も彼の補佐役だから、戦場での駆け引きの類いは、全て英が処理していたのだ。

「必要な物資は必ず手配する。だから『八洲』乗組員を存分に鍛えてくれ給え」

「心得ております」

瓜生は姿勢を正した。その彼女の背後から「全機着艦完了」という見張員の声が響いた。要した時間は二〇分前後。その半分か四割にまで縮めたいと彼女は考えた。

3

第七艦隊——遊撃機動部隊は兵員二万の大所帯である。そのため艦隊司令部参謀は各所から選ばれた優秀な人間が揃えられていた。人物眼に関しては定評のある元帥宮——英の父親が娘を気遣い、これはという人材をその傍に置いたのである。以下にその人物を記す。

参謀長 楠裕

参謀副長 柳郡

首席参謀 釘村茜（くぎむらあかね）

作戦参謀 太刀風弥生（たちかぜやよい）

砲術参謀 豊島拡（てしまひろむ）

水雷参謀 山口門奈（やまぐちもんな）

航空参謀 鶴賀芳子

航海参謀 永海遙（ながみはるか）

通信参謀 美星明乃

補給参謀 萬屋満（よろずやみちる）

法務参謀 誘坂実（さそうざかみのり）

情報参謀 名倉四織

潜水参謀 橋本五八（はしもとごや）

機関参謀 徳平治（とくひらおさむ）

連絡参謀 五反田静香（ごたんだしずか）

この中で連絡参謀だけは毛色が異なる。と言うのも、連絡参謀とは通信参謀とは役割が違う。自軍や友軍と通信を交わして情報の遣り取りを管理する者ではなく、陸軍から派遣されてきた連絡係なのである。役割は陸軍と第七艦隊の意見調整だと言え、その立ち位置は判ろうか。

陸軍から派遣されてきた連絡要員と言え、海軍側に侮られないようにと、押し出しの強い男性が務める事が多いのだが、五反田は容貌端正な女性将校——本来の職務は砲兵中佐——である。どうやら陸軍側が、第七艦隊——遊撃機動部隊の最高司令官が内親王なので、同性の方が話しやすだろうと気を利かせたらしい。

その陸軍とのパイプ役——連絡参謀を務める五反田から皇都で陸軍を交えた作戦会議が大晦日（おおみそか）に開かれると聴かされたのは、間もなく年が暮れようとしている一二月二九日の事だ。

「皇国聯合艦隊司令長官が交代し、艦隊編成も大幅に変更になりましたので、陸軍としても意見調整の必要を感じたようです。是非とも出席をして欲しいと陸軍参謀総長からのお言葉が添えられておりました」

海主陸従が徹底されている瑞穂では、陸軍も参加する重要会議は、海軍の提唱で開かれる事が多い。

しかし、爬間諸島沖海戦での大敗と海軍人事の慌ただししい移動は、必然的にその影響力を地盤沈下させ、陸軍側から提案された作戦会議を認めざるを得なくなっただけらしい。

一連の戦闘で、陸軍は基地航空隊所属機を空撃や艦砲射撃で壊滅させられたが、飛行士や整備員の大半を守備隊と共に脱出させる事に成功しており、人的損害は固より、政治的失点も最小限に抑えている。

危機的状況に際し、陸海軍の縄張り争いを苦々しい思いで眺めていた英からすれば、他の提督連のように、「何で陸式が主催する会議に出ねばならん」との考えはない。むしろ一致団結の姿勢を築くのに必須だと考えた。

「喜んで出席するとお伝え願いたい」

英はそう答えた。五反田に対する物腰は丁寧である。これは喧嘩を売る相手を探しているのではないか――との印象を持たれやすい彼女からすれば珍しい事だが、それなりの計算はある。

共闘態勢を築かねばならない別部署の人間とわざわざ不仲になって良い事など何一つないからだ。

同じ海軍部内でも、英は持ち前の性格と元帥宮様の娘だから艦隊を預けられたのだろう――という妬みから、敵がそれなりに多い。戦場に赴いた時に、付近の基地航空隊に支援要請をしても、意趣返しとばかりに無視される可能性が高い。

「友達が少ない奴は苦労する」とは、何処の世界でも言える事だが、頭を下げられる性格ではないので、そこは無理もない。故に撤退作戦の支援やら陸上防衛戦での共同作戦展開などで、ある程度まで親しい陸軍関係者に「お願い」をした方が余程ましなのではないか――と考え、五反田にも接している。

これは陸軍関係者を「陸式」だの「泥臭い連中」だのと蔑称を付して呼ぶ事の多い海軍提督としては非常に珍しいもので、五反田は「陸軍との繋がりが強い宮様提督だからだろうか？」と内心では考えた。英治は海軍元帥であるが、婚姻関係などで繋がりのある陸軍関係者は多く、そうした線で陸軍との意見調整役を務める事も屡々（しばしば）あったのだ。

「二日後ともなると早めに移動した方が宜しいかと」

話を聴いていた楠が進言した。美呉軍港は皇都からさほど遠くない位置にあるが、遅刻が厳禁とされる会議となると、天候不順などが移動の際に問題になる。

「暫くは冬晴れの日が続くと思いますがね」

英の副官――五十旗紅葉少佐が、空の様子を思い浮かべながら答えた。彼女は気象予報の専門家ではないが、海軍兵学寮を首席で卒業した秀才だから、その辺の事も理解できた。

「航空機を使えば良いさ」英は今でも戦闘機を単独で飛ばせられる。「皇都なら二時間もあれば充分だ」

「だとしても前日には移動せねば」

「明日には動こう」

急な予定の変更は軍隊にはつきものである。攻撃開始時刻がずらされたり、移動の最中に目的地が正反対の場所になったりするの、最前線では日常茶飯事だ。驚くには値しない。それに艦隊内での事務処理は楠参謀長の役割だとされていた。英がいなくても書類仕事が滞る心配はない。

「随員は誰にしますか？」

「紅葉と美御だけで構わない」

英は直接的な血の繋がりはないが、精神面で親戚との意識のある副官と、乳幼児の時から付き合いのある御附武官をごく自然な態度で選んでいた。

これは無駄に人数を増やせば良いものではない、との意識と、常に傍に置きたい人間は決まっている、という態度の表れであったのかも知れない。

実際、艦隊司令部内に於いて、英が私的空間（プライベートルーム）で雑談を交わし飲酒までするのは、この二人に限定されていた。単なる取り巻きとも違う。心の奥底で「恩賞目当てについてきた連中は、肝心な面で信用できない」と考え、自分自身に個人的崇拜の念を寄せる者らだけを自分の部屋に入れたかったのかも知れない（親睦会との名義で開かれる宴会には、英はほぼ毎回出席していたが）。

「でしたら飛行艇を手配します」

「『紫風』なら私でも操縦できるんだが」

元が戦闘機搭乗員であるためか、英は飛行機を手ずから操縦したがる癖を有していた。まだ一七歳で空が恋しい年頃だと言えるが、周囲からすればとんでもない話である。艦隊最高司令官が単独飛行中に行方不明ともなれば、洒落（しゃれ）にならない。

「やめてください」楠は眉を顰めた。叱るように付け加える。「単発戦闘機は事故率が高いのですから」

航空機は空戦のみで喪われるのではない。むしろ移動中の天候急変や発動機不調による不時着、あるいは地上攻撃を受けた際に破壊される事が多いのである。

「一日のうちに季節が巡る」と揶揄される南海諸島の島を伝いながら飛んでいると、突発性暴風雨に見舞われ、輸送飛行士（フェリー・パイロット）――飛行機に乗りそれを目的地に届けた後、輸送船や飛行艇に乗り還る飛行士――が集団で行方知れずになるのは、特殊な事例ではない。

冬の瑞穂本国で天候の急変はあまり起きないと思うが、雪が降り視界が悪化する可能性はある。空が雪雲に覆われていたら、天測も難しくなり、遭難するかも知れない。楠はそれを強く危惧している様子だ。

「冗談だよ」英は肩をすくめた。国外にはまだ戦闘機隊を自ら率いる将軍がいたりするが、流石にそれを真似する気はない。指揮官が真先に戦死するのは、勇敢なようで無責任だからだ。何があろうとも戦死しないという自信を持つ超人であれば、また話は別かも知れないが。

「九七式飛行艇ですか？」紅葉が訊いた。

「いえ」楠は紅葉を英の副官と言うよりか、仲の良い従姉妹（いとこ）同士のような感じで見て

いる。故に口調も丁寧だ。

「二式大艇『雲鯨（うんげい）』になりますね」

「最新鋭機か！」航空機に関しては詳しい英が眼を輝かせた。「確か河西（かさい）飛行機が開発した、二〇〇〇馬力級の発動機を積んだ四発機だと聞いたが」

瑞穂海軍は橋道洋の広大な領土を防衛するために、索敵を重視していた。それ故、水面さえあれば離発着できる飛行艇を「索敵巡洋艦を建造するより安価だから」との理由で重宝していた。

何しろ全ての島に飛行場を設営する訳にはゆかない。密林地帯（ジャングル）を飛行場適正地――平地にするだけでも手間だし、それを維持するのに必要な費用を思えば、計画を立案するのも莫迦莫迦しくなる。

そうした次第で、飛行場がない地域では飛行艇や水上機は積極活用されていた。最大速度が四〇〇里台でも航空機には違いなく、そもそも最新鋭艦上戦闘機でもない限り、追いつかれて撃墜される恐れもないからだ。

「その通りです」楠は頷いた。「近くに偶然おまして。提督は新しい飛行機に興味があるかと」

二式大艇「雲鯨」は瑞穂陸海軍が保有する航空機の中では、最大級の大きさを誇る。全長二九間×全幅三八間の航空機など、他国にもそうはない。陸海軍共同攻撃機一式重爆――海軍は「聯山（れんざん）」と呼称し、陸軍は「鳳（おおとり）」との愛称をつけた――にしても、全長二二間×全幅三二間なのだから、その規模が判ろうか。

「ああ。新しい飛行機は好きだ。実機に触れてみなければ判らない事も多々あるからね」

英はたちまち機嫌を良くした。航空機と戦艦が好きなのは昔から変わらない。

楠は英との付き合いはさほど長くない。第二航空戦隊の参謀長として赴任した時が初顔合わせだった。彼は英治に事務処理能力を買われて出世したため、本来は航空機についてさほど詳しくないのだが、眼をかけてきた部下――鶴賀が、英が好きそうな航空機に関する情報を仕入れてくるので、そつなく過ごせた。

英は癩癢持ちな部分があるので、一度機嫌を損ねると面倒になる。そこは紅葉も知り抜いているので、楠が英の気分を良くしてくれた事に、素直に感謝した。英の才能に惚れ込んでいる紅葉だが、子供じみた我儘に振り回されるのは、やはり御免なのだった。

4

戦闘機搭乗員である美御は、航空機の事が嫌いだとは冗談でも言えない立場にある。嫌いだと言えば、ならば何故そんな商売をしているのかと、即座に切り返されるのがおちだからだ。自爆的な形で反論を封じられる発言などするものではない。

だが、「好き」の範疇（カテゴリー）に入る事柄に「自分が操縦しているものならば」という但し書きをつけるのは許されると思う。車で遠出（ドライブ）するのが好きな人間は、その理由を自分で操縦輪（ハンドル）を握れるから――操縦できるから好きだと言うはずだからだ。

――空にいるのは好きだが、他人が操縦しているものは、どうも落ち着かないな！

英に同伴する形で「雲鯨」に乗り込んだ美御は、そんな事を考えた。これは同調してくれる同業者が多かろうと感じた。輸送機に乗り込んで移動している最中に、先輩飛行士たちから「ここで死ぬのだけは御免だな」と何度も言われてきたからだ。

戦闘機搭乗員は己の技量を頼みとする者が多い。それだけに自分の手に届かぬ場所で展開される戦いに不安を感じるのだろう。どんな手練れも鈍足かつ弱武装の輸送機内では「無力な輸送物資」に過ぎないのだから。

その一方――

「二〇ミリ機銃だけで五挺は装備しているのか！」

英は持ち前の好奇心の強さを発揮し、手漣（てす）きの搭乗員たち――年嵩（としかさ）は彼女に近い――と話をしている。

「雲鯨」の搭乗員の数は、最大で一三名。機上電探を装備しているタイプもあるそうで、内部には比較的余裕がある。加えて、制海空権が絶対的に確保されている内地での飛行だ。機銃員も見張員は特にする事がなく、「お客様」の疑問に逐次答えていた。

航続距離は最大で七〇〇〇里。片道覚悟なら瑞穂本国から爬間諸島へ一直線に向かえます。航空魚雷は二本まで装備可能で、爆弾なら二石は搭載できます。最大速度は四七〇里なので、「清風」が相手なら充分逃げ切れますな。

最新鋭機は軍事機密の塊である。同盟国に供与されるものでも、わざと性能を劣化させた輸出型（モンキータイプ）という機体が造られるくらいだから、その重要性が判ろうか。

にもかかわらず、「雲鯨」の搭乗員たちは、英に機密事項の数々を平気で喋る。相手が現役の海軍中将で、しかも一個艦隊の最高司令官だから問題ないと考えているのか、皇族将官が飛行艇――艦隊決戦の一翼を担う艦載機隊とは異なり、偵察や対潜哨戒、あるいは洋上漂流中の友軍飛行士の救助など、地味な裏方任務が主な機体に興味を持つ事自体が有難いと感じているのか、はたまた英がある種の人懐（ひとなつ）っこさを持ち合わせているからなのか？

「……少佐は戦闘機搭乗員なのに落ち着きがありませんね」美御の隣に座する紅葉が、どこか冷めた眼で訊いた。

「判りますか？」美御は女性歌劇団の少年役を思わせる面立ちをした英の副官に、否定せずに応じた。

「実は、僕は他人の操縦する飛行機が苦手で」

「普段は自分が散々（さんざん）操縦しているのに？」

美御の曲芸飛行団（アクロバット・チーム）並みの操縦は、遊撃機動部隊の中でも話題を浚っている。「紫風」より最大速度が一七〇里速い機体を軽々と操り、平然としている様などは、周りから「流石爬間諸島沖海戦の撃墜王だ」との賞賛混じりの評価を受けている。

「だからこそです」美御は微かに身を震わせた。飾らずに答える。「自分のする無茶ならどんなものも許容できます。戦闘機搭乗員は生きるも死ぬも自分次第ですから。割り切りが出来るんです。自らに意図的な狂気を強いる事により平気になる。僚機が目の前で墜とされても『あいつはドジを踏んだんだ』と笑い飛ばせる。けれども、他人に命を預けるとなると、狂気の鍍金（メッキ）が途端に剥がれてしまう。僕の先輩も輸送機で移動中している時には、普段はお祈りなど

しない人なのに、堅く手を結んで『どうか海賊連中に襲われませんように』と青い顔をして唱（とな）えていました」

美御は「命知らずだ」と言われる事が度々ある。命を惜しむ事が恥だと言われる戦闘機搭乗員としては珍しくないが、皇族将官を義姉に持つ人間としては貴重な存在だと言えた。何しろ何もしなくても身内が出世の手助けをしてくれるから、無茶をする必要がないのだ。

しかし美御は「臆病未練な振舞をすれば、英の名前に傷がつくから」と必死の思いで戦ってきた。「勇敢かつ優秀な戦闘機搭乗員」との評価は、その結果ついてきたものに過ぎない。

だが、どれほどの撃墜数を誇ろうとも、戦闘機搭乗員とて人の子だ。不安に押し潰されそうになる時もあるし、戦場を知る者だからこそ判る生命の儚さにやるせなさを感じる瞬間もある。

「そういうものですか」紅葉は視線に微かな哀れみを込めたように見えた。戦場神経症を発症した兵士の末路を思い出したのかも知れない。恐怖に耐えられなくなった者は、自ら敵弾の方へ突入して現世からの解放を願うか、特定薬物――除鬱剤（じょうつざい）の名で呼ばれる、軍からの支給品、別名「突撃薬」――や各種酒精（アルコール）類の過剰摂取に走る。

勿論、異性との関係に精神の渴きを癒やす術を見出し、そちらに励む者もいる。軍隊が戦場で少なくない性病患者を抱え込む事になるのは、そうした事情――実際に敵と対峙せねばならない人間の悲哀に他ならない。

「もっとも、義姉上は昔からあんな感じですがね。新しい機体が配備されたと聴けば、つい先程まで空中戦をしても、そいつの元へと駆け寄り、整備員にどんな具合かと確認に行っていました。輸送機の中でも義姉上は騒いでも仕方がないと泰然としていましたが」

「人間は何をしても死ぬ時は死ぬのさ」

そう英は常々口にしていた。「義姉上や僕も？」とは美御は怖くて訊けた事がない。「何を今更」と返されると返答に困るし、義姉や自分が敵弾に斃れる様など想像したくもなかったからだ。

「私も飛行士の免許（ライセンス）は保有していますがね」紅葉は呆れたように言う。「少佐のような無茶な飛ばし方はしません。私は戦闘目的で飛行技術を習得したからではないからかも知れませんが」

紅葉は基本的に何でも出来る。今口にした航空機操縦は固より、印字機手（タイピスト）として英が口述する話を書類に纏めたり、艦から艦へと移動する際に内火艇（ランチ）を操縦したり、戦略戦術論を英と五分に戦わせたりなど、流石海軍兵学寮首席卒業者だと思わせる面が多数見受けられる。

それに対し美御は、戦闘機の操縦と機械いじりぐらいが得意なもので、他は英が短気を起こした、あるいは起こしそうな時になだめに回るだけだ。それはそれで参謀陣から「避雷針」扱いされて歓迎されているが。

家柄や個人的な能力の差。そこから来る劣等感が美御の胸を締め付けた。五十旗副官は確かに義姉の傍ににいるのに相応しい人だ。だが僕は怎なのだろう？ 不安が脳裏を掠めた。

そんな美御に、紅葉は叱るように付け加えた。

「少佐、貴男は英様の義弟なのですから、それ相応の振舞をしてください。貴男の言動は英様の

評価にも繋がります。無様な真似をすれば、その程度の男が義兄弟なのかと侮られる原因になりますので」

「……心します」美御は額に滲んでいた冷や汗を、ハンカチで拭いながら応じた。

心なしか、紅葉の言葉の端々に棘があるように感じた。紅葉は英の軍事的才能の信奉者である。個人崇拜を自らに徹底しているふしすらある。その紅葉からすれば、乳兄弟として幼い頃から一緒にいる男とはどう見えるのだろうと、彼は別の事を考えた。

紅葉のように鋭い女性が、自分と義姉の関係に気づかぬ訳がない。気づいていながら、その事を直接的には口にせず、冷たい怒りを内に溜め込んでいるのではないか——そんな気がした。

自身の崇拜の対象を性的に穢（けが）す相手。好意など欠片も抱ける訳がない。流石に隙を見せたら刺し殺されるとまでは行かないが、汚らしい獣（けだもの）だと捉えられているのではあるまいか？ 五十旗副官が罵言（ばげん）をぶつけて来ないのは、義姉への侮辱になるからとの意識があるからだろう。でなければ、言葉だけで死にたくなるような物言いをされるのではあるまいか？

紅葉の身体から発せられる圧迫感、空気が淀んで重くなるような感覚に、美御が肌を伝い落ちるものを冷や汗から脂汗に変えようとした時、拡声器（スピーカー）から「間もなく皇都上空に到達します」との声が響いてきた。

不覚にも救われたような気がした。自身に全面的な非がある——妊娠の危険性のない疑似性交を英と合意の上で楽しんでいるのだから、それ自体は他人にとやかく言われる筋合いはないとも言えるが——と自覚している事柄、それについて延々と無言で責められるなど、精神的拷問に他ならないからだ。空の旅がもう終わりなら、紅葉と距離が置ける。

「雲鯨」搭乗員らに促されて席に着き、座席帯（シートベルト）を締めた英は、そうした不穏な空気を知ってか知らずか、「なかなか興味深い機体だぞ、こいつは」と両名に語りかけた。美御はそれに対し、僅かな苦みを残した笑顔で応じるのだった。

皇都は鳥瞰（ちょうかん）すると碁盤の目のような形をしている街である。整然と各区画が区切られ、さながらある種の趣味人が精魂込めて造り上げた模型の街——文字通りの箱庭のようだ。

ここは橋道洋全域を支配する国家の首都らしく、外敵に攻撃された例が殆どない。占領された事例は一度だけで、所謂「テムジンの軛（くびき）」——満（まん）帝国に瑞穂本国の過半を占領されていた時代の話だ。瑞穂暦二〇〇一時からすれば、もう七〇〇年以上も昔の話だ。

そしてそれは対外進出を開始する以前の話なので、瑞穂の領域が橋道洋の各地域に及ぶようになってからは、外国軍に侵入された事例は絶無だと言える。親善訪問の名目で、皇都軍港に外国船籍の軍艦を停泊させた事は幾度もあるが、それを除けば常に天昇旗（てんしょうき）を掲げた軍勢が国外勢力の侵入を許さず、護り抜いてきた場所なのだ。

「雲鯨」はその皇都の海——皇湾に着水した。ここは瑞穂海側の皇都の出入り口で、海軍の要塞が睨みを利かせている。矢隠級戦艦から転用した四〇センチ四五口径砲を筆頭に、愛雄級重巡洋艦の二〇センチ五五口径砲、駆逐艦の主砲や戦艦の高角砲として使用されている一二・七センチ

砲などが巧みに隠蔽（いんぺい）されて配されている。

「敵艦隊が瑞穂海に侵入する事があるろうとも、皇湾要塞がある限り、絶対に上陸はさせない」
皇湾要塞を管理運営する舞鳳（まいほう）鎮守府——海軍の首都防衛を担当する部署の責任者は、そう豪語しているが、英に言わせればそれは虚しい宣言に他ならなかった。

「敵艦隊が瑞穂海に堂々と侵入してくるようでは、橋道洋の防衛拠点は尽（ことごと）く陥落していると判断せざるを得ない。ただ首都の警備だけが万全なのを誇る事に何の意味があるのか？」

かつて地球最初の世界帝国——ラティウム帝国が地上に在りし時、彼の国の元老院議員の一人が、

「ラティウムの防衛は首都を取り囲む防壁によるものではなく、防衛線によりなされるべきだ」
そう宣うた事がある。これは首都の安全を願うなら、その直接防御力を高めるのではなく、野戦軍や周辺拠点の強化に金銭や人的資源をつぎ込んだ方が好ましいとの意を込めた指摘なのだが、英はその通りだと思う。

「大体、難攻不落なのを自慢にしている要塞程、敵軍の攻略対象となりやすく、激戦の果てに陥落しているのが目立つ。物事に絶対がないのと同様、要塞を構築すれば首都の安全を図れるという発想自体が、いい加減古くさいのではないか？」

各所を練石（ベトン）で固めている皇湾要塞は、戦艦からの砲撃を受けても、簡単に崩落する事はない。戦艦とは違い、「不沈」である事の利を活かし、最後を迎える時まで踏みとどまると思われる。

だがそれよりも、橋道洋側——紀山（きやま）半島側からの上陸を防ぐ手立てを考えた方が、まだ建設的であろう。そのためには外郭（がいかく）防衛線の強化——陸海軍の一致協力が不可欠だ。

——一個艦隊の最高司令官とは言え、実績のない部隊だ。それに私自身がまだ一〇代の小娘に過ぎないからな。背後（バック）に父上が控えていても、何処まで意見を通せるだろうか？

「雲鯨」に寄せてきた短艇（ボート）に移りながら、英はそんな事を考えた。実際にその場に臨んでみなければ判らない、との気持が不安と共に込み上げてきた。しかし賽はもう振られたのだ。覚悟を決めなければならない。

「行くぞ！」

英は、まるで敵艦に向けて突撃する時のような口調でそう言い、皇都市街地がある方向を指差した。

皇国首都（インペリアル・キャピタル）——皇都・皇京には、瑞穂陸海軍の最高司令部がある。それは各々（おのおの）の特徴や癖を強く現していた。

瑞穂の軍部——その主導権を握る海軍は、緋色の煉瓦（レンガ）で形成された海軍総司令部を、官庁街・霧賀崎（きりがさき）の中に設けている。これは予備役編入後に、政界に転じる海軍

提督が多い事と、瑞穂が海軍を伝統的に重視しているとの事実起因する。瑞穂人好みの欧洋風（モダン）なその建造物は、遠目からでも判り易い外見的な特徴から「緋煉瓦」と内外から呼ばれた。故に緋煉瓦とは一般的に海軍総司令部を示す言葉だとされている。

その一方、海軍と比べて、予算・人員・規模の全てで冷遇されている感のある陸軍、その参謀本部はと言えば、皇都の郊外――淡海（おうみ）街にある。しかも木造二階建てで、田舎の役所のような外見をしていた。それ故か一般人からも「泥臭い」とか「野暮な建物」だと言われて莫迦にされていた。何度か建て直す計画が立案されたが、その度に他部門から大規模な予算を請求され――新型戦闘機や重戦車の開発に金を喰われた――て話は流れてきた。

今回、瑞穂陸海軍作戦会議の会場に選ばれたのは、その緋煉瓦や田舎役所を連想させる建物ではなかった。「白桜殿（はくおうでん）」という名で呼ばれている、陸海軍共同出資で造られた、高さ五〇階建ての高層建築物（ビルディング）である。

建造時に「技術力の限界を試すために造られた」とも言われているそれは、平時は陸海軍の意見交換所兼陸海軍親睦団体の本拠地（ホーム）に過ぎないのだが、国家非常時――戦時中は戦争最高指導機関・総本営が設置される場所になる。

「白桜殿」は計画段階時、「宮城を見下ろすような高さを持つのは、好ましくない」との反対意見が各所から出た。これは、「臣下筋にある者が皇族方より高い位置にいるべきではない」との伝統的かつ感情的な主張である（航空機も宮城上空は飛行禁止とされていた）。

理屈と感情論は水と油だ。決して混ざり合う事がなく、同じところにも互いに存在感を主張する。話し合いは幾度となく持たれ、陸海軍どころか各自の派閥での争いが起き、收拾がつかなくなりかけたが――

「世界的な潮流（ちょうりゅう）は、首都に高層建築物を多数建造する事になりつつある。面積の限られた場所を有効活用する意もあるし、最初に公的機関が範を示す事により、民間企業などもそれに倣う事が可能になる」

だが結局のところ、そうした意見が大半を占めた。皇都は伝統を重視する古い街であるが、伝統を遵守した結果、首都として機能しなくなるという莫迦げた事態を回避するために、そのような話になったのだ（もっとも、法を整備する必要があり、国会審議を経た後に大皇に承認を求めた）。

「相変わらず莫迦みたいに大きな建物だな！」

英は二人の随員――義弟と副官を後ろに従えて、そんな事を呟いた。艦や航空機もそうなのだが、巨大さを誇るものは世間に数多い。しかし、平時は陸海軍の意見交換所兼親睦団体本拠地程度の機能しか持たない場所に、これ程の大きさは必要なのだろうか、不思議に思う。予算の無駄遣いもいいところだ。

軍隊が軍隊であり続けるためには、ある種の箔（はく）をつける必要があるが、その一環だろうか――と考えても答えは出ない。儀式化された有難味を強調する者は、何処の世界にもいるのだ。視線を軽く上に上げたまま歩き続けると、門の前で銃剣を構えていた衛兵に誰何（すいか）された。

「身分証の提示をお願いします！」

総本営所在地である「白桜殿」は、警備が厳重である。陸海軍から選抜されてきた兵士が、分厚い練石で形成された周囲の壁を取り巻き、出入り口は「戦車の突撃にさえ耐える」との硬さを誇る鉄扉だ。反政府主義者が殴り込みをかけてきた時にそれを阻止できなければ、陸海軍の頭脳が一度に吹き飛ぶ恐れがあるためだ（総本営の職員は、陸海軍省から派遣されてきた佐官や尉官が過半を占める）。

完全武装の兵士に銃剣を突きつけられ、甲高い声で話しかけられて怯まない者は少ない。英にしても普段は非武装の水兵ばかり見ているので、こういう相手とはなかなか顔を合わさない。

しかし陸戦隊の指揮官としても非凡なところを見せてきた英は、動じる事なく懐から身分証を取り出すと、

「第七艦隊最高司令官の戦船英中将である！」

衛兵に負けない声で応じた。

この時、英は普段着用している讃州県海軍国民防衛隊の大佐服ではなく、紺色の海軍第一種軍装姿である。襟元には金色に輝く二ツ星――海軍中将である事を示す階級章が輝いていた。部下たちだけを前にする時とは違い、一般的な軍服に身を包んでいた。

衛兵は弾かれたように姿勢を正した。「催飯防衛戦」――民間人を含む混成部隊を率い、大規模な叛乱軍を撃退し、尚且つ爬間諸島沖海戦で機動部隊を指揮して友軍の撤退支援を成し遂げた英雄が――「戦う皇族」が自分の目の前にいるのだと意識させられただけで、彼はバネ仕掛けの人形のようになる。

「失礼しました！」

全力で詫びる。日頃出入りしている人間ならば顔を視ただけで誰か判るのだが、海上勤務が多い英は、そもそも皇都にもなかなか足を運ばない。衛兵が見慣れぬ人間だと警戒したのも無理からぬ事である（所謂『顔パス』があまり横行するのも問題があるが）。

「構わないよ。君も仕事だろうから」

一方、銃剣を突きつけられた英は、物腰柔らかく応じた。平時ならともかく今は戦時なのである。衛兵が総本営に出入りする人間に対しきつい態度で応じるのも仕方がないと言えた。気を向ければ、建物全体がピリピリしているような感じを受ける。

衛兵長に連絡が入られ、鉄扉が重い音立てながら開かれる。それを確認してから、英は「白桜殿」の敷地内へと悠然とした足取りで入る。その後にこれまた身分確認を終えた美御と紅葉も続く。通常ならば二〇代の少佐もかなり珍しい部類に入るのだが、最上級者の英がまだ一七歳なので、そちらの方が衛兵に強い印象を残した。

「白桜殿」内の移動は昇降機が主となる。何せ五〇階建ての建造物なのである。一階にいるのに三五階の資料室にある書類が必要だと言われ、それを階段で取りに行かされたら、書類の遣り取りだけで一日の大半が終わるし、そもそも階段が大渋滞を起こし、軍隊で最も必要とされる機敏さが喪われてしまう。

移動には徒歩が必要だとの印象がある戦艦にしても、高層建築物並の大きさがある艦橋内の移動は昇降機で行う。「八洲」にしてもそうで、英は昇降機は乗り慣れている。しかし上に向かうのならともかく、地下へと向かうのにそれを必要とするのは、気分の良いものではない。

「何故地下に会議室を移したのかね？」

英は案内係の中尉に聴いた。確か「白桜殿」の会議室は陽当たりの良い中程にあると記憶していたからだ。

「敵軍の攻撃を避けるためだと聴きました」

「敵軍？」英は呆れて聴き返した。「ここは皇都の中心地だぜ。何が来るというのだ？」

「いざという時に備えて、耐爆防空壕式にしたと聴き及んでおります。『聯山』が一〇〇機単位で爆撃してきても耐えられる作りを目指したそうで」

一式重爆「聯山」は最大搭載量五石を誇る。「陣山」にも搭載可能な八〇〇斤徹甲爆弾――矢隠級戦艦の主砲弾を改造したそれならば、六発は載せられる。その「聯山」が一〇〇機ともなれば、五〇〇石近い爆弾がそこに叩きつけられる事になる（高高度からの水平爆撃は命中率が極めて悪く、制止目標でもそう簡単には当たらないのだが）。

――皇都に敵機がそんなに押し寄せてくるような状況だと、我国はもうお仕舞いではないか！
「備えあれば憂いなし」とは俗に言うが、努力の方向性を完全に間違っている気がした。軍の中枢部さえ健在ならば戦争を継続できるという訳ではないのだ。その辺の自覚が総本営の職員たちにはないのだろうか？

英と同じ感想を美御と紅葉も抱いたようで、

「敵の攻撃に備える気があるのなら、戦闘機隊を増強した方が効果的だと思いますがね」

「上辺（うわべ）だけ立派な建物で繕うのではなく、戦に望む心構えを見せて欲しいものです」

義弟は戦闘機搭乗員らしい意見を、副官は手厳しい論評を加えた。これには英も苦笑するよりない。

「……………」

案内係の中尉は、それに対し沈黙を貫いた。内心ではどうしているのが、表情や仕草から見て取れた。

――この調子だと、ろくな事にならないのではあるまいか？

そんな疑問を英は抱く。我が身可愛さを優先する輩というのは、肝心な時に責任を放棄して逃げ出す事が多い。それは歴史が証明している。その種の悲劇が繰り返されないようにと、今は祈るしかなかった。

総本営地下会議室――

そこは地下室特有の黴（かび）臭さを感じさせないように努力が払われていた。元々が高級将校専用の避難場所なので、一般的な耐爆壕――四囲を剥き出しの練石に囲まれた、殺風景な部屋――とは違い、調度品などが整えられている。

会議の出席者は、殆どが陸軍であれば方面軍司令官、海軍であれば艦隊司令官クラスである。佐官は総本営の職員から陸海軍総司令部の作戦課に籍を置く者たちで、此度の戦争に於いて重要な役割を果たすであろう者たちばかりだ。

英は第七艦隊――遊撃機動部隊最高司令官として、その席の片隅にいる。彼女に近い者とは言えば、海軍兵学寮時代の恩師――真田信繁大将か僅かな皇族将官ぐらいなもので、他は面識がない上に年齢的な隔たりが大きい者ばかりだ。

――完全に部外者（アウェー）だな、これは！

そんな感想を英は抱く。「八洲」にいる時であれば、周囲にいるのは元帥宮――父である英治が声をかけて集めた者ばかりだから、内弁慶（うちべんけい）ぶりを発揮しても誰も何も言わないが、味方になりそうな者がいない場所だと、どうにも気分が重くなる。

もっとも、この会議が開催されるのを心から望んでいた――とおぼしき提督はいない様子だ。

皇国聯合艦隊司令長官と第一艦隊司令長官を兼任する真田は、唇を真一文字に引き結んで沈黙を続けているし、機動部隊司令官――第一航空艦隊司令長官の大沢治郎中将にしても、鬼瓦（おにがわら）と度々揶揄されてきた仏頂面（ぶつちょうづら）を隠そうともしない。

他の司令官たちにしても似たような感じだ。本来なら関係を密にせねばならない基地航空隊司令官――航空艦隊や航空軍を率いる者たちにしても、互いに向ける視線は冷たい。

――猪松大将が主力戦艦群を爬間諸島沖で磨り潰したからな。その影響で海軍の発言力が低下したのが気に入らないのか。あるいは日頃莫迦にしている、されている面々を向き合わせたのがいけないのか？

「世界――大戦艦（ビック・イレヴン）」の四隻と謳われた矢隠級戦艦。長年海軍の象徴として国民に親しまれてきた「矢隠」「時和（ときわ）」「穂先（ほさき）」「龍隠（たつがくし）」はその半数が喪われ、残る二隻も中大破した事により入渠を余儀なくされた（神勢（じんせ）級戦艦二隻――『神勢』『初宮（はつみや）』も同様の被害を受けて共に修理中である）。

修理に必要とされる期間は、最低でも三カ月。

修理完了後に補充されてきた乗組員の訓練を始めるとして、実戦投入が可能になるのは半年後か。

その間、海軍が使える戦艦や巡洋戦艦の数は、間もなく近代化改装を終える高賀級戦艦「高賀」「駿海」に「八洲」――そして岩城級巡洋戦艦六隻だけだ。

合計九隻の戦艦・巡洋戦艦は、聯合帝国からしても無視できぬ脅威であろうが、その半数以上を占める巡洋戦艦——姉妹艦と言うよりも、もはや家族艦（ファミリーシップ）とでも言うべき岩城級巡洋戦艦の六隻は、長姉「岩城」を筆頭に、艦齢が三〇年近くに及ぶ老嬢ばかりだ。

近代化改装の成功により最高速度三四航里——「八洲」と同じ隊列を組めるようになった「岩城」「清石」にしても、聯合帝国の新鋭戦艦と正面から撃ち合えるのかと言え、答えは否だ。

主砲の長砲身化や高速給弾機の採用により攻撃力の増大が計られているが、それにしても艦体の老朽化に伴う防御力の低下は避けられず、敵がこれから投入して来るであろう四〇センチ砲艦ととともにぶつかれば、ひとたまりもなく蹴散らされるのではと思われる。

機動部隊直衛艦や巡洋艦群の牽制などにはまだ使用に耐えるはずだから、戦力として計上しても構わないのだろうが、そうすると艦隊決戦に使える戦艦の数は、入渠中の「矢隠」「時和」「神勢」「初宮」を含めても七隻という事になる。

現在建造中である八洲級戦艦二番艦——「秋津」や四六センチ砲搭載艦である旭級巡洋戦艦の竣工は来年の内に済むはずだから、希望が全く潰えた訳ではないのだが、陸海軍の高級将校たちが前途に暗いものを感じ、表情を強張らせるのも、無理はなかった。

英がそのあたりに思いを馳せている時、新任の海軍総長——武蔵滋信（むさししげのぶ）大將が、海軍次長を伴い姿を現した。

爬間諸島沖海戦の大敗は、前任者の首を容易く轢（ひ）き飛ばした。猪松大將にしても現在は無任所にされたので、当然と言えば当然だが、その後任を誰にするかで一時期揉めたと聴く。

何しろ開戦劈頭に戦艦四隻が沈没し、「負けない戦争」を目指す必要が生じたのだ。

敵が無条件降伏要求を撤回するまで戦い続ける。

そんな明日の見えない状況下で、敗戦を迎えた際に責任を追及されかねない——絞首台（こうしゅだい）に立たされかねない役所を、喜んで引き受ける変わり者など、そういるはずがない。

そうした次第で、現役の海軍大將や中將は、軒並み海軍総長就任を拒否し、そこで仕方なく予備役の人間に声かけられた。その中から選ばれたのが、武蔵である。

彼は還暦を迎えた年に郷里に隠退し、夫人と共に農作業に精を出していたと伝えられる。

瑞穂の貴族や士族たちは、引退後に田舎で庭いじりをしながら過ごすのが理想だとする者が多い。武蔵にしても中級士族の一人で、現役時代の最高位は中將であった。予備役編入直前に「温情的措置」により昇進し、悠々自適な恩給暮らしをしていた。

「皆が嫌がり引き受ける者がいません。どうか総長就任を受けてください」

海軍省から派遣されてきた役員が、支度金の一部——皇室の極印が押された金塊を示しながら、そう頭を下げると、武蔵は、太鼓腹を豪快に叩きながら、

「承知した。再度ご奉公すると陛下にお伝えください」

そう答えたらしい。この時の彼は野良着姿で、海軍提督と言うよりか、田舎暮らしが板についた隠居老人そのものだったと見てきた人間は口にするが、彼が何故二つ返事で面倒な仕事を引き受けたのかは、皆目見当不能だったようだ。

武蔵は海軍総長就任に対し、幾つかの条件つけている。

自分の死後も老妻に対し恩給の支払いを続ける事と、長らく軍務から遠ざかっていたので、近代戦に精通した者を自らの傍に置く事と、各艦隊の司令官らに海軍総司令部の命令を徹底させる事である。

「僕は最近の戦の事は判らんが、各自がてんでんバラバラに戦えば勝算は一分もないのは判りきっている。作戦は若い者に考えさせるから、そこは承知させてくれ」

要するに責任は取るが口は挟まない。武蔵はそう宣言しているのである。現役を引退してから五年程も経つ男があれこれと介入して滅茶苦茶な事をしでかすより、遙かに好ましい話だと言える。

――武蔵総長はその体躯に相応しい親分肌の人物なのだろうか？

英は風聞からそう思う。紀伊総理もそうなのだが、最近はそういう起用が目立つ。周囲の人間が等しく拒否した役割を望んで引き受ける者が世の中にはいるのだ。

もっとも、「無限機関搭載艦になど怖くて乗れるか」とばかりに、英が率いる艦隊にはそうした艦が集中している――押しつけられたとも言えるから、人の事を言えた義理はないのかも知れないが。

さほどの間を置かずに陸軍参謀総長も次長と共に姿を現した。会議開始の一〇分前――海軍の不文律である五分前行動よりも更に五分早く、会議出席者が全員顔を揃えた事になる。

「少し早いですが」武蔵が陸軍参謀総長――巖島尚国（いつくしまなおくに）元帥の方を視て提案した。「会議を始めますか？」

「そうですね」巖島は同意した。「もう全員がいるようですし」

陸海軍の最高責任者同士の判断により、作戦会議は時間を前倒しにして始められた。

7

海軍の戦略方針はおおむね英の予想通りだった。決戦海域を中部橋道洋――具体的に言えば、鞆縄諸島か珊瑚諸島沖に定め、彼の地に侵攻してきた聯合帝国艦隊を、皇国聯合艦隊と基地航空隊が邀撃し、これを撃滅する。しかる後に軍事的勝利を背景に講話に持ち込む。

要するに戦前から何も変わっていない。面白味がない主張である。そう思うならお前は何か別の案があるのか――と言われれば、あるにはある。

商船改造空母や中型高速潜水艦を中心とした通商破壊戦を展開し、聯合帝国軍を爬間諸島に釘付けにする。連中を補給難に陥らせ、そこから前進させない。そうするだけで敵は手詰まりになり、向こうから和を請うてくる可能性が生じる。

この作戦の素晴らしい部分は、損害に対する危険性（リスク）をかなりまで軽減できる事だ。商船改造空母や中型の潜水艦を主力にする作戦だから、それらが何隻か撃沈されても補いはつく。

少なくとも戦艦や正規空母のような大型戦闘艦艇を用いてそれが喪われたらどうなるか――と言うような不安からは解放される。

勿論、補助艦艇だからと無限に建造できる訳でもないし、乗組員の補充も損害が目立つように

なれば困難になるかも知れないが、それでも決戦に訴えて何もかも喪うよりは遙かにましだろう。

海軍の存在意義とは、本来は自国商船の保護――海洋通商路の維持にある。海賊じみた振舞を続ける事に対する鬱屈は、前線にいる将兵の間で拡がるだろうが、戦争とは突き詰めれば相手が嫌がる事をするものなのだ。輸送船が片端から撃沈されて、占領地の維持すらままならないと来れば、それはそれで海軍は国家が求める役割を果たした事になるのではないかと英は思う。

地味な戦争。英雄を生み出すものではないが、国が滅びるよりは好ましいはずだ。

しかし現実に出されたのは、今度こそは――とばかりに、戦前からある漸減邀撃作戦の焼き直し。

「人間とは悲劇を繰り返す生物である」

とは、とある人類学者が日記に記した一文であるが、彼がこの情景を目の当たりにしたら、自身の見識の正しさを再確認し、手を叩いて喜んだ事だろう。

――敵が我々の思惑通り動く保証など何処にもない。誰かその辺の事情を考慮しているのか……？

英は視線を真田の方へと走らせた。彼は沈黙している。眼を閉じたまま腕を組み、何かを考えて続けている。

それではとばかりに大澤の方を視ても、反応は似たようなもの。反論一つ唱えない。

何の考えもなく会議に臨んだのかと言えば、それもいささか異なるように思われた。元来、皇国聯合艦隊は海軍総司令部の命令の下で動く。戦場の駆け引きについては任されているが、戦略方針となると上級司令部の判断に従わざるを得ないのだ。

命令に忠実な事で知られる真田からすれば、海軍総司令部が漸減邀撃作戦を中部橋道洋で試みると言い出せば、それに素直に従おうと考えたのかも知れない。

何しろ英が考えた「戦略的通商破壊戦」にしても、絶対成功するとの保証はないのだ。敵が撃沈される以上の輸送船舶を繰り出し、前線部隊への補給を為してしまえば、最終的には押し切られる。

それならば、国力の差があろうとも一発逆転が可能な艦隊決戦に望みの全てを繋ぐと言われても、反論できない。ただ危険度を下げる事だけが正しいとは限らないのだから。

そう言う意味では、爬間諸島沖海戦に大敗を喫した後、無様な混乱を続けた海軍の意見を、「中部橋道洋上に於ける艦隊決戦の勝利を目指す」に統一して見せた海軍総司令部の参謀連は、無能とは言えまい。

武蔵は「自分が責任を取るから好きにやれ」という親分肌の人物らしく、戦略方針の策定は若い頭脳集団（ブレン）に任せている。その中でもとりわけ優秀なのは、海軍次長を務めている胴賀久光（どうがひさみつ）中将だろう。

胴賀は猪松公爵家と縁が深い人物である。猪松家の先代当主が手許に置いて育てた。彼は幼少の頃より頭脳明晰（めいせき）な事で知られ、海軍兵学寮や海軍大学校を首席で卒業した。そして単なる学業秀才ではない。海賊討伐を幾度となく成功させ、青年将校が形成する戦術研究会や実弾を交えた演習などで華麗な戦術を披露し、注目を浴びてきた。

戦争に必要な資源の大半を、海外領土からの搬入に依存している瑞穂のアキレス腱は、海洋通商路なのだが、それを脅かす最大脅威――敵の潜水艦への対策も、主な海峡に対潜機雷原を構築し、そこから先への侵入を阻むという案を示し、その脅威を軽減させられる見込みを立てた。

ただ、怜悯な顔つきとそれに相応しい態度を他者に対し示しがちなので、近寄りがたい雰囲気身を纏うており、他人とは親しむのではなく理詰め論破して従わせるタイプの軍人に見えた。

――同じ部隊にいと息が詰まりそうだ。連撃作戦をとる際に、さほど遠くない位置にいる別働隊を率いている人物が彼ならば、咄嗟の機転も利きそうだし、丁度良さそうなのだが！

英はそんな事を思う。彼の階級は中将である。戦隊司令官も少将時代に戦艦や巡洋艦のそれを務め、航空戦力の運用に関する知識も有しているから、そのうちに一個艦隊を指揮する機会があるかも知れない。的外れな論評とは言えなかった。

会議そのものは陸軍が提唱して始められたものだが、聯合帝国を相手とした戦争となると、必然的に島嶼争奪戦になる。故に陸軍の役割と言え、敵が侵攻して来るであろう地域に守備隊を置き、要所を要塞化するぐらいのものだ。

事実、陸軍側の出席者で積極的に発言しているのは、中部橋道洋を担当区域とする第三一軍司令官大畑篤（おおはたあつし）中将と第一〇航空軍司令官の加藤康正（かとうやすまさ）中将のみである。彼らは一朝有事あれば自分たちの担当戦域が決戦場となるため、意気込みが違う。

陸軍側としては、水際防御作戦と航空部隊の活用により時間を稼ぐから、その間に瑞穂本国あるいは珊瑚諸島で待機している海軍主力艦隊――真田の戦艦部隊、大澤の空母部隊に来てもらわねば玉碎は必至だとの計算がある。

弱気から来る悲観論ではない。

戦艦の砲撃力は、陸軍三個師団から五個師団の火力に匹敵するとの試算が出ている。

その戦艦を聯合帝国は一〇隻単位で戦場に投入してくる可能性があり、救援が遅れれば守備隊将兵は城ならぬ要塞を枕に全員が戦死しかねない。

また、敵艦隊が対地攻撃を一切試みなくても、瑞穂陸軍が敵勢を撃破できる公算は低い。

何せ軍事予算の大半は海軍の維持費に喰われ、陸軍は昔から弱体なのだ。主任務が密林地帯を根城にする非正規軍討伐で、大陸での大会戦を前提に造られた聯合帝国陸軍と正面決戦できるものではない。

――海軍編重のツケが、こんなところに出ている！

罵るように、英は思う。瑞穂は対外進出を積極的に進めるため、海軍をひたすらに強化してきた。あの、発案者の正気を疑うような計画――二〇艦隊計画にしても、「瑞穂の海軍こそが世界最強であれ」という願望から来たもので、そこに陸軍を貶めようとの気持はない。

だが、陸海軍の片方に重きを置けば、残る片方が弱くなるのは当然――どんな国家にも国力に限界があるのだ。

瑞穂は、海軍は戦艦部隊や空母部隊、巡洋艦と駆逐艦で構成される水雷戦隊、大中小と種類（ヴァリエティー）豊かに揃えられた潜水艦隊、海賊討伐や対潜護衛に用いる事が出来る護衛空母群や護衛駆逐艦群など、近代戦に必要なものの全てを用意できたが、陸軍は広大な領域を維持する

瑞穂のような島国が海軍なくして対外進出できたはずもないし、国を維持できたとも思えない。

海軍にも陸上部隊——陸戦隊がいるが、陸軍と比べて更に数が少ないし、彼らの装備は陸軍と共通——小銃や戦車などは、名称さえもそのまま——だから、こちらも敵軍の正面撃破など夢のまた夢だ。

話の焦点は、気がつけば中部橋道洋の要衝——珊瑚諸島の防衛、そこの外郭防衛線をどうするのかに移行している。珊瑚諸島には東に一〇〇〇里程離れた海域に、戦前は爬間諸島へ航空機を移動させる際に、その中継地点として用いていた場所がある。

字面からも判るように、元はと言えば他国の領土だった。対外進出の過程で奪い取り――今では立派な固有領土なのだが、そう呼ばれている。これは獲得した新領土に瑞穂風の名前をつけるか、あるいはそのままの名前で呼ぶか――当て字をつける場合もあるが――するという瑞穂の癖を現したものである。

爬間諸島は既に敵に占領されていた。御道栄諸島も維持は困難だとの判断から、年明け早々に放棄撤退――守備隊将兵を無駄死にさせないため――する事が決められている。つまり海軍の防衛線は植木島～マルシャル諸島まで後退しているのである。

だが、マルシャル諸島は中部橋道洋の要衝——海軍が内地防衛の要として、戦前から諸施設を整備してきた、珊瑚諸島を攻撃できる場所なのである。往復二〇〇〇里程度の距離ならば、重爆撃機であれば一(ひと)跨(また)ぎだろう。

四発機——長距離攻撃が可能な重爆撃機を保有するのは、瑞穂だけではない。聯合帝国にしてもそこに含まれ、彼らは第17号重爆撃機「空の城塞（ルフト・ツィタデレ）」を開発。既に南加大陸諸国への戦略爆撃に使用している。

大型爆撃機は運動性に乏しく、移動目標への攻撃命中率は恐ろしく低い、不動目標――都市部への無差別爆撃に関しては、極めて有効だとの例が確認されている。特に通気性を重視して造られる熱帯地帯の家屋だと、油脂類を内部に含んだ爆弾を投下されると、たちまち炎上し、それが延焼に次ぐ延焼を起こすという。

瑞穂本国の家屋は、南加大陸諸国のそれに比べると遙かに頑丈――地震が起きやすい地域なので、その備えが為されている――なのだが、それでも木造のものが多いので、無差別攻撃に踏み切られたら、どうなるか判らない。

前提を整理すると、マルシャル諸島が陥落すると珊瑚諸島が敵の爆撃圏内に入り、その維持が困難になる。珊瑚諸島が陥れば、鞠縄諸島が危うくなる。鞠縄諸島が占領されると、そこが敵の戦略爆撃機基地となり、瑞穂本国が爆撃される可能性が生じる。

要するにドミノ倒しの崩壊が起きるのではないかと疑われているのだ。英もこれを笑い飛ばせない。防衛線はどこか一カ所が崩されると、全体が崩壊する危険性がある。敵が物量を活かして一気に押し込んでくる事が多いのだ。

であるならば、マルシャル諸島の防備を強化し、決戦海域をもう少し東に移動すれば済むではないか、と言えるのだが、事はそう簡単ではない。

鞠縄諸島や珊瑚諸島ならば、瑞穂本国に比較的近いから、敵が来寇してきても航空戦力に代表される増援の即時派遣が可能なのだが、瑞穂本国から南に三〇〇〇里離れた珊瑚諸島から更に東へ一〇〇〇里となると、いささかどころではなく様相が変わる。

決戦場を遠隔地に定めると、補給難や移動の手間などから、肝心な時に必要とされる戦力が揃わない傾向にある。爬間諸島沖海戦などがその典型で、もし第一東遣艦隊が決戦当日に現場にいれば、第一艦隊はああも無残な敗北は喫しなかったに違いない。

そもそも漸減邀撃作戦の総仕上げをする場所を中部橋道洋に定めたのも、敵に移動と補給の苦しみを与え、自軍側は本国近海で迎撃できるという利点を生み出すためではなかったのか？

皆がそう考えているらしい。マルシャル諸島は重爆撃機用の滑走路を数カ所築ける程の平地があるから、敵に占領されると航空要塞化するのは目に見えているのだが、そこを決戦場には出来ない。

可能なのは要塞化を推し進め、守備隊が玉砕する時間を僅かでも遅らせる事。

護れないし救えないのなら、いっそ早い段階で全施設を爆破処理でもして守備隊を撤収させてしまえば良さそうだが、それも第一艦隊があと半年は使用できそうにない――との現実を前にすると、許された話ではない。

マルシャル諸島守備隊には、一日でも良いから時間を稼いでもらう。最悪、そこが陥落しても、珊瑚諸島に大規模な戦闘機隊を派遣すれば、航空優勢が確保できなくても、五分以上には戦えるはずだ。まだ戦術展開次第では目がある――

莫迦な話だが、そんな結論が出かけているらしい。

「何を愚かな」

英は腹の内で何かが煮え立つのを感じた。絶海の孤島で孤立している守備隊が戦うのは、戦い続ければ増援が来ると信じているからだ。そこには陸海軍省の高官も皇国聯合艦隊司令部職員も、同じ八洲人の血が流れる同胞ではないか――という民族意識が根幹にあるからだ。

それを、一兵の増援も送らずに玉砕させたとあれば、他の守備隊はどんな気分でそれを眺めるだろう。

少なくとも士気が高揚する事はあるまい。

こういう性格だから敵を作りやすいとの自覚はある。「自重してください」と美御や紅葉に何度言われた事だろう。揉め事を求めて生きている訳ではないのだが。

英は気がつけば口を挟んでいた。

「結果的に玉砕するのと意図的に玉砕させるのでは、その意味合いが随分異なると思われますが」

それを聴いた出席者の何人かは、あからさまに嫌そうな顔をした。正論なのだ。反論する余地のない正論。だが、正しければもれなく全員が従う訳ではないのは、世の常。戦力不足。準備時間不足。その二重苦（ダブルパンチ）を抱えて戦うとなれば、妥協せねばならない部分はある。

「第七艦隊最高司令官か」

場にいる一番年下の人間に注がれる視線は、かなり冷たい。差し出がましさを叱るようなものが多い。

ただし、「若輩者は黙れ！」との直接的な叱責はない。戦時の軍隊に於いて最も幅を利かせるものは、階級でも年齢でもなく、挙げた戦功の数だからだ。

海軍兵学寮卒業直後から最前線勤務を続けてきた英は、単純な戦闘参加回数も、掲げた武勲の数も莫迦にならない。でなければ一〇代で中將になるなど、皇族でも流石に無理だ。

また、会議出席者たちは、英の背後に控えている、元帥宮の影を見ていた。彼女に無体な言葉を吐けば、直ちに自分目掛けて跳ね返る可能性があり、下手な発言は自分の軍歴に傷をつける――場合によれば将来を棒に振る原因になりかねない。

武蔵にしても英治が海軍部内に持つ影響力は無視できない。英に対し探るような眼差しを向ける。彼女が個人的な思惑でものを言っているのではなく、それが英治の意向なのではないか――その可能性を疑っているようだ。

「戦船中將」誰であろうと冷徹さを崩さないとされる胴賀が最初に口を開いた。

「これは海軍総司令部の決定なのだ。陸軍参謀本部とも既に協議を重ね、彼らも承知済みのな」

ちらりと視線を注がれた陸軍側は、気まずそうに頷いた。味方を――特に落ち度のない同胞を、玉砕を避けようもない場所に配置し、全滅させるというのは、実質的に集団処刑と同じだ。なるべくなら避けたかったに違いない。

しかし他に選択肢がないのであれば、やむを得なかった。皇国聯合艦隊も陸海軍の航空隊も救えぬものを、他にどうしろと言うのか。神様にお祈りすれば奇跡が起きる訳でもあるまいに。

「私は反対だ。各地に配された守備隊は、必ず味方が助けてくれるものだと思っているからこそ戦うのだ。初めから玉砕を前提にして戦わせるなど、信義に悖（もと）る。せめて一個艦隊ぐらいは救援に差し向けるべきだ」

「聯合帝国艦隊は強大だ。中途半端な部隊を差し向けたところで、それは焼け石に水となるだけだ。そして徒に派遣部隊を消耗させてしまう。その結果得られるものは、『奮戦はしたが結局駄目だった』という満足感だけだ。それは精神的な自慰行為に他ならず、何の成果ももたらさない。戦うのであれば、全艦隊が力を発揮できる場所であるべきだ」

胴賀の主張は正しい。瑞穂にはもうさほどの余裕などない。負ければ最後――国が滅ぶ。

しかし――

「全軍の士気維持に必要なのだ、次長」

英は敢えて反論する。それは見捨てられかけた島の守備を成し遂げた者のみが持つ独特の感性からであり、祖国は自分たちを最後まで見捨てないと信ずる精神の表れであったのかも知れない。

「精神力では勝てない」

「追い詰められた時だからこそ、信じられるものが必要なのだ。そこを理解していただきたい」

両者は睨み合う。真田大將も口を挟まない。大澤も同じだ。海軍の有力艦隊を預かる両者の沈黙は自然と伝播し、どうなるのだ――との呻きが各所から漏れた。

「……そこまで仰るのであれば」胴賀はため息をついてから額を揉んだ。「第七艦隊最高司令官、貴女がマルシャル諸島守備隊のために戦われると宜しかろう。我々としては発言者が責任を持つべきだと解釈する」

官僚らしい責任回避を目的とした台詞だと言えるが、英としては自由裁量で動けるのであれば、投げやりに責任を押しつけられたのだとしても、別に構わなかった。マルシャル諸島防衛のための行動だとすれば、天下御免で動き回れる。それは魅惑の響きを有した。

「承りました」

何――とざわめきが生じる。一部の将官から「よくぞいった！」という好意的な言葉があるが、大部分からは「元帥宮の庇護があるからと好きな物言いを――」と苦虫を噛み潰したような呟きが漏れた。

「それで構わないのか？」

「私の艦隊にはまだ実績がない」英は鋭く切り返した。「マルシャル諸島に敵軍が侵攻してきた時に行動を開始し、その存在感を天下に示してみせるよ」言い終えてから武蔵の方を視た。「総長、構いませんか？」

話を振られた武蔵は、暫しの間、渋面を形作った。話が事前予想とは異なる展開を迎えたので、困惑気味の様子だ。しかし元帥宮の娘が言い出した事を否定できる材料が乏しいのを悟ると、「引き際をわきまえてくれるのであれば」と妥協した。

彼には確たる戦略見識などない。だが、採用時には複数の爆発事故を起こし、幾人もの技術者や軍人を殉職させてきた無限機関に対する嫌悪感や不信感がある。その無限機関搭載艦が幅を利かしている第七艦隊――遊撃機動部隊であれば、消えて惜しい戦力ではない。二万の人員の命を惜しむ気持は絶無ではないが、戦争だからこそ受け止めねばならぬ悲劇もある。

「早速面倒な問題が起きたわい」

詰まるところ彼の気分はそんなものであったのかも知れない。海軍総司令部の意向を無視する艦隊司令官がいたら戦争に負けるという気がするが、特別扱いされてきた姫提督が好きにする分には、もう構わないか――と考えたらしい。

一部例外を設けるとそこからまた別の問題が顔を覗かせる事が少なくないが、売言葉に買言葉とばかりに英と口論する面倒臭さを思えば――彼女の口が達者なのと、その庇護者の政治的影響力を考慮したら、そのような結論になる――やむを得なかった。

一方、英の方とは言えば、そうした武蔵の複雑な胸中を知ってか知らずか、自主判断（フリー

ハンド)で動ける事を喜んでいた。皇国聯合艦隊司令部から切り離されている独立艦隊なのである。独自行動を取らねばその存在意義がないと考えていた。公式の作戦会議で自由に動いて宜しいと言われれば、それに越した事はない。何かあれば陸軍でさえも「確かに認められていた」と答えてくれる証言者になるのだから。

会議の途中で、身内同士で揉め始めた海軍側に、陸軍側は呆れ半分の視線を投げかけた。

瑞穂人は年末から年明けにかけて長期休暇を取るのが習わしである。これは五星教徒の聖母誕生祭に匹敵するもので、民族的かつ宗教的な理由によるものだと言えた（八百万の神々が年末年始はどんな者も休むべきだと定めている）。

そうした理由により、第七艦隊――遊撃機動部隊も艦隊最高司令官以下皆が帰省した。万一に備えて待機となる一部の人間を除いて、各自が正月を祝い、先祖の墓参りをするために、それぞれの故郷へ還ったのだ。

大晦日に皇都で陸海軍作戦会議に参加した英は、美御を伴い東府へと赴いた。移動手段はこの時代の公共交通機関である蒸気機関車を当初は用いようとしたが、予約席は疎か当日券ですら完売と聴いて、仕方なく陸軍機に――関八州地区へ配属予定の一式重爆「鳳」に同乗する形で、そこへ向かった。

他人の操縦する航空機がさほど好きではない美御としては、続け様にそんな機会を得るのは、正直なところ御免であった。それぐらいなら空輸予定のある「紫風」でも借りて、移動を済ませたい気分である。

しかし、英を一人で「鳳」に載せておいてもし事故が起きたらと思うと、単独移動は出来ない。

そこで仕方なく「鳳」に英と共に乗った。「鳳」は海軍の重爆――一式陸攻「聯山」と基本的に同じ機体なので、馴染みがない訳ではないが、陸軍機使用のために細かな違いがある。

まず陸軍は敵艦隊への攻撃を主任務としていない。そのため、「鳳」には魚雷を装備する機能がない。西天竺にあるヴリタニヤの要塞を爆撃するために、徹甲爆弾を装備品の中に含めているから、水平爆撃ならば可能なのだが、洋上を高速移動中の戦艦や空母に高高度水平爆撃が命中するとは思われないから、気休め以上の意味はない。

英は陸軍機の搭乗員とも、海軍提督と言うより軍事に造詣が深い皇族として接し、その辺の事情を確かめた。

大型機での雷撃は危険を伴うが、大型戦闘艦艇を沈めようと思えば、それが一番だ。陸軍機しか配属されていない地域で敵艦隊に反撃するとなれば、魚雷を用いた方が好ましいと思うのだが。

それに対し「鳳」の爆撃手は顔を曇らせてから答えた。はい。自分もそう思います。しかし、海軍さんに話を向けても、航空魚雷を回す余裕がないとかで、相手にされないのです。そもそも陸軍航空隊には、航空雷撃に関する知識（ノウハウ）もありませんし。

陸軍の諸部隊を邪魔者扱いする海軍の関係者たちは、航空雷撃に関する知識を自分たちで独占したい――と考えている節がある。特化技能を身につけているのが海軍だけならば、陸軍に功績を横取りされる心配はない、と。

莫迦げた話だ。

聯合帝国は航空王国でもある。学生時代から滑空機（グライダー）を乗り回す者が多い彼の国では、民間飛行士の数も、空中輸送への依存度の高さから、瑞穂の何倍もいる。

後年とは違い、民間飛行士を短時間の訓練で軍用飛行士に育てられる時代の話だ。瑞穂でも志願者を募り、短期育成が進められているが、人的資源（マン・パワー）に限りがあるのには変わりなく、どちらかが壊滅するまで戦い続けるのであれば、先に力尽きるのは間違いなく瑞穂側だ。

内輪揉めを優先した挙げ句に、所属組織どころか国家をも滅ぼした事例は、歴史に数多い。籠城戦での敗北、絶対に攻勢に出られない条件下での戦闘に敗れた陣営は、不協和音を盛大に奏でていたという。

自分が皇族の一人として生を受けた国を亡国にするつもりのない英は、どうにか抜け道はないものか――と思案し、一つ思いついた。

「美呉鎮守府の近くにいる陸軍航空隊と『現地協定』を結び、そこで航空魚雷の融通と指導教官の派遣を行えないものだろうか？」

「現地協定」とは読んで字の如く、前線部隊などが戦闘行動を容易にするため、陸海軍の上級司令部を通さず、現地部隊の裁量により結ばれる協定である。

陸軍が陸戦隊や根拠地隊をも指揮下に置き、海軍は陸軍航空隊も含めて、航空作戦全般を担当するという具合に、互いの軍勢や装備を融通し合うのだ。

これは内地から遠く離れた場所だけで行われるものではない。瑞穂本国でも艦隊司令官や方面軍司令官が「腹を割った話し合いの末」にそれを結ぶのが珍しくなく、特に航空関連の話題だと、無線周波数の統一とか防空担当地域の微調整などで、割と簡単に結ばれている。

「空技廠には知り合いもいるし、航空雷撃に必要な知識は艦攻隊に籍を置く搭乗員から聴き出せば良い。美呉鎮守府近郊に限れば、陸軍機に航空雷撃を習得させるのも可能かも知れん」

事は海軍の方針――明らかに間違え、莫迦げているものだとしても――に関わる話だけに、安請け合いは出来なかった。しかし見当する余地はあると英は考え、話に乗りそうな陸軍航空隊関係者の名前を紅葉に調査（リストアップ）させようと考えた。

やはり彼女は根元の部分が戦争屋なのかも知れない。

直ぐ近くで恐怖を呑み込み隠している義弟の存在は、彼女がそれに気づかなかったので、完全に無視された。

2

東府は東瑞穂――関八州の要衝である。古くから商業の中心地として栄え、人口も多い。関八州の各県に行く時は、その中央駅（セントラル・ステーション）を用いて移動した方が早いと言われており、交通の要でもある（各県を繋ぐ鉄道は別にあるのだが、いずれも小規模で、大型かつ高速な列車を求めると、東府にあるそれを使う必要がある）。

英と美御は彼の地で生まれた。「火事と喧嘩は名物だ」と俗に言われ、口よりも先に手が出る人間が多く住む、全国でも有数の喧嘩早い地としても知られる場所は、新しい年を迎えて、天から

降り注ぐ結晶により白く塗装されていた。

「浦須賀（うらすか）は晴れていたのにな」

英は天の気紛れにより白い化粧を施された街並を眺めつつ呟いた。

「浦須賀」とは相河（さがかわ）県――東府より少し南に離れた隣県にある街だ。海軍の大規模な基地があり、鎮守府もそこに設置されている。英と美御はその航空基地に降りて、そこから東府行きの列車に乗ったのだ。

「時折ありますね」美御は空を見上げながら答えた。

東府は冬の厳しさを謳われている地域ではない。降雪が皆無ではないが珍しく、帰省した時を狙うかのように降り注いだ事は、殆どない。

「まあいい。天を恨んでも始まらん。それに――」英は待たせている人たちの顔を思い浮かべた。「子供の頃は雪が嫌いではなかった。互いにそうだろう？」

「寒いのに碌に防寒着も着ないで遊び回り、姉さんによく叱られましたね」

「二人とも身体が妙に頑丈なので、風邪を引いた事はないけどな」英は笑った。

年月が流れるのは、済んでしまえば早いものである。一〇年前は神家の境内を遊び場に使っていた少年少女は軍人――海軍の将校となり、手を血に染めた形で故郷の地を踏んだ。

「急ごう」英は兎の毛皮を裏打ちされた手袋を拝むように合わせた。「積もると面倒になる」

「はい」美御は頷いた。薄着姿でそこいらを駆け抜けた子供時分とは異なり、軍用の緑褐（カーキ）色外套（コート）を英同様に着用している。寒さに殊更弱くなった訳ではないが、分別はある。

「うん」英は東府中央駅の直ぐ近くにある乗合自動車(バス)停留場へと脚を進めた。それは軍隊同様に最低限の人員が東府の交通機関を支えるために正月も勤務しているのだ。時刻表を確認して間もなく次の便がくるのを確認した英は、美御を近くに立たせると、身を寄せ付けた。

「寒いのですか？」美御はどぎまぎする。

「正月なのだ」英は人目を気にする素振りも見せない。「少しぐらいなら良からう」

言い終えたと、彼女は義弟に寄りかかる。

外套越しとは言え、義姉の肌から伝わる感触が、彼の胸を惑わす。心を掻き乱す真似をされると、平静を装えなくなる。乳兄弟として精神的に繋がり、疑似性交の相手として肌を重ねてきた間柄だ。今回はその後者として義姉は振る舞うつもりなのか。正月限定のご奉仕（サービス）なのか。判らない。判らない。

困惑する義弟を無視して、英は自身の胸を彼の腕に押し当てる。まるでこの男は自分のものだと主張するかのように。身体を擦りつけて匂い付けをするかのように。

軍用外套に身を包み、身体を寄せ合う二人の様子は、遠目からは男女の少尉候補生――それも恋人同士――が仲睦まじく佇んでいるようにしか見えなかった。

神社神家は呉葉宗の宗教施設である。瑞穂皇国の海の守り神――護船神である戦船呉葉を祭る神家は多いが、その子孫が幼少期を過ごしたという場所は、さほど多くないかと思われた。

神社御子（みこ）――現在はそこの女神官を務める、英の義姉で美御の実姉は、今年二五歳を迎える。雪のように白い肌と肉付きの良い身体。沢庵（たくあん）を連想させる太い眉毛などが

、昔話に出てくる福の神を思わせ、如何にも温和な人物との印象を人に与える。

そして本人もまた、他人の印象を裏切らない性格を有していた。子供好きで、他人の世話をするのが苦にならない方で、宗教施設の管理責任者よりも幼稚園の園長の方が向いているのではないか――との親しみやすさを持つ。

実際、神社神家はそうした側面を有していた。

近所の子供たちの遊び場と預かり所を兼ねており、いつも小さな子供たちがたむろする。

元旦当日ともなれば、流石に親たちも遠慮して神社神家に我が子を近づけないが、それでも子供たちの声はする。何故か。それは近所の子ではなく、この神家で寝泊まりする幼子が複数人いるからである。

「姉様、姫様は兄様と一緒に還ってくるんだよね？」

「ええ」

「お土産はある？」

「多分ね」

「もう直ぐだよね？」

「うん」

境内を雪が白色に染め上げていく中、防寒着に身を包んだ子供たちを前にして、御子は丁寧に応じてやる。

――手紙や電話で確認したから、今日の内に戻るとは思うのだけれど。

正月に墓参りをするために帰省する。それは瑞穂人の慣習だから、別段珍しい事ではない。

しかし予定の変更が珍しくない軍隊に籍を置く者だと、「急な出撃だから」とそれを突然取りやめにする者は多い。瑞穂人同士の争いであれば、「正月ぐらいはやめにしよう」と休戦が成立するのだろうが、宗教や慣習が全く異なる異国人との戦いともなれば、そうは行かない。

そこは戦時体制に移行しつつある国の民として、御子も理解していた。楽天家に思われがちな彼女であるが、皇室と付き合いのある宗教家として、現実問題への対処が以下に面倒なのかを理解しているつもりだ。

――せめて元日ぐらいは顔を見せてくれたら良いのに。

御子が騒ぐ子供たちを宥（なだ）め賺（すか）しながらそんな事を考えていると、鳥居をくぐる人影があるのに気づいた。

眼を凝らすと、待ち人たちであるのが確認できた。

ぱっと顔を輝かす。爬間諸島沖で英が指揮した艦隊が敵と交戦し、一定の戦果を挙げたのは、新聞や電波放送で確認していたが、部隊の被害については触れられていなかったため、心配していたのだ。

「姫様たちだ！」

反射的に駆け寄ろうとしたが、子供たちに先を越された。わらわらと彼らは群がり、英たちを囲んだ。

「皆、元気にしていたか！」

英は一人一人の頭を撫でてやりながら訊ねる。顔には久方振りの満面の笑みが浮かんでいる。

「兄様、飛行機の話をして！」

「落ち着いたらね」美御も義姉と同じような感じだ。

自分がやろうとしていた事を先にやられると、大抵の人間はその後しばらく固まる。御子もその例外に漏れず、暫し硬直した。しかし英に笑顔で「ただいま」と告げられると、石化していた身体に熱が戻り、「お帰りなさい。二人とも」と微かな涙を滲ませて答えた。

子供は元気を持て余す種族である。陽が高い内はそこいらを力の限り駆け回るが、天道が水平線に身を隠すと、糸が切れた人形のように眠る。英の久し振りの帰省を迎えた面々もまたそれで、夕食の後にはほぼ全員が床に就いていた。

居住に用いている区画、その一室で炬燵（こたつ）を囲んでいる面々は、子供部屋で眠っている幼子たちの顔を思い思いに想像しながら、しかし真剣な顔つきで話をしている。

「仕送りに不足はないか？」

毛織物（セーター）に野袴（ズボン）という部屋着姿の英が、重々しい口調で、御子に訊ねた。日頃幼子の世話をしているのは御子なのだが、この中で一番責任が重いのは、実は彼女なのである。

「もう充分以上に受け取りました」御子は頷きながら応じた。「あの子たち全員を大学まで進ませておつりが来るぐらいにね」相手の顔を視てから付け加える。「最悪、私が面倒を見ます。貴女が気に病む必要はありません」

「あの子たちの保護者は私が死なせたからな」英は懺悔（ざんげ）するような口振りで言う。「それで犯した罪の全てが消える訳ではないが、償いにはなる。誠に偽善的だと判っているが」

英は戦死させたかつての部下たちの遺児を引き取っていた。これは瑞穂の皇族的な振舞、その一つに数えられる。身寄りをなくした子供を養い子にし、保護者となる。成長した子供はその引き替えに忠実な臣下となる。ある意味で信用できる人間を傍に置くための手段、その一つなのだ。

一〇代前半から最前線での勤務を続けてきた英は、必然的に多くの死に直面してきた。亡き妻と彼女が抱えた乳飲み子の写真を示され、後は頼みますーと言い残されたのは数知れず。他に身寄りがあるのであれば話を聴くだけで済んだのだが、親意外に頼みとなる者がおらず、放置すれば孤児院送りが確定するとなれば、引き取りを宣言するのもやむなきかな。

そうした行為を積み重ねた結果、英は都合八人の養い子を気がつけば抱えていた。そしてその全ての世話を、昔自分が過ごした場所――神社神家に預けていた。

勿論、養育費は毎月振り込んでいる。しかし、全ての戦死者の遺族を救えた訳ではないし、英が言うように自己満足的な面を持つ事は紛れもない事実だ。

拙い作戦指導に、法整備の遅れの犠牲者になるのは、いつとても戦災孤児なのだ。孤児院送りにされた者の殆どが満足な教育も受けられず、社会の底辺に喘ぐ事が多い現状を思えば、それを偽善だと言われてもやめられなかった。少なくとも直接面識のある者たちの子供――自分が死に追いやった者たちの遺伝子を後世に残してやりたい。

「姫様が健在なところを見せてくれれば、皆が喜びます。貴女は恨まれている訳ではありません

んよ」

そう言うのは、英や御子と比べると肌の浅黒さが目立つ少女――英が催飯防衛戦の際に壮烈な戦死を遂げた、与那国光夫（よなぐにみつお）少佐の忘れ形見である与那国美琴（みこと）である。彼女はこの時一三歳。英の養い子の中では最も年長であり、子供たちの纏め役である。「そうかな？」英は疑うような、探るような声音で言う。

日頃は強気の権化のような彼女であるが、事が自分の非保護者たちの話になると、途端に弱気になる。

負い目があるからだ――とは本人の弁だが、万単位の戦死者を出して恥じ入るところか当然だと開き直る輩もいる事を思えば、英の振舞は人格者のそれに部類される。少なくとも、彼女は自分に責任があるのを認めている。

「子供は正直です。嫌いな人間に笑顔で近づく者はありません」

美琴の言葉に、英は「そうか」と笑顔になる。

感謝されたくて、あるいは自分の近衛隊が欲しくて戦災孤児の引き取りを始めた訳ではないが、やはり小さな子供にあからさまに嫌われるというのは、大人と違い計算がない人種だけに堪えるのである。

「ところで――」美琴は訊ねづらそうに言う。「鞆縄は――催飯はまた戦場になるのですか？」

そこが気になっていたらしい。彼女の声音は真剣だ。海軍提督である英であれば、軍の事情について詳しいとの判断があるのだろう。彼女は中等学生に成り立てなのだが、実父譲りの鋭さがある。

「それは……」英は口籠もる。

違うと即座に否定できれば、どれだけ気が楽だろうか。だが現実には、英が以前に民間人込みの雑軍を率いて戦ったあの島を、再び戦場にしようとしている。大勢の戦死者が眠る場所を――戦況如何にもよるが――焼け野原にしようとしている。

「美琴さん、それは」美御が困惑を露（あらわ）にする。

言われて美琴も自分の不躰ぶりに気づいたらしい。

「済みません。軍事機密（トップシークレット）ですよ」

「構わないさ」英は戦友の忘れ形見に微苦笑を向けた。「爬間諸島沖海戦で大負けしたツケが来ている。次の決戦場が中部橋道洋のどこかになりそうなのは、皆が何となく察しているだろうか」

「情報の秘匿こそが、国民の信頼を損なう原因になる」と、前総理――秋月実松は海軍が被った損害を正直に発表した。その結果、一般国民までもが海軍の窮状を知るという悲喜劇的な状況が生まれた。

美琴が催飯がまたしても戦場になるのではないかと推測できたのも、そうした情報管理のやり方に原因があると思われる。娑婆にいる人間にまで次の決戦場を推測されるようでは、機密も何もあったものではない。

「やはり」美琴は眉を曇らせた。

「暗い話題ばかりではないよ」英は励ますように告げた。「電波放送でも聴いたと思うけれど、つ

い先頃に新鋭戦艦が竣工したんだ。私の艦隊にいる。あれがいれば敵が何隻戦艦を繰り出してきても心配はない」

「それなら聴きました」美琴は頷いた。「姫様が指揮する艦隊が新しく出来て、そこに『八洲』とかいう巨大戦艦が配属された――と」

全長三三三間という巨体を誇る「八洲」は、船渠の大幅拡張などをせねばならぬ関係から、初めから「建造を秘匿するのは無理」だとの判断が働き、「海軍は世界最強の戦艦を建造中である！」とばかりに、積極的な広報活動に努めた。

故に主砲口径や艦速という重要部分を除けば、瑞穂国民は「八洲」の存在を知っていた。「新しい戦艦は、何と矢隠級戦艦が巡洋艦にしか見えないような巨艦だそうさ」「どんな戦艦だろうが一撃で吹き飛ばせる大口径砲を積んでいるとか」

街雀たちは好きなように言うが、そのさえずりは的を射ていた。建造責任者たちは、一隻で戦局そのものを左右できるだけの艦を拵えていたのだから。

「うん。その『八洲』だ。一度視ればその強さが直ぐに判ると思うよ」

これは養い子を心配させたくない――との気持と、実父が建造に際し深く関与した戦艦を信じたいとの願望が、半々ずつ混じっていた。元戦闘機搭乗員の英だが、戦艦も昔から好きで、その戦艦好きの目から見ても、これまでの軍艦とは一線を画する艦だと思えた。

「視れば――ですか。視られるのであれば、子供たちにも見せて上げたいものですが」「と言うと？」

「姫様のお船を視たいと駄々を捏ねる子もおりまして」

ふーむ、と英は顎に手を当てた。彼女自身、子供時分の時は、近くの港に軍艦が停泊していると聴いただけで、それを直ぐに視たくなったものだ。養い子たちの気持も理解できた。

「それなら、そのうちに『八洲』を見せて上げよう」

「宜しいので？」美琴は英と美御の顔を見比べる。

美御は苦笑した。新しい玩具を他人に見せびらかしたがる子供のような心理に、英がなったのかと思った。

「構わないさ。従来、軍艦とは竣工したら一般国民にお披露目されるのが習わしだ。折角竣工したのに、お披露目式なしに出撃では、『八洲』も可哀想だ。皆から祝福されてこそ、幸多い航海に臨めると思う」

戦時下に竣工した艦とは言え、「八洲」は瑞穂の旧国名と別名を兼ねる名を冠された、海軍期待の巨大戦艦である。とにかく数を揃える必要のある急増艦ならまだしも、それではあんまりだと英は考えたのだ。

「いつになりますか？」

「そんなに急には決められないな」英は思案するような口振りで告げた。「だが時期が来たら、皆を連れてくると良い。戦艦でも空母でも好きなだけ見せて上げるよ。私の艦隊には戦闘艦艇ならば一通りあるからね」

美琴は笑った。父親が軍人であったためだろうか、彼女は軍事に関する関心が強く、戦艦や巡洋艦であれば、殆どの名前を空で言えた。英も幼少期は美琴と似たような部分があり、そのまま

成長した感があるから、養い子の事をとやかく言えない。

言えない、と言え、英にとり海軍が鞠縄諸島を決戦場に定めた事がその最大のものだった。美琴に告げた言葉は、精一杯の強がりでもあった。彼女は気がつけば胸中で呟いている。大丈夫。皇国海軍には、まだ戦艦や巡洋戦艦が一〇隻以上残されている。航空母艦も然り。まだ戦える。

敵との絶望的な戦力差については、養い子に対しては固より、自身の胸中でもとても言えなかった。

3

軍港に戦闘艦艇の群が入港する時特有の、高らかな喇叭音が響き渡り始めた。その様子を、親父島にある軍事施設を管理運営している西部帝家艦隊の将兵たちは、何と言うべきか判らないような顔で見つめている。

「本州艦隊の規模は我らより上だとは聴いたが……」

西部帝家艦隊総帥――ユリーシア＝テレーズ・ド＝ボナパルト元帥は、先導役の軽巡の後に続く戦艦群を視て、呆れたように呟いた。

聯合帝国本土艦隊は、凱旋観艦式もかくやと言いたくなる程の戦艦を揃えていた。三八センチ五〇口径砲を連装四基八門装備するグラフ・ビスマルク級戦艦四隻の後に、三六センチ五〇口径砲を四連装三基持つヴァレンシュタイン級戦艦六隻が続く。

「いずれもここ数年の間に竣工した新鋭戦艦ばかりですな」アドラーが眉を微かに蠢かせた。

「何にせよ気前の良い事で」

西部帝家艦隊は爬間諸島沖海戦の際、メール・リオン級戦艦四隻とレヴォラシオン級巡洋戦艦二隻を主力として戦った。輸送船団護衛用に旧式戦艦も帯同させたが、完全に蚊帳の外で、実際に戦闘に寄与したのは、この六隻であった。

そして、そのうちの半数を撃沈破され、損傷艦も本国の船渠に入渠している。西部帝家艦隊が現在動かせる戦艦の数と比べれば、どうしても数的差が生じる。

「橋道洋戦線での主導権を我らに代わり握りたいのだろうな」ユリーシアは吐き捨てるように言う。「身勝手な」

「身勝手と言え、彼らは指揮系統でも身勝手ぶりを発揮しているようですが」

アドラーは帝国本土艦隊の司令官が事実上二人いるのを気にしていた。ゲーリングが正規の司令官なのだが、聯合帝国内の小邦――オルデنبург公国のゲオルク公爵が副司令官に任命されており、彼の部隊は艦隊司令官の命令を公然と無視する事が度々見受けられた。

「手と手を携えて戦う情景は想像出来んが」

「あまり呆気なく彼らがやられると」主君の皮肉に、彼もまた強烈な皮肉で応じた。「罔にもなりません」

「違いない。憎たらしいので瑞穂人に始末してもらいたいと考えていたので、忘れていた！」

主従は他人には到底聴かせられない話で盛り上がる。聯合帝国は名前にある通り、地方に王国

・大公国・公国などが国家形態を維持したまま存続し、独自貨幣を流通させている地域もある（大まかに見れば、西部帝家領もそうした地方自治体の一つだと言えるが）。

今回のように中央政府の要人と繋がりを持つ人物と、軍事的才能を示す事により頭角を現してきた地方勢力の雄が組むと、足並みが乱れる原因となる。ああ、あいつらは仲が悪いから――と毎回そんな真似をしていたら、どんな軍事作戦も遂行が困難になる。やむを得なかった。

「彼らは彼らで独自の作戦展開を考えているようですが――」

「共同作戦をしろなどと言われても、合同訓練をした事すらないから無理だ」

ユリーシアは容赦ない。同国の軍隊とは言え、帝国本州軍と西部帝家軍とでは、使用する言語も異なり、軸になる人種も違う（帝国本土はゲルマニヤ系が過半を占め、西部帝家領はガリヤ・ブリタニヤ系が幅を利かせているから、実際別の国のようだった）。

下手に共同歩調を取らせると、それこそが混乱を招き、敗北の原因になりかねない。明確な作戦目標を定め、各自が作戦から逸脱しない限り自由に動く、あるいは最初から別行動を取るのであれば、また話は変わるのかも知れないが。

「航空母艦の数も随分と多いな」

「正規空母と軽空母が各六隻ずつ。航空機輸送用の護衛空母が八隻と聴きました」

「合計二〇隻か。我らは？」

「修理中のものを含めて、今のところ一〇に満たぬ数かと」爬間諸島沖海戦の後遺症が――とは言えなかった。

「本国で新規建造中のものが出揃うまで、話にならん」

遠征先では兵力の過多がものを言う。兵隊の頭数が少なければ、何も出来ない。ユリーシアは戦艦と同時に航空母艦を重視する人物だから、その双方で大きく数を開かされた事に、苛立ちを感じているのだろう。

「彼らは状況次第で更なる増援を送り込むつもりなのですが、電探を装備している艦は一隻もありません」

そんなユリーシアに、アドラーは「奇妙な朗報」を教える。電波探針儀の有効性は、西部帝家艦隊が爬間諸島沖海戦で電波照準射撃装置を使いこなした事から広く確認されて然るべきなのだが、「自ら電波を発信するような真似をしたら、敵に発見されやすくなる」との意見が根強い帝国本土艦隊の間では、装備が進んでいないのだ。

「瑞穂人も巡洋艦以上の艦に電探を装備し始めているのか？」ユリーシアは探るように言う。

「はい。彼らは加えて、瑞穂人は視力の悪い者が多いから、夜間戦闘技術も自分たちの方が上だと」

「莫迦な話だ」ユリーシアは彼らの不勉強を笑う。「瑞穂人は特殊な訓練を受けた見張員を多数養成し、夜間戦闘技術に長けていると聴いたぞ。昼間ですら彼らの水雷戦隊から受けた損害は莫迦に出来なかったのに」

「電探の未装備に敵艦隊への軽視――彼らが自らの脚を打ち砕くような真似をするのは、そう遠い話ではないかと思われます」

「違いないな。イクサブネにはそうした数を頼みとする莫迦者共にやられてほしくないところ

だが……」

アドラーは微かに眉を顰めた。爬間諸島沖海戦からこの方、彼が仕える上官は、自分に勝ち逃げをした敵将の事を強く意識している。海戦そのものは西部帝家艦隊の戦術的・戦略的完勝に終わったとは言え、そこに拭いがたいシミをつけた相手の事を忘れかねているのだ。

——一個人への強い思い入れは、判断を誤らせる材料になる。姫が敵対意識に溺れなければ良いが……！

懸念が胸を焦がしていく。急速な膨張を遂げてきた国家や組織は大きな矛盾を抱えるものだが、橋道洋戦線という新たな戦場は、聯合帝国がこれまで直面せずに済んできた問題点を全てぶちまける事になる、禁断の箱なのではないか——とさえ思えてきた。

そんな銀髪銀眼の提督の双眸に、戦艦群に続いて入港してくる巡洋艦の群——重軽巡が映じた。大雑把に見ても十数隻を数えるそれは、騎乗した騎士の後に続く槍歩兵の姿を連想させ、何とも言えない頼もしさを見せつけてくる。

だが、人の和を欠いた存在は、いつの時代、何処の国でも弱い。そのあたりに関する認識は、誰かにあるのか——と考えると、背筋に冷たいものが走った。慌ててアドラーはそれを打ち消す。しかし不安は消えなかった。

4

正月二日。英は美御を引き連れて墓参りをしていた。皇族のそれと言うと、どうにも仰々しい感じがするが、実情はかなり異なる。遠出すらしていない。神社神家が英の生母がとこしえの眠りに就いた墓所を敷地内で管理しているので、直ぐに足を運べた。

実母が眠る墓所の参りを手早く終えた英は、その後、近くにある別の墓石の方へと足を向けた。

降り積もる雪により白く塗装された墓石、それを美御と二人で綺麗にした英は、静脈が透けて見える程に白い肌、その頬を僅かに紅潮（こうちょう）させて、蠟燭（ろうそく）に燐寸（マッチ）で火を点けた。死者を悼む意を込めたその蠟燭は、風に煽られて火が点いたり消えたりするが、どうにか墓石の前に置くまで火が完全に消える事はなかった。

「奇妙なものだな」墓石の前で眼を閉じて手を合わせた後に、英は呟いた。「実の母親の墓、その前では感情が波立つ事など一度もないのに、美里（みさと）さん——美御の母親の墓石の前だと、いつも泣きそうになる」言いながら彼女の目元は潤み始めている。「人の死になど慣れているはずなのにな」

その言葉に対し、美御は即座に返せるものを持たなかった。彼の母親——英も呑んだ母乳を与えてくれた女性は、もうこの世の人ではない。四年前——英たちが少尉任官してから二年後に、流行病で死んだ。父親もほぼ同時期に後を追うように。

英と美御は、その悲劇的な結末を軍事郵便越しに確認した。御子が手紙で報せてくれたのだった。最前線勤務を続ける飛行士に、気軽に休暇を取る余裕などない。葬式にも出られなかった。内地に戻った後に墓石を見ても実感はわかかなかった。あの日だまりのような笑顔をした愛すべ

き人が、流行性感冒などで死ぬはずがない。質の悪い悪夢を見ているのだと信じたかった。

だが、時計の針は逆に回らない。御子から「母様は最後まであなたたちの身を案じていました」と告げられると、英は墓石に縋って泣いた。彼女は生後間もなく産褥熱（さんじょくねつ）で死別した実母を母親だと思っていない節が見受けられた。乳幼児の頃から共に過ごした乳母だけを母親だと意識していた感が多分に見受けられた。つまり彼女は母親を二重に亡くしたのである。

「美御は違うのか？」涙を拭いながら、英は問う。

「僕は……」

美御は口籠もる。違うと言えは嘘になるし、その通りだと同意するのも憚られた。戦闘機搭乗員は僚機を喪うのは日常茶飯事である。見慣れた顔がある日突然にいなくなるのは珍しくなく、誰かが戦死した事をいちいち真に受け止めていたら、身が持たない。

しかし、戦場から遠く離れた地にいる、親しい人間が死んだら、やはり悲しい。還るべき日常が喪われたような、そんな喪失感が心中を埋める。両親と死別するにしても、もう少し先の話だろうと信じていたのに――との気持もある。

だが、英程感傷的になれないのは、自らの薄情によるものなのか？ あるいは実母に乳兄弟と――義姉である英と、恋人とも愛人とも言えぬ関係にある事に気まずさを覚えているからなのか？

昨日の晩も、布団に潜り込んできた英と「姫始め」と称して疑似性交を二度程交わした。そり立つ逸物に舌を這わせた義姉の技巧は抜群で、彼女の口腔内にたちまち精を噴出させた。溜め込んでいたものを搾り取られた。

「したい時は私に言えよ。美御は顔立ちが良いから言い寄る女也多そうだ」英は熱心に口唇愛撫を続けながら囁いた。「私はな、自分のものを他人に取られるのは嫌なんだ。誰にも譲る気はないぞ」

貴女以外の女とこんな真似をするつもりなどない――と口で言うのは容易いが、英は皇族であるから、巧言令色を駆使する者が多いのを、実体験や過去の先例から知悉している。

それに、自分との関係は、義弟を他所の女に取られたくない義姉としての顔がそうさせている――との自覚が、悲しい事にあるので、言葉で飾るのを避けた。代わりに逞しい男性器を英の愛撫に合わせるかのように勃起させ、勢い良く精を迸らせた。

英と床を共にした唯一の異性だからこそ判るのだが、彼女は男への――つまりは美御への愛撫を熱心に続けるうちに、自らも強い興奮と快楽を覚える方らしい。柔らかな唇で硬直した肉棒を刺激する間に、彼女の顔は明らかに紅潮し、快感に歪んだ。

最も柔らかな部分から滴る濃密な液体は、止めどもなく溢れ、そこからかぐわしい香りを立ち上らせた。

最後の一線を越える事だけは駄目だと、互いに取り決めているから、そこから先に進もうとした例はないが、もし許されるのであれば、濡れた英のそこに己の分身を突き立て、胤（たね）を植え付けてしまいたい。

義姉が自分の子を身籠もってくれるのであれば、その後にどんな目に遭わされたとしても、納

得できるに違いない。それは幼少期から義姉を恋い慕ってきた義弟としての本音であり、牡としての本能でもあった。

墓参りの最中に、僕は一体何を考えているのか――と自らの獣欲（じゅうよく）を叱る理性の声がある。しかし激しい戦を経験した軍人は、死を迎える前に子孫を残そうとする気分とは無縁ではられない。生殖行為を強く求める気持は、一般的な常識で押さえ込めるものではない。

義弟の沈黙、その意味を計りかねた英は、怪訝な顔をする。軍務に服している時の彼女であれば、持ち前の鋭さと経験から、敵の考えを直ぐに見抜いてしまうのだが、義弟が不意に襲われた性的衝動を直ぐさま看過する程、その道はこなれていなかった。

「どうした、美御？」

改めて問いかける。「いえ……」とそれでも鈍い返事をする美御に、英は流石に彼の脳裏を占めているものに気づきかける。夕べの情景。帰省したばかりで元日だというのに、堪らないものを感じて、彼の布団の中に潜り込んだ。勃起した陰茎を銜えて楽しんだ。

成程。実母に義姉とこういう関係になりましたとは言いかねるよな。美御が俯くのも無理はない。

何とも気まずい沈黙が降りた。先にそんな事を思い出した方が悪いのだが、銜えるものを乳母の乳房から義弟の生殖器に変えた義姉としては、先に誘いをかけたのが義弟とは言え、彼を叱り飛ばす気にはなれなかった。

「……………」

どうにもならない沈黙――二人の関係性が神社美里の生前から変化した事に原因がある――を強いられた二人を救ったのは、少し離れたところから響いてきた、英の養い子たちの、楽しげに遊ぶ声であった。

二人は少し眼を伏せた状態で顔を見合わせて、

「……戻ろうか」義姉が言う。

「……戻りますか」同時に義弟も。

雪を踏み締める音が静かに響く中、それでも英と美御は互いの手を握り合った。墓所に眠る人たちに、自分たちは健在で、生きている限りは離れるつもりがないと、無言で示すかのように。

4

世間には享楽とは無縁に過ごす者もいる。貧困故ばかりとは限らない。忠誠の誓いを立てた組織あるいは国家からそれを求められる場合もある。マルシャル諸島防衛の任を預かる、第一〇九師団師団長――竹村清（たけむらきよし）中將もその一人である。

マルシャル諸島には、飛行場適正地が二カ所ある。一つは沼枯島（ぬまかれじま）。もう一つは師団司令部が置かれている雅反島（がはんじま）である。前者は中型爆撃機を一〇〇機程運用できる程度の滑走路を設営可能で、後者は一式重爆級の大型爆撃機を数百機単位で利用できる程の航空関連施設を設置できるとの判断がなされていた。

聯合帝国軍がマルシャル諸島を席卷すると、そこを起点に、中部橋道洋の要衝――珊瑚諸島に

対し爆撃を加える確率が高い。珊瑚諸島は海軍が長い歳月と多額の予算をかけて整備してきた諸施設――飛行場や船渠――がある。

もしここが敵の爆撃圏内に組み込まれ、安全な使用が出来なくなると、海軍の戦略的判断――珊瑚諸島沖で敵艦隊を邀撃し、それを撃滅し、一撃講話に持ち込む――が瓦解する恐れがある。そうなった場合、戦争遂行そのものが覚束なくなるやも知れぬ。

故にマルシャル諸島は堅く護られなければならぬ。

その陸海軍上層部の決定は判る。

だが、理解が納得と同意に結びつくかどうかは、また別問題である。第一〇九師団の構成員は、三桁台の番号――瑞穂本国以外で編成された事を示す――が割り振られている事からも判るように、精強とは言い難い。

瑞穂皇国の市民権と恩給を目当てに志願してきた、外地の先住民、もしくは植民都市生まれの混血児が全体の過半を占め、国家への帰属意識と大皇への忠誠心を疑われていた。

彼らは装備も旧式なものが殆どだ。内地にいる部隊や、これから新規編成される師団だと、三年前に正式採用された九九式自動小銃や軽機関銃が豊富な弾薬と共に装備されているのだが、第一〇九師団が持つ主武器は、今から三七年前に採用された六五式小銃である。

六五式小銃は槓桿式（ボルトアクション）だ。六発が一式（ワンセット）の挿弾子を銃に押し込み、一発撃つごとに槓桿（こうかん）を引いて薬莢（やっきょう）を排出し――との動作をせねばならないから、発射速度が自動小銃と比べると格段に遅い。

大陸で百万単位の軍勢が参加する大会戦を幾度も経験してきた聯合帝国陸軍は、当然ながら前線投入される部隊は、全て自動小銃――Mシュミットを装備している。一分あたりの発射速度の差を比べるのも莫迦らしい程であり、正面から撃ち合えば確実に負ける。

ならば第一〇九師団は自殺攻撃のために配置に就かされたのかと言えば、それも違う。彼らの本来の主任務は、南海諸島の植民都市、そこの治安維持なのだ。反政府勢力が組織した便衣兵（ゲリラ）の討伐も経験してきたが、それも時たまの話で、基本的には「軍隊がいるとの安心感と圧迫感を並立させる存在」に過ぎず、激戦区となる場所に配属されるべき部隊ではなかった。全ては動員態勢が整うまでの時間稼ぎ――海軍が有力な援軍や支援を向けられないために必要とされた、「喪われても補いがつく歯車」の一つとして取り扱われたのだ。

「我々は見捨てられた！」

そう感づく者もいる。第一〇九師団は、内地にいる正規編成師団とは異なり、三個聯隊編成――前者は二個旅団、すなわち四個聯隊である――で頭数是一万四〇〇〇に過ぎないが、それだけの人数がいれば、任務の異様さに気づく者が現れても不思議はない。

陸軍参謀本部から第一〇九師団師団長とマルシャル諸島防衛の任を拝命した時から、竹村は陸海軍上級司令部の思惑を察している。「海軍が皇国聯合艦隊を再建するのに必要な時間を稼いでくれ――」詰まるところはそれなのだ。

だからこそ、築城の専門家――要塞構築の第一人者とされてきた竹村が、マルシャル諸島に回された。

正面決戦で勝てないのなら、陣地構築を入念に行い、敵に出血を強要し、一日でも敵軍の侵攻

を遅らせる。

国外の軍隊には、命令違反者などを軸に編成された、戦死が確実視される部隊――懲罰（ちょうばつ）大隊なるものがある。彼ら是对戦車地雷が敷設されている場所に真先に突っ込み、生命と引き替えに味方の安全を確保すると伝えられるが、第一〇九師団が強いられた運命を思えば、それと大差ないと言える。

違いがあるとすれば、懲罰大隊の面々には罰せられる理由があり、第一〇九師団一同には、国家から死刑宣告されるような悪行を積んだ覚えがない事であろうか。

無意味とは言いかねるが、玉砕が確実視される戦場にいろと言われて、愉快的気分を抱ける者は、まずおるまい。竹村にしてもその一人だ。だが、彼は良きにせよ悪きにせよ、命令に忠実な軍人である。国家から敵と戦えと言われれば、怯むものではない。

「勝つのではなく粘るにしても入念な準備が必要だ」

竹村は限られた部隊を分散配置し、各個撃破されるのを防ぐため、戦力を一極集中する事にした。そこには海軍から指揮権を委ねられた陸戦隊七〇〇〇名――歩兵部隊の他に、旧式な艦載砲を装備した重砲隊もそこに含まれる――も含まれた。合計すると二万以上の数になる。陣地構築をきちんとしておけば、攻守三倍の原則――一般的に、攻める側は護る側の三倍は戦力がないと、それを撃破できないと言われる――に従えば、六万までの敵軍なら相手取れる。

海軍は有力な艦隊や航空隊を派遣できない気まずさ故か、陣地構築に必要とされる資材の輸送に関しては、責任を持つ旨を竹村に伝えた。これは聯合帝国の潜水艦が装備する魚雷が、信管不良が原因で役に立たなかった事も幸いし、土木用重機や練石などが約束通り運び込まれてきた。

戦力を雅反島に集結させた竹村は、それらを用いて地下陣地の構築に努めた。彼の地には天然の遮蔽物と言えは特になく、地上に露出した掩蔽壕（トーチカ）など、上陸前の砲爆撃で容易く潰されてしまうからだ。

工事を実際に担当する者に、竹村は出入り口を隠蔽し、尚且つ人工洞窟（トンネル）を直線的に造るなと指示している。これは近くに重砲弾が落下したり、火焰放射を浴びせられた時に、人工洞窟が真直ぐに造られていると、砲弾の破片や火焰放射が内部で待機している将兵に直撃するからである。

「一間でも地上より遠く、深く掘るのだ！」

そう竹村は主張する。雅反島は全体的に地盤が固く、工作機器を導入せねばならない局面が目立った。どうしても歯が立たず、一部では岩盤爆破のために爆裂筒（ダイナマイト）さえ使用された。

その事で不満を漏らす者も数多くいたが、「地盤が固いからこそ、敵の攻撃を跳ね返せるのだ」と竹村は工事を続行させた。彼の見るところ、仮に海軍が一〇〇機の防空戦闘機を回してくれたところで、聯合帝国艦隊の前に早い段階で制空権を奪われるのは目に見えていた。

制海空権を喪失した島嶼戦で注意せねばならないのは、始めに航空攻撃、次いで艦砲射撃である。

とりわけ後者は脅威だ。陸上ではまず運用できない大口径砲――岩城級巡洋戦艦の三六センチ砲でも、直撃すれば、練石製の高速建築物が一撃で倒壊するとの計算がある。矢隠級戦艦の四〇

サンチ砲に至ると、命中力所には月面にある噴火口（クレーター）を思わせる跡が残るだけではないか――とされている。

爬間諸島沖海戦で皇国聯合艦隊の戦艦群を叩き潰した西部帝家艦隊の戦艦部隊は、その矢隠級戦艦の主砲と同等あるいはそれを上回る主砲を装備していたとされる。

軍用の、練石で補強された施設ならば、民間家屋と比べて遙かに頑丈だから、一発や二発喰らおうとも無事だと思われる。しかし相手は世界最強の物量主義軍隊なのだ。上陸前の艦砲射撃だけで何発叩き込まれるか判らない。用心に越した事はなかった。

幸い、上陸海岸が特定されていた。雅反島南岸――双子（ふたご）浜と婆（ばば）浜である。東と西は大軍が上陸するのに適さないし、北岸に至ると切り立った崖（がけ）が聳（そび）えるばかりで、上陸など論外だ。

竹村はその北岸に司令部を置いた。敵が上陸前に攻撃を集中するのは、南岸になると予想されたからだ。彼は司令部をその上で地下深くに構築させたが、命惜しさからではない。司令部が最後まで機能しないと、組織的な抵抗など望めないからだ。各自が寸断された状態で、自己の判断に基づいて戦わねばならない時が訪れたのなら、それはもう攻防戦最終段階だ。どうにもならない。

守備隊将兵の苦しみを、徒に長引かせる事になるだけかも知れない――自身の身の安全を図る事に、竹村はそんな感想を抱く。徹底抗戦を命じる現地司令部が消滅したのであれば、守備隊は指揮系統の消滅を理由に降伏できる。通信途絶状態の部隊が独断で降伏しようとも、本国の上級司令部がどう対処できようか。

いや、そもそも自分たちを捨てようとしている祖国に、生命を賭して尽くす意味があるのか？ 「滅私奉公」との言葉は美しいが、国民が国家への帰属意識を持つのは、自分たちの生命財産を認め、護ってくれるからだ。それを「死んでこい」と言われて粛々（しゅくしゅく）と従うなど、大昔の奴隷でもありえないだろう。

国家と国民を結ぶ確かな絆――それを自ら破壊しようとする側に尽くす意義とは何か？ 今まで受けてきた恩恵か？ 自らを「犬」と割り切る者だけが持つ矜持か？あるいは――「故郷に残してきた家族のためだろうな」

自問の果てに、竹村はそう結論づける。彼は出身地である長濃（ながのう）県に妻子を残してきた。長男はもう独り立ちするような年齢だが、末の子供はまだ小学校に行く前だ。内地が戦場になれば、その妻子が戦火に呑み込まれる日が訪れよう。

それを避けるためには、自分たちが戦い、海軍が巻き返しを図れるだけの時間を稼ぐよりない。

「来るなら来てみろ」竹村は独りごちた。「地下要塞が目論見通り完成すれば、最低でも一カ月は戦える。聯合帝国軍に少なからぬ打撃を与えられる。奴らはこの島に来た事を後悔するであろう……」

薄暗い司令官室に、他に人の姿はない。故に返事をする者もない。竹村は机の上に立てている家族の写真に寂しげな眼差しを束の間注いだ後、郷里の名物である温泉を思い出した。真水が貴重品である雅反島では、将軍である彼にも入浴は制限されており、子供時分には朝から何度も温

泉に飛び込んできた彼からすれば、寂しい限りであった。

軍隊に於いて積極攻勢を唱える者は数多い。孤立した拠点に、磔（はりつけ）にされたように留まり、やがて全滅するか降伏を迎えるのが好みだというのは、斜に構えた、一部の軍事的好事家（ミリタリー・マニア）しか恐らくおるまい。

そう言う一般的な傾向に従えば、ゲオルク・フォン＝オルデンプルグ中將が提案した積極攻勢作戦は多数派に属するものであろう。人は誰しものが鮮やかな勝利を求めるものだし、成功すれば自分が最大の英雄として戦争を終わらせられる作戦ともなれば、意気込みが違う。

だが――

「儼は断固として承伏しかねる！」

戦艦「グラーフ・ビスマルク」作戦室内にて、ヘルムート・ゲーリング上級大将の怒声が響いている。

彼を烈火の如く怒らせているのは、ゲオルクが提案した作戦――「瑞穂本土強襲作戦」である。

ゲオルクは艦隊副司令官として指揮するヴァレンシュタイン級戦艦六隻と航空母艦の半数を使用し、瑞穂海軍の要衝である東府軍港及び浦須賀鎮守府を砲爆撃により破壊し、彼らの継戦意思を挫かんとしたのだ。

「東府軍港には敵の主力艦隊が停泊しているのが確認されている。それを航空奇襲により叩き潰し、浦須賀鎮守府を艦砲射撃で粉砕するだけだ。作戦としては非常に単純であり、複雑な部分などない」

肥満した体躯を揺らして怒るゲーリングに、その正反対の肉体を持つゲオルクは、階級差を無視したような態度を取る。これは地位を収賄のために利用してきたとの噂が根強いゲーリングをゲオルクが軽蔑しているのと、小邦とは言え聯合帝国に加入している国家の元首だという自尊心がそうさせていた。

「危険度が高すぎる。奇襲が成立すれば、成程君の言う通りになるかも知れんが、連中も本土となれば精鋭部隊を配属し、備えているだろう。そんな場所に事前準備もなしに主力戦艦と機動部隊を差し向けるなど、壁に向けて生卵をぶつけるに等しい愚行だ」

自身の命令に対し従わない若造に対する反発は無論ある。だがそれよりも、軍事に精通した者としての常識が、彼をしてそれを言わせている。

瑞穂本国には、第一艦隊の他に、昨年新設された第七艦隊――遊撃機動部隊がいる。手強いとの評価を受けているイクサブネが指揮する部隊だ。そしてその彼女の手許には、竣工したばかりの巨大戦艦がいる。基地航空隊も多数配属されている事を思えば、裸で世界最高峰の山に挑むのに等しい。

「だからこそ成功の確率が高いのだ」

「何……？」

「貴男がそう思っているのであれば、敵もそうだろう。つまりは油断がある。事前に予告したところで、素直に信じはしないだろう。一撃を浴びせて引き返せば、我々は損害を殆ど受けずに作戦を終了させられる」

敵の虚を突く事は、古くからの兵法書に記されている必勝の極意である。「そんな話是有り得ない」と相手が信じ込んでいるのであれば、それを実行に移した時に成功する確率は案外高いのである。

「それはうまくいけばの話だろう」ゲーリングは眉をつり上げる。「移動中に発見されれば警戒される。奇襲ではなく強襲となれば、航空部隊は勿論の事、君ご自慢の戦艦部隊もただでは済まないぞ」

最新鋭戦艦の群と言えども、決して無敵の存在ではない。主砲塔が破損すれば攻撃できなくなるし、機関部が破壊されれば航行不能になる。そして敵地のど真ん中で攻撃力と航行能力の双方を喪えば、待ち受ける運命は自沈か降伏の二者択一となる。

制海空権を完全に確保すれば、そこが敵の領域（テリトリー）であろうとも、大破した味方艦の曳航が可能になるのだが、ゲオルクの主張する一撃離脱戦法だと、部隊全体を素早く行動させる事が肝要になる。航行不能とまで行かなくても、被雷して極端に速度が落ちた艦を伴っての撤退など望むべくもない。すなわち損傷が自沈へと繋がるという極端すぎる危険を背負う事になるのだ。

「敵の戦艦部隊、その過半は爬間諸島沖で撃沈破され、行動不能だ。敵艦隊の迎撃はさほど気にすべき要素ではない。何なら洋上で敵の残存艦隊を片付け、それを以て敵に戦争継続が無益な事を知らしめても良い」

ゲオルクは強気だ。ヴァレンシュタイン級戦艦が装備する三六センチ五〇口径砲は、威力指数が一八〇〇。四〇センチ四五口径砲を装備する矢隠級戦艦のそれに匹敵する。その艦が六隻ともなれば、あながち根拠のない話ではなかった。

「戦艦だけで戦争をする訳ではない。瑞穂本土ともなれば、多数の基地航空隊が展開していると考えざるを得ない。戦艦でさえも航空機に集中攻撃を受ければ、沈没に追い込まれる事が確認されている現在、敵艦隊と基地航空隊を同時に相手取るのは危険だ」

ゲーリングの指摘はもっともだった。

敵艦隊と航空機を同時に相手にしようとして失敗した同業者が既にいるのである。単なる思考実験の話であれば切り捨てれば済むが、実例のある件だとすれば、他人事ではいられない。

だが、ゲオルクの態度は相変わらずだ。

「敵基地航空隊への対処は、空母部隊に一任する。我が艦載機隊の精強さはつとに知られている。ヤープ如きの航空機など、何程の事があるか」

人種的偏見は、時に専門家の目を曇らせる。「あんな奴らたいしたことはない」との固定観念が足許をすくう最大の原因となるのだ。客観性を欠いた判断は、奈落へと続く道路であった。

「戦争には相手がある。何が起きるか判らない賭博的要素もある。敢えて危険に踏み込まねばならない時もあるが、将兵が遠征先の機構にすら慣れぬうちに、危険極まりない作戦を実行に移すなど、兵理に悖る！」

橋道洋方面・派遣帝国本州艦隊司令長官としては、賛同しかねる――との意を、ゲーリングは言葉に込める。

本来なら正規の艦隊司令官と副司令官とが兵力の運用法について議論し合うなど、あまりない。

いや、戦隊司令官や艦長などが出席する作戦会議などであれば、活発な論議をする事もあるのだが、副司令官が「俺には俺の考えがあるから口を挟むな」との態度で話し合いをするなど、軍の規律を維持する意味に於いても、あってはならないのだ。

されども、ゲオルクはその姿勢を貫く。彼はジークフリート皇帝の遠縁に当たり、ある種の寵愛を受けていた。三〇代中頃で中將となり、有力な戦艦部隊を任されているのも、そうした影響による。

ゲーリングにしても、相手が皇帝の親戚で、聯合帝国に加入している地方国家の元首でもあるから、「儂の命令に従え！」と面と向かい言えないのだ。政治的に意趣返しされると面倒になる――との観点がある。

「どうしても賛成しかねると仰るのであれば、我が部隊だけでそれを行います。責任も私が取る。貴男はこの島で作戦の成否だけを確認されれば宜しからう」

「何……？」

「この戦史に名を刻むであろう作戦は、私の部隊だけでやると言っているのだ」

強気の権化とも言うべきゲオルクは、強い口調で言い切る。ゲーリングを睨め付けながら。

「貴公は……！」

それに対し、ゲーリングは咄嗟に言葉を返せず歯噛みした。橋道洋方面に派遣されてくる帝国本土艦隊は、あと戦艦六隻の加入を予定している。それはゲーリングの直接指揮下に置かれる。そうなれば戦艦の数は一〇対六となり、発言力は重みを増す。

けれども実情は四対六で、戦隊司令官や各艦の艦長たちの中にもゲオルクを支持する者が多いため、「鉄の如き規律」を保つ力は、ゲーリングにはない。

やや間を置いて、ゲーリングは吐き捨てるように言った。「判った。そこまで言うのであれば、貴公が成功を信じて疑わない作戦を実行に移すが良からう」

それを聴いたゲオルクはにやりとした。「覆水盆に返らず」という諺があるが、軍事にもそれは当てはまる。一度許可を出した作戦を、やはり物理的に無理だからやめるとは、なかなかいかないのである。軍事行動は言質さえ取れば、後はどうにでもなる側面がある。

「有難い。そうさせていただきます」

一礼したゲオルクは、もう此処に用事はない――とばかりに身を翻した。

そんな動作も癢に障る――とゲーリングはゲオルクの背中に罵言じみたものを浴びせかける。「これは貴公が立案し提案した作戦だ。如何なる惨禍が起きようが、儂は一切の責任は取らんからな！」

「承知」歩みを止め、肩越しに視線をゲーリングに向けたゲオルクは、唇を歪めた。

「功績は全て私が頂（いただ）く。貴男は何もする必要はない」

高笑いを添えて退室する。そんな彼の耳に、扉越しに何かが壊れる音が響く。笑いは止まら

なかった。

ゲオルクは自らが元首を務めるオルデンプルグを、公国から大公国へと発展させる望みを、橋道洋戦線に賭けていた。戦功を挙げさえすれば、その先――王国への拡大もあり得る。

今上皇帝ジークフリートを戴いた聯合帝国は、世界的に例を見ない急速発展を遂げた。しかし地方国家についてはまだ進化の流れに取り残されている部分があり、オルデンプルグもそこに類した。

国家元首である自分が英雄となれば、帝国議会（ライヒスターク）で元老院の席を占める事も可能になるだろうし、宰相にまで上り詰めるのも決して夢ではなかった。ジークフリートにしても、奔放（ほんぼう）な性生活を送った先帝オトフリートが残した庶子、その一人に過ぎず、政治力と軍事的才能を駆使して現在の地位を得たのだ。

ゲオルクが思い描いた将来への青写真、それは都合の良い妄想などではなく、故郷を思い、その発展を願う人間が危険を承知で実行を決めた行為――判り易い例に譬えれば、病気の家族のために、短期間で高額の報酬を得られる仕事に挑むような――に他ならない。

聯合帝国軍が誇る鉄の規律を取って乱したゲオルクであるが、その胸の中は溶鉱炉から取り出されたばかりの鉄の如く熱く、無限の可能性を秘めていた。

6

一月三日正午――

英と美御は帰省した時と同様に、軍用機に便乗する形で讃州県美呉軍港に戻ろうとしていた。この時代の高速機の巡航速度は時速二五〇里前後なので、四時間程機上にいれば戻れる計算だ。まさか艦隊最高司令官が遅刻する訳には行かないので、早めに出立を決めたのである。

「今度はいつ戻れますか？」

子供たちを傍らに置いた御子が英に訊ねた。場所は神家の境内だ。雪はもう消え溶けて、その名残は土を湿らせる水気ぐらいだが、それだけに妙な肌寒さを感じさせた。

「当面は艦隊の訓練になるから、確約できないな」英は義弟の実姉に詫びるように告げた。

「夏休みが取れば、盆には戻れるかと」美御が言葉を添えた。つまり八月の中頃までは暇がないのだ。

「やはり……」

事前に予想できていた返答であるため、御子は衝撃を受けた様子はない。戦時中の軍隊、その要職にある者が気儘に休暇など取れるはずがないのだ。もしかしたらこれが最後の別れになるかも知れない。

「姫様。お船は？」子供の一人が訊いた。

「御免な。いつになるか判らないんだ」英はその子の頭を撫でた。果たせない約束をするよりも、ぼかした方がまだ親切だと言えたが故の態度だった。

「嫌だ」その子はごねた。「約束して」

「そう言われてもな」

英は頭ごなしに子供を叱れない。権威主義的な人間が嫌いだというせいもあるが、個人としての彼女は子供好きであり、幼子を泣かしたくはなかった。助け船を求めるように視線を泳がせた。

「こら、姫様を困らせないの」美琴が口を挟んだ。

「姫様には大切なお仕事があるから、いつになるか判らないの。そこは聞き分けなさい」

子供たちの纏め役――精神的には長姉――である美琴にそう言われると、ごねていた子供も「御免なさい」と頭を下げて項垂れた。彼と同じ事を言いたかった子供たちも沈黙した。

嫌われ役を敢えて引き受けた美琴を気遣うように、英は努力して笑顔を形作ると、
「なるべく近いうちに希望が叶うようにする」

子供たちにそう告げた。結局彼女は養い子たちに甘いのである。訓練が終わり実戦投入が可能になる直前なら、どうにかねじ込めなくもないだろう――との計算を立ててはいるが。

「なら、我慢する」

「偉いぞ」英は養い子たちの頭を順番に撫でた。

そうする様子は軍の高級将校、その一人と言うよりか、幼稚園の保母を思わせる。子供たちに読み書きを手ずから教え、絵本を読んでやるのが好きな彼女らしい態度と言えるが、軍務に精進している時の姿しか知らぬ者が見れば、赤の他人だと思うだろう。

そしてそれは一面に於いて事実であった。後年になり英の人物評をある歴史研究家が纏めようとした際、軍関係者と英の養い子たちの主張があまりに異なるため、彼は資料としての正確さを欠くとの批判を受けた。

莫迦な話である。人間とは二面性を持つ生き物だ。職場では切れ者と言われている男が、家庭生活では恐妻家で子供に甘いという事例は数多く見られるし、その逆もまた然りだ。「人は皆役者」との譬えもあるが、それは真実を言い当てていると評せるだろう。

英が家庭生活で見せる一面――それしか知らぬ彼女の養い子たちは、その延長線上に彼女の功績を見て、生涯強く崇める事になるが、それはこの時点ではまだ先の話である。今はただ自分たちの保護者を、実母を仰ぐような感じで見ている。

そんな英とその養い子たちの様子を見やりながら、御子は美御にだけ聴こえるように囁いた。
「英の事を宜しく頼むわ。あの娘は強そうでいて実は脆い。己自身が持つ硬さのせいで逆に砕けやすい金剛石（ダイヤモンド）のようにね。あの娘の傍に常にいて支えてあげられるのは、この場では貴男だけだから」

「判っているよ、姉さん」

美御は頷いた。それは全くの事実であった。芯が硬いものほど実は壊れやすい。一度木端微塵になると、もう修復できなくなる。そして彼らが赴かなければならないのは、つい先程まで何ともなかった人間が、心身ともに瞬間的に壊れてしまう場所――戦場だ。

「生命に代えても護るよ。それが僕の役割だから……」

そう言う弟に、姉は反論できなかった。要人の乳兄弟は、長じてその側近になる事例が目立つが、英に恋慕の情を寄せる美御は、個人的な思惑もあり、その必要に迫られればそうするに違いないのが目に見えていた。

「……………」

弟に死を強制するつもりは微塵もない御子だが、独り立ちした男が己の矜持のために戦って死ぬと口になっている以上、それに反対意見を述べる事は出来なかった。

「あなたたちに」この場にいる最年長者として、御子はこれより戦の庭へ行かねばならない二人を気遣った。「護船神――呉葉様の祝福があらん事を祈ります。幸多き航海を」

美御は姉に「有難う」と小さく告げた。果たして英の祖先である戦船呉葉が自分たちに幸運を込めた微笑みを向けてくれるであろうか？ それは実際に戦わねば判らなかった。

瑞穂暦二〇〇二年の正月三日の空は、そんな彼らの行く末を現すかのように、晴れと曇りの部分が混在し、一種のモザイク画を形成していた。

正月休みを終えて美呉軍港に戻った英は、麾下艦艇に対し猛訓練を施していた。七日に一度の公休日は、乗組員たちの疲労回復の意を込めて休みにしていたが、それ以外は訓練に次ぐ訓練という日々が続いている。

「八洲」の乗組員たちは、元々は別の戦艦に勤務していた者たちが多いから、新兵を一から鍛えるという手間は省けている。新規採用された機器類の操作に慣れてしまえば、後は経験で補えた。

どんな立派な戦艦でも、運用するのはあくまで人間である。空想科学小説に出てくる超兵器であれば無人でも動くのだろうが、「八洲」は三〇〇〇名を超える乗組員が一致団結せねば動かない艦だ。習熟度は何よりも重要視された。

「大分様になってきたな」

「八洲」長官席に座した英は、そこから艦隊運動と味方艦載機の軌道を確認しながら呟いた。操作卓の扱いにとうの昔に慣れていてる彼女は、外の様子を肉眼なしに把握できるようになっている。

個艦としての訓練を終えた、「八洲」を中心とした輪形陣が画面上にある。外輪部を構成するのは、一二隻の駆逐艦——雷級駆逐艦八隻と霧雨級駆逐艦四隻である。

前者は無限機関を搭載し、一二・七センチ連装砲三基と六センチ五連装第二空気魚雷発射管三基を主兵装とする。一番艦である「雷」を筆頭に、「電（いなずま）」「暁（あかつき）」「響（ひびき）」「霧（きり）」「霞（かすみ）」「朧（おぼろ）」「曙（あけぼの）」と続く。

彼女たちは韋駄天である。最大速度四〇航里を誇る。魚雷艇を除けば彼女たちに追いつける艦がいるとは思えず、尚且つ無限機関の採用により航続距離が短い——という、駆逐艦であれば必然的に抱えなければならなかった欠点とも決別できた。

そして後者の方は、防空駆逐艦なので、魚雷発射管は装備していないが、その代わりに新型高角砲——一〇センチ六五口径砲を連装五基——都合一〇門持つ。当初は四連装魚雷発射管を一基だけでも搭載するかという話があったのだが、

「機動部隊直衛艦として使用する予定の艦なので、水雷戦の機会があるとは思われない。それよりも対空火器の装備を充実させ、中途半端な艦になるのを避けるべきである」

最終的にはその主張が通り、魚雷発射管を持たない駆逐艦となった（その計画が通っていたら、一〇センチ砲の数が二門減少し、『出番がなさそうな装備』を積んだ代わりに、対空火力が二割も減じるという笑えない事態が起きていただろう）。

霧雨級駆逐艦は、一番艦の「霧雨」の後に「雨雲（あまぐも）」「夕立（ゆうだち）」「時雨（しぐれ）」と続く。いずれも雨に縁のある艦名をつけられている。

ただし、彼女たちの場合、空から降り注ぐ雨に打たれるのではなく、火箭（かせん）とでも言

うべき対空砲火の雨霰（あめあられ）を艦上から撃ち出すのがその役割となる。

三個駆逐隊が形成する対空砲火の壁は、実弾演習などを見ても判るように、熾烈（しれつ）なものになるだろう。瑞穂軍機と同じく頑丈なので知られる加軍機と言えども、そう簡単には突破できないと思われる。

しかしそれは、「額面通りの戦闘力を発揮できれば」という但し書きをつけるべきではないか――との悪意ある評価を口にする者たちもいる。

新鋭艦故の問題点――機関が気難しいとか、乗組員の練度の不足などもある。

最大の問題は、乗組員たちの質――国家への帰属意識や大皇への忠誠心の欠如だ、とされる。

そのやり玉に挙げられているのは、霧雨級駆逐艦により構成されている、第一一五駆逐隊である。

第一一五駆逐隊は、三桁台の番号を振られている部隊らしく、異民族により構成されている。国外で徴募した欧洋州の白色人種が主力だ。

駆逐隊司令ですらゲルマニヤ人だというから徹底している。アドルフ・カウフマン中佐がその人だ。カウフマンは彼の国の海軍で少佐まで昇進した後に、公金横領疑惑をかけられて投獄され、証拠不十分で釈放されたが、不名誉除隊を余儀なくされ、瑞穂に流れ着いたという経緯を持つ。

「あいつは母国でさえ裏切った。傭兵として雇われた先に忠誠を尽くす道理などあるものか」

そう囁き交わす声がある。成程、一時期の異民族部隊は、犯罪者が身を隠すための温床と化していた感があったが、「本物の屑」が再就職先で中佐にまで昇進できるものなのかと、英は彼の人となり調査させた。

カウフマンは瑞穂海軍に入隊直後は、艦船勤務ではなく陸戦隊に配属され、派手に暴れたらしい。

その積極的な姿勢が評価され、希望していた艦船勤務に回された。水雷艇の艇長や仮装巡洋艦の副長などを務めた後、実験的要素が強いとは言え、新鋭駆逐艦群の司令に就任した。

彼の生き様は、ある意味で英に似ていた。前線で戦い続け、力業で周囲に実力を認めさせてきた。信じられるものと言えば、己の力量のみ。戦う人間の姿勢がそこに見られた。

周りが気にしている政治的信頼度にしても、カウフマンは既に勤務一〇年以上を経て、瑞穂皇国の市民権と永住権を取得している。それに彼の妻は瑞穂人――第五水雷戦隊司令官齊藤一葉少将の妹なのである。娘が一人いて、その子には瑞穂人としての教育を受けさせている、とも聴いた。一定の信頼を寄せる条件は十分に備えていると言えよう。

他人の調査だけを参考にするのは面白くないと、英は視察にかこつけてカウフマンと何度か話をした事がある。

宮様海軍元帥の娘である英は、敵味方を即座に見分ける癖がついていた。単なる皇族であれば、政治的観点のみから相手を語り、敵味方など所詮はあやふやなものだと割り切れただろうが、一〇代前半から軍隊に深く関わっている英のような宮様だと、こいつは自分を殺しにかかるのか、いざという場合は自分の楯になる気があるのかどうか――という極端かつ殺伐とした観点から相手を見てしまう。

その英の眼鏡からすれば、カウフマンは「味方」の範疇に入った。彼は仕事で第七艦隊――遊撃機動部隊に配属されたが、要求される役割は果たすつもりで、そこに二心はないと判断できたからだ。

英は他人に熱烈な忠誠心を要求しない。

喰うためだとか、仕事だからと自分の命令に従う人間の方が、まだ信用できると踏んでいる。

戦場ど真ん中で指揮官の命令を無視すれば、抗命（こうめい）――命令違反の咎で死刑確定だし、罷免されたら困る。それに下手に怠業（サボタージュ）を敢行すれば、敵に殺されてしまう。

生きたいから従う、その調子で良いのだ。

昔から軍隊が隊列を維持するのに躍起になるのは、そうしないと命令伝達が出来なくなるのと、兵士を一個人にしてしまうと、命を惜しんで逃げ出す者が続発し、逆に損害が増すからだ。

英が今組ませている輪形陣――対空戦闘陣形にしても、敵に対し出血を強要し、尚且つ自軍の損害を減らすための手段、その一つに過ぎない。

そして艦隊にとっての「損害を減らす」と言うのは、沈没したり中大破したら困る大型戦闘艦艇――戦艦や正規空母を護るために、巡洋艦や駆逐艦を贄（にえ）に供する事に他ならなかった。

戦闘はどうしても攻撃する側が主導権を握る傾向にある。こちらが形成する輪形陣が「あまりにも堅い」との意識を敵に対し抱かせてしまうと、「それならば」とばかりに、内側にいる戦艦や空母ではなく、外側にいる駆逐艦が狙われる可能性が高い。

そして軽巡や駆逐艦が集中的に狙われたならば――基本的に打つ手はない。勿論、直掩隊による投弾妨害や各艦に対空射撃ではなく回避を優先するようにと通達する手段はある。だが、それは根本的解決にはならない。排水量が三万石を超える大型艦であれば、爆弾一発魚雷一本が致命傷になるなど、滅多な事で起きないが、駆逐艦クラスの艦だと、至近弾の連続ですら縦傾斜（トリム）を崩させ、横転沈没する原因になりかねない。

戦術とは純粋な思考の産物であり、「勝利」という結果を伴うのであれば、囿にされた者の全滅――という残酷極まりない途中過程も容認される。

災害時に小学生を避難させていた引率教師が、全児童の一割を死なせた――となれば、誰もが大騒ぎする大惨事だろうが、戦役そのものの勝利を決定づけた決戦で、自軍の死傷者が一割前後だったとなれば、批判する者は少ない。基準と物差の尺度そのものが違うと言えどそこまでだが、軍隊は時にどこまでも残酷な牢獄にもなる。構成員の半数が斃れても動き続ける。そんな組織は他には存在しない。それ故の匙(さじ)加(か)減(げん)を理解する必要があった。

「まあ駆逐艦の心配ばかりもしてられないが」

独りごちた英は、画面上の中央にいる「八洲」に視線を向けた。瑞加軍の航空隊は、所属国家の垣根を越えて、ある共通点を有する。それは大型戦闘艦艇を狙いたがるという癖で、とりわけ「八洲」のような大戦艦になると、遠目からでも目立つから、敵機を否応なしに引きつける事になりそうだ。

「八洲」は巨艦に似つかわしくない三四航里という最大速力を誇る。故に敵機も簡単には爆弾魚

雷を命中させられないと思うが、物事には絶対はない。

――全て牧原造船官が言う通りなら、心配はないのだが！

英はそう思う。「蒼電」を含めて三五〇機を超える艦載機を運用できる艦隊なのだ。航空機と水上砲戦部隊を有機的に組み合わせれば、総合力で多少の戦力差は覆せるはずだと彼女は信じている。

必要なのはやはり実戦で、それを行うのがいつの日になるかが気がかりだった。

2

ゲーリング上級大将から瑞穂本土強襲作戦の許可を取り付けたゲオルクは、その準備を精力的に進めていた。橋道洋方面に派遣されている聯合帝国艦隊の中でも、有力な戦闘艦艇を多数擁する彼の手許には、世界有数の戦艦部隊と機動部隊が既に存在していた。

「公国の元首と言え、戦争は物騒な遠足程度に考えている者ばかりかと思えば、貴殿は冒険家だったのだな」

そうゲオルクを評するのは、機動部隊司令官――ヴォルフガング・レンネンキャンプ中將である。彼は正規空母六隻と軽空母四隻を指揮する立場にある。運用できる艦上機の総数は、驚くなかれ八〇〇機！ 彼らに対抗できる機動部隊は、この時点ではいないと思われた。

「皇帝陛下は橋道洋戦線の早期終結を願っておられる」ゲオルクは戦艦「ヴァレンシュタイン」の作戦室内で、これまで何度か手を組んできた、空の猛将に自信満々に語りかける。

「そのためには、彼らの有力な艦隊と本土の基地を同時に壊滅させ、我らに対する抵抗は無意味だとの認識を抱かせねばならない。冒険は必要だ。ゲーリング閣下の言うように島嶼を一つずつ攻略していたら、戦争はあと二年か三年は続く事になる」

「私も同感だ」茶色に近い金髪をした機動部隊司令官は、同じ色をした瞳を輝かせながら頷いた。

「西平洋や北ヤフリカ、南加大陸諸国との戦もある。いつまでも橋道洋に根を下ろす訳にはいかん」

「そこでだ」ゲオルクは戦友の顔を直視する。

「『空の狼（ルフト・ヴォルフ）』の異名を持つ君に、敵艦隊の一掃と周囲に展開する基地航空隊の制圧を任せたい。恒常的なものでなくて良い。半日か一日程度連中の航空部隊の活動を不可能にしてくれれば、私が直率する戦艦部隊で、浦須賀鎮守府を爆砕してみせる」

「それで彼らは本土すらまともに護れないという赤恥を晒す訳か？」

「そうなる」ゲオルクは力強く頷いた。「君は敵艦隊を、私は敵鎮守府を一日の内に歴史の彼方へと退場させ、戦史に消えぬ栄光を刻むのだ」

「敵艦隊を私に譲ってくれるとは、随分と気前の良い話だな」

「私の部隊では、東府湾内に突入する事自体が難しいからな」ゲオルクは野心家であるが、軍事的常識はわきまえていた。「それに美味しい部分を独り占めするようでは、誰もこの作戦に参加したがるまいだろう。機動部隊司令官で、誰よりも勇気に富んだ君であれば、充分可能だと思う

のだがね」

「成程。盗掘癖のある大艦巨砲主義者に従って馬車馬扱いされるより、遙かに面白そうだ」

にやりとするレンネンキャンプに、ゲオルクは男性的な微笑を向けた。ゲオルクは皇帝の遠縁に当たる事だけを頼りとする莫迦者ではない。他人に分け前を与える必要を理解し、自尊心を刺激する術を知っていた。

——「空の狼」さえ味方にしてしまえば、他の者もやる気になるだろう。敵第一艦隊は東府軍港内で再建中だとの話だから、最初の一撃さえ成功させてしまえば、後はどうにでもなる！

聯合帝国本土艦隊の機動部隊は、攻撃力重視である。瑞穂海軍や西部帝家艦隊の航空母艦だと、防御力に重きを置いて、搭載機の半数を戦闘機とするが、レンネンキャンプの麾下にある空母群は、どれも爆雷撃機を全体の六割以上載せている。敵が攻撃を事前に予測し、多数の迎撃機を展開させていたら面倒になるが、先制奇襲が成功すれば勝ち逃げできる。

根拠のない妄想ではなかった。爬間諸島から瑞穂本土まで各地に点在する基地航空隊の哨戒圏は既に調査済みで、その穴をくぐり抜ける目論見は立っていたし、哨戒中の潜水艦は機動部隊の艦載機で始末すれば良い。突破の目算はある。

「我々より遙かに規模が小さい西部帝家艦隊でさえ撃破できた連中だぞ、負ける道理などない」ゲオルクは微笑みを崩さずに続けた。「共に栄冠を戴こうではないか」

「そうだな」

英雄として凱旋する姿を、二人は脳裏の中で思い描いていた。「ゲオルク！」「ヴォルフガング！」と民衆が連呼する声が響き続ける。それは彼らの中でいつしか確定した未来図と化していた。

3

「意外」が反復するのが戦場の習いである。慎重居士として知られる指揮官が突如として企てた大胆な突撃、勇将として名高い將軍の理由不明な独断撤退など、「まさか」と思える事が戦闘の場では起きる。

英も前線指揮官として勤務してきた経験から、それは軍事上の真理だと学んでいる。座学や演習では想定されていない突発事態に如何に対処するかが司令官としての資質を問う事もまた然り。

だが、安全な後方地帯にいて、「予想外」と言える提案を耳にするのは、流石に驚く。

「『八洲』を浦須賀に回航できないか——とな？」

報告に訪れた楠参謀長に、英は怪訝な眼差しを向けた。理由が述べられていないので意図不明なのだ。

「はい。『八洲』は竣工直後に我々の艦隊に組み込まれ、そのまま訓練を続けてきました。つまり国民の大半はこの艦が竣工した事は知っていても、実際に眼にしていないので、ここは一つお披露目式をやりたいと海軍総司令部が」

「そんな呑気な」

そう言うのは、英ではなく紅葉だった。彼女は呆れ顔で上級司令部の提案をけなす。

「『八洲』が竣工直後から訓練に励んできたのは、偏に有事に備えての事。この艦はお座敷船ではありません」

紅葉の意見に楠も内心では同意らしく、

「あくまで提案です。強制力を持つ命令ではありません。無理だと思うなら断る手もありますが」

軍艦とは名の通り戦う艦である。戦に関わる者の作法として、戦闘以外は考えないというのがある。

だが、軍艦の建造費用は、国民が支払う税金なのだ。「血税」との言葉があるが、存在自体が多大な資源と人命を浪費する戦艦ともなると、まさに言い得て妙となる。

民主主義を掲げる軍隊の常として、「民衆の理解を求める」というのがある。これは「文民統制（シビリアンコントロール）」にも繋がる話であり、国民から一定の信頼と親愛の念を抱かれなければ、存在意義自体を疑われる組織の性（さが）とも言えた。

「如何なさいますか？」楠が英に判断を仰いだ。

第七艦隊――遊撃機動部隊では、英が法律であり判断基準である。上意下達式の組織だから、彼女が決めねば何も動かない。

「場所は浦須賀限定なのか？」執務机の上に両肘を立て、指を絡めた姿勢で、英が訊ねた。

「はい。浦須賀なら美呉軍港に次ぐ規模を持つ大軍港がありますし、提督の故郷である東府にも近いので、人口が比較的多いのです。皇都の皇湾でお披露目式をやろうとの案も最初はあったのですが、それだと艦を瑞穂海側にまで入れねばならず、手間になると……」

美呉から浦須賀であれば、四内（よつない）水道を通過して橋道洋側に出て、東に進めば直ぐである。距離的にも近いし、面倒も少なくて済む。

「敵艦隊の動向は？」紅葉が鋭く切り返した。「爬間諸島に聯合帝国本州艦隊が集結しているとの情報が確認されていますが、彼らが動き出したら――」

「今のところ動きはないようですが」

それが海軍総司令部に「浦須賀限定のお披露目式」を開かせる気になった原因らしい。もし敵が本格攻勢を開始した時に、「八洲」のような大型戦闘艦艇が瑞穂海側にいたら、即日対応とは行かなくなる。

海軍上層部の思惑が、「純粹無限機関を搭載した戦艦など信用できない」というものだとしても、「瑞穂皇国を護るための切札」だと説明を受けてきた国民が、肝心な時に「安全海域」に逃げ込んでいる「八洲」を見たらどう思うか？

要するに国民感情に根ざした政治なのだ。

「敵が暗号管理について粗雑な面があるのは確かですが、それだけを基準に、当面は攻勢がないだなどと言われても、信用できませんよ」

紅葉は英の心理を読むのがうまい。「上役の色を伺い、責任回避する術に長けた官僚」というのが世には多いが、彼女の場合、尊崇の念を抱く年下の提督を横で見ているうちに、その心理動向を把握する能力が向上したのである。

楠も元は英治の部下で、その娘の性格も付き合ううちに何となく把握できていたので、紅葉が上官の代わりにその考えを説明している――一種の報道係（スポークスマン）を務めているのを理解している。

多分、提督本人が口を開いても、似たようなお言葉が発せられるのだろうと察していた。「では、拒絶という線で――」

戦時中だし、物見遊山（ものみゆさん）の旅をする訳にはいかん――との返答を想像しつつ、楠はそれを口にした。

だが――

「まあ待て。そう無碍（むげ）に断る事もあるまい」

英は自分を置いてけぼりにして話を進める副官と参謀長に、片手を上げて待ったをかけた。

「はい？」

今の話に応じなければならない理由があるのかと、楠と紅葉は互いに顔を見合わせた。

いつもの英であれば、「皇国海軍（インペリアル・ネイビー）に政治的な話を持ち込むなよ」と言って話を打ち切っても不思議ではないのに、何故か今回は乗り気な様子だ。

「応じるんですか、提督？」楠が訊いた。

「我々はこの艦隊を四カ月で戦えるようにするために猛訓練を重ねてきました。ここで旗艦が不在となれば、その計画（スケジュール）に遅れが出ると思うのですが」紅葉が続けた。

「それは承知している。だがな」英は天井を見上げながら言う。「この艦は建造を積極的に宣伝されながらも、実際に眼にした一般国民は数少ないんだ。多額の国家予算を費やしながら、国民から祝福を受けていない。可哀想だとは思わんか？」

船乗りと軍人は縁起を担ぐ生き物である。あらゆる護り袋が横行するのは、「これを持っているから俺は死なない」と信じたいからだ。

その双方を兼ねる海軍軍人は、一般的に「国民から完成を祝われない艦は、縁起が悪いから、早々に沈むかも知れない」と考えてしまう。

現実主義者（リアリスト）の軍人として知られる英にしても、幼少期を過ごした場所と出自の影響から、神道呉葉宗の信仰が厚い人物としても知られている。そして戦船呉葉は護船神であるから、「祝福を受けていない艦は沈みやすいのではないか？」と英が心のどこかで感じていても不思議はないのである。

「国民の祝福を受けるために」紅葉が英の意図を訊ねた。「お披露目式に応じると？」

「兵士たちの士気にも関わる話だろう。皆も軍関係者からしか『万歳』を浴びていない艦など、何となく嫌だと感じているだろうからね」

「それは……そうかも知れませんが……」

「浦須賀なら東府にいる人間も見に来られるだろう？ 私が艦隊最高司令官として故郷に錦を飾る話にも繋がる。私個人としては、その提案に賛成したい。何なら第七艦隊――遊撃機動部隊総出で赴いても構わんぐらいだが」

「故郷に錦に飾る」――立派に出世した姿を出身地の者たちに見せて回りたいのは、万国共通の願いだろう。とりわけ英の場合、一〇歳の時に海軍兵学寮に入り、それ以降は各地を転戦して

きた、との経歴を持つから、その思いは人一倍強いのだろう。

「凱旋観艦式ではありませんので、流石にそれは……」

楠が渋い顔をして紅葉に目配せする。

紅葉も同感らしく、英の弁に即座に同意しない。

「二人とも反対なのかね？」

英も無茶を口にしているとの自覚があるのか、日頃の強圧的な物言い——「私の命令に従えないのか！」——はなりを潜めている。女房役と秘書役の顔色を伺うような色が顔にはある。

「提督がどうしてもそうなさりたいと仰るのであれば、敢えて反対はいたしません」

「わたくしも」

参謀長と副官が折れたのを見た英は、

「ならば『八洲』単艦で東府に向かおう」彼女も妥協案を示した。「それなら全体の影響は小さい」

「その間は」楠が確認する。「三〇巡戦の金ヶ崎提督が指揮権を代行する事になりますが」

「美呉から浦須賀なら往復で二日もあれば充分だ。お披露目式に一日かけたとしても三日だけだから」

「構いませんね？」

「ああ」英は重ねて訊ねる楠に頷いて見せた。

「それならば手配します」楠は頷いた。思い出し、気づいた部分を付け加える。「最近は内地沿岸にまで近づく敵潜水艦が増えているそうです。一個駆逐隊程度は護衛として随伴させた方が宜しいかと存じますが」

「護衛？ 大袈裟（おおげさ）ではないか？」

「駿海県沖で排水量三〇〇〇石の輸送船長濃丸が三日前に沈められました。冗談ではありません」

瑞穂本国内の輸送に用いられている内航船は、敵潜水艦に備える意を込めて、沿岸部を沿うように航行する事が多い。しかし大胆な艦長を持つ潜水艦だと、その行為を嘲笑うかのように接近し、雷撃を仕掛けてくる（被害が深刻化していないのは、基地航空隊が定期的に対潜哨戒機を飛ばし、敵潜水艦に備えているのと、聯合帝国艦隊が装備する潜水艦用の魚雷が信管不良により命中してもなかなか爆発しない事による）。

美呉～浦須賀間の航行にも護衛が必要だという楠の主張にも、確かに根拠はあった。

「輸送船と『八洲』は防御力が異なるが」

装甲板の有無もさることながら、積荷を満載して喫水線が下がった輸送船は転覆しやすく、防御力の面で戦闘艦艇と比較するのは無理があった。

「『八洲』が撃沈されるとは言いません。ですが攻撃されれば手傷を負い、面倒になります」

「それも一理あるか」

楠の主張を英は容れた。「八洲」のような大型戦闘艦艇が損傷を負うと、修理に時間がかかる。魚雷の一本や二本は装甲板が容易く跳ね返すのだろうが、被雷した以上は他に損傷力所がないか確認せざるを得なくなり、それだけで時間を喰うのだ。

——一個駆逐隊の護衛か。となるとどうするか！

英は暫し思案顔になる。遊撃機動部隊の現在位置は橋架内海である。四内水道を北上して侵入を企てる敵潜水艦など流石にいないのだろうが、手持ちの戦力を引き抜かれる斉藤は良い顔をしようにないのが目に見えていた。

「なら、第一一五駆逐隊にしよう」

「カウフマン中佐の、ですか？」楠が怪訝顔になる。

政治的信頼度がさほど高くない部隊が護衛で、果たして大丈夫なのか——彼はそう言いたげな様子だ。

「戦闘が目的ではない。遠足に等しい航海だぞ。そんなご大層なお供はいらんだろう」

「ですが……」

「護衛をつけると主張したのは君だ」英はこれ以上は妥協するつもりがないのを、言外に込めた。「三日もあれば終わる話だ。問題など起きんよ」

カラカラと笑いながらそう言う艦隊最高司令官を前にすると、楠や紅葉も反論を続けるのが難しくなる。

互いに顔を見合わせた二人は、航海の安全と無事を、目の前にいる人物のご先祖様に、本気で頼みたくなった。

4

爬間諸島には瑞穂軍の残置諜報員が潜んでいると根強く囁かれている。これは敵に対する恐怖の念と事実起因する。白色人種が過半を占める聯合帝国の面々だと、爬間諸島にいる民間人が、現地先住民なのか日焼けした瑞穂人なのか、殆ど区別がつかないからだ。

「異教徒の敵対国」に対する偏見や差別は、昔からどの国でも根強いが、戦前から黄色人種の移民をそれなりに見てきた西部帝家領の人間は、多少怪しげな振舞を見せる民間人を見かけても、強圧的に取り締まるような真似はしない。下手に逮捕令状のない拘束や拷問を繰り返せば、占領地の住民に不必要な敵対意識を抱かせ、その方が面倒になる——暴力（テロ）行為や集団怠業（ストライキ）が発生するようになる——のが判り切っているからだ。

爬間諸島の占領行政に関しては、西部帝家軍の管轄だとされている現在、派遣されてきた帝国本州軍は、その事に対する口出しはしていない。必要物資の荷揚げ作業は、軍関係者や本国から連れてきた労働者に一任されており、強制労働の類は発生していない。

だがそれは、「間諜（スパイ）が紛れ込んでいたら、何を通報されるか判然としない」との防御姿勢がもたらしたものだ。官僚組織にお馴染みの縄張り意識もある。あちらはあちらの管轄だからと、現場の人間が余分な口出しを嫌い、正面衝突を避けたのである。

故に瑞穂本土強襲作戦——「桃源郷作戦（オペレーション・シャングリラ）」を敢行する予定の艦隊は、爬間諸島から一度東に進み、それから爬間諸島の北へと向かうという変則的な航路を採用していた。

これは艦隊の出港名目が「大規模演習」であり、もし莫迦正直に西に進めば、その動向はたち

まち瑞穂側に感知され、警戒態勢を構築される――如何に大兵力とは言え、苦戦は必至の状態に置かれるからだ。

「戦艦と航空母艦だけで一六隻にもなる艦隊か」

艦隊旗艦――戦艦「ヴァレンシュタイン」の第一艦橋の窓から、作戦参加艦艇を眺めていたゲオルクは、「壮観だな」と付け加えた。

事実、それは「壮観」の一言に尽きた。

補助艦艇の数にしても、重巡が七隻。軽巡が八隻。駆逐艦が三〇隻にもなる。

これならば洋上の正面決戦でも、瑞穂皇国聯合艦隊の主力――第一艦隊と第二艦隊を打ち破れるに相違なく、敢えて奇襲攻撃に踏み切らずとも、軍事的栄光を手にするのは難しくないかと思われた。

しかしそれだと勝利の味を、ゲーリング上級大将に独占される恐れがある。

「人の卑しさは出自に関わらない」との金言があるが、ゲオルクはそれを真実だと捉えている。名門貴族出身であろうが、豚のように卑しい輩は卑しいのだ。

僻地まで無理をして足を運んだのに、「骨折り損のくたびれもうけ」になるのは御免だし、何よりゲーリングに対する生理的嫌悪がある。

今すぐに自分の手で、鮮やかな勝利を掴みたかった。

「潜水艦にだけは注意し給え」

「ヴァレンシュタイン」艦長のカール＝ハインツ・ディートリヒ大佐が見張員に注意を与えている。これは定番の台詞を精神論的に口にはしているのではなく、現実の脅威に起因した。

瑞穂海軍は航空機が搭載可能な大型の潜水艦の他に、水中機動性を重視した、中型・小型の潜水艦を多数建造し、前線投入している。

これらは水中聴音機（ソナー）で捕捉するのが難しく、対潜部隊も手を焼いているという。

何しろ相手は素早いし、西部帝家艦隊が爬間諸島沖海戦でその存在を確認した無航跡魚雷――通称「青白い殺人鬼」を装備している。

動力に純粋酸素を使用していると思われる「青白い殺人鬼」は、肉眼で捉える事が難しく、気がつけば懷に飛び込まれている事が多い。

それに加えて、速度・射程距離・威力の三拍子が、聯合帝国が保有する如何なる魚雷よりも優れ、一本でも命中すれば巡洋艦クラスの戦闘艦艇が大破し、戦艦でさえも三本以上命中すれば轟沈は確実だとの試算が出されている。

「ヤープ如きにそんな高性能な兵器が造れる訳があるまい。戦場によくある与太話だ」

軍上層部は緒戦の大勝に気を良くし、対潜部隊の訴え――航路護衛用の小型駆逐艦の増強、護衛空母部隊の拡充など――を完全に黙殺している。判り易く言えば「敵を舐めている」のだ。

艦隊用の軽巡や駆逐艦が周囲をがっちりと固めている機動部隊を、潜水艦が簡単に攻撃できる訳がない――との理屈もあるが、世の中には他者の裏を搔くのがうまい者は大勢いる。ディートリヒが作戦開始前に神経質になるのも無理はなかった。

最前線に赴いたゲオルクもまた、大切な戦闘の前に主力艦が一隻でも欠けるのは好ましくないと、麾下部隊に油断を戒めている。一〇隻いる各空母から対潜哨戒用の艦攻が定期的に発艦し

、周囲を警戒しているのは、その表れだ。

――敵信傍受によれば、敵は特に警戒態勢を強化していない様子だ。我々が当面は動かないものと考えているのだろう。それこそが狙い目だ！

ゲオルクは橋道洋に派遣されてきた帝国本州艦隊の半数を率いているが、それは「現在の」という但し書きが付く。橋道洋戦線での戦闘を長引かせたくないジークフリート皇帝の判断により、戦力の更なる増強が予定されている。そしてそれらはゲーリングの麾下に置かれるのが決定している。

発言力と存在感の双方が決定的に薄れる前に、「世界中の度肝を抜くような大戦果」を挙げて凱旋する。それさえ出来れば、彼の願望は夢から歩むべき未来へと脱皮を遂げるのだ。

爬間諸島から瑞穂本国までの道程は、巡航速度で進んで一〇日前後。目標達成後の功績を考えると、早い段階から眠れぬ夜が続きそうだと、ゲオルクは自嘲した。

5

一方は長い道程を敵の眼を誤魔化しながら進まねばらぬ関係上早々と出港したが、もう一方は見慣れた海を少し進むだけで済むので、出発したのは前日である。

瑞穂暦二〇〇二年三月一七日――

周囲は既に闇に閉ざされていた。雲の隙間から顔を覗かせる双子の月が僅かな光を海面に注ぐが、蛍の光程の明るさもなく、「墨を流したような景色」との表現が似つかわしい、暗黒の海が広がっている。

「参謀長からは大分脅かされたが」英は葡萄酒杯（ワイングラス）を片手に、晩酌の相伴を務める義弟に語りかけた。

「別に何もおらんではないか。平和なものだ」

「まあ沿岸部ですからね」

機嫌の良さそうな英に、美御は微笑みを向ける。

艦隊――と言うよりか、「八洲」とのその護衛である駆逐艦四隻が現在いるのは、駿海県南東海域である。

敵潜水艦の襲撃を警戒しつつ進んだのだが、予想に反して敵の姿は見えず、皆が拍子抜けしていた。

「彼らも交代制（ローテーション）を組んでいて、偶然その隙間にいるのかも知れませんね」

そう評したのは潜水参謀の伊藤五八である。

瑞穂海軍は同じ潜水艦を最前線に張り付けたままだと乗組員の疲労度や整備の問題を抱える事になるのでと、交代制を採用している。

そのため、引き継ぎの潜水艦が現場に駆けつけるまでの間、哨戒態勢に僅かな間隙が生じる事があり、それは制度上やむを得ぬ事――許容できる問題だとされていた。

「敵に襲撃されたい訳ではないが、拍子抜けだ」

「第一一五駆逐隊は最新鋭の水中聴音機を装備していますし、『八洲』の夜間見張員も優秀です

からね」美御は相槌を打つ。「縦しんば敵が近づいてきても直ぐに判りますよ」

此度の決定は、英が正月に帰省した際に、養い子たちに「自分の艦を見せてやる」と言い出した事に起因する。

そのため、そうした事情を知る美御からすれば、物見遊山の延長——海軍の観兵式（パレード）程度のものだと捉えている。

移動中に落命した将兵は歴史上数多いが、自国領海内を近代戦艦が航行するのであれば、突発的な天変地異でも起きない限り、沈没する道理はない——日頃は慎重肌の彼でさえそう考えていたのだ。

「海軍総司令部もなかなか気の利いた提案をするではないか」酔いが回り始めた英は饒舌だ。

「普段は碌な事を言い出さないのにな！」

これには美御も即座に同意できず、苦笑を返すのみだ。

「上層部が無能」だと感じる瞬間は、いつの時代、どんな組織にもあるのだろうが、戦時下の軍隊で軍統帥部を糞味噌に批判するのは、どうしても憚られる。

「指揮官を前にした命令無視」が軍崩壊の第一歩——と言うよりか末期症状の一つなのだが、「現場指揮官が上層部を人前で罵倒する」のは、では何であろうか？

もっとも、英にしても、他の面々——参謀や一般の将兵の前ではそんな不穏当な発言はせず、愚痴やら文句を聴かされるのは、専ら美御の役割なのだが。

「あまり飲み過ぎると」美御はやんわりと注意した。「明日に差し支えるのではありませんか？」

英は酒は好きだが強くない。葡萄酒にしても瓶の半分程を開けてしまうと意識が酩酊してしまう。

意地の汚い男であれば、「介抱」の名を借りて狼藉に及び、「既定事実」を積み重ねてしまうのであろうが、生憎と美御は紳士である。酒精に頭を満たされた英の方から誘いをかけられても、最後の一線を越えた行為に及んだ例はない。

それ故に英も美御の前では杯を勢い良く重ね、乱れた姿を見せるのであろうが、二日酔いで艦隊最高司令官がお披露目式に欠席では、あまりにも問題がある。

「大丈夫だよ」英はトロンとした眼で美御を視る。「私は明日に酒を残さない方だから」

必要以上に呑む前に潰れる——彼女はそう言いたいらしい。それは全くの真実なのだが、美御に言わせれば危険だ。酒に割と強い自分が常に傍にいるから問題が起きた例しがないが、今までがそうだからこれからも平気とは限らないのである。

「美琴さんたちに来てくれるように手紙を書いたのでしょうか？」美御は自重を促した。

「うん。返事も来た」英は何度も頷いた。

「皆で来るから楽しみにしていると」

「でしたらもう呑むのはやめて床についてください」

「なら——一緒に寝るか？」

「はい!？」

悪戯を企んだ子供のような顔をする英に、美御は驚きの表情を向けた。眼を瞬く。

「添い寝だよ。添い寝。私が眠るまでで良いから」

「それでしたら……」

両手を大きく拡げて「おんぶ」を求める英に、美御は近づいて背を向けた。彼女が体重を預けてくる。制服越しに柔らかな胸の感触と女の芳香が伝わり、彼は頭に血を上らせかける。

「美御の背中」英はコロコロと笑う。「大きくなったな」

「育ち盛りですから」この言葉に嘘はない。彼の背丈は今尚伸びている。既にその身長は英を頭一つ分は超えているのだけれど（英は打ち止めの感がある）。

「昔は私がおんぶしたものだがな」

昔の美御は機械いじりが好きな温和しい子供だった。喧嘩になると度々泣きべそをかき、腕白坊主と拳骨を交えて戦ったのは、もっぱら英の方であった。

記憶の糸を辿り、懐かしい情景を脳裏に思い浮かべれば、背丈がさほど変わらぬ頃に直ぐに戻れた。

泣くのではない、美御。美御は私の乳兄弟なのだぞ。戦わねばならん者は泣いては駄目なのだ。

義弟をおんぶしながら、夕陽を背に浴びつつ進む英の背は、美御には随分と大きく感じられた。

時は流れ、気がつけば背丈は英を超えている美御であるが、精神的な大きさは、やはり義姉の方が遙かに優ると自嘲気味に思う。

――僕が大きくなったのは身長だけだ。義姉上が背負わねばならないものは僕一人だけではなく、祖も重さは今なお増すばかりだと言うのに！

そこが歯がゆかった。美御には美御の役割――皇族附武官兼「八洲」戦闘機隊隊長としての任があるが、一個艦隊の最高司令官として二万名にも及ぶ人命を、ひいては瑞穂という国の運命を預かる英に比べれば、何ともお気楽な立場としか言いようがない。

せめて――美御は思った。せめて、貴女一人だけでも何としても護れるように出来たなら。僕の生命一つでこの人を救えたのなら、僕が彼女の傍にいた意味が歴史的に生じるはずなのだが！

「瑞穂皇国史に於ける自分の役割」などと言えば、自意識過剰にも程がある――と評したくなる考えだが、美御の場合、この後に起きる、強烈な出来事の数々――英が「戦争芸術」を極める事になる戦いの中で、劇画じみた伝説を造る事になるから、あながち的外れでもないのだった。

とは言え、今の彼がせねばならぬ事は、酔いが回り呂律（ろれつ）が怪しい英の介抱であり、彼女が希望した添い寝であった。一つ間違えば寝台で嘔吐しかねない少女を襲う趣味のない彼からすれば、ある意味でそれもきついのだけれど。

「うん」自分に言い聞かせるように呟いた美御は、英を天蓋付きの四柱寝台の上に寝かせた。彼女がまだ眼を閉じていないのを確認すると、諦めたようにため息をついて、その横で寝る。

英はそんな義弟に悪戯心を覚えたのか、笑いながら抱きつく。自身の胸で彼の顔を包み込んだ。

「義姉上……？」

このままだと離れられないとの意を、言外に込めた。

戸惑いを露にする義弟に、義姉は笑みを崩さず、

「別に構わないではないか。朝まで一緒にいても」何故か自信ありげに続ける。「私と美御の関係など、艦隊将兵ならば皆が何となく知っておるはずだ」

「それはそうかも知れませんが……」

常に行動を共にする美しい少年少女。勘ぐらずとも彼らが乳兄弟以上の親しみを感じているのが判るはずだ。

そして真実彼らは離れがたい間柄にあった。乳兄弟としてかつては同じ女性の乳房から母乳を与えられた男女は、生まれたままの姿で互いの身体を求める関係にある。

皇族提督にして艦隊最高司令官でもある英の面子を気遣うという部分もあり、美御は疑似性交を楽しんだ後も、英の部屋で朝を迎えた事はなかった。「用事」を済ませると素早く退散した。

これは瑞穂海軍に於いては、類似例が幾つも見られる話である。精神的重圧が半端ではない前線部隊の面々は、各々が「恋人」を見つけ、艦内の使われていない区域を逢引きの場とし、愛を交わすのだ。

勿論これは、厳密な意味では軍紀違反である。特に上官が部下にそれを強制したとなれば、降格を含む厳罰が適用されかねない重罪である。

しかし、他に遊び相手がいない軍艦の中だと、乗組員たちの精神衛生を保つ意味でも、「やむを得ない行為」だとされてもいた。以前に「運悪く」摘発された事例でも、三〇代中頃の女性佐官が一〇代前半の少年兵と、「互いの同意の上で」情交を交わしていた――との図が見られた。

軍の規則に従えば、英にしても「部下」――本当の兄弟でも、軍内の階級は厳格に適用される――である美御と疑似とは言え性交を重ねているのだから、充分厳罰対象だ。

だが、第七艦隊――遊撃機動部隊の司令部は、英の父親である元帥宮――戦船宮英治子飼いの部下が顔を揃えていた。その上で戦船宮家の権威を信じて疑わない讃州県出身者たちが、下士官兵卒の過半を占める。

彼らは英が「本来なら軍規則に違反するような真似」をしていても見て見ぬふりをするのに長けていた。「戦船宮家の姫君がすることにけちをつけるなど恐れ多い」――と。

そんな状態であるものだから、英と美御が二人きりの時は宜しくやっ払いようとも、彼らは気にしなかった。いやむしろ自分たちの姫君に親近感を抱いていたのかも知れない。

何故かと言えば、「人殺しが好き」な切れた提督に率いられるよりも、寵愛する部下に限ってだが、「男好き」な姫君に従っていた方が、精神的には楽だからだ。

古来より瑞穂皇国では好色は罪ではない。実力を持つ皇族や貴族であれば、男女を問わずに後宮を持ち、お気に入りの男女や両性具有者を侍らせたものだ。

「英雄色を好む」とは使い古された表現であるが、一般人は非常な決断を下す支配者に恐怖の念を覚え、どこか自分でもなじめそうな部分を探す。瑞穂ではそれが好色であり、誰にでも理解できる項目故に親近感を強く感じさせるのであろう。

恐らく――仮にだが、美御が夜明けまで英のいる部屋で過ごし、それを大勢の者に視られたところで、大騒ぎする者はいないだろう。気を利かせて知らん顔をするか、「お務めご苦労様です」と言葉通りの意味で言われるだろう。

そして美御にはそれが判っているからこそ、英の寵愛に慣れた風情は他者に見せられない。意

地がある。英が笑いものになる原因を決して作りはしない——との意地が。

けれども、愛おしい少女に身体の一部——しかも女性を強く意識させる部分を押しつけられては、何と返してよいのか判らなくなる。振りほどくのも躊躇われ、続けられても困る。

職業格闘技（プロレスリング）に於ける固め技あるいは関節技を決められたような格好の美御は、結局のところ、早く寝てくれないものだろうか、僕の理性が機能しているうちに——とぼやきつつ、悶々と時を過ごさねばならなかった（三〇分後には『解放』された）。

6

皇国聯合艦隊第一艦隊は、爬間諸島沖海戦で受けた傷を、昼夜を分かたぬ突貫工事の果てに、どうにか癒やそうとしていた。東府に帰り着いたばかりの頃は、艦上構造物の半分近くを吹き飛ばされた艦、武装をごっそりと持ち去られた艦、喫水線を海面近くまで下げた艦、乗組員の半数以上が死傷した艦など、葬式会場よりも暗い空気を纏っていたものばかりだったが、時間経過と共に修理が進み、新規補充された乗組員たちが姿を見せると、「敗残兵」と化していた面々も徐々に恐怖を克服し、立ち直りの気配を見せていた。

「どうにか形ばかりは再建されたか」

戦艦「矢隠」——かつては同型艦三隻と共に、「瑞穂の誇り」とされてきた、二〇艦隊計画の名残を意識させる艦の第一艦橋で、真田信繁大將は呟いた。

「矢隠」の隣には、直ぐ下の妹——「時和」の姿がある。「龍隠」「穂先」が喪われ、一挙に隻数を半減させた矢隠級戦艦だが、二隻合計で一六門の四〇センチ四五口径砲は、今なお聯合帝国艦隊にとり脅威なはずで、雪辱の機会が何より求められた。

その「矢隠」「時和」の直ぐ近くには、あの海戦時、後部甲板を屑鉄堆積場かと見紛う有様にされた「神勢」「初宮」が控えている。姉妹共に五～六番主砲塔を撤去され、飛行甲板が設置されている。

これは二式艦上爆撃機「瑞星（ずいせい）」か水上爆撃機「紅雲（べにぐも）」を搭載するための措置で、それに伴い艦種は戦艦から「航空戦艦」に変更されていた。

「戦艦の砲撃力と航空母艦の攻撃力を併せ持つ新艦種」

だと艦政本部は宣っているが、果たしてどうなるのか——と真田は怪しんでいる。

——三六センチ四五口径砲を積んだ旧式戦艦では、聯合帝国がこれより投入してくる長砲身四〇センチ砲搭載艦には歯が立たぬ。かと言って使える軍艦を即座に廃棄する訳もゆかぬ。それ故、喪われても痛くない艦を実験的要素の強い艦に改造したのではないか……？

邪推のしすぎだとの見解もある。尋常ならざる大敵が相手なのだから、尋常ではない手段で対抗すべきなのだ——と。確かにそうした考えも成り立つ。

だが、真田の麾下にある他の主力艦は、岩城級巡洋戦艦に属する二隻——「叡山（えいざん）」「榛島（はるじま）」でしかない。

どちらも主砲口径は神勢級戦艦と同じで、艦齢も四半世紀を数える事から、敵戦艦との正面決戦に投入するのは、いささかどころではなく躊躇われる。

ただし、速度は「岩城」「清石」と同じように、大幅に増強されている――姉たちに〇・五航里劣るが、最高速度三三・五航里という、重巡並みの速力が確保されている――ため、重巡以下の艦船の牽制には充分耐えとされ、役割を変えれば使えた。

重軽巡に視線を転じれば、爬間諸島沖海戦の生き残り――「白羽（しろばね）」「妙義（みょうぎ）」の二隻が、ようやく修理完了した姿を見せ、準同型艦である「黒場（くろば）」「龍智（たつち）」と隊列を組んでいる。魚雷発射管の有無と対空機銃の配置など、注意すれば異なる面がある四隻だが、遠目からは装いを同じくした姉妹艦にしか見えない。

軽巡は軽空母「海鷲（うみわし）」「青鷲（あおわし）」の護衛についていた事により無傷で生還した「川那（かわな）」の他に、開戦の一年半程前に起工された矢賀乃（やがの）級軽巡二隻――「矢賀乃」「美穂乃（みほの）」が控えている。

この二隻は竣工日が同じ双子艦だ。砲雷撃戦を強く意識した造りで、同型艦があと四隻控えている。そちらの方は航空機の脅威が爬間諸島沖海戦で再確認されたので、魚雷発射管を撤去し、高角砲と対空機銃の数を増やした防空軽巡になる事が決められたが、「矢賀乃」「美穂乃」の二隻は、当初の予定通り水雷戦隊旗艦として生まれ出でたのだ。

決戦時に弾着観測機の安全を確保する補助艦艇――航空母艦群は、先に述べた「海鷲」「青鷲」の他に、かつて英の麾下にあった第七航空戦隊の軽空母――「飛燕（ひえん）」「隼燕（じゅんえん）」の四隻がいる。

この四隻には零式艦上戦闘機「紫風」と索敵・対潜哨戒用の九七式艦上攻撃機「陣山」のみが搭載されている。敵艦隊を攻撃するためではなく、あくまで「艦隊決戦時に制空権を確保する」ために存在しているからだ。

航空機を補助戦力に位置づけ、砲撃命中率の向上に活かすという発想は、前任者のそれと大差ない。

艦隊参謀長佳句少将曰く、

「敵艦隊への有効な攻撃は、第二艦隊の空母部隊が行う。第一艦隊の存在意義は敵戦艦を砲雷撃戦で撃滅する事にある。自艦隊の頭上を護れる程度の航空戦力があれば、それで構わない」

戦艦は重装甲であるが故に艦速が遅い。

それと高速空母を組み合わせたところで互いの持ち味を殺してしまうだけである。

航空機の専門家として、佳句はそう主張しているのだ。

第一艦隊に配属された空母群を見ると、成程彼の言いたいことが判る。第一東遣艦隊時代には、艦隊の速力を二五航里に低下させる原因になった「飛燕」「隼燕」も、ここでは戦艦と同じ速度を発揮できる艦として足手纏いにならないし、搭載機の過半を戦闘機で固めたことにより、制空権確保に充分寄与できる。

爬間諸島沖海戦の際は、その搭載機が九六式艦上戦闘機「清風」であるが故に、制空権を握れなかった――数が違いすぎたせいとも言えるが――軽空母群だが、今度は四隻合計で一四〇機もの「紫風」を搭載するので、準備は万全だと言えた（航空機工場への緊急増産命令がどうにか行き届いたおかげである）。

艦隊決戦と航路安全確保、その双方に欠かせない駆逐艦の方も、新旧合わせて二八隻――七個

駆逐隊が配属されていた。その中には、建造時に世界から注目を浴びた、初(はつ)雪(ゆき)級特級駆逐艦――二・七センチ連装砲三基に、五三センチ三連装魚雷発射管三基を装備し、三八航里の速度を誇る――や第一五駆逐隊が有する霧雨級駆逐艦の準同型艦も含まれており、非常に種類(ヴァリエティー)に富んだ陣容になっている。

しかし、外観の装いと内情が異なるのは、どんな組織にも当てはまる。修理改造を終えたばかりの戦艦と、扱いに慣れていない新型艦を複数有する艦隊ともなれば、総合戦力的に見れば、実は頼りない。

真田が「どうにか形ばかりは再建されたか」との呟きを発したのも、そうした背景――再び決戦を挑んでも、必ず勝てるとの保証がない――を憂えての事である。

勿論、出撃しろと言われて、それを拒絶するつもりはない。艦隊とは軍港内に逼塞して時を過ごすものではなく、洋上にありて敵艦隊と戦うためにあるのだ。

それなのに、「敵に心理的脅威を与えるためだけに温存しておく」など、本末転倒も甚だしいではないか。

だが、現状では出撃命令は出されていない。

昨年の大晦日に議題に挙げられたマルシャル諸島ですら敵影を確認しておらず、決戦海域に定められた、鞆縄、珊瑚の両諸島の沖合にいるのは、味方の艦ばかりだ。

「敵は戦力を集結させてから、堂々と進撃してくるはずだから、通信量の増大などで動向が掴める」

とは、海軍総司令部の見解なのだが、真田もその考えに賛同している。

理由として挙げられるのは、

「国力に勝る聯合帝国が短期決戦を目指さねばならぬ道理はなく、また戦力を逐次投入する形となれば、各個撃破される原因になりかねない。また彼らは、瑞穂と同様に大艦巨砲主義者の信者のはずで、堂々たる艦隊決戦を夢見て艦隊を整備してきたに違いない」

国力や軍事戦略的な部分は理屈である。だが、最後の部分に関しては、幻想的(メルヘン)なところがある。聯合帝国海軍の関係者に、貴国は海軍に何を求めているのかと問い合わせた訳でもあるまいに、断言しても良いのか――と。

その質問に関しては、構成員の精神面(メンタル)に起因すると、辛うじて反論できた。軍人は過去の戦争、その再現を夢見て軍備を整えたがる。航空機や潜水艦が現実的に重大な脅威となった今も、戦艦が重要視されているのは、そうした彼らの心情による(費用対効果(コストパフォーマンス)――投入できる局面が限られているのに、多額の国家予算を必要とする戦艦は、実のところ巡洋艦や無理をすれば敵艦隊攻撃にも使える護衛空母より汎用性が低い)。

軍の上級統帥部が「過去の戦争」の再現にこだわり、現場にいる将兵らもそれを熱望するのであれば、軍事的素人の政治家衆に何が言えようか？

勿論、「この拠点の失陥は政治的に好ましくないから、犠牲を払おうとも死守しろ」「敵国元首の権威を失墜させるために、何としても何日以内に某街を陥とせ」などと口を挟む権利を彼らは有しているが、その際に使用する兵器までは限定しない。いや、出来ない。

そんな無茶が許されるのであれば、「小銃だけで要塞を攻略しろ」という物理的に不可能な命

令でさえ下せる事になる。それでは単なる阿呆である。

海軍総司令部や皇国聯合艦隊司令部も、そうした自国敵国の事情を慮って、そのような結論を出している。

彼らの脳裏にあるのは、「戦力が豊富なはずの敵にしても、理性的な兵力運用を心がけているはずだ」という、ある種の信頼感だった。

まさか功名心に逸る一提督が、政治的駆け引きの果てに一部部隊を動かし、奇襲攻撃を目論んでいるなど、夢にも考えていない。

それは全くの常識的見解であり、彼らを一方的に批判できる話ではないが、無警戒のまま運命の日――三月一八日を迎えた事は、やはり責められるべきだろう。

朝陽と共に災厄が舞い降りるのを、彼らは知らない。

7

〇三〇〇――

周囲はまだ闇に包まれている。本来ならば悠久の時の流れを感じさせる静寂があるべき時間帯。だが、各航空母艦の飛行甲板上は、爆音が響いている。プロペラが奏でるものだ。暖機運転を間もなく終えようとしているそれらは、収穫直前の作物を根こそぎ食い尽くす蝗（いなご）の群を連想させる。

機動部隊司令官――ヴォルフガング・レンネンキャンプ中将は、旗艦である大型航空母艦「グロス・ツェッペリン」の飛行甲板上に立ち、これより出撃する艦載機搭乗員たちを前に、訓示をしている。

「諸君らの攻撃目標は、爬間諸島沖で取り逃がした敵戦艦群である。他は目もくれるな。今度こそ彼らの戦艦部隊を徹底的に叩き、壊滅させるのだ。

諸君らの中には航空母艦こそ次世代の主力艦だと信じ、むしろ敵のそれを撃沈破すべきだと思う者もいるだろう。私も頷きたい部分があるが、此度は先に述べた私の命令を遵守してくれ。

何故なら、瑞穂人は戦艦を特別視している。その戦艦が自国内の軍港で叩き潰されれば、勝利の念を支える幻想が崩れ去るのだ。そう。私は今『幻想』と口にした。その『幻想』を打ち砕くことが、この無益な戦役を終わらせる事に繋がるのだ。

愛する同胞たちよ、どうかそこを理解してくれ。君たちは歴史と伝説を同時に造ることになるのだから……」

日頃の彼にしては珍しい饒舌ぶりも、偏に余裕がある事に起因する。彼の機動部隊と、ゲオルクが率いる戦艦部隊は、敵の哨戒網を容易く突破し、瑞穂本国東部を射程圏内に捉えた。

潜水艦にすら見つからず、航空機の眼もかいくぐり、東府軍港から南東に二六〇里の距離にまで進出したのだ。

ここからなら浦須賀に対し艦砲射撃を仕掛けるのも容易で、作戦を開始さえすれば、引き際さえ間違わなければ、攻撃終了後に、損害はさほど受けずに後退できる。

――まさに天佑（てんゆう）だ！

作戦参加者がそう感じたのも無理はなく、徴用した漁船による哨戒網をきちんと機能させていない――戦闘機が銃撃を浴びせるだけで、無電を発する暇さえなく、沈没に追い込まれる船が複数出た――敵軍の油断ぶりに呆れた者も数多くいた。

レンネンキャンプが訓示を終えると、各機の搭乗員らは、銃剣突撃を思わせる速度で愛機に飛び乗る。

本土艦隊が装備している艦載機は、西部帝家のそれとは異なる。機種が二つに絞られている。制空と防空を担当する艦上戦闘機が、「ドルニエ2号」――最大速力五八〇里で二〇ミリ、一二・七ミリ機銃を各二丁ずつ装備する重戦闘機だ。性格的には瑞穂陸軍の一式戦闘機「燕」に近い（爆弾懸吊（けんちょう）装備を追加すれば、五〇〇斤爆弾までなら装備可能となるため、こちらの方が汎用性が高いとも言えるが）。

そして敵艦攻撃を担当するのが、「コメート」――最大速力四六二里、爆弾魚雷搭載量一〇〇〇斤を誇る艦上万能機である。「艦上爆撃機」あるいは「艦上攻撃機」とつかないのは、この機体がその双方をこなすものであるから。

一昔前の艦上戦闘機に匹敵するだけの速度を持つ「コメート」は、防弾版を張り巡らせた頑丈な機体に、大馬力の発動機を載せたもので、北ヤフリカや南加大陸諸国を相手にした戦闘では「極めて撃墜しにくい機体」だとの評価を受け、敵艦隊への雷爆撃や地上攻撃に猛威を振るった。

「空飛ぶ死神」

との形容は、この二機種にこそ当てはまる表現だと、関係者は豪語している。これに比べれば、性能面で劣り、尚且つ機種を増やし、整備問題を抱える西部帝家艦隊の艦載機隊など、所詮は田舎者に過ぎない。

流石に一石爆弾を装備して急降下爆撃を敢行するという無茶は出来ないが、停泊中の敵艦隊の横腹に魚雷を見舞うなど、演習の延長に過ぎないと感じている者は多いから、航空魚雷の抱える問題点――命中率の低さと信管の不具合は騒がれなかった。

発艦は「ドルニエ2号」から開始された。やはり余分な重量物を抱える「コメート」の方が発艦に手間取るから、先に身軽な方が飛び立つのが好ましいのだ。

青黒い塗装を施された艦上戦闘機の群が、一機また一機と飛行甲板上を滑るように進み、飛び立ってゆく。

その様子は、細身（シャープ）な機体をしている事が多い瑞穂軍機のそれとはまた別の感慨を抱かせた。

「黒い十字架（シュヴァルツ・クロイツ）」を掲げるのはゲルマニアであり、聯合帝国の象徴は青い星なのだが、遙かな高みを目指して飛びゆく「ドルニエ2号」の後ろ姿は、周囲がまだ闇に閉ざされている事もあり、それを思わせた。

戦闘機隊が発艦を終えると、続いて急降下爆撃機隊が発艦を始めた。五〇〇斤徹甲爆弾――戦艦の装甲板を貫通し、内部を破壊出来る威力を秘めた、必殺の航空爆弾を抱えた「コメート」の群は、まるで機体自身が意識を持つかのように動き、空へと駆け上がってゆく。

機体設計時は「戦闘機の護衛が不要な万能攻撃機」を目指された「コメート」は、流石に今では護衛機皆無では任務遂行は厳しいが、名の由来がゲルマニア語に於ける「彗星」なのに相応

しく、機敏な動きを見せる。

「コメート」の発艦は続く。特性の一石徹甲爆弾を装備する水平爆撃隊、八〇〇斤航空魚雷を装備する雷撃隊は、装備している重量物に脚ならぬ機体そのものを引っ張られているような感じがするから、ふらふらとどこか危なげなものも目立つ。

されども、発艦に失敗する機体はない。

皆がここでしくじるのは、本土艦隊のみならず、ひいては聯合帝国の恥になると信じているからだ。

矜持と信念だけでは物理的困難を克服できないのは世の常だが、その双方がなければ戦えないのもまた事実。

第一次攻撃隊三〇〇機は、空中集合を終えると、標的がたむろする東府軍港を目指し、前進を開始する。

「戦果拡大の好機あらば、航空隊の損害に委細構わず攻撃を反復せよ！」

ゲオルクはそう言っていたが、最初の一撃（ファースト・ストライク）が成功すれば、東府軍港自体が火の海になるのは目に見えている。それでも攻撃を続行するとなれば、戦果未確認を覚悟で――その頃には他の場所から直掩戦闘機などが駆けつけているだろうから、損害ばかりが増すことになりそうだ――やるしかない。

「果たして結果はどう出るであろうか？」

出撃する航空隊を見送りつつ、レンネンキャンプは期待と不安をいり混ぜた表情を浮かべた。

8

瑞穂本国の沿岸を飛ぶ航空機と言え、訓練中のものを除けば、対潜哨戒機だとの印象が強い。

これは単なる印象ではなく、一面に於いて事実である。

楠参謀長が口にしたように、大胆な敵潜水艦が本土近海にまで接近していることがあるので、飛行艇や水上偵察機などが定期的に哨戒飛行をしているのだ。

だが、どんな時にも例外はいる。

その日、東府湾内の哨戒飛行を担当していたのは、二式大艇「雲鯨」や水上爆撃機「紅雲」ではなく、単発の艦上機――二式艦上偵察機「輝雲（こううん）」であった。

「輝雲」は型番――「二式」と付されている――からも判るように、最新機である。最大速力は六四〇里にも達し、「蒼電」を除けば確実に追いつける戦闘機さえ存在しない高性能偵察機だ。

その「輝雲」が何故東府湾内を飛んでいたのかと言え、最新鋭機にありがちな欠点を確認するため――試験飛行じみた性格の任務に就いていたからだ。

型録性能(カタログスペック)に凄まじい数字を出すのは、確かに技術者冥利に尽きる話であるが、そのために生じた無理により迷惑を被るのは、いつとても実際にそれを運用する者たちである。

「我に追いつく敵機なし！」

そんな宣伝文句（キャッチコピー）を掲げる「輝雲」も、その例外には漏れず、前線配備を本格的に進める前に、整備状態が比較的良好な内地で問題部分を徹底的に洗い出し、円滑（スムーズ）に運用できるようにと、努力が続けられていた。

ある意味で扱いづらい機体——生産番号は一〇二番である——を預けられたのは、実験飛行隊に属する飛行士二名——梶一馬（くぬぎかずま）少尉と流鏑馬義郎（やぶさめよしろう）一等飛行兵曹だった。

彼らは文句を言いがちな発動機をなだめすかしつつ、空技廠から押しつけられた別の問題児と格闘を続けていた。それは「単発機用の機上電探」で、実用化に成功すれば航空偵察に新時代が訪れると言われてしている一品であった。

どんなに素晴らしい発明も、最初に苦労する者がいなければ生まれない。馬に乗る時の必需品である鐙（あぶみ）や轡（くつわ）も初めは存在しなかったではないか——と飛行長は諭すように告げたが、梶と流鏑馬に言わせれば、「貧乏籤を引かされた。あと、俺たちを馬扱いするな」なのだが。

「流鏑馬さん、何か見えるか？」機長と操縦士を兼ねる梶が、後部座席で偵察員・機銃員・電測員の三役を兼ねる相方に、緊張感に欠ける声で訊ねた。

「いいえ、何も」答える流鏑馬の声にも覇気がない。

二人とも上官の受けが悪いのだ。それも態度ではなく顔つきで損をしているタイプで、本人たちの勤務態度に起因しないそれを、「天からの嫌がらせ」だと彼らは評している。

——せめて対潜爆弾を抱えた艦攻にでも載せてくれたのなら、手柄の立てようもあるのだが！ 偵察もまた重要な任務だと理解できているが、それにやりがいを見いだせるかどうかは、別問題であろう。

梶と流鏑馬はたとえ対潜哨戒であろうとも、敵を直接ぶちのめしたかった。戦うために志願したのであるから、これは当然の願いだと言えた。

もっとも、彼らのこの願いを、現実に護衛空母に配属され、神経を尖らせている艦載機搭乗員が耳にしたら、「そんなにやりたいのなら、俺と代われ！」と怒声混じりの言葉をぶつけられたであろうが。

戦時下にある国家で、後方で実験機を飛ばすという仕事は、出世や戦闘に興味のない者らからすれば、戦争中に軍隊に関わっていたことを示す証拠——自分が臆病者でない事の証となるものだから、「羨ましい」と口にする者も少なからずいたであろう。

だが梶と流鏑馬は、それを嬉しく思った例などない。

「いつ事故を起こすのか判らない機体を、俺たちに押しつけやがって！」

それが彼らの偽らざる本音であるから。

その不運な組み合わせ（コンビ）——本人たちの主観による部分が大きいが——は、しかし歴史を司る女神の祝福を、この日の朝は受けていたらしい。機上電探の操作を続けていた流鏑馬が、そこにおかしな反応を捉えた。

「機長、先の報告を訂正するよ」流鏑馬は首を傾げながら告げた。「変な反応がある」

「変な？」梶は首を傾げた。年上の部下に詳しい説明を求める。「もう少し具体的に頼むよ」

「電探に輝点が複数映ってる」

「複数――とな？」

「ああ。一個や二個なら単なる幽霊（ゴースト）かも知れないが、五〇以上ともなるとどうも」「幽霊」とは、現実には存在しない影を捉える誤作動（マシントラブル）である。採用されたばかりの機上電探だと、その種の反応が起こりやすく、流鏑馬は今までも散々悩まされてきた。

「このあたりの航空隊に、早朝から大規模演習を行う予定などあったかな？」

「多分ないと思うけどな」

機長とその部下とは思えない呑気な会話が交わされる。

しかし事の重大さを認識し、機内の空気が凍り付くのに、さほどの時間は要さなかった。

――敵機!?

彼らの胸の中を、その存在が駆け抜ける。

考えてみれば、爬間諸島沖海戦でも、瑞穂側は敵に先手を打たれた。大規模な航空部隊が押し寄せてきて、制空権をたちまち支配した。

今度の敵が特別大胆で、本土近海まで機動部隊を進出させてきた可能性は絶無ではない。

となると、最初の攻撃で一〇〇機以上の攻撃隊を送り出してきたのかも知れない。考えるのに恐ろしいが。

「警戒を呼びかけておくか？」流鏑馬が訊ねた。

「そうだな」梶が応じた。「単なる間違いなら、俺たちが笑われれば済むが、本当なら洒落にならない」

航空無線を通じて警戒が呼びかけられる。

この瞬間、彼らは不満を抱き続けてきた任務を忠実に遂行し、「全体に於ける自分たちの役割」を見事に果たしたのだ。

だが、その代償は直ぐに支払いを求められた。

無線が発せられた位置を掴んだ敵機の群――その一部が、小癩な偵察機を撃墜せんと、接近してきたのだ。

「畜生！ 視た事のない連中が来たぞ！」

「機長、あれは『ドルニエ2号』とかいうやつだ！」

「西部帝家艦隊の艦載機ではない？」

「確か帝国本州艦隊の艦載機だよ！」

航空機好きの血が騒ぐのか、こんな時にもかかわらず、流鏑馬の眼は敵機に真直ぐ向けられている。

「何でも良いから撃ち落とせ！」

とは言うが、梶はそれが可能だと欠片も信じていない。偵察機に装備されている後部旋回機銃など、所詮は気休めに過ぎないからだ。そんなものでやられてくれる機体など、余程の新米かドジな奴だろう。

「全速離脱を願います！」

「おう！」

促されるままに機体を加速させる。確かに逃げ出した方が生き残れる確率は遙かに高い。

「行って還るまでが遠足」だという表現があるが、敵を発見してそれを味方に伝えるまでが偵察だとすれば、彼らは未だに任務を完遂したことにならない（咄嗟の通信で全てを伝えられる訳ではないから、上官に口頭で視たものを伝える必要がある）。

急加速する機体の背を、敵機――「ドルニエ2号」は追いかける。彼らが装備する最も強力な機銃――二〇ミリ機銃が浴びせかけられる。「紫風」が持つそれとは違うが、まともに喰らえば木端微塵になるのは必定だ。

日頃のように発動機がむずがれば、櫂と流鏑馬は確実に冥府へと続く門を通過する人と化していたであろう。

だが、運命の女神がこの時ばかりは微笑んだのか、あるいは軍神がもう少しお前らは足掻けと意地悪い笑みを投げてきたのか、発動機は求められる出力を――「輝雲」が搭載している蹄（ひづめ）発動機は、二二〇〇馬力まで出せる――発揮した。すなわち六四〇里の速度を出したのだ。機体が揺れて、搭乗員二名の顔が引き攣る。

しかし、過重に対する苦しみは、生きていられる喜びの方が優った。彼らは高らかに笑いながら――そして舌を噛みそうになりながら、例の宣伝文句を口にしていた。

「我に追いつく敵機なし！」

後年伝説になる台詞が「輝雲」機上から発せられた時、皇国聯合艦隊第一艦隊は、ようやく日頃の業務を開始しようとしていた。甲板掃除と夜勤から早番への引き継ぎなど、およそ戦闘とは無縁と思える光景が各艦で起きていた。

皇国聯合艦隊司令長官と第一艦隊司令長官を兼任する真田にしても、長官室で寝台から身を起こそうとしている最中だった。この時代には老人と呼んで差し支えのない年齢である彼は、軍人であるから身の回りの事を自分だけで手早く済ませられるのだが、戦時下の軍高級将校という重圧感からは無縁でいられず、疲労が滲んだ顔をしている。

その真田の許に緊急連絡が飛び込んできたのは、彼が寝間着から軍服への着替えを終え、朝食の前に送られてきた書類に目を通そうか――としている時だった。

けたたましい音を立てて鳴る卓上電話を手にした途端、

「提督、一大事です！」

切迫した声が電話口から響いてきた。

「報告は的確に頼む」不機嫌な声を彼は返した。「一大事とは何かね？ 何処かで地震・噴火でも起きたのか？」

大地震や火山噴火に属する天変地異は、瑞穂では割と頻繁に起こる。地層の関係もあるのだろうが、昔から定期的に震災が起こり、記憶に新しいところでは、「紅城」の姉である「天戸」が航空母艦に改装中に地震に見舞われ、大破放棄となった。

「敵襲」を予測していない彼が、そうした自然現象に関する事柄に考えを向けたのも無理なかった。

「敵襲です」報告者――当直将校は続けた。「東府湾内を哨戒飛行していた『輝雲』が敵機を確

認しました。その数は推定で一〇〇機以上――」

真田の顔が瞬間的に歪んだ。

「事実かね？」

「彼らは実際に銃撃を受けました」当直将校は自分も信じられない話をしているのだとの意を込めながら言う。「付近にいた他の哨戒機が現場に駆けつけ、それが真実であるのが確認されています」

「一〇〇機以上となると、敵は機動部隊か」

「近海を索敵機が調査していますが、今のところ敵艦隊は発見されておりません」

「承知した。儂は直ぐに第一艦橋に向かうから、君は参謀たちに招集をかけてくれ給え」

そう言い置くと、受話器を置いた。

顔面を硬直させてから天井を仰いだ。内心で呟く。

――まさか内地にありて敵襲を受けるとは……！

敵艦隊の動向について注意を払っているはずの情報部は、何も伝えてこなかった。橋道洋の各根拠地に配属されている航空隊も、通商破壊その他の任務に投入されている潜水艦群も！

これでどうやって警戒態勢を築かせれば良かったのだろうか？ 自分も含めて間抜け揃いだったのか？

だが嘆いても始まらない。必要なのは、これから戦闘態勢を整えることで、被害を抑える事だ。

椅子から立ち上がった彼は、早足で部屋を出る。「矢隠」第一艦橋に上がらねばならない。艦隊旗艦の長官席に座する自分がいなければ、空気が締まらないからだ。

果たして間に合うのか？ 果たして間に合うのか？ 心がひたすらに肉体を急かした。

海上を哨戒飛行中の偵察機に発見された——との報せは、第一次攻撃隊の間を、火事か他人の恋話（ゴシップ）のような勢いで広まった。有史以来、どちらも人類には馴染みのあるものだが、「奇襲攻撃（サプライズ・アタック）」が「強襲攻撃（アサルト）」に切り替わったのは、難易度の上昇を意味するから、心穏やかでいられる者は少ない。

「奇跡が起きなかっただけの話であり、何も驚くには値しないではないか」

第一次攻撃隊を率いるアルベルト・シュミット中佐は、そんな部下たちにそう言い聞かせる。

このゲルマニヤ語で「鍛冶屋」を意味する姓を持つ人物は、周囲から先祖が取り扱ってきた物——鉄同様の精神を持つ男と評されている。どんな時でも冷静沈着で、自らを見失うことがないからだ。

「攻撃隊は、予定通り、東府軍港を攻撃する組と周囲の飛行場を攻撃する者—toに分かれろ」

三〇〇機の攻撃隊は、その全てが東府軍港を攻撃する訳ではなかった。第二次攻撃隊と浦須賀砲撃を企画しているゲオルク艦隊の支援のために、対地攻撃——飛行場の破壊を命じられていた組—toに分けられていた。

事前情報によれば、東府と浦須賀には大規模な海軍航空隊用の飛行場があるとされていた。東府の対岸——千房（ちぼう）半島には陸軍航空隊もいるのが確認されていたが、そちらは手が回らないのと、聯合帝国の陸軍航空隊が基準とされた——洋上飛行が出来ない者が多い——ので無視された。

飛行場を完全破壊する必要はなかった。滑走路の一部を破壊し、半日程度機能を奪えば良いとされた。対地攻撃にかかりきりとなり、敵艦隊への攻撃が手薄になれば本末転倒だからだ。

二〇〇機の攻撃隊——「ドルニエ2号」が六二機に対し、「コメート」は一三八機——はそれでも敵機の妨害を受ける事なく東府軍港の上空に侵入した。

戦時にある軍隊らしく、敵艦の反応は素早かった。戦艦が六隻——その中には、後部甲板を飛行甲板に改造した、おかしげなものも含まれていたが——が激しい対空砲火を打ち上げてくる。

だが、抜錨したばかりであるためか、速度はさほど速くない。高角砲や対空機銃により形成される弾幕が邪魔と言えは邪魔だが、対空砲火だけで航空攻撃が完全に阻止された事例は、今まで存在しない。

「かかれ！（シュトルムアングリフ）」

機上無線を通じてそう命じながら、シュミット自身も機体を急加速させ、突撃態勢に入る。命中率の低下を嫌う彼は、愛機には常に爆装させている。それも被弾率が高いと言われている急降下爆撃を専門としているのだ。

周囲からは戦死する確率が高い役割は、指揮官が自ら請け負うものではないと何度も諫められてきたが、

「指揮官が一番危険な任務を担当するからこそ、周囲も従うのだ。俺が安全な場所であぐらをかいていたら、誰が命懸けで戦うのだ。それに『コメート』は頑丈な機体だから、滅多な事では撃墜されん」

そう反論して黙らせてきた。これは彼なりの矜持で、譲れない一線でもあったのだ。

金切り声を上げながら進むシュミット機が目標としたのは、敵艦隊の中でひときわ大きい戦艦――連装砲塔を四基備えるものだ。艦橋の形や副砲の配置などから、識別標で確認した矢隠級戦艦の一隻だと思われた。

五〇〇斤徹甲爆弾で確実に撃沈できる相手なのかと言え、大いなる疑問だ。「当たり所が良ければ仕留められる」程度だと言える。敵艦隊の戦力を削ぐ事が目的なら、一発轟沈が狙える巡洋艦を標的にした方が好ましい。

けれどもシュミットはそれで構わなかった。

爆弾が直撃すれば、損害を受けるのは確かだし、対空砲火の何割かを減じれば、雷撃が命中する確率が上がるかも知れない。味方の助けになるのは確かなのだ。

攻撃隊総隊長の後に続くのは、彼が直率する中隊――二機である。一機につき五〇〇斤の航空爆弾を装備する彼らは、都合六石の爆撃力を持つ事になる。

彼我距離が秒単位で詰まっていく中、シュミットは投弾の時期を計っている。

――あともう少し……！

視界の中で標的が膨らんでいく。経験の浅い飛行士であれば、「敵艦にぶつかる！」と喚き散らしそうぐらい接近――五〇〇間程まで距離を詰めた――したのを認めたシュミットは、爆弾を投下させた。

投下桿を引いた直後、懸吊されていた航空爆弾が外れ、重力に従い降下を始めた。何かが空気を切り裂きながら進む時特有の、あのヒュルヒュルという音が、時限信管付の対空砲弾が弾ける音に混じり響く。

先頭を進む彼の行動に倣い、中隊全機もそれに続く。

翼を翻す過程で高角砲弾の直撃を受けて砕け散る者も出るが、それは僅か一機に過ぎない。二五ミリ機銃を翼や胴体に何発か受けた受けた機体は三機出たが、そちらは「コメート」特有の頑丈さに助けられ、致命傷とはならず済んだ。

さて爆弾の方はと言えば、シュミット自身が願いを込めたような感じで投下した分は、第四砲塔の天蓋に直撃し、その基部を歪めて旋回不能に陥れたが、残りは両舷を挟むような形で落下し、至近弾となる。

命中率は一割以下で、褒められた数字では決してないが、被弾の瞬間に濛々（もうもう）と立ち籠めた黒煙とその矢隠級戦艦の動きが鈍い事から、相当な打撃を与えたのではないかと、攻撃側からは判定された（航空攻撃の難しさは、そこ――戦果確認の困難さにある）。

指揮官自らの攻撃に前後して、その他の戦艦――神勢級戦艦と岩城級巡洋戦艦だと確認された――への爆雷撃も開始された。敵機の姿が見えない事から比較的余裕のある戦闘機隊も、甲板上への機銃掃射などに加わり、敵艦隊は確実に死傷者を積み重ねていく。

「突撃！ 突撃！」

それを意味する言葉が、東府軍港上空を乱舞する航空機の間でひたすら交わされ続けた。

真先に被弾した矢隠級戦艦は、実のところ真田が将旗を掲げる「矢隠」であった。不意を突かれて爆撃を受けた彼の戦艦は、通信機能に重大な打撃を受け、指揮能力に早くも黄信号が灯っていた。

「提督！ 旗艦を変更しませんと――」

参謀長佳句止少将が決断を促した。

「矢隠」は第四砲塔の天蓋に直撃弾を受け、そこを旋回不能にされただけで、戦闘航海は充分可能だ。

しかし、通信機能が損なわれ、全体の指揮統率が難しくなったとなると、その価値は半減している。

混乱が続く状況の中、手旗信号だけで三〇隻を超える艦隊を動かすなど、無茶が過ぎる。損害を倍加させる原因になりかねない。

だが――

「駄目だ。そんな余裕はないし、我々がここを離れれば、乗組員が戦意を喪失するかも知れん」

真田は頭（かぶり）を振って拒絶する。

彼の主張には根拠があった。上空を敵機が飛び回中、味方艦を横付けするなど出来たものではないし、内火艇での移動など考えるだに恐ろしい。敵戦闘機から銃撃を受ける恐れがあるし、回避行動を続ける味方艦に挽き潰される可能性もある。

そして何より、今では「矢隠」と「時和」が残されるだけになった四〇センチ砲搭載艦の片割れが、乗組員の戦意喪失により撃沈されたとなると、瑞穂海軍は更に厳しい台所事情を抱える事になる。

「ですが……」

翻意を促そうとする佳句を無視して、真田は、

「直掩機は出せないのか！」

直ぐ近くにいる、軽空母群にその言葉を叩きつけた。

「紫風」であれば先程から急降下と雷撃を続けている敵機を追い払えるはずだ――彼はそう信じている様子だ。

しかし――

「敵機の攻撃が激しく、直ぐには出せません！」

艦体が小型の護衛空母には、発艦補助装置（カタパルト）が標準装備としてつけられている。だが、一定の大きさを持つ改造空母だと、その中途半端さが災いし、発艦補助装置の設置が後回しにされる傾向が見られた。

「海鷲」「青鷲」「飛燕」「隼燕」の四隻もまた、

「戦闘機さえ発艦させられれば取り敢えず問題はないのだし、発艦補助装置を慌ててつける必要はあるまい」

そう評されて、風上に向かい直進せねば発艦できない使用のままなのだ。

これを技術的怠慢と見るか、限りある資源を活用するためのやむを得ない措置と見るかで評価

が分かれるところであろうが、第一艦隊に所属する空母は、泣いても笑ってもそれしかない。

歯噛みした真田は、青筋を立てながら吼えた。

「基地航空隊でも構わん！ 直掩機を早急に寄越すようにと伝えるんだ!!」

対空砲火や回避行動だけで、一〇〇機を超える艦載機の襲撃を凌ぐ事は出来ない。大艦巨砲主義者である彼にしても、それは理解していた。

「輝雲」やその他の偵察機から、敵機接近の知らせを受けていた基地航空隊の面々は、勿論緊急発進（スクランブル）をかけようとしていた。内地防衛の任を預かる彼らは、最新鋭艦上戦闘機である「紫風」や局地戦闘機「天電（てんでん）」を装備し、相手が何であれ迎撃戦闘を行うのに不足のない戦力を整えていたのだ。

だが、その努力も、急襲をかけてきた敵機の群を前にすると、たちまち烏有に帰した。

空襲警報が発令される間もないまま、五〇機の戦爆聯合から攻撃を受けた大和平（やまとだいら）飛行場――東府軍港近郊にある戦闘機基地は、たちまち滑走路の各所に穴を穿たれ、使用不能になった。勇敢な飛行士が慌てて発進させようとした戦闘機にしても、その穴に突っ込むか銃撃を浴びて大破炎上――空鉄（エアニウム）の塊と化した。

押取刀（おっとりがたな）で行われた対空射撃も、獲物を素早くかつ着実に仕留めていく術を心得た戦爆聯合の前では、虚しい抵抗に過ぎない。地上すれすれにまで降りてきた「ドルニエ 2号」が高射砲や対空機銃に二〇ミリ機銃を見舞うと、操作員が射殺されたり、弾薬が小爆発を起こして行動不能になるものが続出させられた。

一番手近な飛行場から、悲鳴じみた通信――

「我、敵機ノ攻撃ヲ受ク」

を受けた真田は、自分を含めた味方部隊の不甲斐なさに呆れ、地団駄を踏んだ。

無能との評価を受けた前任者――猪松敏平大将にしても、敵艦隊の接近を事前に察知し、艦隊を洋上に展開させておき、基地航空隊の支援を受けられる態勢を整えていた。

だが、自分は艦隊を軍港内から出すか出さないかのうちに攻撃を受けた。こんな莫迦な話があるものかと、自己嫌悪の念が沸く。

しかし罵ったところで事態が改善される訳ではない。一分でも早く空撃は終わらないか。

そんな風に、胸をジリジリと灼かれるように考えていた真田の耳に、爆音が続け様に届く。衝撃は鈍い。「矢隠」ではなく他の戦艦が被弾したらしい。

味方艦の損害を確認する術は乏しく、彼女たちを預かる者たちに命令を伝達する手段も然り。

拷問のような時間だが、耐えるしかなかった。

第一次攻撃隊から分派した部隊の一部は、浦須賀軍港の近くにある飛行場――薄木（うすき）飛行場を攻撃目標として前進していた。彼らは自分たちの任務が全体の安全を確保するのに必要だと理解していたが、「俺たちは大物（ビッグゲーム）を仕留める事は出来ないのか」と不満を抱えていた。

事前情報だと、敵艦隊の主力は東府軍港に在るとの話だった。浦須賀には巡洋艦以下の小物しかない――と。

故に飛行長の方からは、

「お前たちは陸用爆弾しか装備していない。巡洋艦や駆逐艦相手に色気を出すなよ」

そう釘を刺されていた。着発式の対地攻撃用爆弾だと、装甲に覆われた軍艦に致命傷を負わせる事は叶わず、出来ても高角砲や機銃を吹き飛ばすぐらいであろうから。

――俺だって、対艦攻撃を任せてくれたら、戦艦は無理でも巡洋艦ぐらいなら沈められるのに！

攻撃隊指揮官――ヨアヒム・シュロスベルガー大尉は、そんな事を考えていた。継子扱いされた訳ではないが、彼が率いる部隊は、彼を含めて、機動部隊の中でもさほど練度が高くない――それでも他国であれば、充分合格点な技量を持つ――搭乗員たちで占められている。

されども、戦争にはあまり強くないとの評価を受けている瑞穂軍が相手なら、俺たちでも大丈夫なはずだ――との意識がある。手柄の一つも立てて勲章を貰わねば、何のためにこんな僻地にまで繰り出してきたのか判らなくなる。

しかし命令は命令なのだ――と己に言い聞かせながら前進を続けていたシュロスベルガーの目に、奇異なものが映じる。彼らは高度六〇〇〇間から浦須賀軍港上空を走破しようとしていたのだが、それよりも二〇〇〇間程高い空域から突っ込んでくる機影がある。

――まさか敵機か!?

奇襲が完全に成功したとは言い難い状況であるため、敵が緊急発進させた戦闘機が上空で待ち構えていても不思議はない。しかし高度八〇〇〇間にまで上昇するのには、それなりの時間が必要なはずだ。

予め空中哨戒をしていた戦闘機がいたのか？

疑問を解消する術はなく、仮に解消できたところで敵機が消える訳でもない。

「コメント」は爆雷撃が可能な機体の割には速度が速く、運動性にも優れるが、純粋な戦闘機と空戦をやるのは分が悪い。護衛機にその始末を任せるべきだ。

「敵直掩機のような。迎撃を――」

空中無線を通じて命令が発せられる直前、敵機が発砲を開始した。遠い。威嚇射撃か？

だが、この距離では命中など望むべくもない。

そうシュロスベルガーは解釈したが、直ぐ近くを飛んでいた味方機が瞬間的に火球と化す様を視て、考えを改めた。率直に言えば度肝を抜かれた。この距離から初手で命中弾だと!?

驚愕に目を見開くシュロスベルガー。そんな彼の目に、更なる衝撃が映じる。敵機の形が妙なのだ。

まるで翼とプロペラの位置を逆にしたかのような、ありえない図形（フォルム）。こいつは――一体何なのだ？ ヤープ共の新型機には間違いはないが、恐ろしく速く強烈な火力を持つ。意味が判らない。

軍人とは一般的に、手合わせした事のない敵を舐めてかかる傾向にある。特に味方部隊が以前に大勝した相手となると、大したことはあるまいと、自然と油断をする。

シュロスベルガーにしても、そうした傾向とは無縁ではいられず、衝撃に打ちのめされた。「恐ろしく速く強烈な火力を持つ」敵機は、そんな彼の心的動揺を見逃さなかった。数は一二機と少ないが、悪魔の如く巧みな軌道を見せ、片端から彼の部下たちを撃墜していく。

射撃音が響き、そこに爆発が被されると、聯合帝国に忠誠を捧げてきた飛行士たちが、一人また一人と、異境で天に召されていくのだ。それを止める手段を持つ者は誰もおらず、犠牲者が時間単位で増大する。

「莫迦野郎！」

自分でも意味と訳が判らないと思う罵言を放ちながら、シュロスベルガーは近くにいた敵機の方へ突撃をかける。

機首に一二・七ミリ機銃二丁を装備する「コメート」であれば、もしかしたら敵戦闘機に一矢報いる事が出来るのかも――そんな淡い期待が、そこには込められていた。

だが、敵機は意味不明な軌道を見せた。

空中で俄に減速したかと思うと、停止――未来位置へと放たれた機銃弾が虚しく空を切る。「何だ、あの動きは！」

彼は今自分が眼にした光景を、誰かに伝えねば、との使命感にかられた。戦場でよくある与太話ではない。我が眼で確認した異常事態なのだ。敵新型機の性能を友軍に伝達するのは、神聖なる義務であろう。

されども、その願いは叶わなかった。

次の瞬間に、彼の意識は闇の底に沈んでいたからだ。

何度目かの衝撃を受けていたシュロスベルガーの意識を、瞬間的に断ち切ったのは、別方向から銃撃を浴びせてきた敵機であった。油断する奴や注意散漫な奴は、戦場では直ぐに死ぬ――彼の最後はその用例見本のようで、生じた爆発はそれを戒める狼煙（のろし）のようだった。

指揮官の戦死は、多くの場合に於いて決定的な出来事となる。特に貴族がそのまま将校をしている場合が多い国であれば。指揮系統が一気に崩れ、全体が崩壊へと突き進むのは珍しくない。

シュロスベルガーが率いていた戦爆聯合は五〇機。「謎の敵機」が突入してきた段階で、動揺は始まっており、かなりの機数がやられていたから、これは撤退の最大の理由となる。

「大尉が撃墜された！ 逃げろ！」

無残な敗北を喫した側が、戦場から整然と撤退できた事例は少ない。大抵が敵から徹底的な追撃を受け、四分五裂（しぶんごれつ）させられてしまう。それは陸海を問わない一つの真理である。

彼らも全滅は確定した事実であり、免れようがないかと思われた。しかし予想されていた敵機の追撃はなく、どうにか十数機が戦闘空域からの脱出に成功する。これには彼らの方が驚いた。敵に背を向けて逃げ出した以上、全機が撃墜されてもおかしくないと覚悟していたからだ。

「第二次攻撃隊の接近に備えた措置か？」

疑問を感じるが、答えを確認する術はない。

尻に帆をかけた彼らは、這々の体で退却した。

「来襲した敵機の遁走を確認しました！」

見張員のその報告に、「こちらも確認したよ」と英は長官席に座したまま答えた。

戦艦「八洲」の第一艦橋である。

「輝雲」からの緊急通信と対空電探の反応から敵機接近は間近だと確認した英は、第一一五駆逐隊を引き連れて浦須賀軍港から出港していた。

そして事態は予測通りの進行を迎え、重苦しい雰囲気がかつて満ちている。敵機の迎撃に成功——美御が率いる「蒼電」隊が四倍の敵勢を蹴散らしたのであるが、燃料と弾薬を一気に使用した彼らを収容し、補給を受けさせられる時間的余裕があるのかと言えば、大いなる疑問だからだ。

「取り敢えずは凌いだが」英は長官席から確認できる情報を一瞥してから呟いた。「まだ来そうだな。それに東府軍港が敵機の群に襲撃されている」

「『蒼電』隊は薄木基地にでも降ろすしかありません」鶴賀が進言した。「下手に本艦に収容しますと、そのまま発進の機会を喪いかねません」

「薄木基地は第一艦隊からの支援要請——この場合は命令ですな——を受けております」釘村が周囲を取り巻く環境を推測した。「次に敵機が来ようとも、我々の上空直掩は望めますまい」

参謀たちのその言葉に、英は爪を噛みそうな顔で頷いた。「やはり自力で凌ぐよりないか」

出港直後に航空奇襲を受ける——という最悪の脚本（シナリオ）を回避するために、早い段階で切札を切ってしまった後悔が、言葉に滲んでいるかのようだった。

「蒼電」が装備する機銃は、「紫風」と同じものだから、薄木基地に降りても、給弾不能にはならないだろうが、「他所から来た機体」に彼らが親身に接してくれるとは到底思えない。

第一艦隊への支援が急がれるし、薄木基地そのものが攻撃を受ける可能性がある——敵が制空権確保を狙っているのは、大和平基地への攻撃で判明している——事を考慮すれば、最悪それが終の別れとなりかねなかった。

「我らは僅か五隻」楠参謀長が眉を歪めた。「艦隊とは名ばかりで、一個戦隊程の戦力もありませんが」

「友軍が叩かれている。我らだけで逃げる訳にはいかんのだ。それに——」英は外へと視線を転じた。

「如何に『八洲』が韋駄天とは言え、艦載機を振り切れとは思えないぞ」

対空電探が新たな機影を捉えたのは、それから程なくしての事だった。

初めて行く場所でうまく攻撃できる確率は、案外低い。事前に予想していたのと条件が違うというのは、ざらにあるからだ。不足する攻撃力を補うのは、勢い数になりがちで、攻撃側が物量作戦で押し切るとの展開が目につきやすい。

レンネンキャンプもその呪縛から逃れられず、第一次攻撃隊とほぼ同数の第二次攻撃隊を、さほどの間を置かずに発進させていた。彼らは本来ならば東府軍港への追加攻撃——第一艦隊への止めを担当する予定だったのだが、「浦須賀軍港の方にも有力な軍艦がいる」との報せを受け、急遽

目標を変更した。

それにしても三〇〇機はやり過ぎだと言えた。戦場では時に「何故これ程の数をそんな場所に？」との事象が起きるが、今回もその類이었다。浦須賀軍港に停泊していたのは、お披露目式に参加する予定だった「八洲」とその護衛である駆逐艦四隻を除けば、航空母艦に改造中の潜水母艦と修理点検（オーバーホール）中の特設巡洋艦が数隻いるぐらいで、めぼしい標的などいなかったのだから。

本来であれば、これは単なる過剰殺戮（オーバーキル）になっただけであろう。如何に戦艦とは言え、一隻で三〇〇機――正規空母三隻分の攻撃力と立ち向かう事になったとなれば、沈没は必至だからだ。

苦戦中の友軍のために敵を引きつけた――との意を込め、その艦は撃沈されても伝説になったであろう。

だが、此度敵の大軍と正面戦闘をすることになった艦は、ただの戦艦ではなかった。その事を思えば、あるいはこれが正当な評価だったのかも知れない。

「敵機接近中！ 推定で三〇〇機！」

「主砲使用弾種三式弾！」

電測員から報告を受けた瓜生は、即座に新型対空砲弾――三式弾の使用に踏み切る事にした。三式弾に搭載されている近接信管は、現段階では最高機密に指定されるべき存在だが、出し惜しみして使いどころをなくしたのでは意味がない。

「三式弾装填（そうてん）！ 測敵開始！」

対空電探と測距儀が連動して、敵機との距離を測り始める。電子の眼と光学測定器の組み合わせである。本来なら水と油になりそうなものだが、機械と名人芸が共存できた時代の話なのだ。これらは訓練時と同様に、即座に必要とされる数値を弾き出した。

「主砲発射！」

彼我距離四万二〇〇〇間という、従来の戦艦であれば砲弾を届かせる事さえ不可能な隔たりを、「八洲」の五―サンチ五〇口径砲から放たれた三式弾は、僅かな時間の間に駆けていく。

「八洲」が主砲を発射する様子を望見していた聯合帝国軍機の群――その搭乗員らは、碌に警戒もせず、

「莫迦な真似をしやがる。戦艦の主砲で艦載機を墜とせる訳があるまいに」

そう嘲笑する。これは従来の戦艦主砲用の対空榴弾、その命中率が、お話にならない程低い事による。発射速度が対空機銃とは比べるべくもない――高角砲と比べても遙かに遅い大口径砲で、高速かつ小型な目標を狙い撃つのは難しい。

それに加えて、対空電探と連動していない射撃で、時限信管付の砲弾の使用というハンデがあるのだから、当たる方がどうかしている。主砲射撃が戦艦にもたらす負担を考えれば、やらない方がましだとさえ言える。

だが――

今回彼らに向かい発射された砲弾は、従来の対空榴弾とは次元が異なった。電探と連動してもいた。

その結果、過る認識を正される瞬間が訪れた。

一発あたりの危害半径が五〇〇間にも及ぶ火球が、蒼空に咲き誇る。直近にてその爆発の時を眼にした搭乗員らの眼には、直ぐ近くで別の天道が生まれ出でたのではないか——と思わせるだけの輝きが生じていた。

砲弾内に仕込まれていた鉄球が、寒天状の油が、砲弾自体の破片が周囲に飛び散り、戦闘機と爆雷撃機の区別なく、一緒くたにして粉碎する。風防を防弾硝子ごと吹き飛ばされた「ドルニエ 2 号」が操縦不能となり落下し、装備していた魚雷を撃ち抜かれた「コメート」が誘爆を起こし虚空へと消える。

三式弾の危害半径に飛び込んだ艦載機の群は、その操縦者たちが何が起きたのかを理解する前に、尽く薙ぎ払われていた。同じ航空機が相手なら十分に役立つはずの装甲板も、この凄まじい攻撃の前では、火焰放射器に捌られた塵紙以下の存在に過ぎない。

強力な殺虫剤を振りかけられた羽虫の如く落ちていく艦載機の群を視て、「八洲」艦橋見張員が万歳を叫ぶ。

五一センチ砲という前代未聞の大口径砲を装備した「八洲」は、その引き替えに、主砲射撃時は対空機銃が使用不可能になるという問題を抱えていた。主砲発射時の衝撃が強すぎ、機銃員を避難させておかないと、吹き飛ばされてしまうのだ。

故に最初に戦果を肉眼で確認したのは、対空戦闘に縁が深い対空機銃員たちではなく、艦橋見張員だった。

長官席に座する英も、対空電探の反応からそれを確認していた。今の一撃で五〇機前後は消滅したらしい。

「『蒼電』隊が撃墜したのが三〇機前後だから、『八洲』関係だけで八〇機は始末したか」

正規空母一隻分の戦力が消えた勘定である。

だが、戦争は運動競技とは違い、数字を競うものではない。仮に直ぐ近くにいる三〇〇機全てを始末したところで、敵が更に増援を繰り出して来たら、こちらが沈められたら、戦いは負けなのだ。

「続けて撃て！」

戦闘に直接敵に関与する必要がなく、論評を加えている余裕のある英とは異なり、瓜生は忙しい。

三式弾の威力が如何に凄まじいとは言え、来襲した敵機の全てをそれで叩き落とせる訳がない。

必ず途中で墜とし損ねた奴が接近してきて、そこからが真の意味での正念場となろう。

主砲弾装填と測敵が先程と同様に進められる中、聯合帝国軍機の前進も続く。彼らは「正体不明の対空砲弾」に確かに肝を潰しもしたが、戦慣れした者らしく、その弱点も看過していた。すなわち連射が利かず、分散すれば威力が減じるという事を。

「全機散開せよ！（ブレイク）」

第二次攻撃隊隊長——フランツ・ゲルングロス中佐が指示を出す。本来なら編隊を散開させると攻撃時の命中率が低下するので避けるべきなのだが、やむを得なかった。固まっていると一度

にやられる危険がある。

二度目の主砲射撃は、それでも編隊が完全に散開する前に行われたので、彼らに少なくない犠牲を強いる。十数機が吹き飛ばされ、機体の残骸――プロペラや発動機の一部が、その搭乗員諸共、無残に砕かれた状態で海へと落ちていく。

しかし残った二〇〇機以上の編隊は、細かく形が崩れてはいるが、「八洲」に対しその牙を剥き出しにしたのである。爆音が迫ってくる。

「主砲射撃中止！ 近接対空防御！」

瓜生が間髪入れずに指示を出す。その途端に、避難していた対空機銃員が持ち場に就き、高角砲群も合わせて射撃を開始する。

「莫迦め、遅い！」

この時点であっても、まだ「八洲」を舐めている――何しろ相手は周囲の護衛艦艇を含めても五隻なのだ――加艦載機隊は、一直線に彼女を目指した。

どれだけ遠距離砲撃能力に長けていても、所詮は戦艦だ。近場の防御はおざなりなものだろう――と。

されども「八洲」の対空火力は、並や大抵ではなかった。片舷だけで一二・七センチ連装砲一二基――駆逐艦四隻分の火力があるのだ。そして無数の四〇ミリ機銃。

活火山が突然溶岩を噴き上げた時のような、凄まじい衝撃が周囲を満たした。測敵を終えた二〇・三センチ砲も射撃に加わっているのだから、当然と言えば当然なのだが、従来の戦艦、その常識を越える対空火力をいちどきに浴びせられた艦載機の群は、先に三式弾に粉碎された者たちと同じく、何が起きたのかを理解する暇もなく、片端から撃墜された。

「莫迦な……！」

ゲルングロスはいった。先程に比べれば威力は小さいが連射力に優れる対空榴弾に、文字通りの弾幕を形成する高角砲／対空機銃群――こんな艦がいたのか？ いてよいのか？ 疑問が胸を埋め尽くした。

濃密な対空砲火を躲し、どうにか投弾に成功したとしても、「八洲」は重巡や正規空母を思わせる速力を持つ。爆弾魚雷は容易く躲かれ、虚しい水柱を立てるばかりとなる。

「ドルニエ2号」や「コメート」は、北ヤフリカ戦線や南加大陸諸国との戦闘で猛威を振るい、「空飛ぶ死神」との異名をつけられてきた。

その名機が、橋道洋戦線に顔を出した途端に、僅か一隻の戦艦に通用しない――さながら蠅や蚊の如く墜とされるなど、悪夢としか言いようがない。

夢なら覚めてくれ――との思いが、ゲルングロスの心を満たす。普通なら楽勝のはずの戦闘が、今や極めつけの悪夢となろうとしている。足掻けば足掻く程に絡まっていく蜘蛛の糸を思わせる悪夢――

自分たちが受けた理不尽な仕打ち、これに腹を立てた彼は、頭に血をかつと登らせた。彼の愛機は水平爆撃用の一石徹甲爆弾を搭載していた。これは本来ならば高度六〇〇〇～八〇〇〇間から投下するものなのだが、それを高度数百間からぶつけることに決めた。

信管が作動するかどうか怪しい限りだが、目標物は限りなく堅そうなので、どうにかなるだろ

うと考えた。そんなゲルングロスの後に、一〇機が続く。

凄まじい対空砲を放つ「八洲」の直上は、近づくのでさえ心的な拒絶感があった。しかし真上であれば構造上は他の艦が支援しなければがら空きのはずで、理論上は一番安全なはずだと言えた。

「くたばりやがれ！」

口にしている当人も、半分も信じていない台詞。

全弾命中しても、恐らくは致命傷を与えられず、対空火器の何割かを減じさせるに留まるだろう。

だがそれでも良かった。この悪魔のような艦に一矢報いねば、戦死した仲間たちが浮かばれない。

ゲルングロスが悲壮なる覚悟を固めつつ、投下桿を飛行としたその時、更なる衝撃が彼らを見舞う。

何とした事か、煙突とおぼしき部分から、白い発射煙が生じたのだ。それも一発や二発ではない。断続的かつ高速に。彼は眼を大きく見開いた。これは一体何が起きたのだ!?

訳が判らぬままに、ゲルングロス本人と彼に続いた部下に、命中弾あるいは発射物の付近での爆発が起き、彼らは瞬間的に全滅する。――機――一個中隊分の艦載機が溶け消えたのである。

一度に三〇発纏めて発射された大型対空噴進弾――それがその正体だった。三式弾に仕込まれていたのとは別の近接信管を装備するそれは、実戦初使用で、その製造理念――直上に侵入した敵機を粉碎する――が間違っていなかった事を証明したのだ。

「化け物か！」

味方機が被った半端ない被害――それに肝を潰した残存機の面々は、異口同音に呻いた。数百機単位で攻撃すれば、戦艦でさえも撃沈可能なはず――との確信は、とうの昔に揺らぎ、音立てて崩れ落ちていた。

そこにはかつて存在した幻想――「戦艦は海上の女王で、それを撃沈できるのは、同じ戦艦だけ」という概念が、生々しい煌めきと共に機能していた。またそう思わなければ、自分たちの不甲斐なさに呆れ、自決したくなる程の衝動が込み上げてくる。

攻撃隊は「八洲」に攻撃を集中し、他の艦――「霧雨」「雨雲」「夕立」「時雨」にまるで関心を払っていなかった。そしてその弊害も現れてきた。

長一〇サンチ砲を一隻につき一〇門装備する彼女たちは、敵機の攻撃が「八洲」に集中しているのを見抜き、その周辺に猛烈な弾幕を展開したからである。

もはや何が原因で墜落が生じているのか判らない――との状態に、加軍機側は陥る。

爆発が生じる度に「ドルニエ2号」や「コメート」が木端微塵になるのだが、それが「八洲」の副砲から放たれた三式弾によるものなのか、高角砲の直撃なのか、対空機銃の命中なのか、はたまた対空噴進弾が挙げた戦果なのか、防御側もうまく掴めない――との飽和状態になる。

とにかく皆が夢中で行動した。

「八洲」の長官席で泰然と構えている――ように見える――英にしても、対空電探に表示されている輝点が現れては消えていくので、何が起きているのか、実のところきちんと確認できてい

ない。

自分たちは、このまま時の牢獄に囚われて、永劫に敵と戦い続ける運命を甘受せねばならないのではないか？

そんな超自然現象的な思いを抱き、恐怖を覚えた者も少なくない。戦場に於ける一秒は、時に日常の一時間よりも重く感じられるのだから、当然の反応だと言える。

だが、どれ程楽しい時間でも、無限に続く訳ではない。苦痛にしても然り。

戦い続けた一同は、一方が新たな攻撃がないことに気づき、もう一方が爆弾魚雷を使い果たしたことに気づき、それぞれの平穏を、一時的とは言え手に入れた。

「敵は――逃げたのかね？」

英は艦橋見張員に、同意を求めるように訊ねた。

「はい」艦橋見張員は頷いた。「視界に映る範囲内に、新たな攻撃を仕掛けてくる敵機はおりません」

「電探も綺麗なものだ」英は戦闘自体に参加していないし、余分な口も挟んでいない。しかし気疲れが激しく、座席に体重を思い切り預けた。

「取り敢えず凌いだか」

艦隊最高司令官の言葉は、額面通りに受け止められた。

第三次攻撃隊が来るにしても、機銃の銃身を冷却し、兵員を休憩させる暇ぐらいはあるだろう。

何かをする時に、得意分野だと「朝飯前」だと表現することがあるが、日の出とほぼ同時に攻撃を受けたような感がある「八洲」の一同は、事が事だけに、朝食も摂らずに戦闘を続けた。

いい加減将兵の消耗も激しいだろうと考えた英は、

「艦長、時間的余裕があるのなら、戦闘配食を手配させてくれ。空きっ腹ではこの後に響く」

そう支持を出した。戦闘配食は通常の食事――煮魚や味噌汁がつく給食とは異なり、握り飯に沢庵ぐらいしか出ないが、それでも最低限の熱量（カロリー）は摂取させられる。

「判りました。直ぐに命令を――」

瓜生が同意して艦内電話を手にしかけた時、

「一大事です！」

通信室から将校伝令が駆け込んできた。

彼のただならぬ様子から、事態の急変を察知した英は、「報告は簡潔かつ正確に言い給え」という紋切り型の注意は控え、「何が起きたのだ？」と質問を発するに止めた。

「薄木基地が放った索敵機からの報告です。戦艦六隻を含む敵艦隊が、当方に接近中だと！」

場が瞬間的に凍り付いた。

敵機動部隊だけで手を焼いているのに、戦艦部隊が前進中だと聴かされたら、思考停止状態になる者がいても不思議ではない。

「それは誠か？」英が怪訝な顔をして訊ねた。

「複数の索敵機が確認しております」伝令は断言した。

「承知した。肝は持ち場に戻り給え」

伝令を下がらせた英は、流石に厳しい表情を浮かべ、腕組みをした。通常編成の艦隊であれば、「八洲」の他に巡洋戦艦二隻――「岩城」「清石」がいるし、愛雄級重巡洋艦四隻――「愛雄」「高宕」「摩海」「鳥耶」が使えるから、艦隊決戦を恐れる必要などないが、今は「八洲」と駆逐艦四隻しかない。

その状態で戦艦六隻を擁する敵艦隊に勝負を挑めば、はなはだ分が悪いのは、誰の目にも明らかだ。

敵の目的が「八洲」の撃沈なのか、浦須賀軍港の破壊にあるのか、あるいは市街地への無差別砲撃なのかは不明だが、下手に根拠地を護ろうとすると、艦隊と基地の双方を喪うことに繋がりがねない。

「提督、我々は多数の敵艦載機を引きつけ、浦須賀軍港を護り抜きました。それで友軍に対する義務は完遂したものかと思われます」楠が厳しい表情で進言した。「これ以上の戦闘は我々の手には余り、将兵に徒に損害を強いるだけなるかと」

それは正論である。軍事行動である以上、奇跡が起きるのを前提にして話を進める訳にはゆかぬ。

英にしても、戦い続けるだけが勇気の発露ではないと心得ている。退くべきなのだ。今は。だが――

「浦須賀軍港の近くには、『八洲』のお披露目式を視ようと集まってきた民間人が大勢いる」英は自分が招待した養い子たちの顔を思い浮かべながら言った。「我々が自分の都合で退けば、彼らはどうなる？」

「それは――」

「軍人や軍属が戦時中に死ぬのは、やむを得ぬ話だろう。だが、護るべき民間人を置き捨てて逃走したとなれば、我らは陛下や国民にどう顔向けをするのだ？ 自らの存在気をかなぐり捨ててまで生きるべきなのか？」

艦隊最高司令官にそこまで言われると、参謀長も反論できなかった。相手が艦載機ではなく戦艦であれば、「八洲」の韋駄天ぶりを思えば、逃げ切れる確率が高いが、誇りを捨てた者が身の置き場をなくすとの論法を持ち出されると、覚悟を決めるしかなかった。

「……仕方ありません」

彼はため息をついて、丸眼鏡の位置を指先で直した。次いで、周囲に控えている参謀陣の顔を見回した。

――今更逃げたいと言う者はおるまいな？

その意を込めて。

誰も艦隊最高司令官や参謀長に反対しなかった。

「全員やる気のようにです」楠は苦痛を突き抜けた先に感じる何かを、自覚したようだった。

「宜しい。大いに宜しい」英は力強く頷いた。

「もう一合戦挑むぞ！」

こうして「八洲」は自ら修羅の海へと乗り出した。

東府軍港への攻撃が成功したとの報せは、ゲオルクの許へも届いていた。矢隠級戦艦二隻を撃沈破し、付近にいた神勢級戦艦二隻にも中破程度の損害を与え、その他に巡洋艦や駆逐艦を数隻沈没乃至着底させたという。

「爬間諸島沖海戦で撃沈したのが戦艦四隻だからな。これで敵の戦艦部隊は壊滅したのと同じだろう」

戦艦「ヴァレンシュタイン」第一艦橋でその報告を受けたゲオルクは、取り敢えず及第点を出したことに満足感を覚える。大艦巨砲主義者である彼からすれば、艦載機が戦艦を撃沈するなど、「余程の僥倖に恵まれない限りありえない」話であり、奇襲攻撃が成功したからだろうと、自らの着眼点の正しさを誇りたくなる。

だが、航空攻撃に対する続報は、褒められたものではなかった。浦須賀軍港で発見した新型戦艦（アンノウン）を攻撃したのは良いが、投入機三〇〇機中一六八機を撃墜され、敵戦艦に与えた損害は恐らく皆無だという。

「発見したのは戦艦一隻に軽巡洋艦四隻だと？」

浦須賀軍港撃砕を計画するゲオルクは、その前に立ち塞がる敵艦隊の規模を視て、首を捻る。

早い話、攻撃隊がこの程度の戦力に撃退されたという話自体が信じ難いのだ。

戦場には嘘も誠も含めて、あらゆる噂が飛び交う。

集団心理というものもそこに響くから、駆逐艦が巡洋艦に、巡洋艦が戦艦に見えるというのが、熟練兵でもありえるので、一概に艦種誤認に代表される敵戦力の過剰見積もりを批判する事は出来ない（そういう現象が起きた時のために、司令部があるのだと言える）。

しかし僅か五隻の艦隊——と呼ぶのもおこがましい小部隊——が三〇〇機にも及ぶ艦載機隊の攻撃を凌ぎ、あまつさえ無傷ですと言われて、はいそうですかと納得できない。攻撃参加者が全員素人かそれに類するような連中ならばともかく、機動部隊に籍を置く飛行士は、皆が手練れなのだ。

これはもう、想像を絶する怪現象が起きたと解釈するよりなく、それはもう戦艦でどうにかするしかなかった。

「航空部隊が仕留め損なったというのであれば、我々が決着をつけるまでだ」

ゲオルクはそううそぶく。本来であれば、敵艦隊撃滅の栄光は、分け前を用意するとの意を込めて、機動部隊に与えるつもりだった。だがその機動部隊がドジを踏んだとなれば、戦艦部隊が尻ぬぐいをする必要があった。

敵国本土で強力な戦艦と正面から激突する事に対する不安はなかった。ゲオルク艦隊は戦艦が「ヴァレンシュタイン」「パッペンハイム」「マントイフェル」「ラインハルト」「カール＝グスタフ」「ルドルフ」の六隻を数え、巡洋艦もガルデン級重巡三隻、レーベ級軽巡四隻がおり

、その他にZ級駆逐艦一二隻が控えている。

発見した敵戦艦が極めて強力なのは疑う余地がないが、兵力差で圧倒しているし、あちらは対空戦闘の連続で乗組員たちも疲労しているはずだ。

質と量の双方で敵を圧倒していれば、負ける気遣いなどない。勿論損害は受けるだろうが、それは許容範囲に留まるはずで、敵艦隊撃滅後に浦須賀砲撃を敢行しても、問題はなかろう。

艦隊司令官はそう考えていたし、その周辺に控えている参謀陣も同じ考えだった。これは彼らが極端な楽観主義者だったことを意味しない。軍事的常識から考えて当然の事なのだ。

戦争とは時に数と勢いである。

質で劣る側が突進力を頼りに、敵勢を打ち破った事例は数多く、相手が仮に四〇センチ以上の主砲を積んでいたところで、三六センチ五〇口径砲七二門を用いれば、十分に撃破可能であろう。

。

むしろ索敵機の報告から、敵艦隊が浦須賀軍港沖に留まるらしいと確認された際、敵将の正気を疑った程である。余程根拠なき自信があるのか、戦わずに身を退くのを潔しとしない頑固者なのかは不明だが。

「どんな艦が現れようが、この圧倒的な火力の差をどうにかする術などあるまい。戦艦・軽巡纏めて仲良く海の藻屑にしてくれるわ」

ゲオルクの心眼は、間もなく戦うことになる敵艦隊ではなく、既に任務達成後の栄光を捉えていた。

浦須賀軍港を背後に控えた「決戦」を企図した英は、流石に内心穏やかではいられない。ただでさえ劣勢なのに、「軍港周辺に流れ弾が落ちないようにして戦え」とはとても言えないからだ。

。

政治的制約が軍事作戦を破綻させ、ひいては国家自体を破滅へと追い込んだ話は多いが、現場指揮官の自分が、そうした莫迦げた事態を引き起こすのは、死んでも御免だった。

英は周囲にいる友軍に多くの期待を寄せていない。

直接的指揮下にある第一一五駆逐隊にしても、基本的に防空駆逐艦だから、魚雷を装備しておらず、敵戦艦の撃沈は狙えない（艦体が大型なので、敵が軽巡だと思い込み、警戒心を呼び起こしはしたが）。

薄木基地にしても、自分たちの事に忙しいらしく、直掩機を寄越す気配がない。真田であれば強制権を持つ命令を出す権限を持つが、英が出来るのは相手の気分次第である要請に過ぎず、目の前の友軍を見捨てる事が、自分たちの生命維持に直接響いてくる最前線の部隊ならばともかく、官僚的処世術に長けているはずの本土防衛用部隊に奮戦を期待するのは虚しかった。

「初陣から随分と酷い有様だなあ、おい」

誰に言うでもなく、英は呟いた。

これは自らの捻（ねじ）れた運命を嘆いているようにも、一個艦隊の最高司令官として初めて臨む戦闘が異例尽くしである事に呆れているようにも聴こえた。

だがその実際は、英が生死を共にすると定めた艦――「八洲」へのぼやきである。

国家が多大な予算を費やして建造した大戦艦ともなれば、本来であれば一国の運命を賭した艦隊決戦、その一翼を担うべきなのだ。それこそがあるべき姿であり、理想的な初陣だと言える。

されども「八洲」の初陣は、僅か四隻の防空駆逐艦を連れた、なし崩しの防衛戦闘である。「艦隊を用いた決戦」には違いないが、はなはだ均衡（バランス）を欠いた戦力で戦わねばならず、瑞穂海軍の情報管理、その杜撰さが窺える。

もし敵の接近を事前に察知できていたのであれば、このような事態は起きなかったはずだ。第一艦隊を予め洋上で待機させておくとか、関八州地区に基地航空隊を集結させ、鉄壁の護りを敷く事も出来たはずだ。勿論、第七艦隊――遊撃機動部隊も全艦触先を揃えた状態で浦須軍港沖に存在し、敵を迎撃できたろう。

歴史に「もし（イフ）」はないと言われるが、爬間諸島沖海戦で大打撃を受け、ようやく再建したばかりの戦艦部隊が少なからぬ損害を受け、「八洲」一隻で戦艦六隻を含む部隊と戦わねばならぬ事を思えば、ぼやきたくなる気持も理解できよう。

もっとも、美御が英の傍に控えていたならば、
「これが我々の宿命だと思えば、気になさる事もありますまい」

今までが今までの意を込めて、そう口にしていたであろう。事実、彼らは劣勢の中で戦を始める事が多く、むしろ優勢な形で臨めた方が少ない。

そのあたりの事に思いを馳せた英は、そうだな、それこそが運命だと思えば、何程の事があるうか。

電測員が敵艦隊の接近を電子の眼で認めた時、英はその「彼女なりの運命」と直面する覚悟を固めた。

「彼我距離五万二〇〇〇間なり！」

電探照準射撃なら可能である。だが、測距儀に代表される光学照準装置は使えない。肉眼で目標を捉える事が出来ないからだ。

「彼我距離四万まで引きつけるんだ」英はきつく命じた。「肉眼で確認できる距離まで接近してから砲撃開始だ」

「それでは」砲術参謀――豊島拡が眉を顰めた。「完全なる射程圏外（アウトレンジ）戦法が望めませんが」

「遠距離砲撃だと精度が鈍る」英はその進言を即座に却下した。「弾着観測機も手許にはない。無駄弾を撃っている余裕は、敵艦の数からしてない」

「必中が期せる距離から始めると？」

「四万間でも大分乱暴な主張だが、先程の対空射撃を見る限りでは、充分行けるよ」

元が戦闘機搭乗員の英だが、砲術に関しては、兵学寮時代に得意としていた分野、その一つであるだけに、自信を有していた。

それに五一センチ五〇口径砲に耐える装甲を、敵艦が有している訳がない――との計算もある。

もしそんな艦を敵が多数有していたのなら、この戦争はどのみち勝ち目がない。無条件降伏要求撤回を求めて、民族の滅亡まで戦い続けるより仕方がなく、死ぬのが遅いか早いかにいうだけ

になる。

どうかそんな事になりませんように――英は、天におわす何者かに、真摯な祈りを捧げた。

超自然的な存在に、戦場で祈るのは何より虚しい行為である。その事は、宗教家に育てられた英とても認めている。しかし、二五対五という五倍の数的差を見せつけられると、そうするよりなかった。

だが、祈りは内心で捧げられたものだから、周囲に控えている参謀陣は、彼女の心情を完全に誤解した。

何故なら、第七艦隊――遊撃機動部隊の最高司令官は、唇をあからさまに歪め、傍目からは笑っているように見えたからだ。

恐怖心から責任感を放棄する指揮官がいる事を思えば、その場の最高責任者が笑い始めた事に不安を覚えた者がいても不思議はない。

けれども、肝の太さは天下に広く知られている人物の微笑ともなると、一種異様な頼もしさを感じさせるのもまた事実。楠参謀長以下艦隊司令部要員は、望んで笑みの意味を誤解した。

そうしている間に、敵艦隊との距離が、急速に詰まってくる。向こうに遠慮がないのだ。こちらを寡兵だと見做し、警戒心の欠片も抱かず、前進してきている。

――「八洲」の威力を見せてやる。

胸中でそう呟いた英は、彼我距離が四万に達するのを、今か今かと待ちわびる。

時間経過が妙に遅く感じられ、一秒ごとに催促したくなるような焦燥感が心を焦がしている中――

「彼我距離四万間！」

待ち望んでいた報告が飛び込んできた。

英は矢も楯もたまず、怒声を発した。

「主砲砲戦開始！ 目標敵戦艦、撃て（テェッ）!!」

測敵を既に終えていた主砲射撃指揮所が、その命令を受けて、即座に砲撃に移る。電探と二〇間の大きさを誇る測距儀の双方から射撃に必要な情報を入手していたそこは、各主砲塔に理想と言える数値の下で砲撃をさせた。

主砲の一斉射撃は、甲板上を凄まじい爆焰で包み、雷鳴を連想させる爆音で覆った。何よりも男性的な光景。

一度成層圏にまで昇った九発の五一センチ砲弾は、その後に敵艦の未来位置へと向け、急速に落下を開始した。その様は灼熱に包まれた隕石が地上へと落下する様を思わせる。

「八洲」の主砲射撃の瞬間は、ゲオルク艦隊の方でも認めていた。水平線の彼方に何かが煌めいたかと思うと、天道を目指すような勢いで橙色の塊が射出されるのを、艦隊司令官を含めて、大勢の人間が目撃していたのである。

「莫迦な真似を」ゲオルクは敵の反応を嘲笑う。「我らの数に恐れをなして、当たりもしない距離から撃つとは――」

一般に戦艦の主砲弾は、風速・風向・気温・気圧などを観測しなければ命中を期せないとされている。

そこに地球そのものの自転や、敵艦の反応などを加味すれば、最大射程で当てられるかどうかなど、問いかけるのすら虚しい。彼我距離が二万間台にならないければ、本格的な砲戦を行うのは無理とも言われる。

にもかかわらず、敵艦は彼我距離が四万間という、正気を疑うような距離で発砲を開始した。

瀬踏みにしても、こんな観測が難しい距離では、普通はやらない。ゲオルクが周章狼狽の産物だと受け止めたのも無理はない。いやそれが常識的な判断なのだ。

だが――

発射された砲弾の軌道は、ゲオルクの思惑を裏切った。単縦陣を組んだ戦艦部隊――その三番艦である「マントイフェル」の周辺にそれは降り注いだのである。

九発中六発は、「マントイフェル」の周辺に水柱を立てるだけに終わる。高さが数十間にも及ぶそれは、されども眼にする者の肝を潰した。恐るべき高さを誇る水柱から、砲弾の威力を推定できたからだ。

排水量が四万石近いヴァレンシュタイン級戦艦の一隻が、三六センチ四連装砲塔三基を装備する第一級の戦艦が、正体不明の敵艦からの砲撃を受け、まるで浴槽に浮かべられた玩具の艦のように揺れている。

「マントイフェル」の艦長以下、全乗組員が戦慄する中、本当の衝撃は訪れた。第一砲塔と第二砲塔の間に、垂直降下してきた五一センチ砲弾が直撃し、そこをぶち抜いたのである。

重要防御区画に近い場所であるだけに、そこにも分厚い鋼板が張られていた。少なくとも、同級の戦艦――主砲威力指数だけならば、ほぼ同じの矢隠級戦艦の砲撃には耐えられるように造られていた。

しかし直撃した砲弾は、豆腐を田楽刺しにする串よりも鋭く、「マントイフェル」を刺し貫いた。艦内の各甲板が、乗組員らが悲鳴を上げる暇すらなく撃ち抜かれ、艦底部で大爆発が生じる。

この一撃で、「マントイフェル」は竜骨を叩き折られた。同時に衝撃が艦内電路を各所で寸断し、人間であれば背骨と神経を破壊されたのに等しい被害を加えた。

そして命中したのは、この一発だけではなかった。

弾着観測機用の昇降機に飛び込んだそれは、機関部とスクリューを瞬間的に崩壊させた。発艦補助装置も当然無事では済まされず、「マントイフェル」の艦尾は丸裸かつ廃墟になる。

最後の直撃弾は、欧洋州の古城を想起させる形をした、艦の脳髄――艦橋に直撃した。艦長以下そこに詰めていた高級乗組員たちは、何が起きたのかを理解する暇もなく、灼熱の鉄塊に薙ぎ倒されて絶命する。

時間的に見れば、これらの被害は間を置いて生じたものではなかった。ほぼ同時に起き、それぞれが致命傷と呼ぶに相応しい打撃を、彼女にもたらした。

艦首が爆発の衝撃に負けて脱落し、艦橋が屈強な樵（きこり）に一撃を見舞われた大木のように倒れ、艦尾が爆音立てながら崩落する。その様は荘厳さすら感じさせた。驕れる者に下される鉄槌――最終破局(カタストロフィー)の情景。

僚艦の乗組員らが息を呑んで見守る中、「マントイフェル」は艦体を三分された形で沈降――

止めとでも言うべき大爆発を起こした。

生じたキノコ雲が醜く変貌した姿を覆い隠し、大量の水蒸気がそれに合わせて立ち上る。まるで一発も放つ事なく撃沈された「マントイフェル」が、誰にも今の姿を視られたくない――と訴えかけるかのように。

戦艦一隻沈没――それは敵味方の共通認識となる。

一方は「そんな莫迦な……！」と呻き、もう一方はお祭り騒ぎが生じていた。

「やりました！ 我が射弾が敵艦を一発轟沈!!」

「八洲」艦橋見張員の報告を、艦隊司令部要員――楠参謀長たちは、手を叩いて喜ぶ。

爬間諸島沖海戦で、西部帝家艦隊は、彼我距離三万八〇〇〇間で有効弾を送り込むという離れ業を演じたが、それよりも二〇〇〇間も離れた場所にいる敵戦艦を一撃で轟沈させた事例など皆無であろう。

「八洲」はその初陣から世界記録（ワールドレコード）を達成した事になる。

「初撃は期待通りか」だが英は表情を変えない。口振りも冷厳な宗教家のそれだ。

「油断するな。敵はまだ戦艦だけで五隻いる。距離があるうちに続けて沈めてしまおう」

激情家である英は、周囲が熱狂している時の方が、比較的冷静でいられるのである。他人と違う事を見せつけたいのではない。騒いでいる他人を視ていると、何となく客観的になれるのだ。

「了解。目標の指定は？」

瓜生艦長が問いかける。先程の一撃は位置関係から真ん中近くの戦艦を目標としたが、敵艦隊の混乱を狙うのであれば、先頭に行く艦――恐らくは艦隊旗艦――を攻撃した方が効率が良いからだ。

「今沈めた艦の直ぐ後ろだ」英は敵艦隊の運動を電探の画面上から確認している。「艦隊運動を乱し、混乱させたい。やれるかね？」

「勿論！」

力強く頷いた瓜生は、主砲射撃指揮所に次なる目標を指定した。接近される前に可能な限り撃沈したいとの考えは、彼女も共通していた。

各主砲塔が生物のように動き、標的に筒先を向ける。照準を合わせ終えた途端に、発砲する。

轟！ としか形容しようのない砲撃音が響き、先程とほぼ同じ距離を音よりも早く駆け抜けた五一センチ砲弾は、今度は四番艦――「ラインハルト」の艦首部分に集中して直撃した。錨を収めていた区画――錨鎖庫（びょうさこ）が爆砕され、木端微塵となる。そして第一砲塔からその先が爆圧に負けて崩落し、艦体の二割程度をなくした状態で「ラインハルト」は停止した。

このような有様に成り果てて、どうして進む事が出来ようか。無理をすれば海水が大量に流入し、沈没を早めるだけである。彼女を救いたければ、他の艦で曳航（えいこう）を試みるよりないが、聯合帝国艦隊の将兵からすれば、ここは敵地のど真ん中である。悠長にそんな真似をしていたら、格好の的になり、救助をしようとした艦すらも巻き込まれ、ミイラ取りがミイラになるかも知れない。

つまり、「ラインハルト」はこの瞬間に喪われたのと同義になったのだ。傾斜が著しい状態で砲撃をしたところで、照準が定まらず当たるはずがないし、そもそも揚弾機が作動しないから、

砲撃自体が出来ないのだ。

何もしないまま戦艦の三分の一を戦列から喪ったゲオルクは、戦慄から顔を青ざめさせ、肩をわなわなと震わせていた。勝利は揺るぎないものだ、という確信が覚束ないものになりつつある。

三〇〇機からの攻撃隊を跳ね返し、損害らしい損害を受けていない――との報告が、事実をそのまま伝えていると、こうなると認めざるを得ない。

一瞬、撤退するか――との考えが脳裏をよぎる。敵は受け身の姿勢だ。本土を護る事こそが彼らの最優先目的のはずだから、こちらが退けば無理に追撃をかけてくる事はあるまい。

何しろ数は未だにこちらが圧倒的に多いのだ。縦しんば彼らが追撃してきたところで、機動部隊から応援を差し向けて貰えば、足止めは充分可能だ。

されども、政治的な問題がある。

ゲオルクはゲーリングに大言壮語を吐いて出撃した。敵艦隊に対する打撃は、機動部隊が挙げたもので充分であろうが、予定されていた浦須賀軍港への砲撃を、僅か五隻の艦隊に阻まれて失敗したとなると、その功績は大幅に割り引かれねばならない。

皇帝の親族でもあるゲオルクが、任務失敗を理由に厳罰を受ける恐れはないが、彼はゲーリングから莫迦にされるのが耐え難かった。あんな大兵肥満の豚野郎に舐められて堪るか、との感情的なもつれがある。

戦えばまだやれるはず――との思いが、ゲオルクを突き動かした。彼は吼えた。

「近づかねば勝負にならん！ 全艦突撃せよ!!」

指揮官がそれを決断した以上、皆が従わねばならぬ。各艦は全速での突撃を開始した。

2

「敵戦艦大破！ 行き足が止まります」

艦橋見張員の報告は、「八洲」がこの日二隻目の戦艦を仕留めた事を意味していた。敵地のでの大破航行不能は、自動的に降伏か自沈かに繋がるからだ。

「止めを刺しますか？」瓜生が英に訊いた。

英は頭を振る。言った。「もう動けない艦は無視しろ。それよりも次の目標を叩け」

一方的な攻撃で敵戦艦の三割を戦列から脱落させて尚不利なのだから、数的差というのは時に絶望的な要素になる。英はそう感じざるを得なかった。

しかし「八洲」そのものは主の不安を微塵も感じさせない動きを見せる。標的を敵五番艦に変更した彼女は、距離三万五〇〇〇間からまたしても直撃弾を出し、戦艦「カール＝グスタフ」を大破させた。煙突を倒壊させ、第三主砲塔を爆砕した結果だ。

排煙機能が御釈迦（おしゃか）になり、砲戦能力の三分の一を一瞬にして奪われた彼女もまた、行動不能な艦――その一隻となる。僚艦「ラインハルト」と共に、海上を漂流する廃墟と化した。

本来であれば、救えぬ艦に対し介錯――自沈処理を施し、その乗組員らを救助すべきであろう

。

だが、瑞加両艦隊は交戦中である。戦闘の方に忙しく、他事に構っている余裕などない。漂流艦二隻は邪魔な障害物扱いを受けて放置され、動ける艦が憎しみに駆られた人間同士の手により操られ、戦闘が続行となる。

――戦艦半分に撃沈破したのに、まだ来るか！

英は呆れ半分にそう思う。しかし敵将の気持も理解できた。戦艦の半分に潰されて手ぶらで帰れば、敵前逃亡や戦意不足を理由に、最悪処刑されかねない。

軍隊とは、信賞必罰を徹底させねば機能せぬ凶器である。如何なる者とてもその例外にはなり得ず、だからこそ理不尽な命令を実行に移さねばならない兵士たちも従うのだ。

「巡洋艦や駆逐艦も突っ込んできます！」

見張員が報せる。皆の顔が途端に引き攣る。

戦艦を人体に譬えれば判り易いと思うが、彼女は心臓への一突きだけで死に至る訳ではない。細かな傷を無数につけられても、沈没乃至戦闘不能になるのだ。それは失血死を間近に控えた者の最期に酷似していた。

「巡洋艦は副砲に任せろ。駆逐艦は第一一五駆逐隊に突撃を阻止させる」

細かな戦術指示を英は出す。本来なら艦長や戦隊司令官の職分なのだが、手持ちの部隊が少なく、また同時に対処せねばならない事柄が多いため、そのような姿勢にならざるを得なかった。

。

「了解！」

「八洲」の副砲であれば、重巡の主砲と同列である。

敵艦隊の重軽巡の性能はよく判らないが、六秒に一発発射可能な「八洲」の副砲で撃ち負ける心配は恐らくなかった。

急速に彼我の距離が詰まっていく。

浦須賀軍港を――ひいては付近にいる民間人を護るという大前提を遵守しなければならない瑞穂側には、戦術的な自由度はさほどない。とにかく敵に浦須賀を砲撃させるな、との観点からの防衛戦闘となる。

そうした瑞穂側の思惑を聯合帝国側も気づいていた。気づいてはいたのだが、ゲオルクが「八洲」に対する砲雷撃を最優先にするように命じていたから、半数で彼女を拘束し、残りが浦須賀軍港への砲撃を敢行するという戦術展開は見られなかった。とにかく目前にいる敵艦を潰すという動きを強いられた。

そんな状況下でも駆逐艦に乗る者たちは勇敢である。英から「敵艦の突撃阻止」を命じられたアドルフ・カウフマン中佐――第一一五駆逐隊司令は、司令駆逐艦「霧雨」から、全艦に檄を飛ばしていた。

「『八洲』に敵艦を近づけるな！」

「八洲」が規格外の艦であるのは、カウフマンにも一連の戦闘情景から理解できていた。しかし魚雷が何本も命中すれば、縦傾斜が狂い、その砲撃精度は著しく落ちるだろう。そうなれば、浦須賀防衛は絶望的になる。防空戦闘を優先して造られた霧雨級駆逐艦には魚雷発射管が装備され

ておらず、戦艦の撃沈など望むべくもないからだ。

突撃を続ける敵艦に、第一一五駆逐隊の方から突進をする格好になる。対艦戦闘でも威力を発揮する長一〇センチ砲が唸りを上げ、聯合帝国本土艦隊の標準艦隊用駆逐艦であるZ級の何隻かが、早くも被弾し、黒煙を立ち上らせるという有様になる。

「多少の戦力差など何程のものか！ 御国と陛下に我らの忠節の程をご覧くださいのだ」

瑞穂を第二の故郷と定めるカウフマンは、そんな言葉を口にする。これは政治的姿勢を現すためのものではなく、素で出たのである。彼の周囲に配属されている者たちにしても、瑞穂という国家への帰属意識が強い連中ばかりだから、露骨な点数稼ぎと感じたりはしなかったが、

「うちの司令は、そこいらの瑞穂人よりそれらしい」

そう改めて意識させられ、苦笑いを余儀なくされた。

一二隻対四隻という三倍の戦力差が横たわる戦いを、第一一五駆逐隊が技術と戦意――「八洲」に戦艦部隊が一方的に叩かれる様子を視て、聯合帝国の駆逐隊は、怖じ気づいていた――の高さにより優位に進めていた頃、「八洲」は戦艦・重巡各三隻ずつと軽巡四隻を向こうに回し、正面決戦を展開していた。

この段階では、敵戦艦隊との距離は、二万五〇〇〇間にまで詰まっている。重軽巡に至ると、一万かそこらだ。三六センチ砲弾と二〇センチ以下の中小口径砲が「八洲」の周囲に水柱をひっきりなしに林立させ、海面を掻き回している。

「敵艦隊との決戦を決意したのは私だが」英は響き渡る砲声の中、困惑したように呟いた。「まさかこれ程賑やかになるとは思わなかったな！」

一〇隻対一隻――普通、ここまで数の差が開けば、質の差は克服されてしまうものである。巡洋艦が乱射してくる砲弾が、ひょんな事から重要区画――艦橋や測距儀を破損させる危険性が高く、そうなれば如何に戦艦でも屑鉄になるよりあるまい。

しかし「八洲」の場合、高速給弾機を採用しているおかげか、戦艦と巡洋艦群を同時に敵に回して、問題なく戦っている。それどころか押している。

「八洲」から砲撃を受けた巡洋艦群が戦闘力を次第になくし、脱落していく様が肉眼でも確認されていた。

これは六秒に一発という、従来の二〇センチ砲ではありえない速射能力を持つ副砲と、片舷だけで連装一二基ある一二・七センチ高角砲の機能に頼る部分が多い。

ゲオルクは手数で「八洲」を沈黙に追い込む腹づもりでいたが、その手数でさえも「八洲」一隻に及ばないとなれば、残されたものはもはや単なる意地であろう。

だが、その意地に付き合わされる方は堪らない。命を懸けた死の競争（デス・レース）など、しかも勝ち目が薄い勝負など、途中放棄したくなるのが人情である。

「重巡『ガルデン』大破炎上せり。同『ベルヒデス』航行不能――」

見張員は固より、艦隊司令部要員ですらこの段階になると絶望に顔を歪めている。彼我距離が詰まった結果、問題の敵艦には何発か直撃弾を与えている。全く無抵抗でいる訳ではない。

けれども、命中弾が敵に対し打撃を与えていなければ、何の意味もない。命中力所から焰どころか煙すら上がらず、単に弾き返されているだけとなると、もはや打つ手なしである。

「戦艦や巡洋艦だけでは駄目だ。駆逐艦に雷撃させろ。駆逐隊は何をしているんだ！」

ゲオルクは苛立たしげに叫んだ。

勿論、彼らとて遊んでいる訳ではない。意気挫けそうになりながら戦闘を継続していた。その中でどうにか二隻が第一一五駆逐隊の妨害を突破し、肉薄雷撃態勢に入る。

「敵駆逐艦が突撃してきます！」

見張員のその報告に、瓜生は素早く応じる。

「高角砲に駆逐艦を狙わせるんだ！」

一二・七センチ砲は駆逐艦と言えば主砲に匹敵する。事実、瑞穂海軍は汎用性の高いそれを、駆逐艦では主砲に、巡洋艦や戦艦では高角砲として採用していた。

重軽巡に連続拳撃（パンチ）を見舞い、手数で多さで損害を積み重ねさせた高角砲群は、彼我距離四〇〇〇間――経験の浅い者であれば、ぶつけに来ているのではないかと誤解するような距離にまで接近してきた駆逐艦二隻を新たな目標に据える。

その様子を画面上から視ていた英は、「大胆な連中だ」と彼らの行為を褒めた。最大射程が四万間――戦艦の主砲並みだという第二空気魚雷でも、接近せねば命中は期せない。駆逐艦による突撃は、そのため行われる。

「だが、無謀だ」

駆逐艦は艦体の殆どを機関部が占める。高速性を発揮するために、装甲板も殆ど張られていない。極端に言えば、戦闘機が機銃を浴びせ続けるだけで穴だらけ。破れた障子のようになる。

故に肉薄雷撃は、彼らの犠牲の上で成り立つ。戦艦なら魚雷の一本や二本で死に至る事はまずないが、戦艦が装備する艦載砲――副砲や高角砲が一発か二発直撃するだけで、彼女たちは容易く大破炎上してしまう。

今回も似たようなものだった。

「八洲」相手に雷撃を敢行した、二隻のZ級駆逐艦は、退避行動の最中に高角砲弾に捉えられた。

一隻が右舷から左舷に突き抜ける形で砲弾を喰らい、たちまち均衡を崩して横転沈没。

もう一隻が二発同時に被弾し、艦首と艦尾を切断された。三つに分断された艦体は、そのまま見えざる手により海に引き摺られ、沈降する。

その様は巨像に蹴散らされた小型草食獣の兄弟が、断末魔を上げながら死に逝く様を想起させた。格が違いすぎたのだ。沈没に追い込まれたのは、彼女らの艦長、その腕に起因しない性能差による。

彼らにとり幸福であったのは、発射された魚雷の行く末を視ずに冥府へと旅立てた事であろう。

「八洲」の速力は重巡並みで、瓜生艦長は魚雷の直撃だけには注意を払っていた。故に発射された二〇本の魚雷は、容易く回避され、「八洲」に掠り傷一つ負わせていない。

ただし、彼らの努力は完全に無駄だった訳ではない。変針を余儀なくされた「八洲」は、砲撃の調子（リズム）を崩した。先史時代の技術に頼る部分が大きい艦だが、やはり人間が肝心なところを操作するため、ひょんな事から歯車が狂うのは仕方がないのである。

そこに彼我距離を二万間にまで接近させた、聯合帝国の戦艦部隊がつけ込む。第三砲塔に直撃弾が生じた。厚さ六五〇ミリを誇る装甲板が難なく弾き返すが、初めて主兵装に受けた敵弾に、動揺する者も出てくる。

「あまり好ましい展開ではないな……」

英にしても舌打ちしている。既に敵艦隊の半数近くは撃沈及び大中破させて脱落させたが、それでも敵は戦艦三隻と重巡一隻、軽巡二隻と駆逐艦六隻程度が健在なのである。

援軍が欲しいところだ。最も近い場所にいる味方艦隊が動けるとは思えないが。

——まったく、こんな状況を迎えるなど、海軍兵学寮では教えてくれなかったな！

非常識極まりない展開を迎える事になった原因が何を言うか——そんな風に自分を叱る声は何処からか聴こえるが、無視するよりなかった。「我が行いこそが未来の先例足るべし」——そんな気概を支えに。

3

浦須賀軍港の周辺は大騒ぎになっていた。当然であろう。海軍自慢の新型戦艦のお披露目式が開始されるとの触れ込みで、物見高い連中が野次馬根性を発揮して、早朝から詰めかけていたのだ。そんな時に直ぐ近くで開戦が勃発したとなれば、誰でも慌てる。

「最寄りの建物か地下鉄内に避難してください！」

警察官に在郷軍人、果ては国防婦人会の面々まで動員され、民間人の避難誘導が行われていた。

最初は単なる暴力（テロ）活動の警戒のつもりで来ていた彼らもまた、とても冷静ではいられなかったが、職務に対する忠実さを発揮する事により、どうにか正気を保ち、それを続けていたのだ。

「敵艦隊が浦須賀の沖合にいるだと!？」

「今、海戦が行われている最中らしい」

「海軍は——皇国聯合艦隊は何をしていたんだ！」

辞任した前首相——秋月実松が爬間諸島沖海戦での損害を正直に発表したもので、瑞穂国民は海軍の台所事情が芳しくないのを認めていた。

だがそれと敵艦隊が内地にまで接近してきたのを見逃したのは、話は別である。周辺海域の哨戒を担当していた航空機は、何故敵が此処まで近づくまで気づかなかったのか？ 潜水艦隊は何をしていたのか？ 情報部は何処で何をしている？

様々な不満が噴出し、人々の口から大蛇が放つ毒素のように垂れ流される。

「浦須賀沖にまで接近してきた敵艦隊は、戦艦数隻を含む大部隊らしい。『八洲』がどれだけ強力な軍艦だか知らないが、これでは勝ち目はないのではないか？」

悲観的な噂話が拡がる早さは、悪質な流行病のそれを思わせる。味方が負けそうだという話は、自陣営に自信が持てない時こそ語られ、いつしかそれが真実へと変貌してしまうのだ。

「『八洲』が負けたら、俺たちはどうなるんだ……？」

戦艦一隻に敵艦隊が砲弾全てを撃ち尽くすとは、到底考えられない。沿岸部にある建造物は、軍施設を含めて軒並み艦砲射撃という人工的な暴風雨に晒されよう。

練石がふんだんに使われている高層建築物であれば、一発や二発の流れ弾になら耐えられるかも知れない。

だが、瑞穂本国でおなじみの紙と木材で出来た家屋となると、近くに砲弾が落ちただけで、衝撃波に負けて倒壊しかねない。まだ空気が乾きがちな時なので、そうすると延焼は必至だろう。

避難民の中には、浦須賀が瑞穂本国で最初の戦災を被る街となり、瓦礫の山となる情景を思い描いた者が、少なからずいたであろう。この状況で味方の勝利を信じられる者など、そういるはずもない。

けれど皆無ではなかった。

浦須賀の地下鉄内に身を潜めている、英の義姉――神社御子は、少なくとも義妹が負けるとは考えていない。

彼女は突然の大騒ぎに不安がる子供たちを我が身で抱きしめながら、囁くように言う。

「皆、気をしっかりと持ちなさい。あなたたちの姫様が簡単に負けたりなどするものですか」

人間は信じたくない話を拒否する本能を持つ。御子もその一人だ。自覚はある。だが、彼女は英が常に劣勢の中で戦いを始め、奇跡を起こし続けてきたのを知っている。毎度毎度都合の良い展開を迎えられる訳がない――とは思うものの、彼女であればどうにかしてくれる、との期待感がそれを優っていた。

「御子さん」子供たちの中で一番の年長者――美琴が言う。「本当に平気なんですか？」

気丈なようでも大人には程遠い少女の瞳には、不安が刻まれていた。こうしている間にも、流れ弾が飛んできて、何かも一緒くたにして吹き飛ばされるのではないか――との想像を働かせたのであろう。

御子はそれを責める気にはなれなかった。

美琴は「催飯防衛戦」で父親を亡くしている。それまで不死身だと信じていた絶対的な存在を。

過去に戦争により地獄を見た人間には、御子の言葉は単なる気休めにしか聴こえなかったのだろう。

「大丈夫」御子は微笑んだ。慈愛を感じさせる、女神のような感じで。「あの娘なら勝つわ」

「その根拠は？」

「どんなに危険に身を踏み込んでも、今まで負けた事などないし、それに――」

御子は己の自信をうまく言葉で表現できるかどうかと迷った。人間には時としてこういう瞬間がある。言葉よりも重い何かを伝えねばならぬ時、他者への伝達に苦労する。

結局のところ、御子は笑みを崩さないまま、

「だって、あの子も傍にいるからね」

美琴が納得しかねる――との表情を浮かべかけた時、また大きな爆発音が響いてきた。思わず彼女は頭を抱え、その場に座り込んだ。天井から埃がぱらぱらと落ちてきて、彼女の黒い髪に白いゴミをつけた。

「敵か味方の艦が爆発したのではないか？」

そう囁き交わす声がある。果たしてどうなのだろうか――との疑問を、御子は呑み込んだ。今は子供たちと堅く身体を結び、離れ離れにならないように努力するだけだ。ただ耐えねばならぬ時間は長く感じられた。

4

英が待ち望んだ援軍は、意外な形で現れた。爆装した戦闘機の一群――「蒼電」隊が軽巡への爆撃を開始し、これを大破炎上させたのである。一二機と数は少なく、一隻だけの戦果であるが、こちらに援軍が駆けつけてきた――との形になり、敵艦隊への動揺が広まり始める。

「『蒼電』は戦闘爆撃機としての能力も持つと聞いたが――」

薄木基地が援軍を寄越す訳がない、との確信を抱いていた英は、燃料と爆弾の双方を融通してくれた事に、驚きを隠せないでいる。

「一二番でも軽巡相手ならば十分な威力が見込めます」鶴賀が技術的な問題に触れた。

「しかしよく間に合ったな」

楠も驚いている。軍隊では指揮官同士の反目に連絡の不備など珍しい話ではない。直ぐ傍にいるにもかかわらず没交渉で、各個撃破された前例は多いのだ。

「電探の反応を見るに」英は方角的に味方機だと判別できる機影を見つめながら言う。「美御たちは先陣らしいな。後続機が駆けつけてくれるようだ」

その通りだった。陸用爆弾を搭載した「烈山」や二五番を一発だけ装備した「陣山」など、現場の荒れ模様が判る攻撃機が混ざっているが、八〇〇斤航空魚雷を持てるだけ積んだ「聯山」がその中核を為しており、敵艦隊へ本気で攻撃する気なのが窺える。

「全部で五〇機程のようですが、これならば決定的な要素となりますな」

「違うない」英は頷いた。「とにかく助かった」

第一一五駆逐隊と交戦中の駆逐艦に陸用爆弾が見舞われ、重巡に水平爆撃された二五番が直撃し、今や三隻にまで数を減らした戦艦部隊の脾腹（ひばら）に魚雷が叩き込まれる。

「航空支援のない艦隊が味わう悲哀の満漢全席（フルコース）」とでも言うべき情景が現出する。何しろ対空戦闘陣形を組んでいる訳でもなく、対空電探を装備してもいない彼らからすれば、まさに寝耳に水だったからだ。

彼らの事前計画によれば、浦須賀の飛行場は、東府大和平のそれと同じように、早い段階で沈黙させられているはずだった。

ところが「蒼電」隊の迎撃を受けた攻撃隊が敗北を喫し遁走してしまうと、以降は放置され、無傷のまま健在だった。予定の狂いが最悪の形で姿を現した格好と言えた。

爆弾魚雷を見舞われ、一隻また一隻と数を減じていく艦隊の姿を目の当たりにしたゲオルクは、愕然としていた。まさかこのような結果になろうとは、想像もしていなかったからだ。

「莫迦な……こんな事が……！」

戦力比を考えれば、負ける気遣いなどなかったはずだ。なのに結果はご覧の有様である。傷つ

き著しく数を減じた味方艦艇を思えば、もはや勝機など絶無であるのが何より確実に伝わる。

「公爵――提督！ 撤退命令を願います。我々はもう限界です。ここは一度艦隊を後退させねば」

参謀たちは異口同音にそれを訴える。

艦隊旗艦「ヴァレンシュタイン」にしても、大型爆撃機――一式重爆「聯山」が投じてきた魚雷を一本受け、速度を二五航里に減じさせていた。後続艦「パッペンハイム」は五〇〇斤徹甲爆弾を第二主砲塔に受け、そこを旋回不能にされている。「ルドルフ」も急降下爆撃機が投じた爆弾を数力所に受け、各所から黒煙を上げ、戦闘能力を明らかに低下させていたのだ。

「限界――限界だと!？」

ゲオルクは額に青筋を立てた。理性の囁きはそれを現実だと認識させるが、今はそれよりも感情の叫びが優っていた。俺はこれより先には進めぬと言うのか！ たかがヤープ如きに叶わず、全てを喪うのか!？

耐えられなかった。敗北を喫する事も敵に背を向ける事も。それぐらいなら死んだ方がましだと思う。

機動部隊に援軍を差し向けさせれば、まだ戦闘継続は可能なのではないか、とそこに光明を見出す。

それは全財産を博打で喪おうとしている賭博師（ギャンブラー）の発想に似ているが、本当に焼きが回っている人間はそれに気づかない。戦いとはいつとても冷静沈着でいる方が有利なのだ。敵艦が何隻沈もうが超然とした姿勢を保ち続けた英とは、まずそこが異なる（英のこの時の態度を『不屈の意思が刻まれた彫像のようにも、争いに憐憫の眼差しを向ける軍神のようにも見えた』と神格化して記した資料は多い）。

戦場に於いて司令官は絶対的な権限を有する。またそうでなくては務まらない。あれの権限は誰それのものだからと決定権を分散すると、大抵の軍事作戦は中途半端になり失敗するからだ。

さりとても「成算絶無な自殺攻撃」を即座に命じる程、ゲオルクは理性を欠いていなかった。少なくともこの時は。彼の名を「愚将」として歴史に刻ませたのは、意外にも敵将からの伝言（メッセージ）が原因だった。

そして多くの事柄が原因を追及すると意外に単純な話から始まるが、今回も例外ではなかった。

「主砲弾がもうないだと!？」

主砲射撃指揮所から報告を受けた瓜生は、受話器を握る手に力を込めていた。嘘だろう――と言いたげに唾を吞んだ。しかし報告者は構わず言葉を続けた。

「景気良く撃ちすぎました。もう榴弾や三式弾も各砲塔に数発ずつしかありません」

一般に戦艦に代表される戦闘艦艇は、保有する砲弾を全て撃ち尽くす事はありません。帰路の安全を確保する意味もあり、最低でも一割は残す。残弾が皆無だと言うのは、抵抗しなければ撃沈がされるのが明らかな時だけだ。

「榴弾や三式弾だけだと……それでは……」

抵抗を続けている敵戦艦を仕留めるのは不可能だ。榴弾や三式弾では装甲板を撃ち抜けない。

顔を歪めている瓜生艦長に、英は冷めた口調で、
「高速給弾装置が原因だろう。あれは速射能力を持たせる代わりに、砲弾を湯水のように使わせるから」

事実だった。「八洲」の各砲は二〇〇発からの砲弾を搭載していたが、連続砲撃の過程でそれは射耗し、姿を消していたのである。

「基地航空隊の攻撃も終わりつつあります」鶴賀が不安に眉を顰めた。「これでは――」
燃料補給に爆弾魚雷の再装備。これらに必要な時間を考えると、もう援軍の望みは薄い。
突撃されたら面倒どころでは済まない――そんな絶望感が、艦隊司令部要員の胸中を満たしつつある。

だが、英は機転を利かせた。敵の方がこちらよりも余程苦しそうなものを見抜く。彼女は言った。
。

「降伏勧告をしよう。敵の残存艦艇の状態を見る限り、応じる可能性は高そうだ」
それを聴いた一同の表情は、砂漠の中でオアシスを発見した旅人のような感じになる。
降伏勧告！

そうだ、相手が降れば戦闘は自動的に止まるではないか。何故それに気がつかなかったのだろうか？

「応じますかね？」しかし紅葉は怪訝顔になる。
「ここまで手酷くやられるまで徹底抗戦を貫いた相手が、今更我らに降るなど」
「かも知れない。だが、試みる価値はある」英は副官の懸念を認めていた。「単なる撤退でも構わないさ。我々は彼らを追撃しない。そう言うだけで素直に尻に帆をかける可能性はある」

艦隊最高司令官の閃きは、直ちに電波を介して向こう側に伝えられた。降伏サレタシ。国際法ニ基ヅク人道的ナ取扱ヲスル用意ガ当方ニアリ。マタ降ル事ヲ潔シトセヌノナラバ、撤退サレタシ。当方ハ軍ノ名誉ヲ護ルタメニ、コレヲ追撃セヌ事ヲ宣言スル。

これを聴いたゲオルク艦隊司令部の面々は、敵将が慈悲の心を持ち合わせている事に、感謝しなくなった。単純にこちらの戦艦を鹵獲したいだけなのかも知れないが、生きる道はまだ残されているのだ。死んでしまえばそれまでだが、虜囚（りょしゅう）になればそのうちに捕虜交換で帰国できるかも知れない。

参謀の多くが、この敵の提案に応じるべきだとの姿勢を示す中、ただ一人だけ脳血管を破壊されつつある男がいた。それは勿論ゲオルクであった。

勝算絶無だから撤退する。捲土重来を期する。
その選択肢を脳内で弄びもしたが、敵から命惜しさに降るような人間だと思われたのは心外だった。

俺は確かに無能かも知れないが、卑怯者ではない。いや、そんなものにはなれない！
感情が俄に沸騰し、僅かに残されていた理性を蒸発させた。彼は鬼という生物が本当にいるのであれば、このような顔をしているのに相違ないと思われるもの――憤怒を顔に刻むと、叩きつけるように吼えた。

「ふざけるな！ 我々に降れだと。逃げるならどうぞご自由にとは何様のつもりだ！」

感情を激発させた艦隊司令官の姿を視た参謀一同は凍り付いた。世の中には逆らえない存在が幾つかあるが、この時のゲオルクはまさにその用例見本と化していた。今「降伏」を主張すれば、裁判すらないままに処刑されかねない――との雰囲気、場を支配した。

「提督、それでは……？」

「ヴァレンシュタイン」艦長――カール＝ハインツ・ディートリヒ大佐が、氷づけにされた人形のようになった参謀陣に代わり、その意思を確認する。

「まだ動ける艦を浦須賀にのし上げさせる。そして砲弾の続く限り砲撃を敢行するのだ」

聴きたくない――脳は拒んだが、耳はその役割を果たした。狂気に身を浸した人間の命令を聴いた。

沈没が確実視される軍艦を座礁させるのは、それ程珍しい話ではない。味方が制海空権を握っている海域であれば、他の艦の力を借りて離礁（りしょう）させ、本土まで回航した上で修理し、戦列復帰させた事例がある。

だが、敵地のど真ん中――敵国本土に軍艦を座礁させる作戦など、聴いた事がない。恐らく前例皆無。後に続く者がいるとも思われない。最低最悪の愚行として、戦史に長く刻まれる決定となろう。

何しろ作戦参加者が生きて帰れるとは到底思えないからだ。座礁してしまえば、自力での脱出は不可能だし、そもそもそんな「迷惑行為」に及んだ敵艦とその乗組員を、本土に突入された側が許すはずがない。

全ての火器が沈黙するまで砲爆撃を浴び、僅かな生き残りは激怒した一般民衆に私刑（リンチ）をされるか、辺境の鉱山で強制労働を命じられるとか、考えられる限り碌でもない未来が待ち受けている。

従えるか、そんな命令。死にたいのならあんただけ死ねばよい――そう言うのは容易いが、非常に勇気がいる。ディートリヒが喉の奥で行きつ戻りつする罵言を口にしようとした時、ゲオルクは腰に提げていた護身用の拳銃を抜き放ち、彼に一撃を加えていた。

「私の命令に従えないのであれば、死ね」

艦隊司令官が、艦隊旗艦の艦長をその場で射殺するなど、本来ならあり得ない蛮行である。如何に皇帝の親族とは言え、護らねばならない規則はある。

艦隊司令部要員は、ゲオルクが正気を喪っているのを認めていた。であるならば、直ちに逮捕拘禁すべきだった。戦場では重圧感に負け、正気を喪う指揮官は多い。彼らもまたそんな存在を見慣れていた。どうにかすべきだった。

されども――

彼らもまた冷静沈着さを欠いていた。「八洲」というこの時代最強最悪の艦と正面決戦をした彼らは、日頃であれば保っていた常識を脳から抜け落ちさせていた。狂気に呑み込まれ、本来であれば踏み出さないであろう道――流血に彩られた茨道（いばらみち）を、彼らは沈黙する事により歩む破目になる。

「かくなる上は全艦突撃！ 全員玉砕するまで敢闘し、それを以て皇帝陛下の恩寵に報いるのだ!!」

今や紛う事なき狂人と化したゲオルクは、艦橋の窓から望める天を仰ぎながら、両手を高く掲げた。

狂気に爛々（らんらん）と輝き血走った眼は、喪われた栄達の日々を見つめているのか、自分を破滅に追い込んだ敵戦艦に天罰が下される時を幻想の中で見ているのか判らなかったが、命令を受けた全艦がそれを遂行する限り、全員戦死するか捕虜になるというものが達せられたのだ。

この決定は、「八洲」に即座に通達された。

「汝武人ノ名誉ヲ知ラズ。我ラ降伏モ逃走モ潔シトセズ。我ラコレヨリ全艦突撃セン」

末尾に「皇帝陛下万歳（ハイル・カイザー）！」と記したその通信を受けた美星は青い顔をしていた。敵にこちらの窮状が知られているのか――との意を込めて、英の方を視る。彼女はゲオルクとは違う意味で、憤怒を顔に刻んでいた。

「武人の名誉だと……くだらん」

英とても瑞穂の皇族の端くれとして、何が名誉か恥なのかはわきまえている。だが自分のくだらない意地のために、麾下将兵を玉砕させる趣味はない。「滅びの美学」など、所詮は己の無能を糊(こ)塗(と)するための装飾に過ぎないではないか！

「まだ動いている艦が、当方に向かってきます！」

艦橋見張員の声は上擦っていた。命を捨ててかかる死兵の集団、彼らが形作る雰囲気呑まれかけているのかも知れない。

「最大脅威は戦艦二隻か」英は呻いた。

敵の莫迦な決定について論評を加えている余裕は、もうない。彼らの意図は明らかだ。「八洲」に艦をぶつけて自爆するか、浦須賀に艦をのし上げさせて弾薬が尽きるまで「固定砲台」になるか。

前者であれば回避に徹すれば良い。「八洲」の速度に追いつける艦は恐らく皆無だ。何しろ駆逐艦と数航里しか変わらないのだから。時間を稼げば、基地航空隊の再攻撃が望める。

だが、相手が後者を選んだ場合、軍港は固より周辺の市街地にまで被害が及ぶ。軍艦は海にいた間は沈むという不安を抱えて戦わねばならないが、ある種の覚悟――敵地に座礁し、生還を期さず、弾薬がなくなるまで、あるいは全武装が使用不能になるまで撃ち続ける、との覚悟を固めて戦えば、相当にしぶとい。

そして状況からして、敵が後者を選ぶのは明らかだ。

「八洲」一隻の安泰を計るのであれば、ただこの場から離れば良いが、それをやると瑞穂本国有数の海軍基地が長期間使用不能になり、尚且つ民間人からも多数の死傷者が出る。

どうにかしなければならない。

なるのならしたい。だが、もう弾薬がない。榴弾や三式弾では敵艦の装甲板を撃ち抜けぬ。

どうすれば――

思い悩む英に、突如として天啓のような閃きが舞い降りた。戦うために必要な手段は、まだ残されている！

「やむを得ない。あれを使うか……！」

英の言葉の中に潜む不気味な響き、それに気づいた一同は、眼を大きく見開いた。

「提督、まさか貴女は光芒砲を――」

楠が代表して問いかけた。彼は「大量破壊兵器」である零式破壊光芒砲光芒射出砲に強い嫌悪感を抱いていた。

「使うしかない」英は断言した。「他に手段はない」

「ですがあれば」

「責任は全て私が取る」

英の意思が堅い事は、言葉の端々から窺えた。冷厳な宗教家のそれに近いものは消え去り、国を憂う若者の心情がそこに滲んでいる。

艦隊最高司令官の胸中を察した楠だが、それでも諸手を挙げて賛同するのには躊躇があるらしく、

「実験は成功していましたが、実戦使用の経験がない兵器です。危険すぎませんか」

「ならばこれが最初の実戦試験だ」英は参謀長の懸念を吹き飛ばそうとした。「国力差が歴然としている以上、どのみちいつかは使わねばならん。その時が来たのさ。それに『八洲』に対する性能確認は、今のうちに全て済ましておきたい」

英は一度こうだと決めると、他人の意見に耳を傾けない傾向がある。しかし、そこから生じた問題を他人のせいにしたり、責任を転嫁する事は一度もなかった。

今回もそのつもりらしい。自分を悪者にすることにより、他者に一切の責任がかからないようにしている。

「判りました」楠は時間がない事から、これ以上の抗弁は有害だと認めた。「提督がそこまで仰るのであれば、私共はその決定に従うまでです」

参謀陣の纏め役である楠が折れた事により、他者も反論するのを控えた。実際、時間がないのだ。愚図愚図していると全てが手遅れになる。

英は長官席から主砲射撃指揮所に直接電話をかけた。本来であれば砲撃関連の話は、艦長を介して命じるものなのだが、「戦略級兵器」の使用に関するものだから、彼女が砲術長に直接話をする必要がある。

「私だ。零式破壊光芒射出砲――光芒砲の使用を行う。主砲管制方式を実弾使用（モード）から光芒砲使用（モード）に切り替えてくれ」

電話口にいる相手の沈黙が伝わる。それは涸れ井戸に石を投げ込み、底で乾いた音が響いた後の光景を思わせた（実時間にして数秒に過ぎないが）。

「光芒砲ですね？」

「二度言わせないでくれ」英は峻厳（しゅんげん）な軍人の仮面を、自らの顔にかぶせていた。

「急げ。時間がない」

「了解！」

電話が向こうから切られた。本来であれば上官の方から「切る」と言わねばならないところだが、時間がないからそれを叱る暇もないし、英も気にしなかった。あちらも初めての出来事に気を動転させているのだろう。

主砲射撃指揮所から艦内の各部署に命令が伝達された。

「各主砲塔を実弾使用から光芒砲使用に切り替え」

「熱量伝達管（エネルギー・バイパス）接続。安全弁解除」

「機関出力緊急増大。二割増し」

「熱量（エネルギー）注入開始。熱量充填率一〇……二〇……」

無限の力を発揮すると言われているが故に、「無限機関」と名付けられた機関の力が、破壊のためだけに各主砲塔に注ぎ込まれてゆく。

戦艦の存在意義は、敵艦の破壊、抹殺にある事を思えば、通常弾の使用も同じようなものだ。

だが、光芒砲が実験と同じような威力を発揮するのであれば、それを受けたものは消し飛ぶ。文字通りの木端微塵となり、生者など一人もおるまい。

通常弾であれば、爆沈しない限り、沈没前に脱出に成功する者が一握りでもいるから、まだ言い訳も出来る。しかし何もかも消し去るようなものを使えば、その言い訳も出来なくなる。

「何故そんな非人道的な兵器の使用に踏み切ったのか」

後世の人間はそう批判するかも知れない。英とても許されない蛮行になるのではないか――との気分を抱いてもいる。引き返すなら今のうちだぞと囁く声も聴こえてくる。

しかし何もかも護れない以上、優先順位をつけるのであれば、本土の防衛と民間人の生命財産を護る事を優先せねばならない。全員が理解を示してくれる訳がないし、助けたはずの民衆からも非難されるかも知れないが、やるしかない。

――どうせ私の手は血にまみれている。今更そこに一滴や二滴血を注いだところで、何が変わろうか！

開き直りの心境に英が達する中、準備が完了する。長官用の操作卓からそれを確認した英は、例の赤いスイッチを押した。その後に鍵盤に彼女のみが知る八桁の暗証番号を入力する。

艦内の電子計算機がそれを認めると、光芒砲発射に必要な引金が展開される。と同時に周辺にいる味方部隊に退避警報が発令される。本艦はこれより広域破壊兵器の使用を行う。周囲にいる味方部隊は直ちに退避せよ。繰り返す。本艦はこれより広域破壊兵器の使用を行う。周囲にいる味方部隊は直ちに退避せよ――

これを聴いた航空部隊や第一一五駆逐隊の将兵は首を捻った。光芒砲の存在など、彼らは知らない。五一サンチ砲より凄い何かを、あの艦は有しているのか？

ただ、警告は警告である。彼らは「八洲」の周囲から慌てて離れた。「とんでもない何か」に巻き込まれるのは御免だ。恐怖と好奇心がない交ぜの視線が、「八洲」に注がれる。

「艦橋要員は全員が対衝撃対閃光用防御眼鏡を着用！ そのままだと眼を灼かれるぞ！」

英はそう言いながら、自分用の防御眼鏡（ゴーグル）をかけている。実のところ、以前の戦傷により右眼を人工物に代えている彼女は、両眼用のそれをつける必要はないのだが、面倒なのとあまり強烈な光に触れるとどうなるか判らないので、そうしているのだ。

引金についている照準器が、「八洲」のカメラ・アイが捉えた敵艦の映像を映し出している。目標は二五航里で航進を続ける敵戦艦二隻。九門の主砲がそれを完全補足した時が発射の瞬間だ。

照準器の中央にある十字が目標物を捉えた。点滅する。このように操作者に直感的に訴えるのが、この機具の特徴だ。実戦どころか実験すら英はしてこなかったが、説明書に記載されてい

た内容を暗記していたので、問題なく動かせた。

「一一行くぞ。発射！」

腹中で秒読みを終えた英は、引金を勢い良く引いた。

5

衝撃が訪れるのを関係者全員が把握していた。戦略級兵器の使用に際して訪れる変事を皆が臆気ながら理解していた。だがそれは、所詮は脳内での 想定 (シミュレーション) に過ぎず、実際にそれを体験した者が抱くべき覚悟には程遠かった。

光芒砲が発射された瞬間に来た衝撃は、そう評すべきだった。照準を終えた各主砲塔——その砲身から青い雷を思わせる光芒が放たれた時、皆がその事を自覚した。

凄まじい閃光が周辺を包み、発射の衝撃が「八洲」そのものを強く揺さぶる。長官席に座していた英でさえも、そこから転げ落ちそうになる。だがどうにか踏み止まる。自身の行いとそれに連動する結果を余すことなく見定めようとする矜持が、彼女を支えた。

「八洲」のそうした動きを知らないゲオルクは、発射の瞬間に、発砲炎とは異なる煌めきが生じるのを視認した。

青白い光が、ピカリとした。何だ？

狂気に身を浸しているとは言え、従来の攻撃法とは違う何かが行われたのではないか——と彼は本能で感じたのである。

だが、気づくのが遅すぎた。

めくるめく閃光が、光の束となり押し寄せてくる様が、「ヴァレンシュタイン」の艦橋からも望めた。

その「光の束」は、艦橋にも飛び込もうとしている。その様子を、ゲオルクは死を直感した者特有の鋭さで見つめていた。全てが記録映像の遅回し (スローモーション) のように見える。しかし単なる光ではないのは明らかだ。これは——

「八洲」から放たれた「青い雷」は、「ヴァレンシュタイン」の艦首から艦内に突入した。凄まじい勢いで各装甲を貫き、艦尾から顔を覗かせると、当初の突入の勢いを喪うことなく「パッペンハイム」も同様に刺し貫いた。

「光の束」に一直線に田楽刺しにされた二隻の戦艦は、各所で爆発を起こしていた。一瞬のうちに削岩機(ドリル)で艦内の何もかもを穴だらけにされたようになった彼女らは、各弾薬庫・電路・機関・気缶の機能を奪われたのだ。

これだけで致命傷になったはずなのだが、状況をより悲劇的にしたのは、僅かに外れた射撃が、艦橋に飛び込んだ事であろう。艦隊司令官ゲオルクが衝撃を自覚した時、戦艦の脳髄は神の怒りに触れた伝説の都市のように消失し、生者の痕跡は消失していた。

頭と重要な内蔵をほぼ同時に奪われた戦艦は、行動不能になる。行き足が止まる。その直後に背後で起きた衝撃——大爆発を回避する術などあろうはずがなく、濛々と伸びてきた黒煙により全てが覆い隠される。

赤黒いキノコ雲が「八洲」の第一艦橋からも確認できた。記録映像で見たあのおぞましさを感じさせる情景が見事に再現されている。あの時標的にされたのは無人の小島だったが、今回は多数の乗組員がいる戦艦なのだ。恐らく今の一撃で五〇〇〇名に及ぶ戦死者が出たのではあるまいか。

――あれでは誰も助かるまい。

予め予想されていた結果とは言え、英は苦いものを呑んだような気分になる。達成感よりも先に、遂に最後の一線を越えるような行為に及んだ、との罪悪感がある。

――光芒砲を乱発する事は、海球そのものを破壊しかねない愚行になろう。だが……。

牧原造船官の言葉に、嘘はなかった。「八洲」は確かに一隻で一個艦隊を相手に渡り合えるだけの性能を有し、光芒砲は艦隊決戦の切札になり得る。

絶望的な戦力差。小手先の技術では覆せない国力の差を埋めるためには、これに頼るしかない。

英はそう決めた。

彼女は惚けたような表情を浮かべる参謀陣を前に、颯爽（さっそう）とした感じで対衝撃対閃光用防御眼鏡を外し、殊更に強気を装った口調でこう告げた。

「見たか諸君！ これこそが我々が待ち望んでいた『八洲』だ!!」

弾着の瞬間を見つめていたのは、瑞穂海軍に籍を置く者ばかりではない。海戦の状況を確認しようとした、レンネンキャンプ機動部隊所属機もそこに含まれていた。

「見たか？」

「はい。ですが信じられない……」

「コメート」の一機である。戦艦部隊があのような敵艦とどう戦うのか、それを観察・記録するために記録写真機（ガン・カメラ）搭載機がいるのだが、記録者当人にしても俄に信じ難い映像が撮れたのに驚いている。

「あの艦は砲弾以外の何かで戦艦二隻を撃沈した。それは紛れもない事実だ」

「上が信じてくれますかね？」

「我々の役目は記録した映像を提出する事だ」機長――リヒャルト・バウアー中尉は断言した。

「判断は上層部の仕事だ」

「それはその通りですが」後部機銃手兼写真撮影者のクルト・マース軍曹は困惑を隠せない。

「もう戦闘は終わりだ。敵に気づかれないうちに脱出するぞ。あの逆向き戦闘機に見つかると逃げ切れない」

淡々と告げると、バウアーは翼を翻させた。しかし彼の内心は荒れている。謎の新型機に新型戦艦。彼らの装備は、いずれ帝国に重大な脅威になるのではないか？ そんな疑問が強風のように頭を駆け抜けたからだ。

――攻撃を続行するにしても時間がかかる。敵基地航空隊の存在も気がかりだ。恐らく、東府軍港に停泊中の艦隊を撃滅したという戦果を手に、帰投するよりあるまい。

バウアーは眉を顰めた。あの戦艦を、今のうちに何としても沈めるべきだと彼は思うのだが、聯合帝国艦隊が今日一日で受ける損害をこれ以上増やすような真似を、誰が好きこのんでするだ

ろうか？

「如何なる犠牲を払っても目的を達成する」との言葉は美しいが、それを実行に移すのは勇気がある。その価値を見出すのも然り。結局のところ、ゲオルク公爵の判断に問題があったから、艦隊が全滅した――との結論に落ち着くのではないか、と考えられた。

そんな彼の懸念は的中する。

「戦艦部隊が全滅したと!？」

機動部隊旗艦「グロス・ツェッペリン」で報告を受けたレンネンキャンプ中将は、衝撃的な話に顔を歪めた。

「何かの間違いではないのか？ ゲオルク公爵の艦隊は戦艦六隻に巡洋艦七隻、駆逐艦一二隻だぞ」

東府軍港に停泊中だった敵第一艦隊とも五分に渡り合える戦力を有した艦隊である。それが浦須賀に在る戦艦一隻と軽巡四隻程度の小部隊にやられるはずがない――彼の瞳はそう訴えている。

「間違いありません」報告者は断言した。「我々の攻撃を撥（は）ね除（の）けた敵戦艦は、返す刀でゲオルク閣下の戦艦部隊を全滅させた模様です。敵味方の通信内容を傍受する限り、脱出に成功したのは駆逐艦数隻のみ――」

「そんな莫迦な話があるか！」

「我々は現にあの戦艦を仕留め損ないました」

そう切り返されると、レンネンキャンプとしても返事に窮した。そうなのだ。浦須賀軍港にいた敵戦艦は、都合三五〇機の艦載機で攻撃したにもかかわらず、損害らしい損害を受けていない。

逆に激しい対空砲火を受け、二〇〇機近い撃墜機を出していた。整備員が修理不能と判断し、海中投棄を余儀なくされた「ドルニエ2号」や「コメート」の数を思えば、三〇〇機程が烏有に帰した計算になる。

「だとすれば、まずいぞ……！」

機動部隊そのものは無傷である。敵から攻撃を受けていないからだ。しかし、戦艦部隊が全滅したとなれば、損害はこちらの方が大きい。国力差を思えば、敵方が受けた被害の方が、遙かに重いとしても。

「正体不明艦への攻撃を続行しますか？」

どれだけ強大な戦艦と言えども、それを操るのは人間である。一〇〇〇名単位の技術者が一致協力せねば、その能力は引き出せない。飽和攻撃で撃沈に追い込むというのも、確かに手段の一つであろう。

だが――

「大和平の攻撃には成功したが、他は無傷だ。無理に留まると発見され、執拗な反復攻撃を受けるかも知れん」

練度や機数で劣るはずの敵勢を過剰に警戒する必要はない。敵の方から来るのなら、むしろ撃滅の好機だと捉えるべきだろう。航空戦でも、純粹に防御に徹すれば、攻撃側に出血を強いる事は難しくない。

しかし、この時のレンネンキャンプは、浦須賀軍港にいた、得体の知れない敵新型戦艦にこれ以上関わりたくない心境だった。あの艦一隻のために、正規空母三隻分の航空機が喪われた。

無理攻めをして犠牲を重ねるよりも、詳細を調査して、攻略法を見つけてから料理した方が好ましくはないか？

彼はそんな疑念にとりつかれたのである。

「如何なさいますか？」

参謀たちが問いかけてくる。艦隊指揮が上意下達式なのは瑞加を問わずに変わらない。参謀には決定権がなく、最終的な判断は全て司令官が行う必要がある。

「撤退だ。我々は敵艦隊撃滅の目的を果たした。浦須賀軍港攻撃が失敗し、多数の艦船を喪ったのは誠に無念であるが、敵は当面は立ち直れない打撃を受けたからな」

攻撃隊が出撃する前に告げた言葉の一部分――「幻想を打ち砕く」――がレンネンキャンプ自身に跳ね返ってきたような気がした。航空攻撃で敵戦艦を撃滅できるという信念が揺らぎ、音立てて崩れ落ちていくような感覚に囚われた。

これが臆病風という奴なのか――と自嘲の念が沸くが、ここから離れたいという渴望を思えば、後から取り返せるはずだ、との言い訳が全てを打ち消す。

参謀の中には不満そうな顔をする者が少なからずいるが、周囲を警戒する駆逐艦から「敵潜水艦複数が付近にあり」との報せを受けると、攻撃続行を強弁できなくなる。元から無理に無理を重ねた作戦なのだ。機動部隊だけでも無傷で戻れるのであれば、温和くそうすべきだろう。今更粘ったところで、沈んだ艦が蘇る道理はなし。

「撤収するぞ！」

レンネンキャンプはそう命じた。彼の言葉には、多くの艦と同胞の生命を呑み込んだ「魔の海」から一刻も早く逃れたい――との願望が滲んでいた。それに気づいた者もいるが、指摘は出来なかった。何故なら、彼もまた同じ気分でいたからだ。

勝者は敗者よりも重苦しい気分を抱いて、舳先を爬間諸島方面へと向けた。

「全員玉砕」を怒号する司令官が消滅した後に、彼が残した最後の命令を遂行しようとする者はいなかった。皆が臆病風に吹かれたのではない。「八洲」の光芒砲に度肝を抜かれ、抵抗を続けようという意味そのものを破砕されたのである。

そしてその戦意喪失劇は思わぬ贈り物（プレゼント）を瑞穂側にもたらした。大破し、浦須賀軍港付近で航行不能状態にある戦艦三隻——「ラインハルト」「カール＝グスタフ」「ルドルフ」が鹵獲できたのだ。

通常であれば、敵地で航行不能となり、脱出の可能性が皆無となれば、乗組員たちが自沈処理を施すのだが、「八洲」に艦の首脳部を抹殺され、最終的な判断を下せる者がおらず、放置されたのがその原因だった。

「昔の軍人は『敗北の次に惨めなのが勝利である』との台詞を残したが」英は戦後処理に忙しい。「私は『敗者よりも勝者の方が忙しい』と言いたい」

敗北を喫して戦場から逃げた側であれば、後の関心は自分たちが無事に生還できるかに絞られる。だが、勝者は戦場掃除や敵味方を問わない負傷者の救護などを求められる。彼女の主張は成程的を射ていた。

「重巡以下の艦で大破した艦も降伏しています。自沈処理が施される前に」楠が報告する。「どうやら敵は敗北を予期しておらず、その辺に対する措置が極めていい加減なようです」

「だろうな」英は同意した。「私が彼らの立場でも同じ意見だろう。これだけの数的差をつけて尚、敗北する可能性を口にするなど、そう出来るものではない」

「八洲」の存在そのものが非常識なのだ——英は胸中でそう呟いている。

間違っただけではなかった。

一撃で戦艦二隻を木端微塵にする超兵器を搭載した戦艦がいるなど考えたら、慎重肌と言うより、妄想癖にとりつかれた変人と見做すべきだろう。

「それで降伏した敵勢に関してなのですが」

市街地への無差別攻撃を企んでいた連中である。

戦時国際法に基づいた人道的な取扱をすべきか否か、英の判断を仰ぎ必要が認められた。

「私は嘘はつかん」

降伏すれば勘弁してやる——との言葉は、今も尚有効らしい。掌を返すつもりはないようだった。

「判りました」皇国聯合艦隊司令部が聴いたらどう思うかな——との考えが脳裏をよぎるが、楠は口にしなかった。古武士のような気風を持つ真田であれば、英の考えを支持しても不思議はなかろう、との計算もあるが。

「うん」英は頷いた。そこに昇降機の作動音が重なる。

「只今（ただいま）戻りました」

現れたのは美御である。敵第一次攻撃隊を撃退し、態勢を整える時間をもたらし、軽巡一隻を爆撃撃破するという功績を立てた男。英の寵愛を一身に受ける義弟。

「美御か。怪我はしていないようだな」

「脚もちゃんとありますよ」

男性的な端正さを有する顔に、少年飛行将校は笑みを刻んだ。彼は英に正面から冗談を言える希有な存在だ。

「報告は既に受けた。薄木基地の園田（そのだ）司令を説得し、援軍を連れてきてくれたそうだな」

「あれが説得と呼べるものでしたら、そうですね」

美御は微笑を浮かべた。彼の脳裏には自分が預かる航空基地を護る事しか関心の無い、官僚的な軍人を遠回しに脅迫した時の情景が蘇っている。

本官が受けている命令は、薄木基地の保全なのだ。浦須賀軍港の防衛にしても、東府鎮守府からの許可がなければ出来ない。ましてや浦須賀沖で戦闘中の艦隊への援軍など論外だ。燃料と爆弾は融通してやるから、後はそちらの責任でどうにかしろ！

援軍要請を出した美御に対し、園田大佐はそのように捲し立てた。護るべきは前例と規則であり、その他の話など受け付けられない――と言わんばかりの態度だ。これには美御の後に続いてきた副隊長萩助六大尉などは、「この野郎！」との表情を浮かべ、掴み掛かろうとしたぐらいだ。

誰のために戦っていると思ってるんだ！ そう感じたのは美御も同じだ。だが、上官を相手を殴りつけたりしたら、その場で憲兵に逮捕されかねない。それでは英への助けにならないどころか、単なる迷惑行為だ。

美御はいきり立つ部下たちを片手で制した。その上で戦法を変えた。相手が規則を楯にするのであれば、こちらは伝手を頼りにするまでだ。彼は徐にこう告げた。

「八洲」には元帥宮様のご息女であらせられる戦船英中將がおられます。もし「八洲」が薄木基地から何の支援も受けられずに沈没したら、元帥宮様は園田大佐にどのような感情を抱かれますかな？

これを聴いた園田は顔を引き攣らせた。少佐は本官を脅迫するつもりなのか？

いえそんな気は微塵もありませんよ。自分はただ事実を告げているだけです。

にこやかな顔でそう言う美御の背後に控えている面々は、それを耳にして噴き出しかけた。誰がどう聴いても脅迫にしか聴こえない発言である。事実を事実として並べ立てただけだと言えなくもないが。

大佐、視点を変えてみませんか？ 美御は割の良い投資話を勧める証券屋のような口振りになる。第七艦隊が敗れば、薄木基地も艦砲射撃で蹂躪されるのは目に見えています。そうなればこの基地に何百機航空機があろうが関係なくなります。大佐も瓦礫の下に埋もれる破目になりますよ。

浦須賀沖合にいる敵艦隊の規模は、戦艦数隻を含む凄まじいものである。美御の発言はある種

の真実味を帯びていた。それを聴いた園田大佐は、保身と護身の双方を天秤にかけ――と言うよりか、とにかく自分の身が助かる道を選ぶ事に決めた。

戦闘機隊は防空のために出せん。爆撃機や攻撃機なら構わないから、好きなようにしろ！

それさえ認めてもらえれば充分だった。敵機がまた出現しても、「蒼電」であれば容易く蹴散らせるし、今必要なのは戦闘機ではなく爆雷撃機だからだ。

有難うございます。後は自分たちでどうにかします。一礼した美御は、搭乗員待機室で敵艦隊攻撃の許可を待つ――爆雷撃機の搭乗員たちの方へ足を運んだ。

彼らは「説得する」必要がなかった。内地が敵の手により蹂躪されようとしている時に、何もしないのが我慢ならないと考えていたし、「人助けだ」と言えばそれで全てを受け入れてくれたからだ。

燃料の補充を受け、尚且つ一二番を装備させて貰った美御は、とにかく大急ぎで戦闘海域へと戻った。機種も装備もばらばらな雑軍を率いた格好だが、それが敵味方の意表を突いた形になり、補助艦艇群の撃滅に寄与したのだから、世の中何が幸いするのか判らない。

「軍事行動は終わりよければ全てよしさ」英は美御がどのような方法で園田を説得したのか想像がついていた。「我々は勝利し、明日への希望を繋げた。方法とか途中過程はどうでも良いとまでは言わんが、大事なのは生き残る事だ」彼女は義弟の肩を叩いて微笑んだ。「よくやってくれた」

「はい」美御も微笑んで応じた。

この人が笑ってくれるのであれば、僕はどんな苦労も厭わない――彼は改めてそう感じている。

戦艦一・駆逐艦四で数倍の敵を打ち破るという偉業を成し遂げた面々は、勝者として振る舞う事が出来た。後世の戦史研究家たちも、「かくも偉大な勝利をこのような少数部隊でなしえたのは驚くほかない」と手放しで絶賛している事からもそれは窺えよう。

浦須賀軍港壊滅の危機から一転して、戦艦六隻を撃沈乃至鹵獲との発表を受けた民間人たちも沸き返し、その勝利を喜んだ。何せ対潜部隊と潜水艦の戦闘を除けば、瑞穂陸海軍は勝利らしい勝利を開戦以来一度も挙げておらず、皆が勝利に飢えていたのだ。

だが、その勝利は無血により得られた訳ではなかった。

確かに第七艦隊――遊撃機動部隊は沈没艦皆無で完勝したが、東府軍港で敵機動部隊の強襲攻撃を受けた第一艦隊は、手酷い損害を受けていた。

後部甲板を急降下爆撃機により廃墟同然にされた「矢隠」は大破の判定を受け、煙突や第二主砲塔を破壊された「時和」は中破。折角航空戦艦への改装を終えたばかりの「神勢」「初宮」の二隻も、前者が魚雷でスクリューを吹き飛ばされ、後者が飛行甲板を航空機格納庫ごと御釈迦にされて中破――着底した（傍目からは撃沈されて再起不能に見えたが、専門家が調査したところによれば、浮揚修理は可能だとされた）。

他に竣工したばかりの新鋭軽巡「矢賀乃」が雷撃を受けて沈没し、姉妹艦「美穂乃」も爆撃を受けて主砲塔一基と魚雷発射管をもぎ取られ、大破着底。

駆逐艦も初雪級駆逐艦の一番艦「初雪」を筆頭に、「粉雪」「淡雪」が爆撃破壊されて沈没。こ

ちらは誰がどう見ても修理は不可能で、解体して資材に戻すしかない――とされた。

幸いと言うべきか、巡洋戦艦や重巡、そして軽空母群に目立った損害はなく、彼女らなら即座に行動可能な状態だった。だが、第一艦隊は瑞穂海軍の根幹を成す戦艦部隊である。軽空母を主体とした小規模な機動部隊ではなく、戦艦四隻の大破乃至着底は、部隊の維持すら困難とさせる大損害だと言えた。

「いっそ第一艦隊は書類上の存在に止め、残存艦艇は別の艦隊に割り振るべきか？」

第一艦隊が再び甚大な損害を受けた――との報せを受けた海軍総司令部は、そのような意見を述べた。

皇国聯合艦隊が過去に陸上に司令部を設置した事例があり、使える軍艦を司令部施設として遊ばせておく――前線投入が出来ない――事への批判は以前からあり、それが顕在化した形だ。

武蔵も胴賀も納得しかけたが、

「海軍最強の艦隊に雪辱の機会も与えずに解隊すれば、世間はどう見ると思うのか？」

幸い、敵艦隊には『八洲』以下の第七艦隊が大打撃を与え、当面は攻勢作戦をとる事はないと思われる。真田大將を留任させ、再度艦隊を再建させれば良いではないか」

最終的にはそのような意見が部内を支配し、海軍総長や次長もそれに流された。

軍隊は民主主義――多数決が全てではないが、殆どの者が反対している意見を通せる程、空気を読まない訳ではない。大体、真田が皇国聯合艦隊司令長官に就任する時でさえ揉めたのだ。彼を解任したら後任はどうするのかが未定だし、この状況で火中の栗を拾う輩が他に出るとは思われない。

それに我々は浦須賀軍港沖の海戦には勝利し、降伏した敵の戦艦や重巡は遠からず戦力化できる。

攻撃を受ける前よりも、むしろ戦力は増えている。

であるならば、誰かに責任を取らせる必要は――信賞必罰を機能させる意味ではあるのだが、それに手をつけると收拾がつかなくなる恐れがあるので――ないのである。国民にもそう伝えれば良い。

まるで責任回避の術に長けた官僚が作成した作文のような話だが、それは通った。そうすれば誰も傷つかないで済むし、後の処理が円滑になる。国民にしても、海軍が怠慢から再び大敗を喫したと耳にするより、収支決算は辛勝したとの知らせを聴く方を歓迎したのだ。

人間は己が信じたい情報しか耳にしない傾向が多分にあるが、それが実に顕著に表れた話だと言えた。歴史好きな英が聴けば、「どんな国家や民衆もしてきた事さ」とでも皮肉混じりに述べたに違いなкаろう。

だが、彼女は傍観者として辛辣な皮肉を述べている余裕はなかった。何故なら情報収集の怠慢による敗北を再度喫した海軍が英雄を求め、彼女をまたしても持ち上げたからである。「浦須賀沖海戦」――世界海戦名も同じ――で勝利の立役者になったのは紛れもなく彼女で、あの時現場にいたのはお披露目式に参加予定だった「八洲」なのは、民間人ですら知っている。

故に報道管制は敷かれず、むしろ海軍は積極的に「無敵新鋭戦艦」と「戦う皇族」の記事を各種報道機関に書かせ、英にも取材に応じるように求めたのだ。

現実を知る英からすれば、一連の行為は茶番とさえ思えたが、軍事活動は政治の一環だと知悉している彼女は、表面上はそれを穏やかに受けた。国民的な人気を楯にして政治的な危機を乗り越えた軍人が数多い事を、歴史から学んでもいたからだ。

かくして「東府湾海戦」と「浦須賀沖海戦」は前者が大敗、後者が大勝との両極端な結果を残して終わる。

全ては両軍の油断が招いた結末だが、その後に何が起きるかを予見していた者はおらず、橋道洋の青い海は、万石単位の鉄塊と人命を呑み込んでから、僅かな平穏を取り戻したのである。

「浦須賀沖海戦」に勝利した「八洲」は、その脚で生まれ故郷——美呉軍港へと蜻蛉返しした。浦須賀軍港は彼女が生を受ける前に拡張工事され、停泊する分には問題がないのだが、やはり本格的な修理を施すのは、母港である美呉でなければ駄目だった。

「被弾した数は報告を信じる限りでは二〇発以上になりますね。派手に壊してくれたものだ」
美呉軍港の船渠内での会話である。報告書の束を捲る造船官の一人に、牧原は眉を顰めながら、
「壊れたのは高角砲や対空機銃が殆どさ。それなら予備を出せば直ぐに直せる」

そう答えている。六五〇ミリの厚さを備えた主砲用装甲板は、長砲身三六センチ砲の直撃を受けて尚、歪んですらない。被弾記録があるし、何かが表面を掠めたような痕跡があるからそれは間違いないのだが。

——しかし、単艦で敵戦艦六隻を正面から敵に回して撃ち合うとは、英殿下も無茶をなさる。一隻で一個艦隊を相手取れるだけの能力を持ち、戦局を左右する力を持たせたと告げたのは私だけれども！

戦闘報告書は零式破壊光芒射出砲——光芒砲が敵戦艦二隻を瞬間的に撃沈した事を記載していた。弾着観測者の記述を信じる限りでは、光芒が敵戦艦の艦首から艦尾にかけて一気に貫き、その後に大爆発が起きた、という。

実験では五一センチ単装砲で小島一つを破壊できた。三連装砲塔三基だと排水量が四万石近い、第一線の戦艦を纏めて撃沈できたのだから、妥当な線だと言えた。

しかし、無闇矢鱈（むやみやたら）と使用すると、海球そのものを滅亡させかねない原因になるのではないか——との指摘は、牧原にとり耳が痛い。

今のところ「八洲」しか光芒砲を装備していないが、同型艦の「秋津」が竣工すれば、それが使用可能な船は二隻になるし、そうでなくても強力な威力に着目した軍部が、「全ての軍艦に光芒砲を装備させよ！」との達しを出した場合どうなるかは未知数なのだ。

最大排水量一二万石を誇る戦艦しか装備できない兵器が、そう簡単に巡洋艦クラスの艦まで備えられるものなのか——との疑問はある。事実、単純に五一センチ砲であるのならば、連装三基にまで数を減らしても、全長二六〇間前後の艦体と九万石近い排水量を持つ艦でなければ、安定性を欠いたものになる。

だが、航空機が発明されたばかりの頃は、それがこれほど急速に普及すると考えた者は、誰一人いなかった。弾着観測の手助けになる発明品程度に考えていたら、気がつけば一機あたりの爆弾搭載量が五石を数える重爆撃機が登場し、砲兵隊では攻撃できない遠方に爆弾の雨を降らせ、標的を撃砕する事が可能になっている。

航空機は発動機や機体そのものを大型化し、航続距離の延長を図ってきたが、その逆——小型

化する事により、使用可能になるものもある。その代表は電子計算機で、戦士文明研究者たちが存在に気づき、どうにか自分たちで使用可能なものが出来た時は、高層建築物一個分の大きさを誇るとんでもない代物だったが、今では戦艦の艦内に充分格納できるサイズとなり、「八洲」では打たれ強さを有する事すら証明している（精密機器は衝撃に弱いはずなのだが）。

そうした前例や理屈に従えば、国家が多大な予算を組み、専門研究科チームを編成すれば、光芒砲が使用可能な無限機関の大幅縮小は可能なのではないか？

巡洋艦程度の艦に搭載可能なサイズで「八洲」の機関と同じ出力を発揮可能となれば、海軍は重巡にまで光芒砲を載せるかも知れない。

勿論、発射時の衝撃――艦体に加わる負荷などを思えば、一朝一夕に出来る話ではないのかも知れない。戦時損傷艦艇を修理しつつ、革命的な船を造るなど、夢物語であろう。国力には限りがあるし、光芒砲の事を「戦争の伝統を破壊する悪魔の僕（しもべ）」だと嫌悪している軍人は、何気に多いのだ。

だが、牧原は海軍上層部からそれをやれと言われたら、拒否するつもりはない。左遷されるのが恐ろしいからではない。瑞穂という国を救うために必要なのであれば、自分は鬼にでも悪魔にでもなるつもりだからだ。光芒砲の発明者は自分ではなく、単純に普及に寄与しただけであっても。

「私は軍艦も御国も愛している。全ての批判は受け入れよう。そのどちらも滅びるぐらいであれば」

そう牧原は決意している。それは最前線で敵と実際に砲火を交える軍人に求められる勇氣、それと本質的に大差の無いものであった。

美呉軍港の船渠が、「八洲」の修理点検（オーバーホール）のために慌ただしく動いている頃、艦隊司令部を間借りした美呉鎮守府内に臨時設置した英は、各戦隊司令官を集めて緊急会議を開いていた。

「敵に攻勢の兆しあり――ですか？」

艦隊最高司令官が会議冒頭で持ち出した話を耳にした出席者たちは、異口同音にそれを口にした。

早い話、突拍子もない話を持ち出されたという感じだ。彼らの心情を要約すれば、以下の通りになる。

「まさか」

「冗談だろう」

「戦艦六隻をいちどきに喪い、それでも何か仕掛けてくる訳がない」

「当面は戦力再編に努めるのではないか？」

根拠はある。爬間諸島沖海戦以来、西部帝家艦隊は北加大陸と爬間諸島に分散逼塞し、向こうの方から攻撃を仕掛けてくる気配は微塵も見せず、今回無謀なる攻勢を仕掛けてきた聯合帝国本土艦隊にしても、戦艦六隻の沈没乃至鹵獲は相当堪えたはずで、しばらくは温和しくしているはずだからだ。

「冗談で物騒な話を持ち出した訳ではない」

一方、英の表情は真剣そのものだ。遊びの要素など欠片も見当たらない。彼女は両肘を机の上に立て、指を口許で絡めた姿勢のまま続けた。

「私は此度の攻勢作戦を、彼らの不協和音によるものだと推測している。私が実際に交戦したのは、ヴァレンシュタイン級戦艦六隻とその護衛艦艇だが、彼らにはグラーフ・ビスマルク級戦艦四隻もいる。

途中で潜水艦が発見した敵機動部隊の中には戦艦は含まれておらず、これは爬間諸島にそのまま残されていると見て良いだろう。本土強襲という賭博性の高い作戦を実施する戦力としては、中途半端だと言わざるを得ない、と私は見る」

「燃料の都合なのではありませんか？」二航戦司令官の周防が指摘した。「彼らは我々とは異なり、無限機関搭載艦を持ちません。国力は我々を遙かに勝るとは言え、最前線に捨てる程の重油を持ち込めるとは思えないのですが」

通商破壊部隊――二等潜水艦を中心とする、敵の補給船を集中的に叩いている部隊は、聯合帝国の対潜戦術のお粗末さもあり、無視できない戦果を挙げている。

「第六艦隊の努力を否定するつもりはない」英は周防の弁を頭から否定しなかった。「だが、致命的な打撃を与えている訳ではない。動かそうと思えば動かせたはずだ。現に彼らは一〇〇隻単位の輸送船団を絶える事なく動かしている」

敵信傍受や残置諜報員からの報せは、聯合帝国の海上輸送力が一向に衰える気配を見せないのを示している。「化け物か！」と罵るのは容易いが、敵に呪詛をかけたところで戦局は好転しない。

「だとすれば、理由は？」

戦力の分散は、敵に各個撃破の好機を与えてしまう。戦果の拡張を図るために、各級部隊に自由行動を許す事もあるが、それは追撃戦が残敵掃討レベルに移行した時に許されるという展開が多く、一步間違えば作戦参加部隊が全滅しかねない、敵本国攻撃の際に行って良いものではなかった。

「尋問官が捕虜から聴き出した話なのだが――」

英は周囲を見回した。皆が続きをと表情で促している。

捕虜の中には助かりたい一心ででたらめを平然と口にする者がいるのだが、その辺についての指摘はない。

「浦須加沖海戦」の勝利が利いているのだろうか――と彼女は思いながら続けた。

「今回の本土強襲作戦を立案し、実行に移したのは、橋道洋方面・派遣本州艦隊副司令長官のゲオルク・フォン＝オルデンプブルグ中将だったそうだ。彼はゲーリング司令長官とは不仲で、何らかの形で彼を出し抜き、手柄を立てたがっていたそうだ。

だから、自身の麾下にある戦艦部隊と、懇意にしているレンネンカンプ中将の機動部隊を動かし、今回の作戦に臨んだらしい。機動部隊が東府軍港に停泊中の第一艦隊を攻撃し、戦艦部隊が浦須賀軍港を撃砕し、我が海軍の無力さを満天下に晒す予定だった――と」

「単純な主導権争いが原因？」

そんな莫迦な――と言いたげな顔つきになる周防を、英は制した。

「彼らは我々を舐めている。西平洋に北ヤフリカ、果ては南加大陸諸国とも戦争中なのに、橋道洋にまで進出する姿勢を見せているのだぞ。我らの事を一筋縄ではいかない強敵だと考えていたら、そんな真似するか？」

「確かに。それは……」

「ゲーリングは皇帝の親族であるゲオルク公爵に引きずられ、仕方なく許可を出したのだろう。積極的な攻勢作戦を唱える者を支持する奴は、どんな組織にも一定数いるからな。

その彼が戦艦部隊と共に海没した以上、政治的な重しが取れたゲーリングは、必ず動くはずだ。

戦艦六隻の喪失は、作戦立案者であるゲオルク公爵に帰する事になるだろうが、そうなるとどうしてそんな無謀な作戦に許可を出したのかと言い出す輩は必ず出るだろう。そうなった時、それを誤魔化すのには新たな攻勢作戦が必要になる」

「責任回避のために？」

軍隊は官僚組織の一部である。それも加点式ではなく減点方式の。自業自得とは言え、皇帝の親族を戦死させた司令長官として、軍上層部に白眼視されたくなければ、積極攻勢に出て失点を取り戻す必要があるだろう。

「そういう事だ」英は頷いた。

皆がため息をついた。戦艦六隻の喪失と言えば、列強と呼ばれる国でも、海軍そのものが滅んでもおかしくない大打撃である。世の中にはとてつもない数字を突きつけられても全く動じない者がいるが、それを垣間見たような気になる。

「それで」三〇巡戦司令官の金ヶ崎が促した。「提督は彼らが攻勢作戦を開始した際、どうなさるので？」

全員が一番気にしている部分である。視線が英に注がれた。彼女は椅子から立ち上がると、壁に貼られた橋道洋の地図、その一点を指差した。

「私は敵が新たな攻勢を仕掛けるのは、マルシャル諸島だと考える。此処は航空要塞化が進められている鞠縄諸島や珊瑚諸島に比べると配置されている航空機の数が少なく、また彼の地に敵が基地航空隊を進出させた場合、珊瑚諸島が敵重爆の行動可能圏内に入る」

「確か昨年末の会議で話題に上げられた」東雲が言う。

「そうだ。戦艦と艦載機を同時に大量に喪失した敵が狙う目標としては手頃だろう」

「西部帝家艦隊と共同作戦で鞠縄か珊瑚に來襲する可能性はありませんか？」

同じ国の軍隊なのに、「共同作戦」と言うのも奇妙な表現だが、瑞穂海軍とは異なり、装備や使用言語まで異なる連中である。指揮系統も統一されておらず、そう言うのが適切だと評せた。

「それはあるまい」英は指摘された可能性を否定した。「西部帝家艦隊は再建途上だし、ドジを踏んだばかりのゲーリングが、西部王の麾下にある艦隊を指揮する権限を付与されるとは到底思えん」

同国人との意識の乏しさ、僚友を出し抜いてまで功績争いをする性質、そしていつも付き纏う瑞穂人への蔑視――これらの要素を勘案すると、西部帝家艦隊と本州艦隊が手を携えて進撃してくる可能性など、正月に台風が来るようなものだと言えた。

「マルシャル諸島が舞台であれば、当艦隊は自由裁量（フリーハンド）で動けると聴きましたが」

「事実だ。言質は取り付けてある」英は作戦の大晦日に繰り広げられた情景を思い出している。

艦隊最高司令官が自由に戦いたいから、その場所を次の戦場に選んだのではないか——との疑念を抱く者も当然いる。しかし、爬間諸島沖海戦で敵機動部隊に大打撃を与え、浦須賀沖海戦で敵戦艦部隊を壊滅させた英に真向（まっこう）から反論できる者はおらず、皆が沈黙を貫いた。

天才的な判断力を有する人物は、時として思い込みの激しさから着眼点を間違えるものだが、果たしてどうなるのだろうか——と気を揉む者は少なくない。

だが、この時の英の判断は、実のところ間違っていなかった。浦須賀沖でヴァレンシュタイン級戦艦六隻の沈没乃至降伏を報されたゲーリングは、最初驚倒した。ゲオルクへの嫌悪感は強く、痛い目を見ればよい——と考えていたが、まさか返り討ちにされるとは思わず、皇帝の親族を戦死させたという政治的失点の大きさに動転したのである。

しかし嘆いたところで時計の針は逆に回らない。盆からこぼれた水が元に戻らないと騒ぐよりも、他者の耳目を別の意味で引きつける行動を取る方が賢明だ。

発想をそう転換したゲーリングは、機動部隊を大急ぎで呼び戻す一方で、以前から予定されていた攻勢作戦を実行に移す事に決めた。鞠縄諸島を攻略して瑞穂本国を重爆撃機の活動圏内に収め、戦略爆撃により瑞穂を屈服に追い込むという計画は、戦艦部隊が大打撃を受け、著しく数を減じたので取りやめとし、マルシャル諸島を占領した後、珊瑚諸島を基地航空隊と共同で無力化し、その後に中部橋道洋を制圧するという形にしたのだ。

この案件は明らかに規模が縮小されていた。最初に考えられていた鞠縄諸島攻略を実行に移せば、瑞加両艦隊による史上最大規模の艦隊決戦が勃発し、勝敗はともかく賭して、海戦終了後に損害の凄まじさに肝を潰した両国首脳は講和交渉をする気になったかも知れぬ。

されども、ゲオルクの無謀なる挑戦——当人も周囲も、そう考えていなかっただろうが——が全てを変えた。

マルシャル諸島の航空基地としての機能が俄に注目され、聯合帝国本土艦隊は、直接的攻勢（ダイレクト・アプローチ）から間接的攻勢へと戦略を変更（シフト）した。

全ては「八洲」と彼女を戦闘に駆り立てた英の手腕によるところが大きいのだが、この段階でそれらが何をもたらすかを理解している者は、当事者を含めて誰もいなかった。

2

戦争計画とは国を隔てても性格を似通わせる傾向にある。まるで関係者が事前に打ち合わせをしてきたのではないか——と思わせる奇妙な符号が、そこかしこに見られるのは、決して珍しくはない。

瑞穂暦二〇〇二年四月一日——

マルシャル諸島の北端——沼枯島の周辺は、鉄の艦艙（もうどう）たちに包囲されていた。多数の艦上機を発進させる航空母艦を筆頭に、戦艦や巡洋艦が標的に定めた地点（ポイント）へと

制圧砲撃を行う。その様は活動写真に出てくる異星人（エイリアン）が、侵略先の先住民の痕跡を、暴力の限りを尽くして根絶しようとしているかのようで、軍事活動と言うよりも破壊活動の一環に見えた。

ただし、攻撃を受けている側に人的損害はない。何故かと言えば、沼枯島は予め放棄されていたからだ。

守備隊司令官――第一〇九師団師団長とマルシャル兵団兵団長を兼任している竹村清中將が、中途半端に守備隊を残し、雅反島の兵力を減じるぐらいなら、初めから何も置かない方が良いとの判断を下していた。

故に沼枯島に存在するのは、戦前に使用されていた施設の廃墟――言い方を変えれば張りぼてである。

聯合帝国側からすれば、航空偵察だけでは敵が完全撤収したのか判然とせず、砲爆撃をする必要があるのだが、瑞穂側からすれば、それは単なる時間と砲弾の浪費であり、なるべく敵には慎重居士でいてもらいたいとの気分が出てくる。

「海軍は浦須賀沖に来襲した敵艦隊を撃攘（げきじょう）したと発表したが一」

雅反島に設置された地下司令部。そこで航空部隊の通信内容を耳にしながら、竹村は独りごちた。

「海軍ハ戦艦三隻撃沈及ビ同三隻ヲ鹵獲セリ」

新聞や電波放送でそう派手に宣伝されてから、まだ半月と経過していない。にもかかわらず大規模な敵艦隊がマルシャル諸島への攻撃を開始したのは、どういう訳なのか？

雅反島の要塞化は、土木重機の大量投入などで一応の目処がつき、海軍も重砲隊や陸戦隊を派遣してくれたので、兵員数は二万を超えた。現状でもかなりまで頑張れるとの確信があるが、解せない。

「一澤（いちざわ）さん、これはどういう事なのかな？」

竹村は海軍諸部隊の司令官――一澤美白（みしろ）海軍少將に問いかけた。彼女はその精強さを広く知られる海軍陸戦隊を含む六〇〇〇名からを率いる立場にあり、マルシャル兵団でもそれなりの発言力を有する。

「浦須賀沖海戦に大勝したのは間違いなさそうなのですが」一澤は確信が持てない様子だ。「その引き替えに東府軍港で第一艦隊がまたしても大打撃を被り、当面は活動不能になった影響かと」

総本営は国民の士気喪失を恐れ、損害発表をしない、という愚行に興じてはいない。戦艦四隻――「矢隠」「時和」「神勢」「初宮」が撃破されたという結果をきちんと発表している。

つまりは、主力艦隊が当面は活動不能なのを内外に報せている訳で、敵が浦須賀沖での失態を糊塗するために、新たな攻勢作戦を開始してもおかしくはない状況にある。

「軍事的かつ政治的な理由はある訳か」

「だとしても」砲兵隊司令官の左近尚政（さこななおまさ）少將が口を挟んだ。「海軍は一兵の援軍も寄越さない気か？」

「我軍にも台所事情がありまして……」

一澤は言葉を濁す。海軍は六〇〇〇名からの部隊をこの地に派遣した。それはマルシャル諸島を護るという意味を固めたからで、決して陸軍へ政治的な言い訳をするために送り込んだ訳ではないはずだ。

しかし状況の変化に合わせて対応を変えるのは珍しい話ではなく、「第一艦隊の再度の壊滅」は、海軍上層部の気を変えるのに十分な衝撃ではなかったか——とも思う。

「陸軍には海上にある敵艦をどうにかする手段がない。それもこれも、海軍が対艦攻撃兵装を独占し、我々に供与しなかったからだ。我軍にも航空魚雷があれば、一矢報いてやれたものを……」

左近は歯噛みする。一澤は終始俯いたままだ。

この意見は竹村も同意できる部分があるが、仮に海軍が雷撃機を丸ごと貸してくれたとしても、それを使いこなせたかどうかは別問題だ、とも感じられた。

陸軍の主な役割は、海外領土の非正規軍（ゲリラ）の討伐だ。密林地帯に分け入り、そこに潜む不埒な輩を始末するのが絶えず繰り返されてきた任務で、航空部隊も大会戦に勝利するために整備されてきたものではなく、そうした「必要だが地味な任務」のために存在してきた。

そんな陸軍に、敵機動部隊を攻撃できる機種を持ち、尚且つそれを維持できるだけの予算を組む、という離れ業が演じられたかと言えば、大いなる疑問だ。

そもそも海上防衛に関しては、欧洋州の列強とも正面決戦が挑めるだけの戦力を有する、海軍の仕事だとされてきた。戦艦一〇隻。巡洋戦艦六隻を持つ彼らがいる限り、何の心配もないと。

ところが、その海軍が緒戦にて保有する戦艦の半数を撃沈破されるという悲劇を経験して以降、その目論見が怪しくなる。航空母艦や基地航空隊は残されているが、彼らだけで西進する聯合帝国艦隊を撃滅できるという目算は立たず、橋道洋防衛計画は赤信号が灯り続けるような状態になる。

「陸軍にも対艦攻撃機が必要」

との理論は、そうした事情が多分に影響している。

救援に来るかどうか判然としない海軍をあてにせず、陸軍だけで守備を任された地域を護り抜くという発想が生まれ、それが海軍との新たな軋轢を生む原因になったのだから、何とも情けない限りだ。

「無い物ねだりをしても始まらない」竹村は左近をたしなめた。「それよりも、敵が雅反島にいつ上陸してくるのかを考えるべきだ。彼らの目的が航空基地の確保であるのなら、雅反島を無視するはずがない」

そう言われると左近も押し黙る。手を携えて戦わねばならない相手と不毛な論議を続けても何ら益する事がないのに気づいたらしい。今度は彼が俯いた。

「沼枯島上陸前の事前砲撃に二日乃至三日」竹村の参謀長——白根和隆（しらねかずたか）大佐が指摘した。「その後に沼枯島飛行場を再建し、基地航空隊を配属した後となると、もう数日は後になりますが」

「敵は艦上機だけで雅反島への航空攻撃は充分だと考えれば、その日程は更に短縮されるな」

島嶼攻略戦に於いて、上陸前の砲爆撃は基本中の基本だが、それを為すのに必要な戦力が既に

あるのなら、無駄な補強のために時間を浪費すべきではない。

と言うよりか、沼枯島周辺を包囲している敵艦隊の規模からすれば、二島同時攻略作戦を仕掛けてきても、何ら不思議はないのである。航空母艦だけで一二隻いる敵艦隊をどうにか出来る戦力など、珊瑚諸島にまで眼を拡げてもしないのだから。

「敵がそのような増上慢（ぞうじょうまん）を抱いてくるのであれば」白根は力強く断言した。「上陸部隊に地獄を見せてやるまでです。我らは今日までに島全体を要塞化し、迎撃準備を整えてきたのですから」

その言葉に嘘はない。工事全般を自ら指導監督してきた竹村には、それがよく判る。だが、増援や救援が来る可能性のない籠城戦の果てに訪れるのは、玉砕か降伏の二者択一であり、祖国が一日でも長く抗戦する事を望むのであれば、後者は論外だ。最終的には指揮系統が崩壊した状態で、各拠点ごとに全滅するまで戦う――という自体になるやも知れぬ。

だが、最高司令官である自分が、今から最悪の事態を口にする訳にはいかない。分別がある。周囲の者に無用な不安を与えたくなければ、そんな事は自分だけが考えていれば良いのだ。

「地上戦に関しては、参謀長の言う通りだろう。だが、航空部隊を残しておいたところで、全滅するだけだ。珊瑚諸島方面に退避可能な機体は、そちらに移動させておいた方が良いでしょう」

これは「最悪の事態」云々は関係なく、予想される悲劇、その一端だった。数百機の艦上機相手に五分に渡り合えるだけの戦力は、マルシャル諸島にはない。縦しんば戦闘機同士の戦闘が互角でも、向こうには戦艦がある。夜間に飛行場目掛けて艦砲射撃をされれば、基礎部分から吹き飛ばされてしまう。

航空機をなくした飛行士を歩兵代わりに使うなど、人的資源の無駄遣いもいいところだ。元からそうした訓練など受けていない人員など、厳しい戦闘では単なる足手纏いだとの観点もあるが。

「偵察用に幾らか残しておいた方が」

「どのみち直ぐに使用不能になる」

そこには乾いた悟りがある。破局の到来を防ぎようがないのだからと、他者を道連れにするのは、竹村の趣味ではなかった。しかし彼の「温情」は結果的にさほどの意味を持たずに終わる。

何故なら、陸軍航空隊を中心とした防空戦闘機隊及び爆撃機は、沼枯島への砲爆撃をしていた敵機動部隊への反撃を実施し、その大半をただ一度の攻撃で喪失したからである。

マルシャル諸島守備隊は、それ以降、翼をなくした状態での行動を余儀なくされ、敵機は自由往来との為体を示す事になる。全ては予想されていた事態とは言え、彼らの悪戦苦闘は、実際に敵と砲火を交える前から約束されていたのだった。

マルシャル諸島に敵が侵攻を開始した――との報せは、総本営に強い衝撃を与えた。浦須賀沖海戦で大敗を喫したばかりの彼らが、まさか新たな攻勢作戦をこの時期に発動すると予想できた

者はおらず、周章狼狽の様相を呈したのだ。

「発見せる敵艦隊の規模、戦艦六隻に巡洋艦一五隻、航空母艦一二隻、駆逐艦多数――」

「上陸軍の規模は、推定で三個師団乃至四個師団」

この報せを受けた海軍総司令部では、どう対処するかで意見が割れた。ようやく再建されたばかりの第一艦隊が再び壊滅的打撃を受けた結果、可能な限り遠隔地で時間稼ぎをする必要が生じていたからだ。

鞠縄諸島に展開する基地航空隊を珊瑚諸島に移動させ、マルシャル諸島守備隊への援護に当てるとか、第二艦隊――第一航空艦隊ならば即座に動けるので、彼らを投入すべきだなどと、意見が百出した。何度も緊急会議が開かれたが、結論は出なかった。

そんな感じに大荒れの海軍総司令部に英が顔を出したのは、四月五日――沼枯島が陥落し、雅反島への砲爆撃が開始されたその日である。混乱がいよいよ極まりそうな時だ。

英は当直将校の案内を受けると、海軍総長室へと直行した。物事を決める時は、下よりも上に直接的に訴えた方が早いとの観点による。

いささかではなく強引だが、昨年末の大晦日に決定した事項、その再確認なのだから急がねばならない。

海軍総長――武蔵滋信大將は、憔悴していた。英が入室時に感じたものは、それだった。東府軍港で第一艦隊が戦艦四隻を撃沈破されるという打撃を受けたが、それが彼の精神を打ちのめしているらしい。

「総長」英は入室すると、敬礼もそこそこに武蔵の方へと詰め寄る。

「何かね？」眼の下に疲労感から来る隈をくっきりと浮かべた武蔵は、執務机の上を占領する書類の束に埋もれたまま、つかつかと歩んでくる彼女の方を視た。

「出撃の許可をいただきたい」

「出撃許可とな？」

「昨年大晦日に開かれた会議、その時に総長もマルシャル諸島防衛作戦に関しては、私の艦隊に一任してくれると仰いました」

そう言われて、武蔵は何かを思い出す素振りをする。記憶という名の井戸にある水を汲み上げた彼は、眼を大きく見開いた。一〇代の皇族将官の顔を見返す。

「駄目だ。あの時と状況が異なる。それに八洲級戦艦を安直に前線投入するのはまずい！」

浦須賀沖海戦の結果が出るまで、「八洲」は初めての純粹無限機関搭載戦艦として不審の眼差しを注がれてきた。早い話、新技術好きの元帥宮が、多大の国家予算を浪費してまで造り上げた玩具だ――と。

ところが専門家たちの意見に反し、「八洲」は単艦で戦艦六隻と渡り合い、三隻を撃沈し、三隻を降伏に追い込むという離れ業を演じて見せた。

それまでは純粹無限機関搭載艦を白眼視してきた海軍上層部は、この結果を受けると、掌を返したかの如く、「八洲」を持ち上げ始めた。牧原が懸念したように、光芒砲を搭載可能な艦を俄に増やそうとした。

こうした上層部の態度を、英は当然と受け止める一方で、嫌悪感を抱いてもいた。散々人の事

を莫迦にしておいて、今更何を――との気分である。

だが、浦須賀沖海戦大勝、その興奮冷めやらぬ今ならば、発言力は充分以上にある。無茶な要求が通りやすい雰囲気にある。遠慮している場合ではなかった。

「時間稼ぎをする必要があるはずです。第一艦隊が活動不能な今、だからと第二艦隊をマルシャル諸島防衛のために投入する訳にもいきません。もし大澤提督が敗れば、内地を防衛できる戦力がなくなりますからね。

だからこそ、海軍総司令部の直轄戦力である第七艦隊――遊撃機動部隊を『戦略的通商破壊作戦』に投入し、マルシャル諸島での戦闘を一日でも長引かせる事が肝要なのです」

「敵艦隊と直接戦わない？」

「相手は戦艦・空母・巡洋艦まで含めると、三〇隻以上にもなる大艦隊です。上陸部隊の規模も多い。故に毎日消費する燃料や弾薬の量は半端ではありません。私は東橋道洋から中部橋道洋までを縦横に暴れ回り、彼らへの補給を途絶させて見せます」

「輸送船団には護衛艦隊も付随するはずだが」

「敵の全力ではありません」英は力を込めて言う。「それに対し、我らは全力で敵に当たれます。正規空母だけで四隻――三〇〇機を超える艦載機を投入可能ですし、何より我が艦隊には『八洲』がおります。多少の敵艦であれば、鎧袖一触――即座に蹴散らせます」

「しかし――」

武蔵は即答を避けた。英の主張には確かに利があるのだが、これ以上彼女に戦功を挙げられると、その発言力が抑えられない領域にまで膨張するのではないか――皇族将官に軍部の主導権を握られるという、「逆下克上」が起きる可能性を恐れたのである。

「総長！」英は執務机を両手で勢い良く叩いた。

その拍子に書類の束が舞い散るが、彼女は気にする素振りも見せない。

勢いに吞まれて眼を瞬いている武蔵に、浦須賀沖海戦の英雄は肺腑（はいふ）を抉るような台詞を投げつけた。

「貴男が見捨てようとしているのも、陛下の赤子ではないのですか？」

この言葉は、武蔵の葛藤、その本質を的確に言い表していた。誰が好きこのんで二万を超える将兵を遠方の地に置き捨てようか。可能であれば助けたく、その戦力があるのであれば、即座に手をつけたいのが偽らざる本音であった。

だが、人の上に立つ者が感情を爆発させる訳にはゆかぬ。彼の怒声には数十万の海軍将兵の生命財産が、ひいては瑞穂という国の運命がかけられており、安直な出兵は亡国を招いた。「臆病者」と誹られても、耐える必要がある。

「英殿下。貴女が何と言われようとも、私は――」

込み上げてくる怒り。一〇代の俄英雄に自分が感じてきた苦しみ、その何が判るのかと、罵言を叩きつけたくなる。莫迦。阿呆。増上慢。貴様のような若輩者に、天下国家の何が判ると言うのだ！

超人的な努力により押さえ込まれている溶岩の爆発、それを感じ取った英は、恐れを抱くのではなく、

「今こそが好機だ」

逆にそう感じた。マルシャル諸島防衛に関する言質は、あの会議の時に取っている。

故に武蔵総長を怒らせて、「そこまで言うのなら、後は貴女の艦隊で好きなようにやれば宜しかろう！」と怒鳴りつけてもらえれば、それで良かった。

両者の睨み合いの時間は、現実時間（リアルタイム）で三〇秒程続いただろうか。緊張が継続するそんな時である。海軍総長室に新たな人物が姿を見せたのは。

「話は聴いた！」

現れたのは海軍次長――洞賀久光中将である。

その顔には、彼の表情に相応しい怜悯なものが浮かんでいる。どこかにやついているようにも見えた。

英は舌打ちした。武蔵一人が相手であれば、挑発して怒らせればどうにかなりそうだが、洞賀だと如何なる挑発を投げかけても、平然と「それがどうした」と無視されるような気がした。

雲行きの怪しさを感じた英が、先に口を開こうとしたが、洞賀が機先を制した。彼は怒鳴るように言う。

「マルシャル諸島防衛のために、第七艦隊が出撃したいと言うのであれば、私は賛成する」

「何!？」英と武蔵は異口同音にそれを口にした。

「昨年大晦日に第七艦隊最高司令官は、敵艦隊が来襲するのであれば、自らが責任を持って防衛行動に出るとの発言をしている。有言実行ならば誠に結構！」

海軍次長のこの発言に、武蔵は慌てた。

「君――次長、今や八洲級戦艦は我が海軍にとり無視できない戦力なのだぞ。それを軽々しく投入して、万一の事があればどうするのだ。あの時と今では状況がかなり異なるではないか」

「だからこそです、総長」洞賀は武蔵の顔を見返した。「あの艦一隻で六隻の戦艦と渡り合えるのは、既に周知の事実です。『八洲』を投入すれば、危機的状況でも劇的な変化が望める。第一艦隊再建に必要な時間を、彼女に稼いで貰うのです」

「言いたい事は判るが、投機的すぎる」

「戦争とはそもそも賭博行為です。一〇割の勝算を以て事に臨むなど不可能です。戦力差が一〇〇対一でも負ける時には負ける。それが常だと私は思います」

「しかし――」

「我々に残された選択肢は、さほど多くありません。それに国民や主上（おかみ）も『八洲』に期待しています」

「陛下が……？」

「絶望的な戦力差がありながら、国土と国民を護るために、敵艦隊に敢然と立ち向かった『八洲』と英殿下の活躍は、陛下のお耳にも当然届いています」

「……………」

皇室尊崇の念は、他の瑞穂人同様に、武蔵は骨の髄まで叩き込まれている。その皇室の頂点に

立つ人物――大皇が「八洲」の前線投入に諸手を挙げて賛成しているのであれば、何をか況んや。

肩の力が抜けた海軍総長に、「第七艦隊に出撃命令を出しても宜しいですね」と胴賀は押し被せるように言う。

「判った。もう君の好きなようにし給え……」

一度引退し、それから現役復帰した武蔵は、現代戦の何たるかを理解していない。単に名目上の責任者として存在するだけの、無力な総長人形に過ぎない。作戦の実質的な指揮権は「切れ者」との評価を受ける胴賀が握っている。

その胴賀が乗り気で、「桜の御紋」まで持ち出してきたとなれば、武蔵に断り切れる道理はなかった。

物事は上の方が制約がなく、話が進む時はとんとん拍子になると考えている英だが、まさか思わぬ形で助け船を得て、そうなるとは思わず、置き去りにされたまま石化した。

そんな英に胴賀は、「陛下の期待を裏切らないでいただきたい。第七艦隊最高司令官」と脅すように告げた。

これを聴いた英は、第七艦隊の出撃許可に援護射撃をくれた人物の思惑が何処にあるか掴みかねた。自分の艦隊を前線で磨り潰させようとしているのか？ 前皇国聯合艦隊司令長官で、爬間諸島沖海戦大敗の責任者である猪松敏平大将の派閥に属しているという彼の背景を思えば、それも充分考えられる。

だがそれにしても、第七艦隊の行動を制約するような発言はしていない。戦場での駆け引きはこちらに一任するようだ。だとしたら、その真意は何か。まさか純粋に陛下の発言を重視したのか？ 主上は私より年下で、兵馬の事は素人同然だと聴くが。

まあいい。実際に戦わねば判らない部分はたくさんあるし。本当の意味で戦争好きな一部の人間、その一人である英は、そう結論づけた。胴賀次長の思惑が何処にあるかは判らないが、私は自分の好きなように戦えれば、それだけで。

「立派に期待に応えてご覧に入れましょう」

内心の動きを隠して、英はそう言いながら胸を張る。

かくて第七艦隊は修羅の海へと繰り出す事が決められた。艦隊最高司令官が部隊結成時に口にしたように、四カ月程度の訓練期間を経た後に。

4

四月六日――

「超突貫工事」と呼ばれて恥じない速度で修理を終えた「八洲」は、出渠と同時に前線への出撃が決定していた。弾薬・食料・飲料水に代表される必要消耗品を大急ぎで搭載する彼女の姿からは、その慌ただしさが滲み出ている。

「以前から聴いていた話とは言え」牧原はようやく傷が癒えたばかりでまた戦わねばならない愛艦に、哀れみを込めた眼差しを向けた。「苦労ばかりかけるな」

被弾時に破壊された高角砲や対空機銃の交換、機関部の修理点検、摩耗した砲身の取り替えなど、僅か半月程度の時間とは言え、かかりきりで臨まねばならない部分が多く、濃密な時間を過ごしたような気がした。

しかし、初陣からいきなり敵主力艦隊と交戦した戦艦など、歴史上あまりいないのではあるまいか？

極端な事例として、工員を乗せたまま出撃し、未成部分は無理矢理造りながら前進し、敵艦を僚艦と共に撃破した――との話はあるが、あれは相手の数が少なく、こちらの手駒も不足気味な時で、今の瑞穂が置かれている状況には当てはまらないと思われる。

まあ、兵力差が極端で、それ故に積極的攻勢に出ねば、直に手詰まりになるという理屈は判るが。

遠征準備を進めているのは、「八洲」だけではない。一航戦と二航戦を形成する四隻の航空母艦――「紅城」「北賀」「翔龍」「碧龍」も同じだ。零式艦上戦闘機「紫風」に九九式艦上爆撃機「赤星」に九七式艦上攻撃機「陣山」を予備機込みで目一杯積み込んでいる。

英の言う「戦略的通商破壊作戦」を実施するに際して、この四隻と彼女らが搭載する艦上機はその主力となり得るはずだ。何しろ敵輸送船団を発見せねば、そもそも勝負にすらならないのだから。

「八洲」と同じ戦隊を組む巡洋戦艦――「岩城」「清石」もまた準備に余念がない。彼女が装備する三六センチ四五口径砲は、聯合帝国の新鋭戦艦が相手だと威力不足気味だが、巡洋艦以下の艦ならば充分蹴散らせる。

愛雄級重巡洋艦の四隻――一番艦の「愛雄」を筆頭とする、「高岩」「摩海」「鳥耶」の防空重巡は、浦須賀沖海戦に参加し損ねた悔しさを、次なる戦闘で晴らさんとしているように見えた。魚雷兵装を撤去し、艦上を対空火器で満たしたその姿は、「獰猛なる鉄の獣」とも評せた。

爬間諸島沖海戦にも参加した、軽巡「千穂乃」を旗艦とする第五水雷戦隊の方も気合いに満ちていた。雷級駆逐艦の八隻は、水雷戦となれば無類の強さを発揮する事を期待されている。一隻につき一五門という魚雷発射能力は、他に類を見ないものであり、第二空気魚雷が僅か一本の命中で重巡クラスの艦を戦闘不能にすることを思えば、尚更に。

高波級潜水艦の八隻は、既に出港したらしく姿がない。無限機関を搭載した中型高速潜水艦である彼女らは、偵察と輸送船への襲撃の双方に活躍すると思われる。何しろ水中速度二四航里は、旧式戦艦であれば振り切れる程なのだから（最新式の水中聴音機を装備した軽巡や駆逐艦でも、小型で素早い彼女たちを爆雷で仕留めるのは難しいだろう）。

艦隊に随伴する予定の、高速給油艦や弾薬運搬船なども必要物資をしこたま積み込んでいる。

浦須賀沖海戦で改めて意識された事なのだが、高速給弾装置の採用は、時間単位での砲撃力を増大させる代わりに、必然的に弾薬を莫迦喰いさせる。勝っていながら追い詰められた原因はそこにあり、昔の軍事評論家が口にした格言――

「絶えざる補給こそ最良の援軍」

それを実現させるために彼女らはいる。

三〇隻を超える大艦隊の出撃ともなれば、秘匿したくてもしきれるものではない。

いや初めから出来ないと海軍も考えたらしく、むしろ「出撃を見送る会」を民間側に積極的に勧めた。

妻子に代表される家族、友人知人らと別離の挨拶を交わす者らの姿が、故に各所で散見された。

「手紙は何処に送ればいい？」

「判らんね。俺も行き先不明なんでな」

恋人相手に、そんな黒いのか風味（ウィット）に富んでいるのか判らない冗談を飛ばす者もいる。

確かにそうなのだ。情報を秘匿する意味を込めて、あるいは艦隊最高司令官本人が状況次第と考えているのか、明確な行き先は告げられていない。

もっとも、瑞加開戦以前からの英の行動――常に戦闘続きで、穏やかな日常とは程遠い情景――を思えば、何処に行こうとも血を見ずに済むとは思えないが。

牧原は自身が造り上げた戦艦がこれより歩むであろう道を思い浮かべながら、出撃準備に忙しい艦艇群から視線を外した。彼女とても忙しいのだ。戦時急増艦艇の設計・建造をせねばならないし、何より「八洲」の妹――八洲級戦艦二番艦「秋津」を竣工させねばならない。

開戦に伴う計画変更から、竣工時期が今年の八月から――一月にずれ込みそうな彼女であるが、「八洲」の精強さが浦須賀沖海戦にて実証された今、「秋津」の完成は英にとり、いや――瑞穂という国家からすれば、何より有難い援護射撃になるだろう。

戦わねば切り開けない運命もあるし、膝を屈した果てに訪れる平和に安らぎなどない。

そう言うところかの独裁者の演説を思わせるが、弱肉強食が罷り通る現状――あちこちが戦場だという世界情勢に眼を向ければ、所謂平和主義者の戯れ言など、砲弾一発分の価値もあろうか？

そのように考えてしまうあたり、やはり牧原も戦船宮親子に毒されていたのかも知れない。

翌日――

遠征準備を整え終えた第七艦隊――遊撃機動部隊の諸艦艇は、美呉軍港から出港した。橋架内海から四内水道を南下し、橋道洋側へ出るために。敵と砲火を交え、孤立した友軍を支援するために。

そんな修羅の道を歩む事になる軍艦の群を見送ったのは、美呉軍港とその周辺に詰めかけている民間人や報道機関関係者と、橋架内海で母艦搭乗員の育成に勤しんでいる練習航空母艦「龍飛（りゅうひ）」――世界で初めて純粋な航空母艦として設計され、そして誕生した老嬢――だった。

「龍飛」は遊撃機動部隊の艦艇群の姿を望むと、高らかに汽笛を鳴らし、その存在を訴えた。

かつて瑞穂が海軍先進国である事を示す材料、その一つになった練習航空母艦。今では機動部隊に明日の翼を与えるために老いた身体を酷使する艦。

その姿を認めた英は、一種の感慨に打たれた。

――瑞穂の事を頼むとでも言っているのだろうか？

老朽化した艦体を、相次ぐ改装で騙し騙し使っている「龍飛」は、飛行甲板の延長などによる復元性の悪化を理由に、もはや外洋に出る事が叶わぬ身だ。

波の穏やかな橋架内海の外に一步踏み出せば、トップヘヴィ気味な彼女は、たちまち横転沈没しかねない――専門家からそう言われている（橋道洋や瑞穂海は荒波で有名なのだ）。

もう戦いたくても戦えない老嬢から見送りを受けた、と感じた英は、幼き日に受けた感銘をそのまま込めた。相手に見えるかどうかは定かでないが、綺麗な敬礼を捧げたのである。彼女は幼き日に東府に姿を現した「龍飛」の事を――当時はまだ現役の正規空母として扱われていた――今でも愛しているのだった。

「『龍飛』――別れは言わんぞ。私らはまたこの海に還ってくる。その日までお前も元気でいろよ」

艦隊最高司令官の行動に儀礼以外のものを見出せなかった参謀陣は、この呟きを聴き損ねた。

しかし英の傍らに立ち、その心情を理解できる美御は、彼女の唇から紡がれたものを聴き逃さなかった。彼は思った。そうだと、僕たちは必ず此処に帰ってくる。いつになるのか断言できないけれど。

旅立つ艦に見送る艦、そんな彼女らの姿を、天に輝く絶対的な存在――天道が春先の優しい光を投げて、輝かせていた。

瑞穂暦二〇〇二年四月七日、遊撃機動部隊出撃せり！